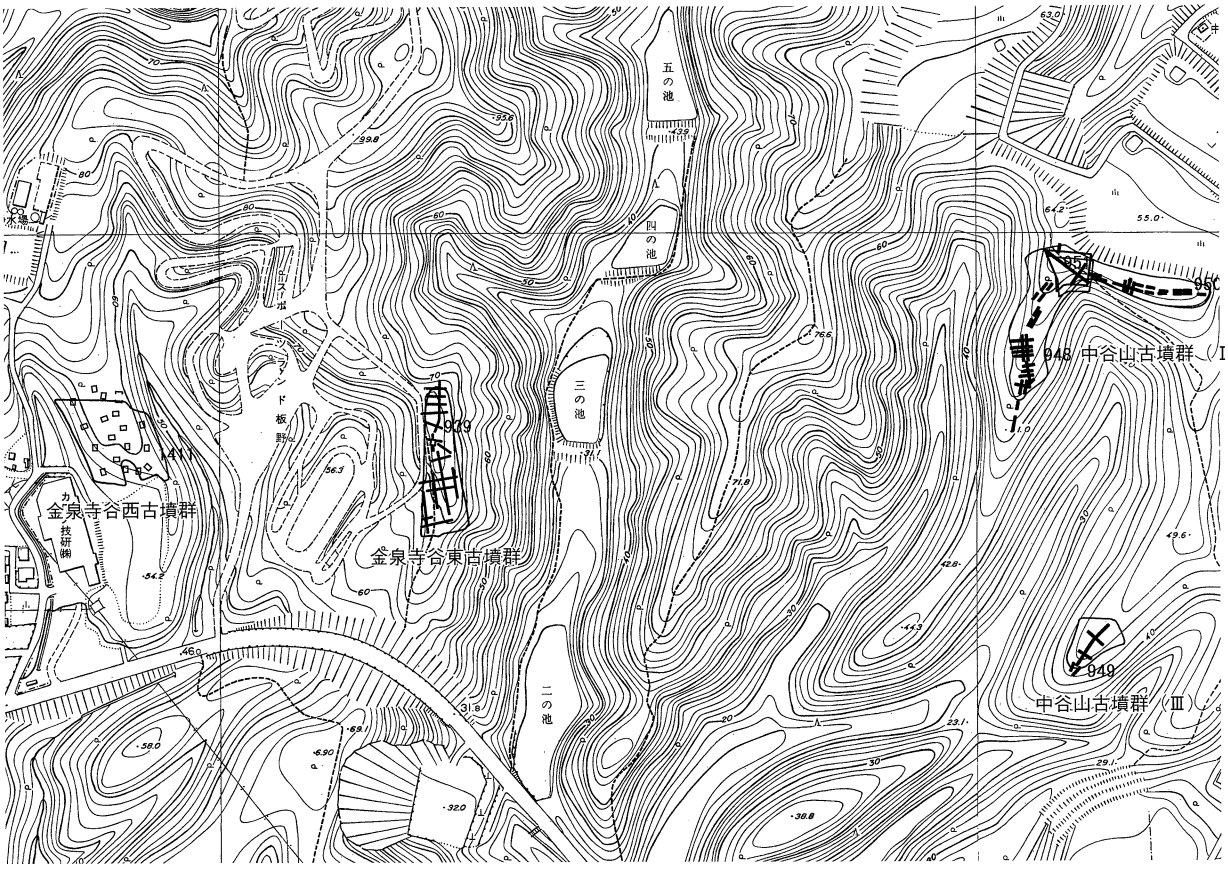
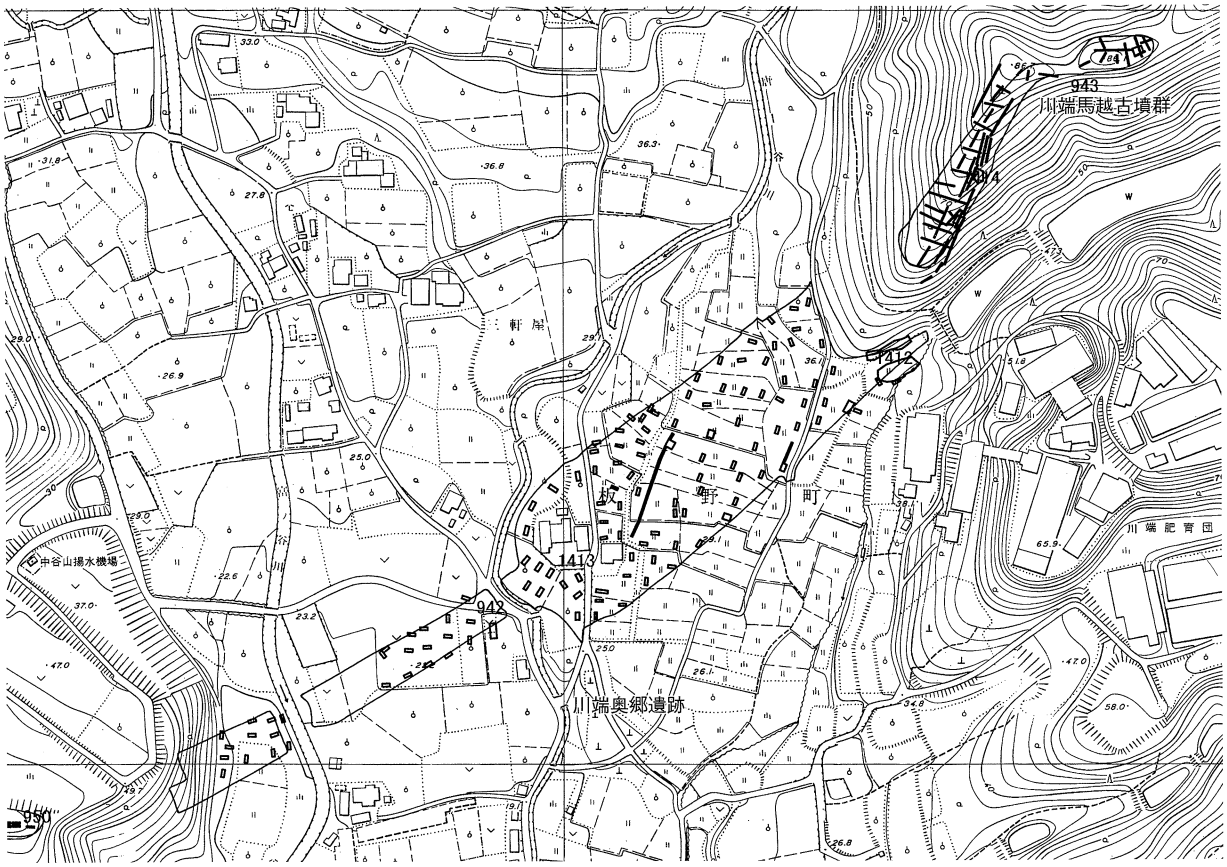
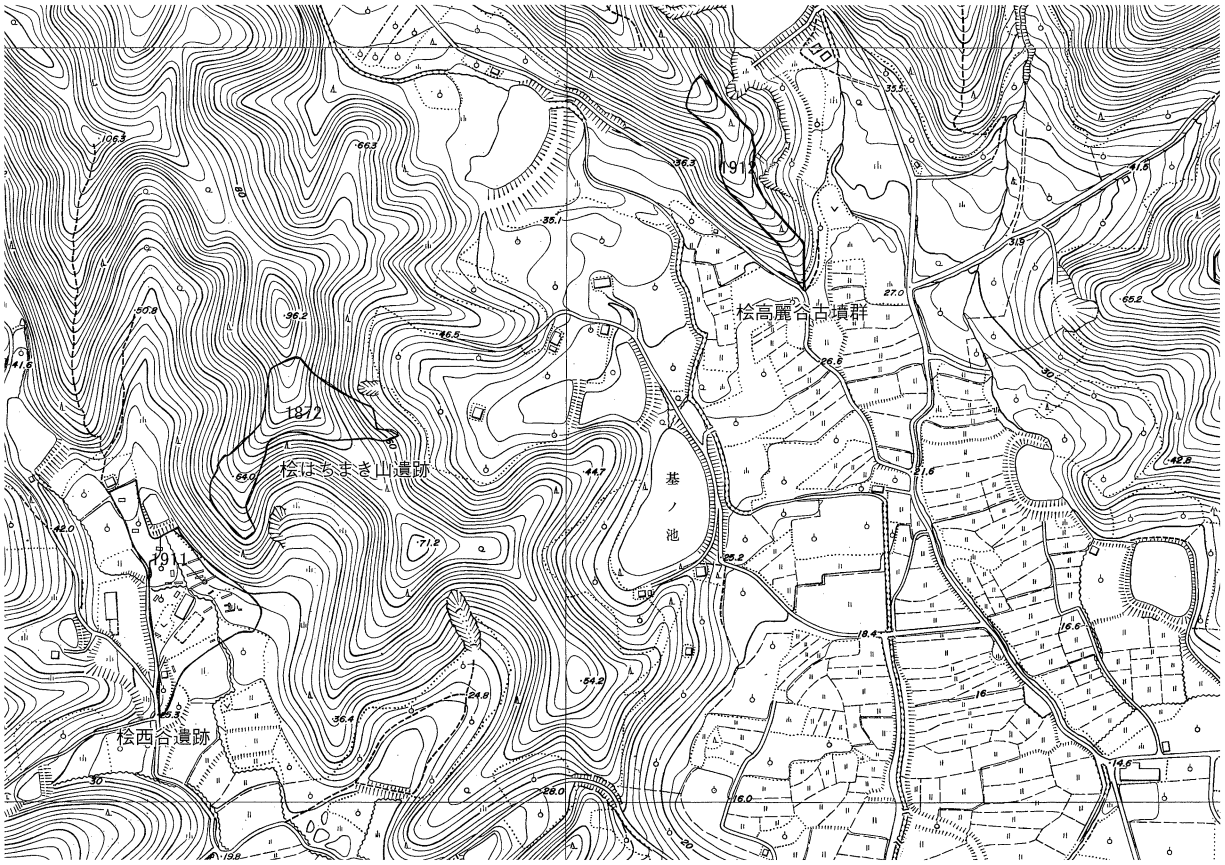


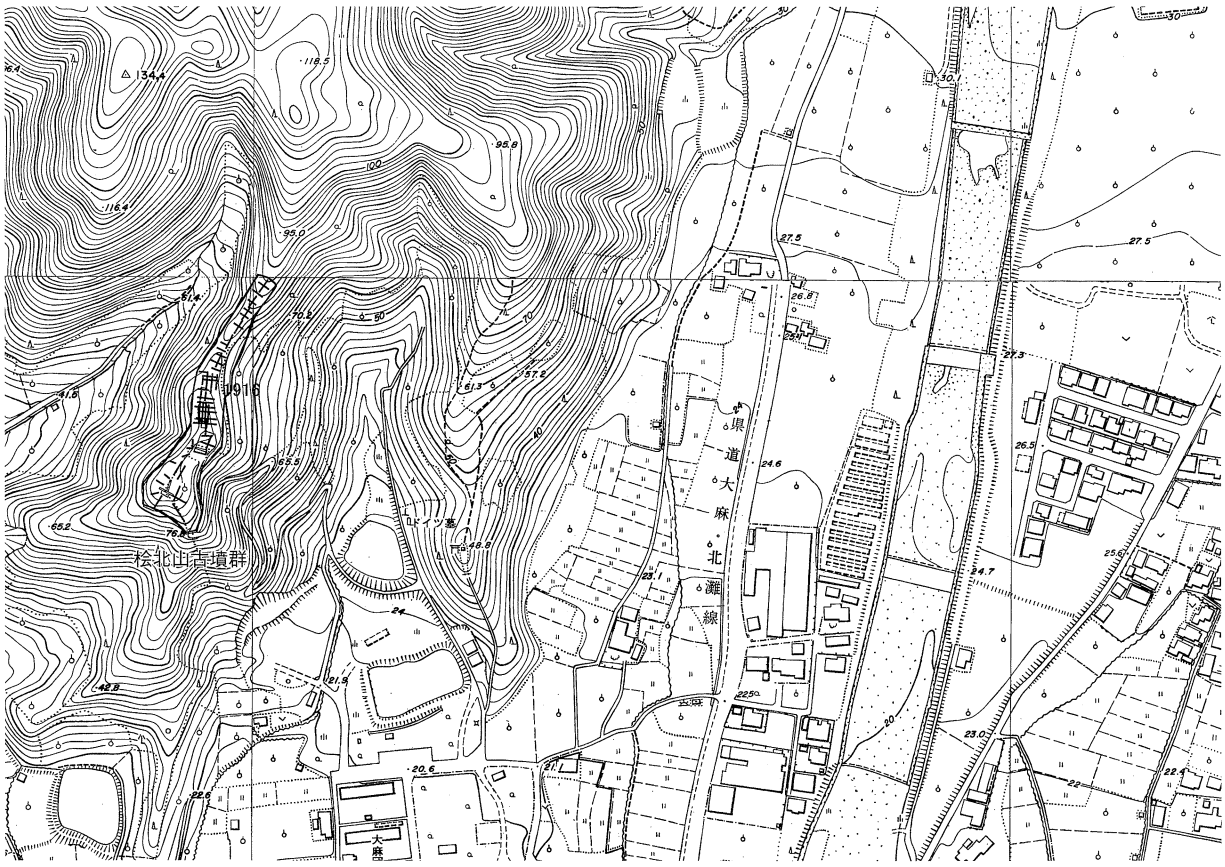
第11図　調査区位置図（S＝1/5,000）



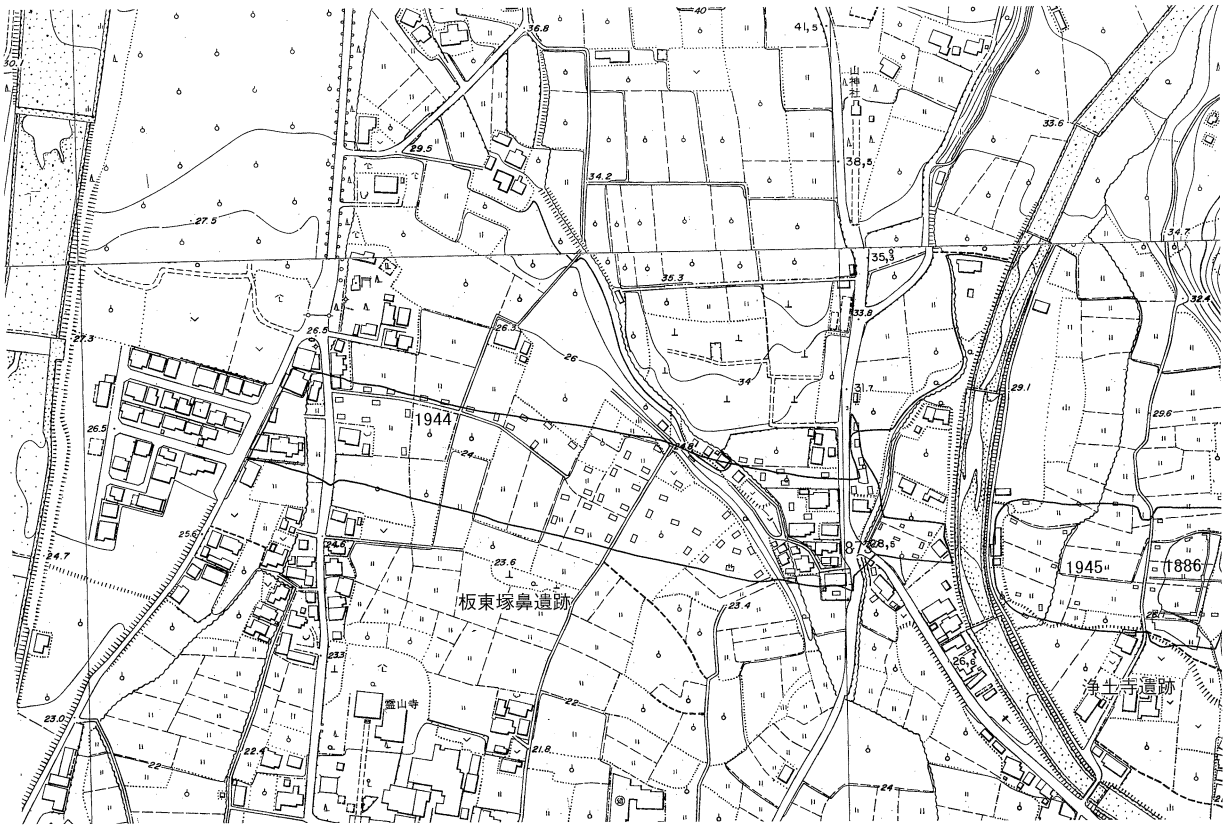
第12図　調査区位置図（S＝1/5,000）



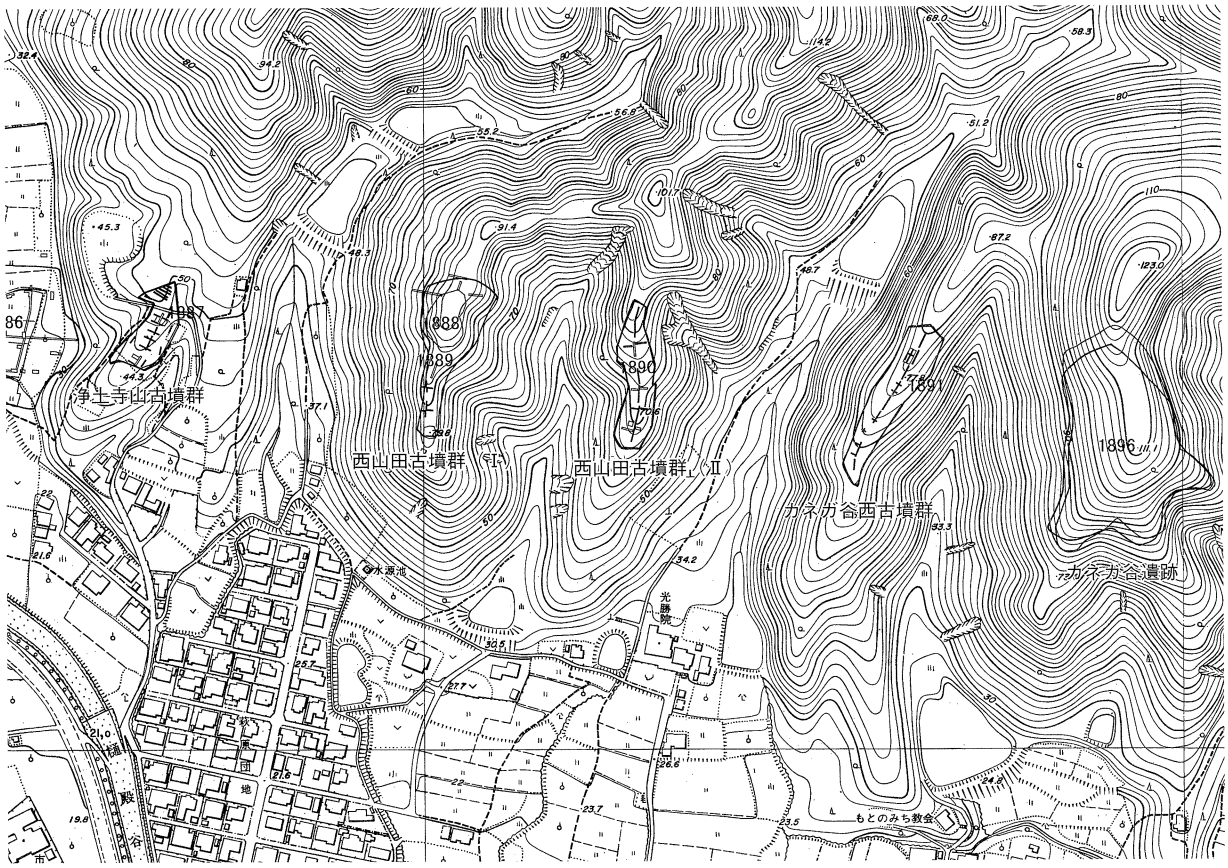
第13図　調査区位置図（S＝1/5,000）



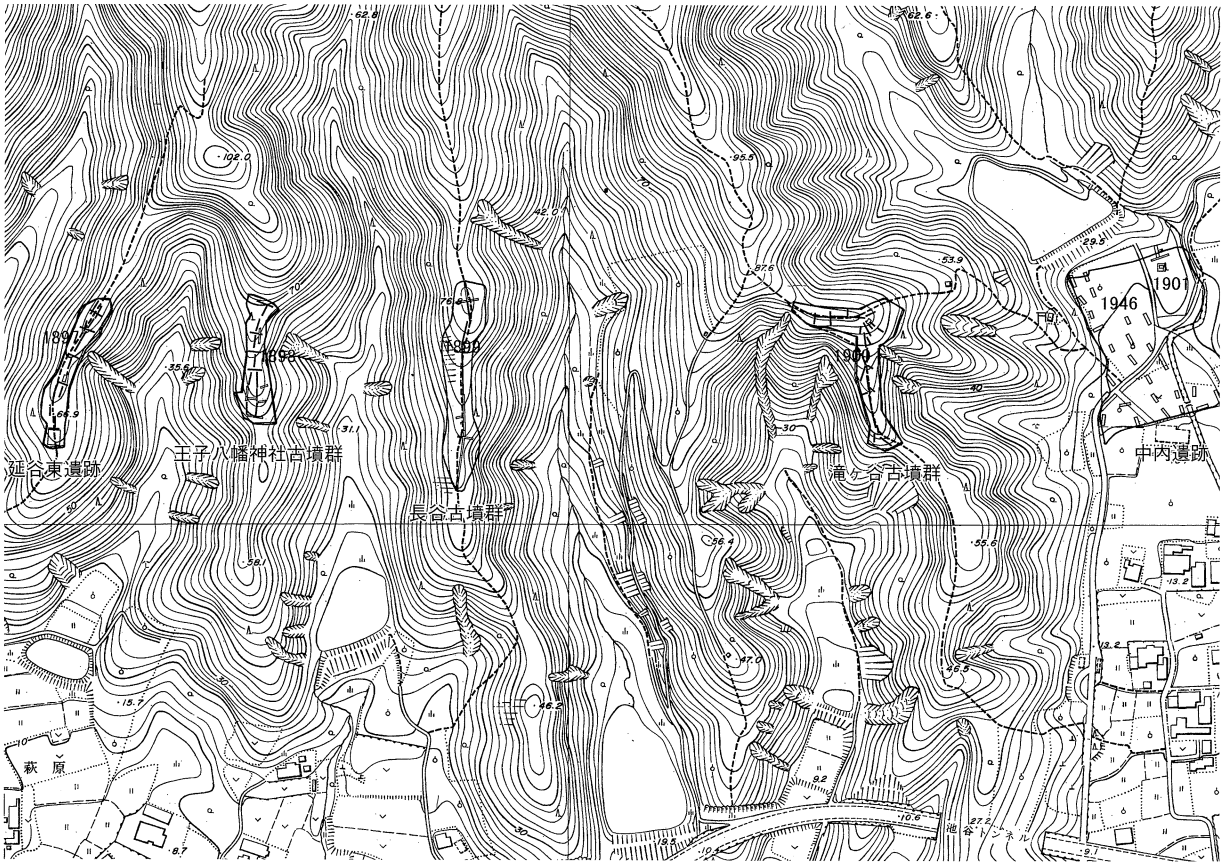
第14図　調査区位置図（S＝1/5,000）



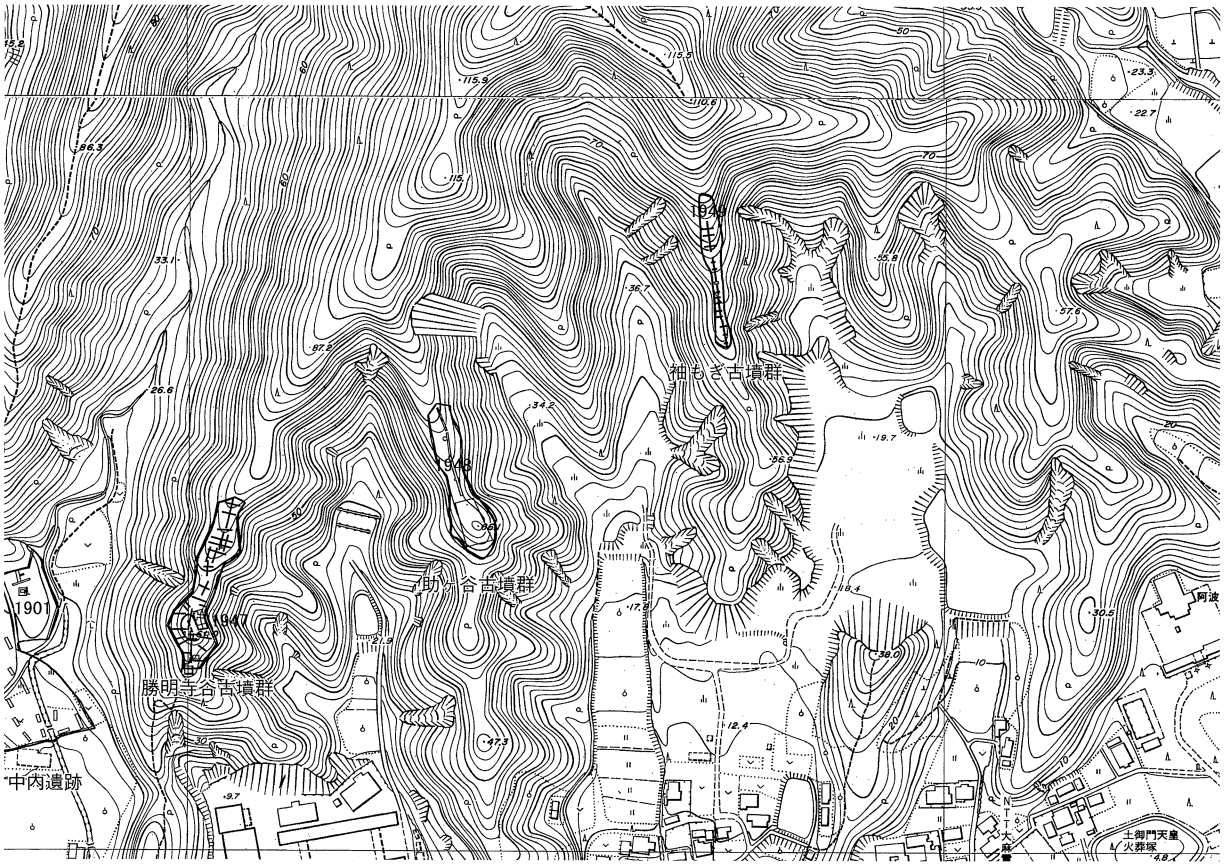
第15図　調査区位置図（S＝1/5,000）



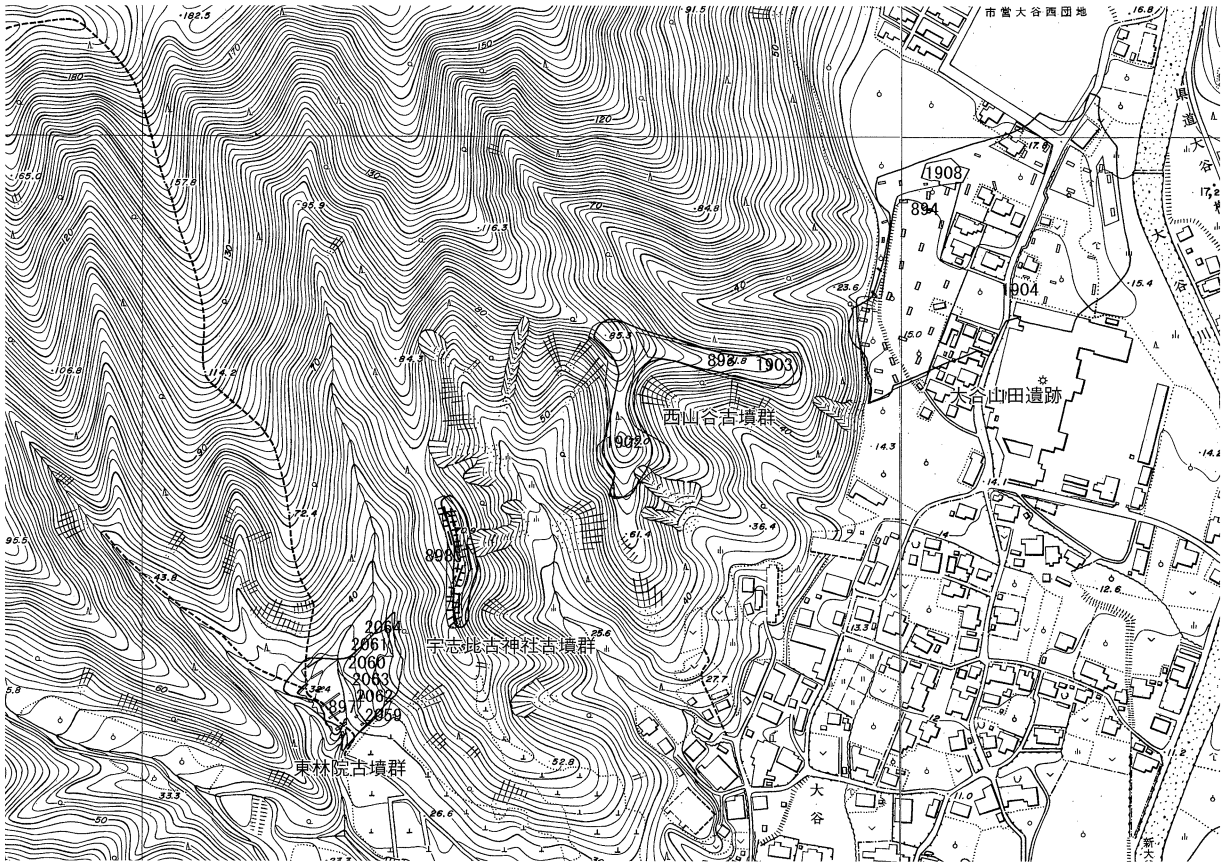
第16図　調査区位置図（S＝1/5,000）



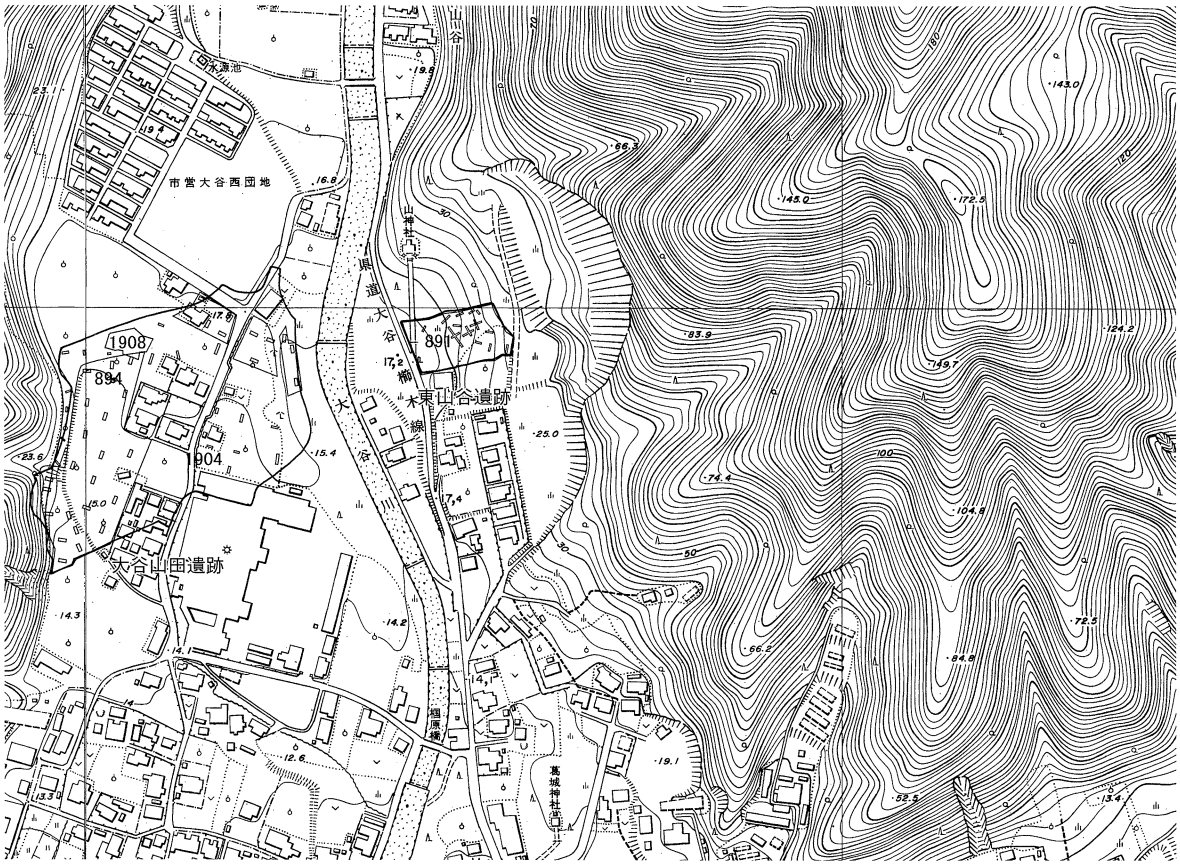
第17図　調査区位置図（S＝1/5,000）



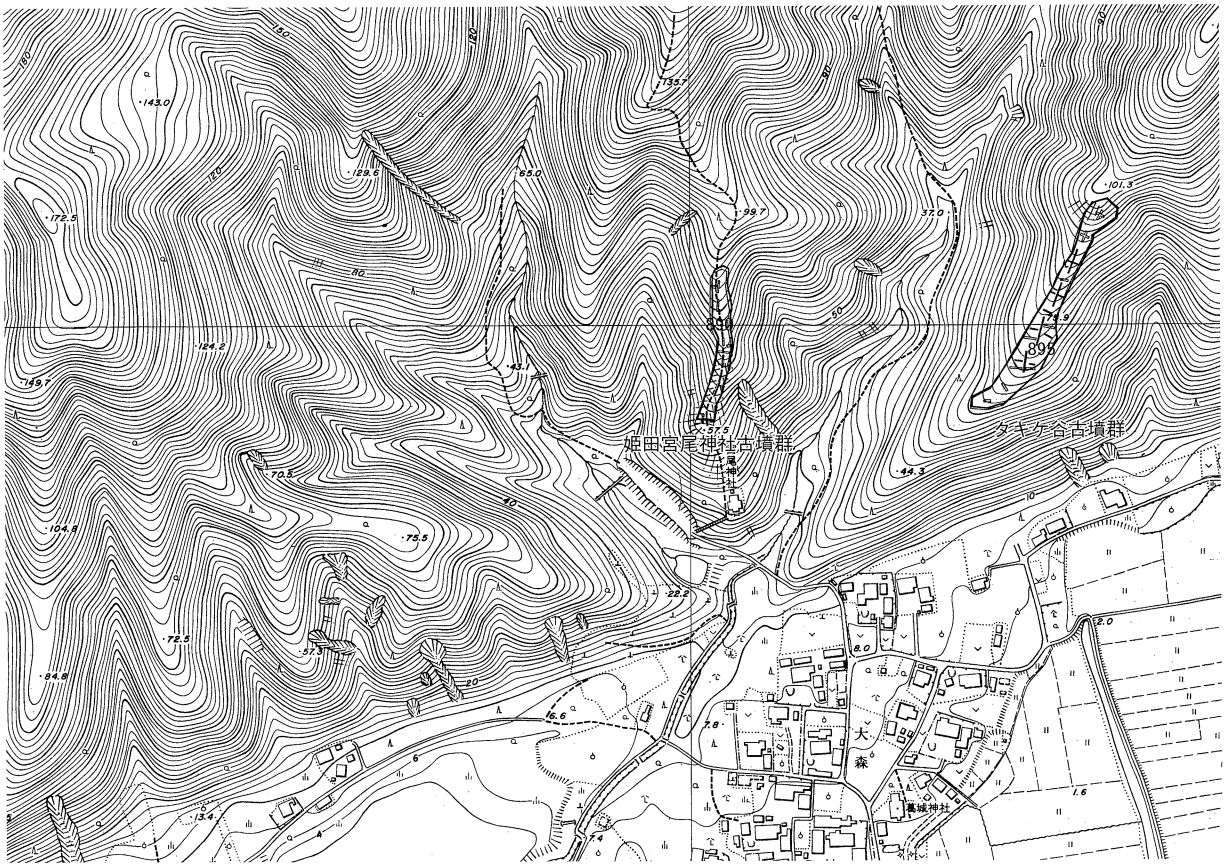
第18図　調査区位置図（S＝1/5,000）



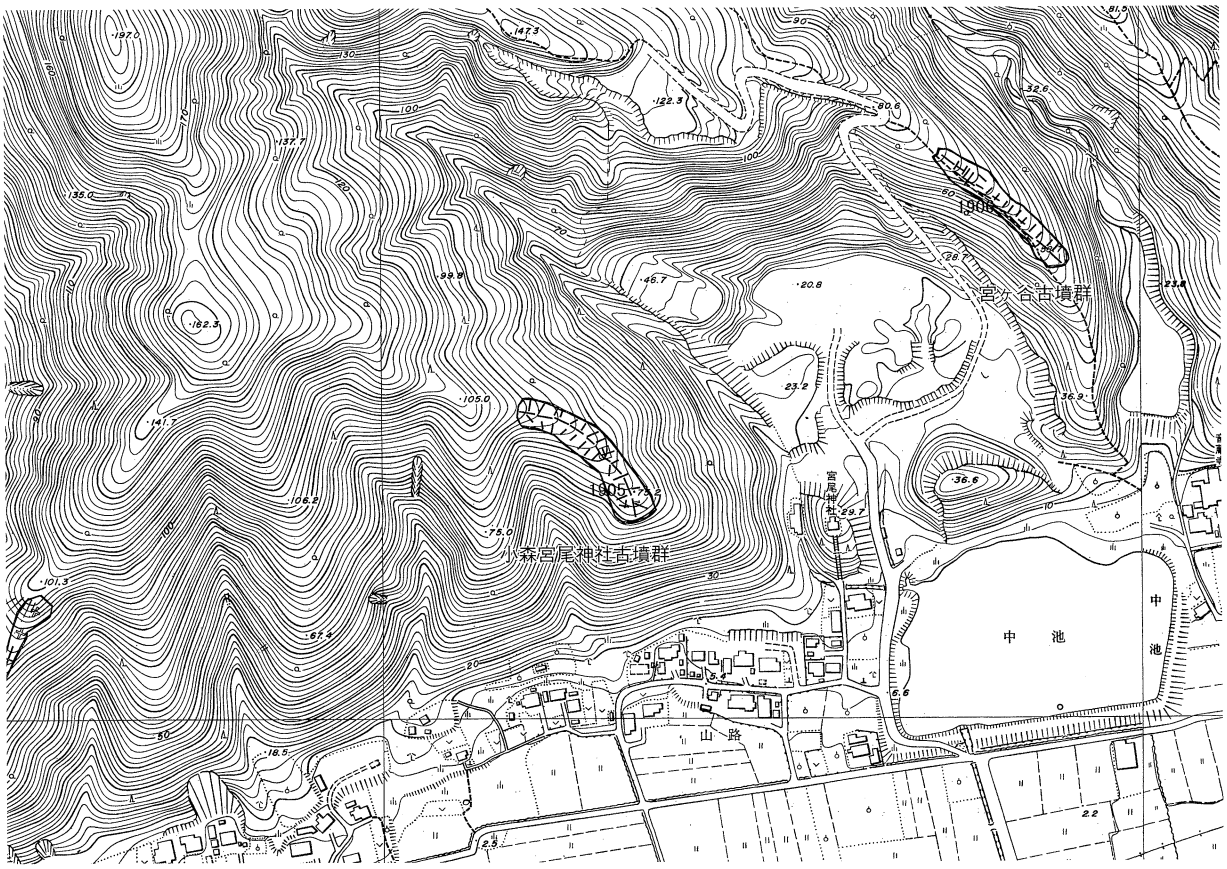
第19図　調査区位置図（S＝1/5,000）



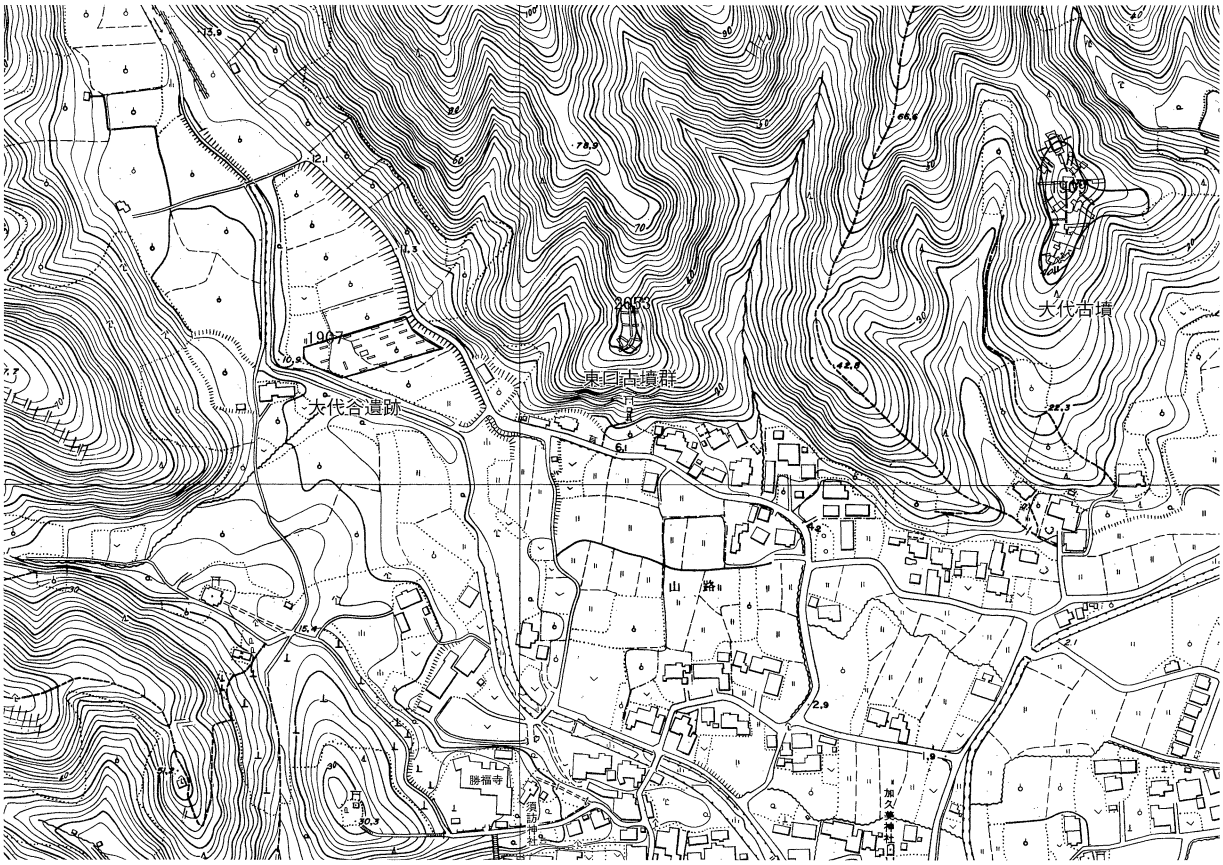
第20図　調査区位置図（S＝1/5,000）



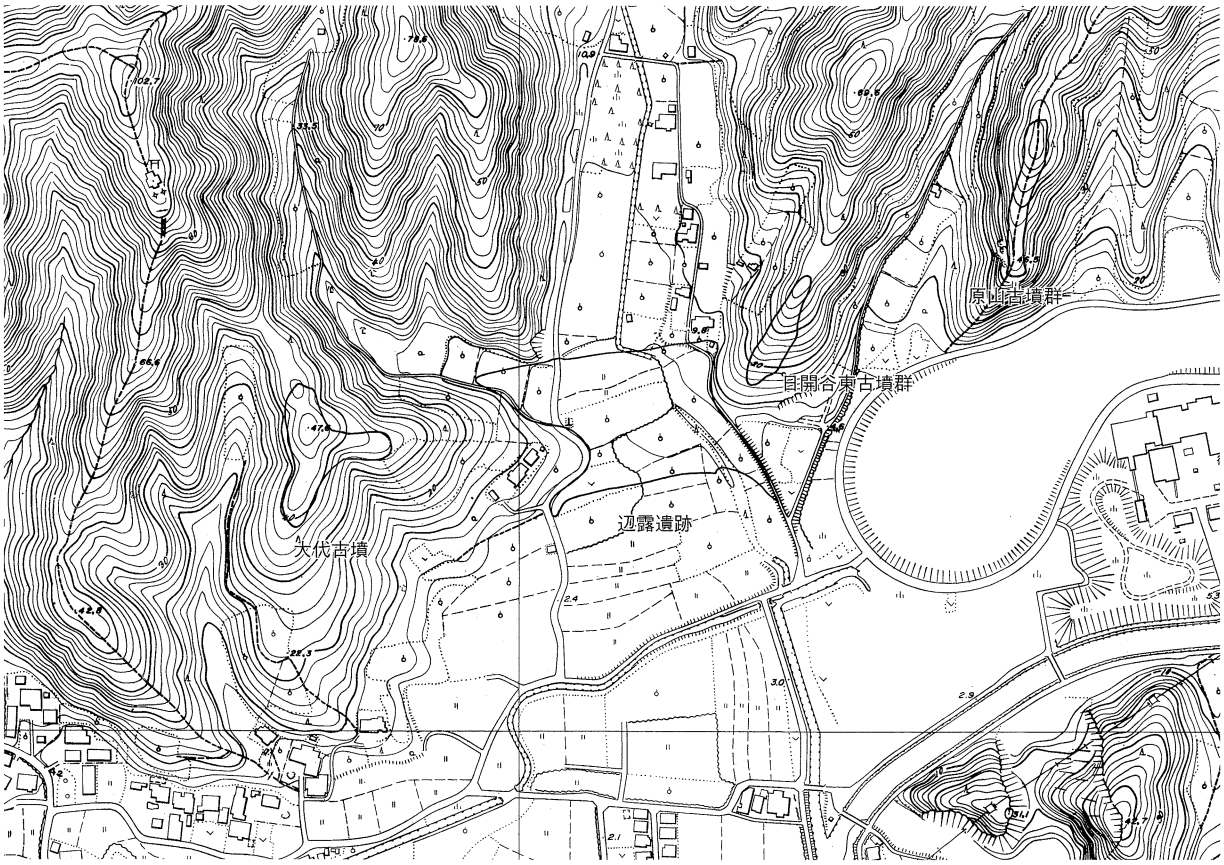
第21図　調査区位置図（S＝1/5,000）



第22図　調査区位置図（S＝1/5,000）



第23図　調査区位置図（S＝1/5,000）



第24図　調査区位置図（S＝1/5,000）

Ⅲ　試掘調査総括

1　大坂西谷遺跡

調査成果

遺跡の位置（Ⅰ-第１図およびⅡ-第１・２・７図）

調査対象地は吉野川北岸、標高95m前後の阿讃山脈の南麓に拡がる扇状地の緩斜面に位置し、四方を山に囲まれ盆地状になっている。調査対象面積は28,200㎡である。現況は畑地である。

トレンチの設定（第１図）

調査区は横断道の路線に沿い、扇状地上を南北方向に通るかたちで設定した。試掘に際しては、調査対象面積の５％を基準としてトレンチを設定し、遺物包含層および無遺物自然堆積層までの層厚の確認と柱状断面図、断面写真の作成を基本方針とした。遺跡の有無の判定については調査対象面積の20％を上限とした。

基本層序（第２図）

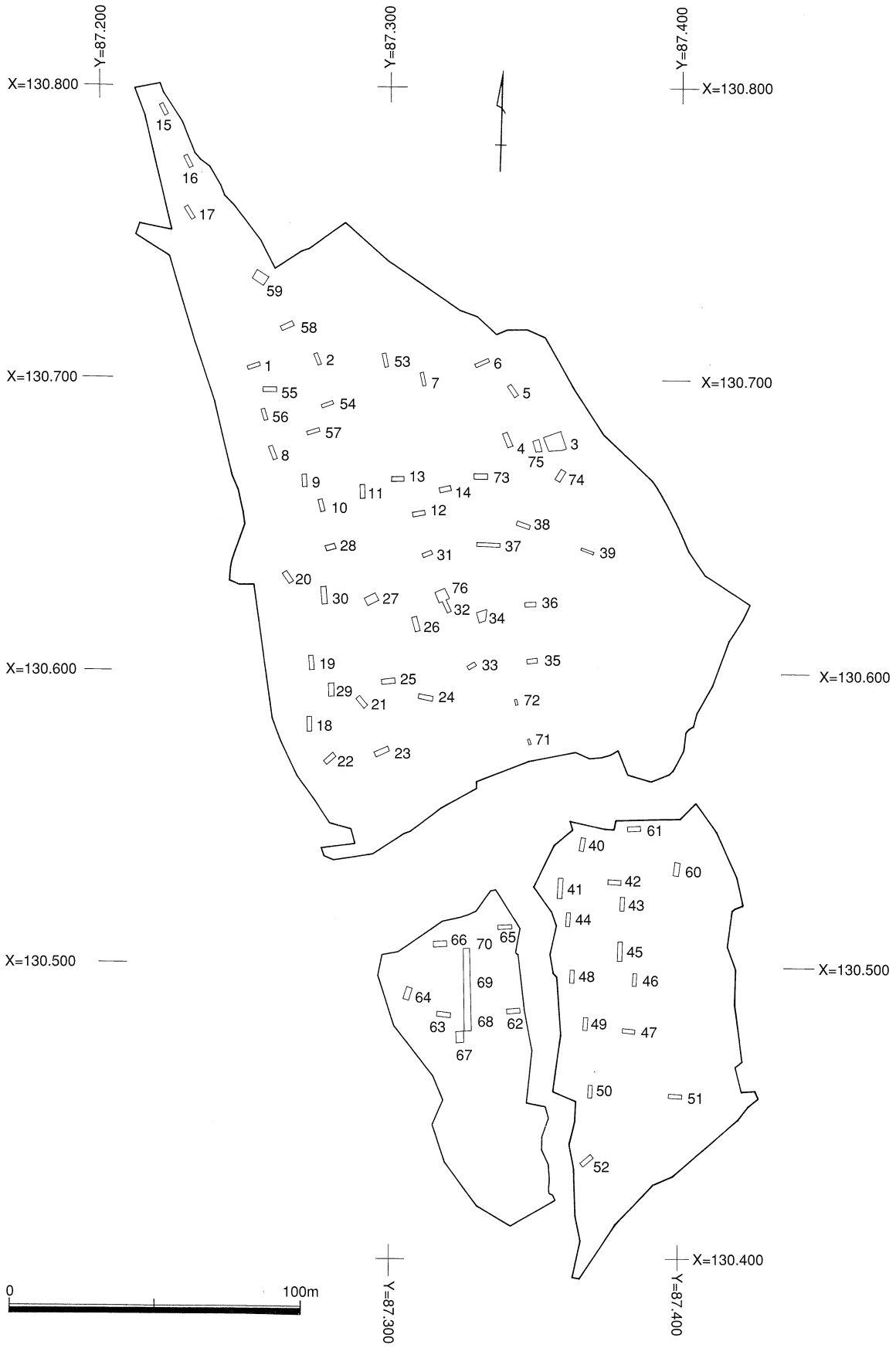
調査地点は耕作地開墾による削平あるいは客土等の改変が著しい。表土以下は扇状地性の礫層の堆積が見られ、安定した遺物包含層・遺構面は確認することができなかった。

出土遺物（第３図）

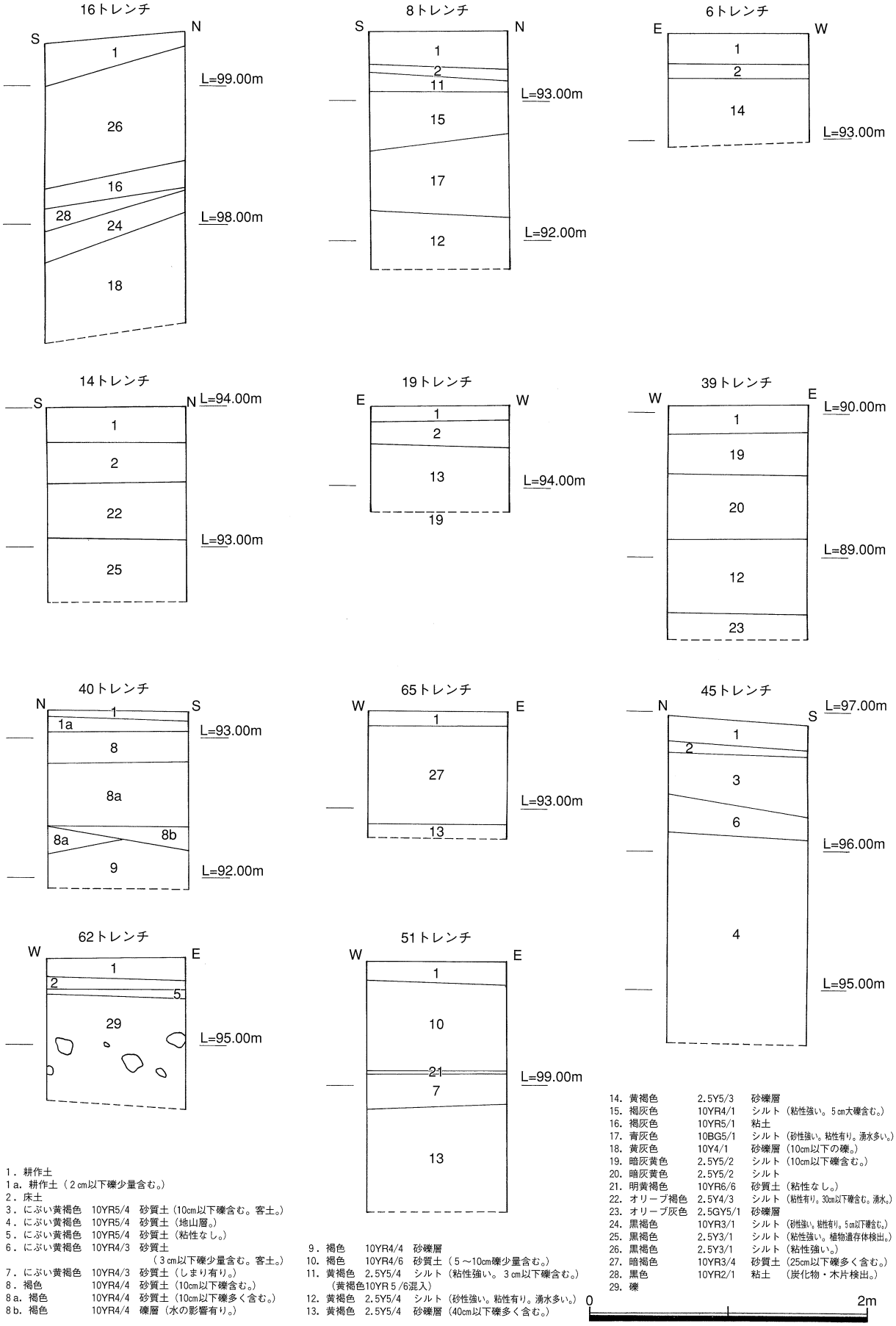
遺物は１層（耕作土・客土）からの出土がほとんどであり、近世～近代頃の時期の遺物で占められている。１は龍泉窯系青磁碗である。底部器壁は厚く、高台の削り出しは浅い。時期的には13世紀頃と考えられる。２は初期伊万里と思われる皿である。３は肥前系の陶器大皿である。時期的には17世紀第３四半期から第４四半期頃と思われる。４は初期伊万里の染付草花文皿、５は土師質土器の擂鉢である。６は須恵質土器の小片である。詳細な器種は不明であるが外面に格子状のタタキがみられ、甕の一部だと思われる。７は須恵質土器の甕である。８は砂岩製の石臼である。

まとめ

76基（850㎡）の試掘トレンチを開口し、遺跡の有無の確認に努めた。しかし、表土（耕作土）直下は30cm前後の礫を多く含み、大谷川の堆積作用により形成された扇状地の礫層と考えられ、出土遺物はほとんど客土層よりの出土であり、また遺構等も確認することはできなかった。調査区全域において遺構は存在しないと考えられることから、本調査区域では試掘調査のみで終了した。

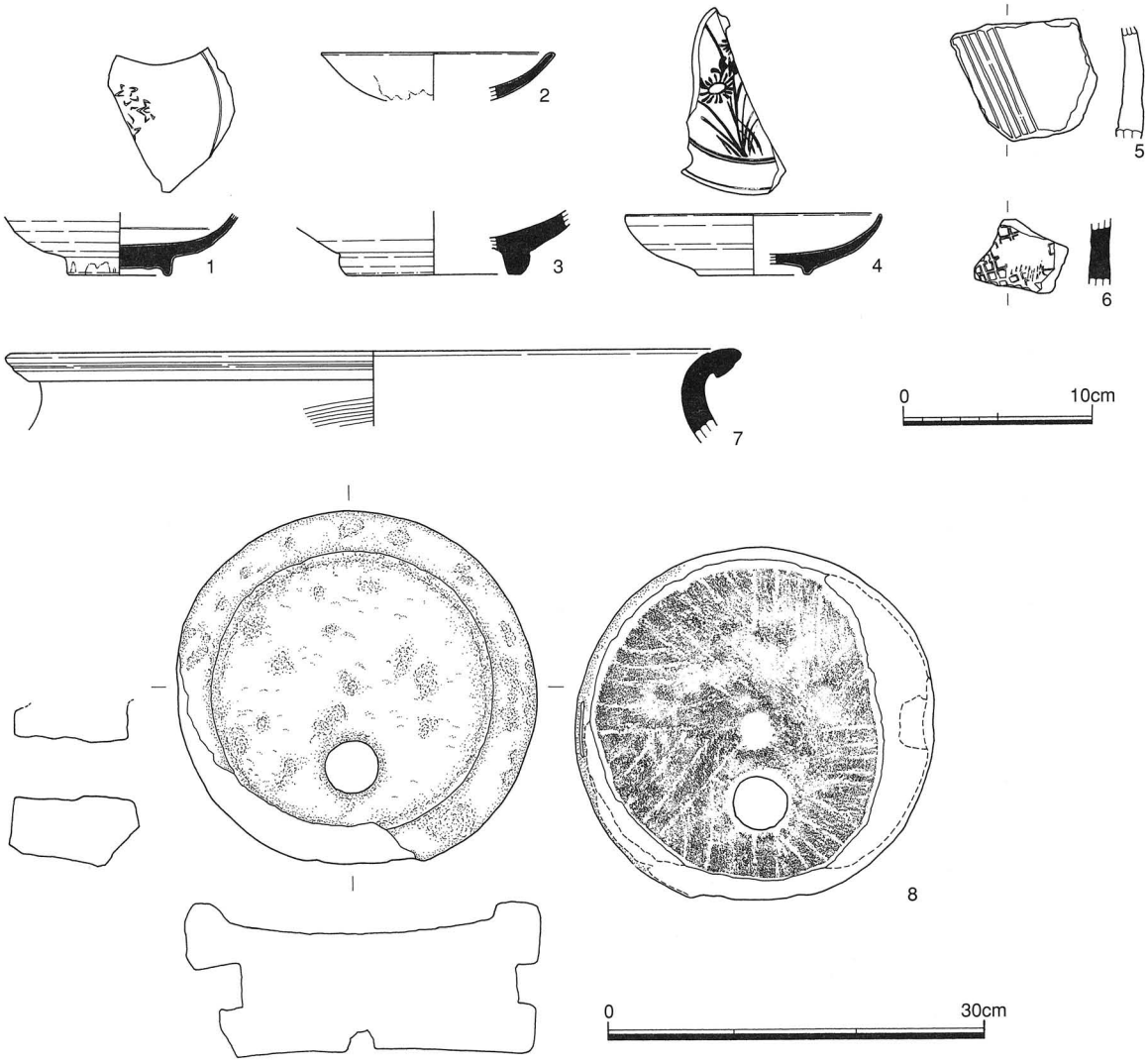

Y=87.200
Y=87.300
Y=87.400
X=130.800
X=130.800
X=130.700
X=130.700
X=130.600
X=130.600
X=130.500
X=130.500
X=130.400
Y=87.300
Y=87.400
0
100m

第１図　トレンチ配置図



1．耕作土
1a．耕作土（2cm以下礫少量含む。）
2．床土
3．にぶい黄褐色　10YR5/4　砂質土（10cm以下礫含む。客土。）
4．にぶい黄褐色　10YR5/4　砂質土（地山層。）
5．にぶい黄褐色　10YR5/4　砂質土（粘性なし。）
6．にぶい黄褐色　10YR4/3　砂質土（3cm以下礫少量含む。客土。）
7．にぶい黄褐色　10YR4/3　砂質土（しまり有り。）
8．褐色　10YR4/4　砂質土（10cm以下礫含む。）
8a．褐色　10YR4/4　砂質土（10cm以下礫多く含む。）
8b．褐色　10YR4/4　礫層（水の影響有り。）
9．褐色　10YR4/4　砂礫層
10．褐色　10YR4/6　砂質土（5～10cm礫少量含む。）
11．黄褐色　2.5Y5/4　シルト（粘性強い。3cm以下礫含む。）（黄褐色10YR5/6混入）
12．黄褐色　2.5Y5/4　シルト（砂性強い。粘性有り。湧水多い。）
13．黄褐色　2.5Y5/4　砂礫層（40cm以下礫多く含む。）
14．黄褐色　2.5Y5/3　砂礫層
15．褐灰色　10YR4/1　シルト（粘性強い。5cm大礫含む。）
16．褐灰色　10YR5/1　粘土
17．青灰色　10BG5/1　シルト（砂性強い。粘性有り。湧水多い。）
18．黄灰色　10Y4/1　砂礫層（10cm以下の礫。）
19．暗灰黄色　2.5Y5/2　シルト（10cm以下礫含む。）
20．暗灰黄色　2.5Y5/2　シルト
21．明黄褐色　10YR6/6　砂質土（粘性なし。）
22．オリーブ褐色　2.5Y4/3　シルト（粘性有り。30cm以下礫含む。湧水。）
23．オリーブ灰色　2.5GY5/1　砂礫層
24．黒褐色　10YR3/1　シルト（砂性強い。粘性有り。5cm以下礫含む。）
25．黒褐色　2.5Y3/1　シルト（粘性強い。植物遺存体検出。）
26．黒褐色　2.5Y3/1　シルト（粘性強い。）
27．暗褐色　10YR3/4　砂質土（25cm以下礫多く含む。）
28．黒色　10YR2/1　粘土（炭化物・木片検出。）
29．礫

第2図　模式柱状土層図



第３図　出土遺物

大坂西谷遺跡　土器観察表
包含層

報告書掲載番号	遺構	出土地点	層位	器種	残存率	口径(cm)	体部最大径(cm)	底径(cm)	頸部(脚柱)径(cm)	器高・残存高(cm)	その他の法量(cm)	部位	形態	調整	含有物組成	色調	備考
1	No32トレンチ		5層	青磁碗	底部1/3			5.4		3.4	高台高1.0	底部	体部外上方へ延びる。削り出し高台で、断面を方形状に収める。畳付、高台内無釉。内面見込みに印花文。	外面：ロクロケズリのち施釉。 内面：ロクロナデのち施釉。	石英・黒色砂粒・白色砂粒	釉：グレイみの黄緑 胎：明青灰	龍泉窯系。焼成良好。
2	No32トレンチ		排土	磁器皿	口縁部1/10	12.5				2.5		口縁～体部	体部外上方に立ち上がり、端部を外側に尖り気味に収める。外面釉だれが見られる。	外面：ロクロケズリのち施釉。 内面：ロクロナデのち施釉。	緻密	灰釉 釉：うすい黄緑 胎：灰白	肥前系。焼成良好。
3	No32トレンチ		排土	陶器皿	底部1/4			9.2		3.4	高台高1.3	底部	体部外上方へ立ち上がる。削り出し高台で直立する。断面方形に収め、にぶい面取りを行う。畳付高台内無釉。	外面：ロクロケズリのち施釉。 内面：ロクロナデのち施釉。 ハケ。	長石	外面：くらいグレイ 内面：ブラウンみのグレイ 胎：暗赤灰	肥前系唐津。焼成良好。
4	No33トレンチ		5層上面	磁器皿	全体1/5	13.8		6.0		3.3	高台高0.35	口縁～底部	体部内彎しながら立ち上がり、端部を丸く収める。削り出し高台で「ハ」の字に開く。畳付無釉削り跡有り。高台砂付着。染付(呉須)草花文。	外面：ロクロナデのち施釉。 内面：ロクロナデのち施釉。	緻密	透明釉 釉：青みの白 胎：灰白	初期伊万里。焼成良好。
5	No32トレンチ		排土	土師質土器擂鉢	破片					5.9		不明		外面：剥離のため調整不明。 内面：擂り目。	石英・長石・結晶片岩	外面：橙 内面：暗灰黄	焼成不良。
6	No55トレンチ		2層上面	須恵質土器甕	破片					3.6		不明		外面：格子目タタキ。 内面：ナデ。	石英	外面：灰 内面：灰	焼成良好。
7	No56トレンチ		3層	須恵質土器甕	口縁部1/3	38.0				4.1		口縁部	口縁部で若干外反し、端部を丸く収め、上下に拡張する。	外面：凹線1条。 ハケ（5条／cm）。 内面：ナデ。	石英・雲母・結晶片岩	外面：橙 内面：橙	焼成不良。

大坂西谷遺跡　石器・石製品観察表
包含層

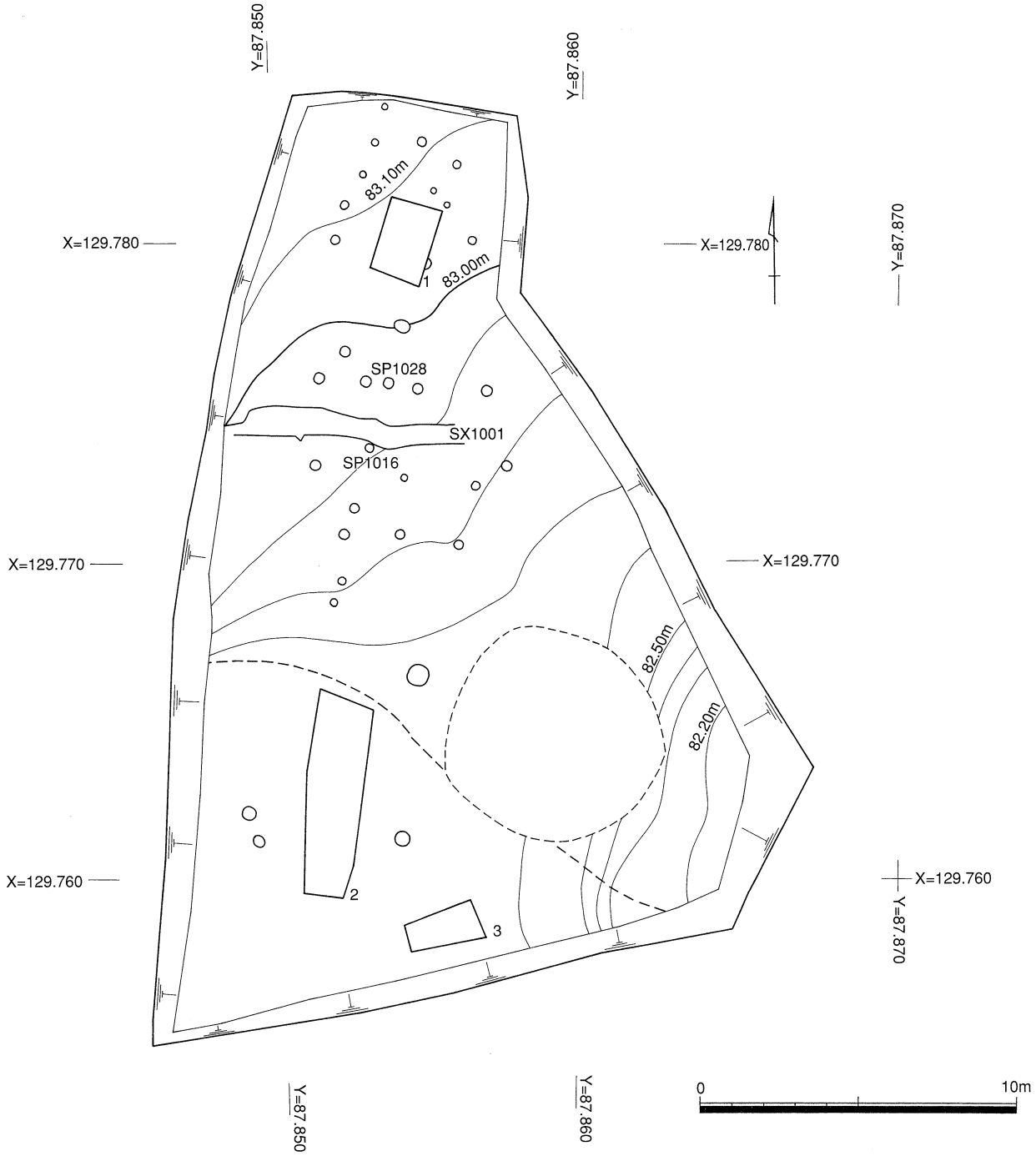
報告書掲載番号	遺構	出土地点	層位	石材	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	その他の法量(cm)	残存率	部位	備考
8				砂岩	石臼			高さ12.2	14900	最大径29.1	9/10		

2　唱谷遺跡

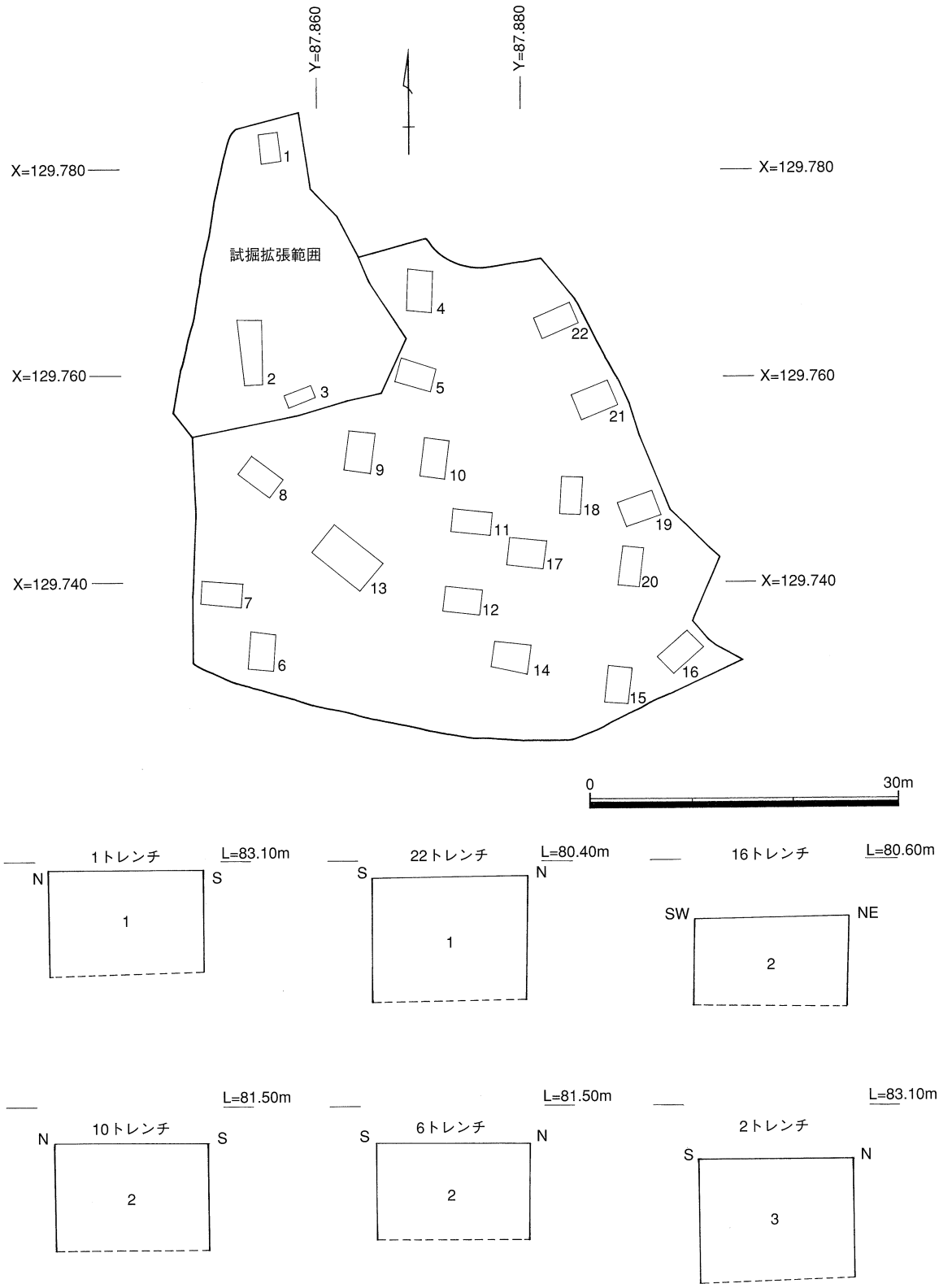
調査成果

遺跡の位置（Ⅰ-第１図およびⅡ-第１・２・８図）

調査対象地は周囲を阿讃山脈から派生する支脈に囲まれた、標高約80mの北唱谷川に沿った傾斜地に位置する。現況は石垣や擁壁で仕切られた段々畑となっている。1995年度に徳島県教育委員会文化財課により実施された精密分布調査では遺跡確認調査の必要性が指摘されている。



第１図　地形平面・遺構配置図



1．明黄褐色　10YR7/6　砂質土（やや粘性あり。）
2．オリーブ褐色　2.5Y4/3　砂質土（しまりのない堆積層。φ＝2～30cm大の礫が多く混じる。）
3．明黄褐色　2.5Y6/6　砂（しまり弱い。水気多い。）

0　1m

第2図　トレンチ配置・模式柱状土層図

トレンチの設定（第２図）

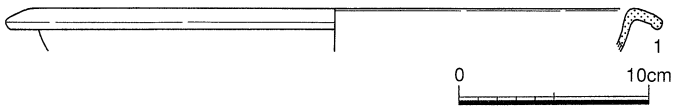
調査区は横断道の路線に沿い、傾斜地上を南北方向に通るかたちで設定した。試掘に際しては、調査対象面積の５％を基準としてトレンチを設定し、遺物包含層および無遺物自然堆積層までの層厚の確認と柱状断面図、断面写真の作成を基本方針とした。遺跡の有無の判定については調査対象面積の20％を上限とした。

基本層序（第２図）

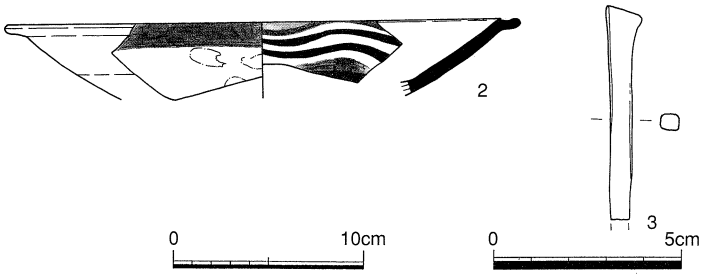
表土以下は耕作地開墾による削平あるいは客土等の改変が著しく、安定した遺物包含層・遺構面は確認することができなかった。

出土遺物（第３～５図）

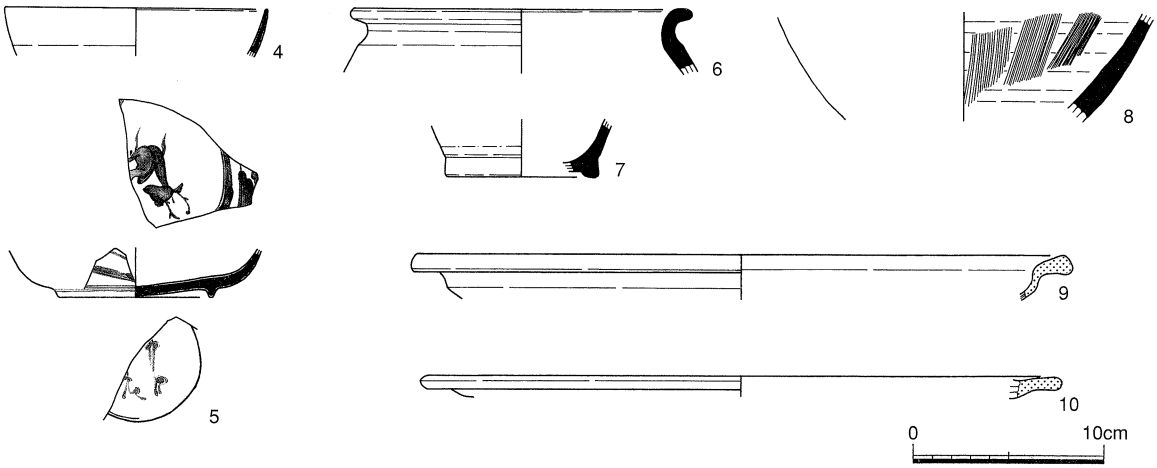
１は瓦質土器の焙烙鍋である。２は瀬戸美濃系と思われる内面に白泥刷毛目が施された陶器の皿である。３は鉄釘である。４は肥前系の青磁碗である。５は肥前系磁器と思われる染付の皿である。６は大谷焼と思われる鉄釉陶器甕、７は瀬戸美濃系陶器瓶の底部である。８は備前焼の擂鉢、９・10は１と同様、瓦質土器の焙烙鍋である。



第３図　出土遺物１



第４図　出土遺物２



第５図　出土遺物３

まとめ（第１図）

22基の試掘トレンチを開口した。土層の堆積状況から、調査区域は耕作地（畑）を造成する過程でかなりの削平・客土等、人為的な土地の改変が行われていることが確認された。また土地の改変を受けていない自然堆積層中においても近世以降の陶磁器類が出土したにとどまった。調査時において数基のSPあるいはSXが検出されたが、後世の攪乱等によるものと判断され、遺構等は確認されなかった。試掘結果を受け、本調査区全域において遺跡は存在しないと考えられるため、試掘調査のみで終了した。

唱谷遺跡　土器観察表

SX

報告書掲載番号	遺構	出土地点	層位	器種	残存率	口径(cm)	体部最大径(cm)	底径(cm)	頸部(脚柱)径(cm)	器高・残存高(cm)	その他の法量(cm)	部位	形態	調整	含有物組成	色調	備考
1	SX1001		第1遺構面直上	瓦質焙烙	口縁部1/24	32.0	35.0			2.2		口縁部	口縁部大きく外下方へ外反し、端部を丸く収める。	外面：ナデ。 内面：ナデ。	石英・長石	外面：紫灰 内面：灰黄	焼成良好。外面に煤付着。

SP

報告書掲載番号	遺構	出土地点	層位	器種	残存率	口径(cm)	体部最大径(cm)	底径(cm)	頸部(脚柱)径(cm)	器高・残存高(cm)	その他の法量(cm)	部位	形態	調整	含有物組成	色調	備考
2	SP1028		第1遺構面直上	陶器皿	口縁部1/12	27.0	27.2			4.0		口縁～体部	体部外上方へ大きく開き、口縁部で短く外反し、端部を丸く収める。1回焼成した後、口縁近くの内面に白色の化粧土を塗った後に、掻き取って、波状の文様にしている。	外面：ロクロナデのち口縁下まで施釉。 内面：ロクロナデのち施釉。	石英	釉：グレイみのオリーブ 胎：にぶい赤褐	瀬戸美濃系。焼成良好。内面白泥刷毛目。

包含層

報告書掲載番号	遺構	出土地点	層位	器種	残存率	口径(cm)	体部最大径(cm)	底径(cm)	頸部(脚柱)径(cm)	器高・残存高(cm)	その他の法量(cm)	部位	形態	調整	含有物組成	色調	備考
4			包含層	磁器碗	口縁部1/16	14.0				2.6		口縁部	体部外上方へ直線的に立ち上がり、端部を尖り気味に収める。	外面：ロクロケズリのち施釉。 内面：ロクロナデのち施釉。	緻密	釉：グレイみの黄緑 胎：灰白	肥前系磁器(伊万里)。青磁碗。焼成良好。内外面に赤斑有り。
5			遺構面直上	磁器皿	底部1/4			8.1		2.6	高台高0.5	底部	体部外上方へ内彎しながら立ち上がる。削り出し高台で、断面を逆台形に収める。畳付内側砂付着。染付(呉須)。	外面：ロクロナデのち施釉・鹿文。 内面：ロクロナデのち施釉。	緻密	透明釉 釉：黄みの白 胎：灰白	肥前系。焼成良好。高台内変形文字。
6	No13トレンチ		包含層	陶器甕	口縁部1/6	17.6			16.1	3.5		口縁部	体部内彎しながら立ち上がり、口縁で若干外反し、端部を丸く収める。	外面：ロクロナデのち施釉。 内面：ロクロナデのち施釉。	石英・長石	鉄釉 釉：グレイみのブラウン 胎：にぶい赤褐	焼成良好。
7			包含層	陶器瓶	底部1/5			7.9		3.1	高台高1.0	底部	体部外上方へ直線的に立ち上がる。削り出し高台で、断面を方形状に収める。高台際まで施釉。	外面：ロクロナデのち施釉。 内面：ロクロナデのち施釉。 底部：ロクロケズリ。	緻密	灰釉 外面：くらい黄 内面：グレイみの黄 胎：灰白	瀬戸美濃系。焼成良好。
8			第1遺構面直上	陶器擂鉢	体部					5.7		体部	体部外上方へ延びる。	外面：ナデ。 内面：擂り目（9条／単位）。	長石・砂粒	外面：にぶい橙 内面：にぶい褐	焼成良好。断面に黒色の溶けた粒が多数見られる。
9			包含層	瓦質焙烙	口縁部1/20	34.0	35.0			2.3		口縁部	口縁部大きく外反し、端部を上下に拡張し、丸く収める。	外面：ナデ。 内面：ナデ。	石英・雲母	外面：黒 内面：暗灰	焼成良好。外面に炭化物付着。内外面共に砂状雲母付着。
10	No4トレンチ			瓦質焙烙	口縁部1/16	34.0				1.2		口縁部	口縁部外方へ水平に延び、端部を丸く収める。	外面：ナデ。 内面：ナデ。	石英・雲母	外面：黒褐 内面：黒褐	焼成良好。外面に煤付着。

唱谷遺跡　鉄製品観察表

SP

報告書掲載番号	遺構	出土地点	層位	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	その他の法量(cm)	残存率	部位	備考
3	SP1016		第1遺構面	釘	5.5	0.6	0.4	9.8		1/2	頭部	

3　関柱遺跡

調査成果

遺跡の位置（Ⅰ-第１図およびⅡ-第１・３・９図）

調査対象地は阿讃山脈南麓、調査地点の東側を北から南へ流れる大坂谷川によって形成された扇状地の扇頂部、標高約32～44ｍの緩斜面上に位置する。調査対象面積は83,000㎡と広範囲であるため、調査同意の得られた地区から順次、試掘調査を実施した。現況は耕作地（田・畑）であり、擁壁や石垣で区切られた階段状の地形となっている。

トレンチの設定（第１図）

調査区は横断道の路線に沿い、扇状地上を南北方向に通るかたちで設定した。試掘に際しては、調査対象面積の５％を基準としてトレンチを設定し、遺物包含層および無遺物自然堆積層までの層厚の確認と柱状断面図、断面写真の作成を基本方針とした。遺跡の有無の判定については調査対象面積の20％を上限とした。

基本層序（第２図）

調査地点は耕作地開墾による削平あるいは客土等の改変が著しい。表土以下は扇状地性の礫層の堆積が見られ、安定した遺物包含層・遺構面は確認することができなかった。

出土遺物（第３図）

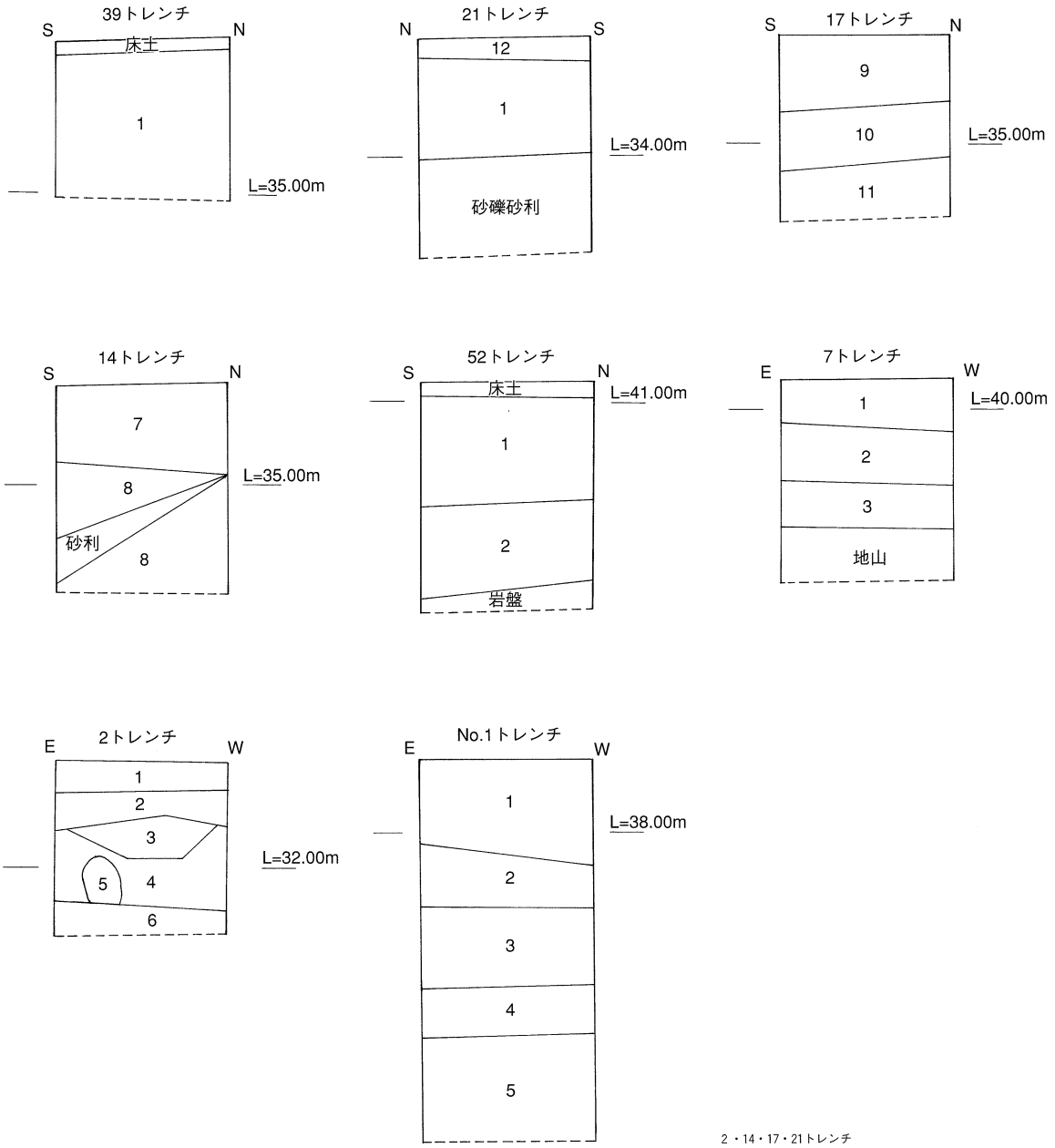
１は東播系の擂鉢の底部である。２は備前系の陶器の徳利である。３は陶器の鍋の口縁部である。４は瓦質土器の焙烙鍋である。５は緑色岩製の敲石である。

まとめ

53基の試掘トレンチを開口した。試掘トレンチ規模は５ｍ×１ｍを基本とし、必要に応じて拡張あるいは深掘りを行い、遺跡の有無の確認に努めた。試掘の結果、表土（耕作土）直下は、大坂谷川の堆積作用による扇状地性の礫層が堆積しており、遺構の存在するような安定した層は確認できなかった。また調査対象地は後世の開墾による削平・盛土等の土地改変が著しく、出土遺物も表土（耕作土）からであり、時期的にも近世以降のものである。また遺構も検出されなかった。試掘結果を受け、本調査区全域において遺構は存在しないと考えられるため、試掘調査のみで終了した。

Y=88.400
X=128.700
Y=88.500
X=128.600
X=128.500
X=128.400
Y=88.400
X =128.400
X=128.300
Y=88.500
0
100m
No.53
43
52
50
44
47
No.13
No.11
No.10
51
45
48
No.14
No.12
46
49
No.4
No.9
No.15
53
No.5
No.16
No.19
No.3
No.8
No.51
No.6
No.17
No.50
No.40
No.22
No.18
No.52
No.2
No.21
No.23
No.38
No.7
No.41
No.37
No.1
No.20
No.25
No.24
No.32
No.44
No.43
No.42
No.39
No.36
No.26
No.33
No.31
No.45
No.35
No.27
No.34
No.30
No.46
No.28
No.29
No.47
T-3
T-2
No.48
T-1
No.49
No.54
No.60
No.56
No.58
No.55
No.59
No.57
41
42
40
39
29
25
30
21
26
16
22
31
28
32
17
20
23
24
27
8
11
12
13
18
19
15
14
33
9
34
10
35
3
36
2
1
6
4
37
5
7
38

第１図　トレンチ配置図



2・14・17・21トレンチ
1．にぶい黄褐色　10YR5/4　砂質土
（しまり弱い。3～5㎝の砂礫多く含む。）
2．褐色　10YR4/4　砂質土
（2㎝大の砂礫を多く含む。草木根含む。）
3．明黄褐色　10YR6/6　砂質土（4～6㎝の砂礫を多く含む。）
4．明黄褐色　10YR6/6　砂質土（やや粘性有り。）
5．明黄褐色　10YR6/6　砂質土（4～6㎝の砂礫を少し含む。）
6．褐色　10YR4/6　砂質土
（しまり弱い。1～10㎝の礫を多く含む。）
7．明黄褐色　10YR6/6　砂質土（やや粘性有り。しまり有り。）
8．明黄褐色　10YR6/6　砂質土（3～4㎝の砂礫を多く含む。）
9．明黄褐色　10YR7/6　砂質土
（1～10㎝の様々な大きさの礫を多く含む。）
10．明黄褐色　10YR7/6　砂粒
（しまりなし。5㎜～2㎝の礫を無数に含む。）
11．明黄褐色　10YR6/8　砂粒（5～20㎝の礫を多く含む。）
12．黄橙色　10YR8/6　粘性砂質土（しまり強い。3㎝大の砂礫。）

39トレンチ
1．暗褐色　10YR3/4　砂質土（1～10㎝の砂礫を多く含む。）

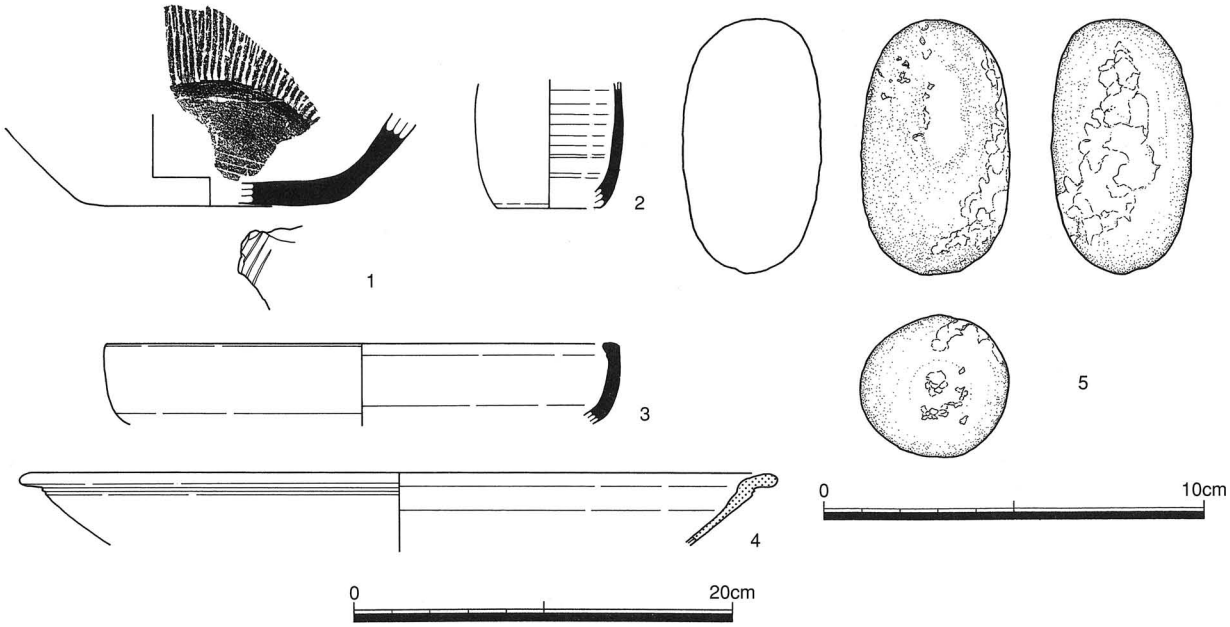
7トレンチ
1．黒褐色　2.5Y3/2　シルト（植物片を多く含む腐植土。）
2．明黄褐色　2.5Y6/6　砂質礫（亜角礫が主、こぶし頭大が多い。大礫～巨礫。）
3．黄色　2.5Y8/8　砂質礫
（亜角～角礫が主、下部にしまりのある粘土を含む。）

52トレンチ
1．砂利・礫層（3㎝大前後の丸みを帯びた礫が中心。）
2．明黄褐色　2.5Y6/6　砂質土（部分的に5㎝大の砂礫を含む。）

No.1トレンチ
1．暗オリーブ褐色　2.5Y3/3　シルト（粘性有り。しまりやや弱い。耕作土。）
2．にぶい黄色　2.5Y6/4　砂質土
（粘性、しまりやや有り。1～5㎝の礫を全面に含む。）
3．にぶい黄色　2.5Y6/4　礫層（粘性、しまり有り。中礫、粗礫を含む。）
4．にぶい黄色　2.5Y6/4　礫層（粘性、しまり有り。粗礫、巨礫を多く含む。）
5．オリーブ褐色　2.5Y4/4　礫層（しまり弱い。中礫のみ。）

0　1m

第2図　模式柱状土層図



第３図　出土遺物

関柱遺跡　土器観察表
包含層

報告書掲載番号	遺構	出土地点	層位	器種	残存率	口径(cm)	体部最大径(cm)	底径(cm)	頸部(脚柱)径(cm)	器高・残存高(cm)	その他の法量(cm)	部位	形態	調整	含有物組成	色調	備考
1	14トレンチ		盛土	陶器擂鉢	底部1/6			13.6		4.6		底部	底部僅かに上げ底。体部外上方に延びる。	外面：ナデ。 内面：擂り目（8条／単位）。 摩滅のため調整不明瞭。	石英・長石	外面：明赤褐 内面：橙	東播系。 焼成良好。
2	14トレンチ		盛土	陶器徳利	体部1/8		7.8	5.4		6.7		体部～底部	体部直立に立ち上がり、底部外周面取りを施す。	外面：ロクロナデ。 内面：ロクロケズリ。 底部：ロクロケズリ。	緻密	外面：赤灰 内面：赤褐	備前系。 焼成良好。
3	14トレンチ		盛土	陶器鍋	口縁部1/20	26.7	27.2			4.2		口縁部	口縁部は直立して端部は四角く収める。	外面：ナデ。 口縁端部ケズリ。 内面：ナデ。	石英・長石	外面：黄灰 内面：褐灰 胎：灰白	焼成良好。
4	14トレンチ		盛土	瓦質焙烙	口縁部1/24	40.0				3.7		口縁部	体部外上方へ開き、口縁部で肥厚、外反し、端部を丸く収める。	外面：ヨコナデ。 型跡。 内面：ヨコナデ。 ナデ傷有り。	石英・長石・雲母	外面：黄灰 暗灰黄 内面：黄灰	焼成良好。

関柱遺跡　石器・石製品観察表
包含層

報告書掲載番号	遺構	出土地点	層位	石材	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	その他の法量(cm)	残存率	部位	備考
5	14トレンチ		包含層	緑色岩	敲石	6.7	4.0	3.9	158.5		1/1		

4　金泉寺谷西古墳群

調査成果

遺跡の位置（Ⅰ-第１図およびⅡ-第１・３・10図）

調査対象地は阿讃山脈南麓の標高約56～59mの高位段丘面上に位置する。調査地点の南には中央構造線に派生する断層が通る。現況は山林であるが、以前には耕作地（畑）として開墾されていた。調査地点周辺には、中谷山古墳群・愛宕山古墳・阿王塚古墳・吹田奥郷古墳など多くの古墳が存在している。

トレンチの設定（第１図）

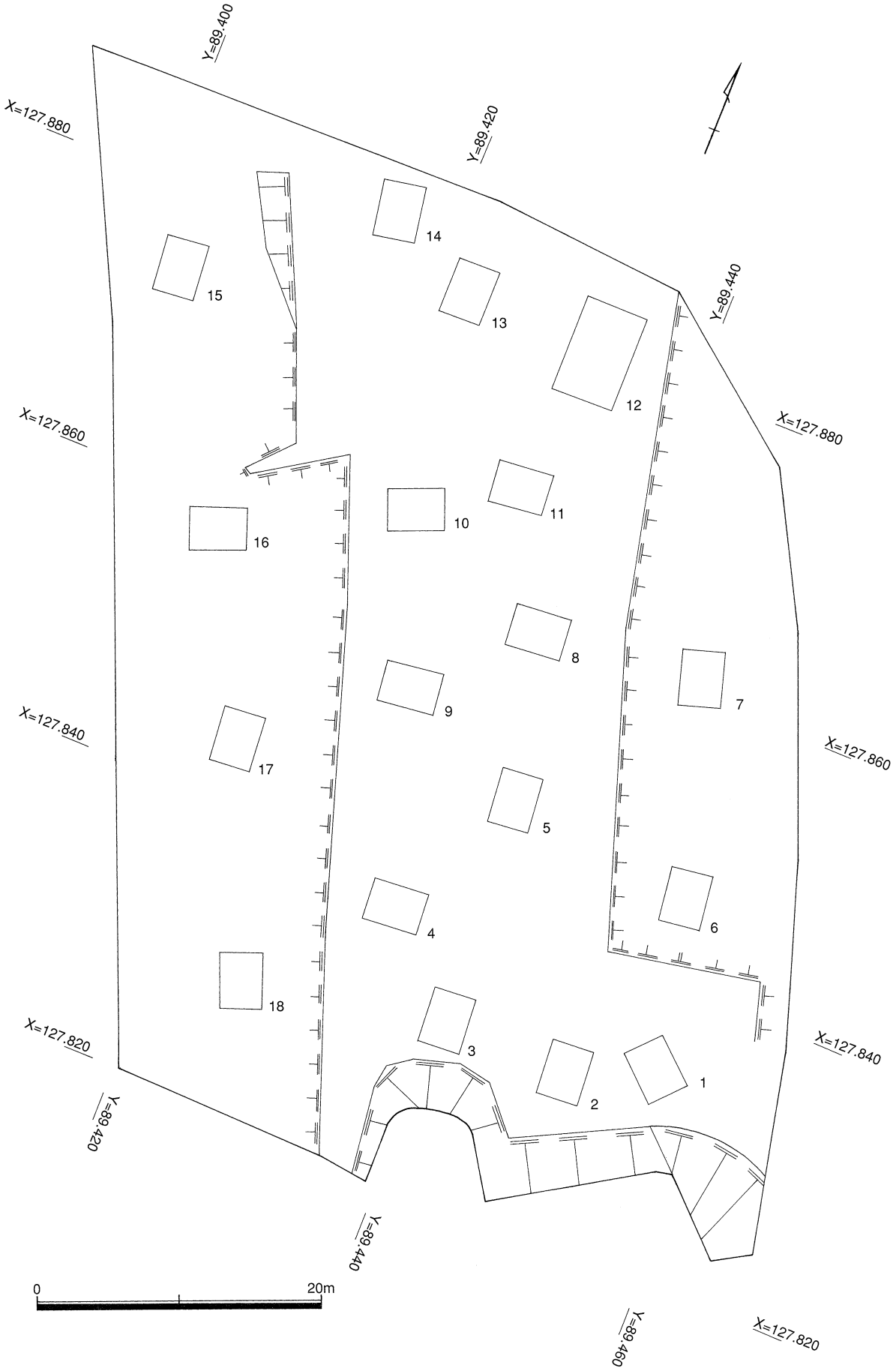
調査区は段丘平坦面を中心に設定した。試掘に際しては、調査対象面積の５％を基準としてトレンチを設定し、遺物包含層および無遺物自然堆積層までの層厚の確認と柱状断面図、断面写真の作成を基本方針とした。遺跡の有無の判定については調査対象面積の20％を上限とした。

基本層序（第２図）

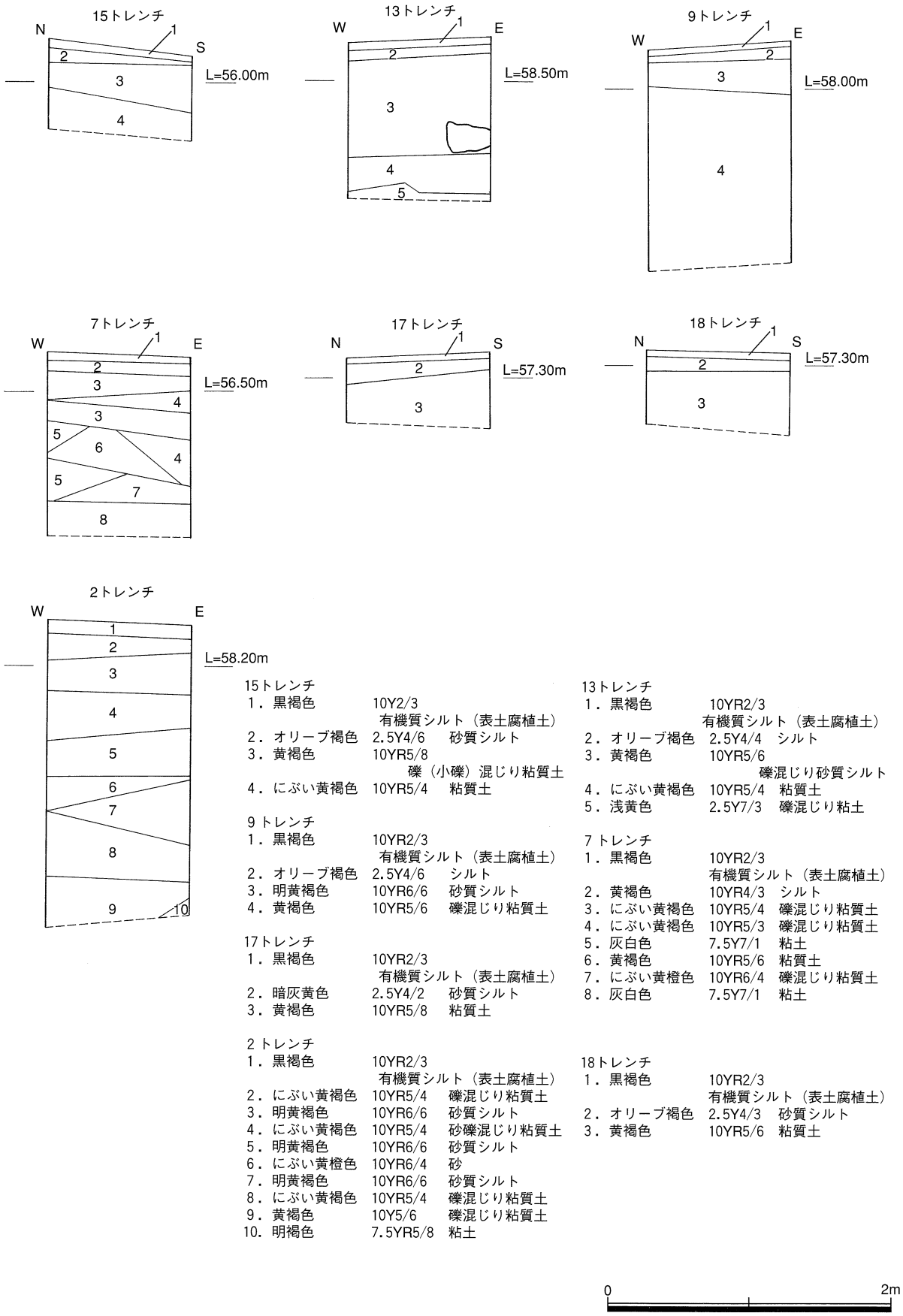
調査地点は耕作地開墾による削平等の改変が著しい。また表土（腐植土）以下は岩盤の風化砂礫層となっており、遺物包含層・遺構面は確認することができなかった。

まとめ

18基のトレンチを開口した。調査の結果、表土直下は風化砂礫層（地山・無遺物層）である。部分的に火山灰の堆積層も見られた。調査地点は後世の開墾による削平を受けており、遺構・遺物共に発見されなかったため、調査区全域において遺構は存在しないと考えられる。よって本調査区域では試掘調査のみで終了した。


Y=89.400
Y=89.420
Y=89.440
X=127.880
X=127.860
X=127.840
X=127.820
Y=89.420
Y=89.440
Y=89.460
X=127.880
X=127.860
X=127.840
X=127.820
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
0
20m

第１図　トレンチ配置図



15トレンチ

1．黒褐色　10Y2/3　有機質シルト（表土腐植土）
2．オリーブ褐色　2.5Y4/6　砂質シルト
3．黄褐色　10YR5/8　礫（小礫）混じり粘質土
4．にぶい黄褐色　10YR5/4　粘質土

9トレンチ

1．黒褐色　10YR2/3　有機質シルト（表土腐植土）
2．オリーブ褐色　2.5Y4/6　シルト
3．明黄褐色　10YR6/6　砂質シルト
4．黄褐色　10YR5/6　礫混じり粘質土

17トレンチ

1．黒褐色　10YR2/3　有機質シルト（表土腐植土）
2．暗灰黄色　2.5Y4/2　砂質シルト
3．黄褐色　10YR5/8　粘質土

2トレンチ

1．黒褐色　10YR2/3　有機質シルト（表土腐植土）
2．にぶい黄褐色　10YR5/4　礫混じり粘質土
3．明黄褐色　10YR6/6　砂質シルト
4．にぶい黄褐色　10YR5/4　砂礫混じり粘質土
5．明黄褐色　10YR6/6　砂質シルト
6．にぶい黄橙色　10YR6/4　砂
7．明黄褐色　10YR6/6　砂質シルト
8．にぶい黄褐色　10YR5/4　礫混じり粘質土
9．黄褐色　10Y5/6　礫混じり粘質土
10．明褐色　7.5YR5/8　粘土

13トレンチ

1．黒褐色　10YR2/3　有機質シルト（表土腐植土）
2．オリーブ褐色　2.5Y4/4　シルト
3．黄褐色　10YR5/6　礫混じり砂質シルト
4．にぶい黄褐色　10YR5/4　粘質土
5．浅黄色　2.5Y7/3　礫混じり粘土

7トレンチ

1．黒褐色　10YR2/3　有機質シルト（表土腐植土）
2．黄褐色　10YR4/3　シルト
3．にぶい黄褐色　10YR5/4　礫混じり粘質土
4．にぶい黄褐色　10YR5/3　礫混じり粘質土
5．灰白色　7.5Y7/1　粘土
6．黄褐色　10YR5/6　粘質土
7．にぶい黄橙色　10YR6/4　礫混じり粘質土
8．灰白色　7.5Y7/1　粘土

18トレンチ

1．黒褐色　10YR2/3　有機質シルト（表土腐植土）
2．オリーブ褐色　2.5Y4/3　砂質シルト
3．黄褐色　10YR5/6　粘質土

第２図　模式柱状土層図

5　金泉寺谷東古墳群

調査成果

遺跡の位置（Ⅰ-第１図およびⅡ-第１・３・11図）

阿讃山脈南麓、標高52～62mの北から南に傾斜する尾根上に位置する。調査地点周辺には、中谷山古墳群・愛宕山古墳・阿王塚古墳・吹田奥郷古墳など多くの古墳が存在している。現況は山林である。

トレンチの設定（第１図）

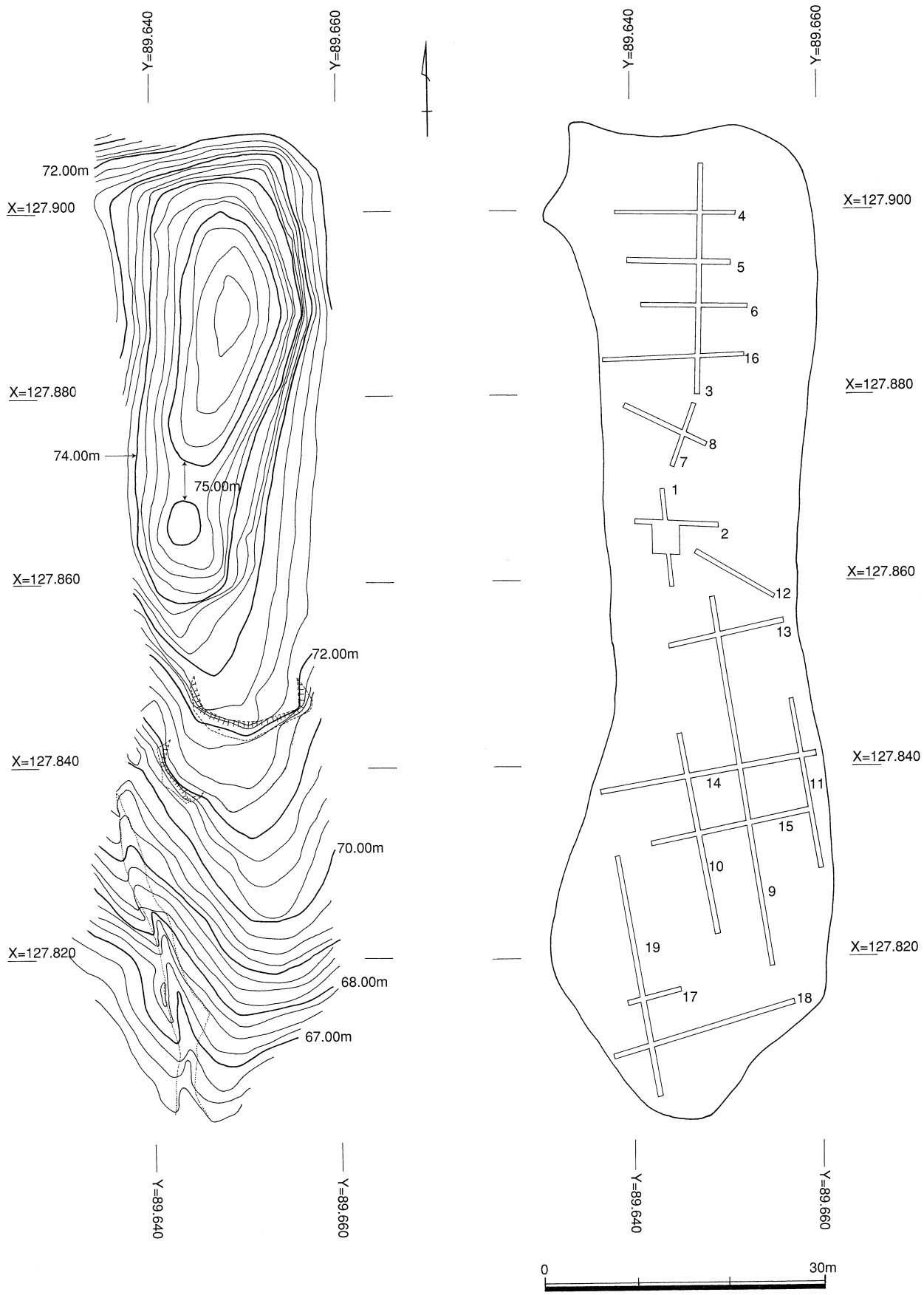
調査に際し、現況の地形測量を実施した。墳丘と思われる高まりを確認した後、試掘トレンチを設定し、掘削作業を行った。トレンチの設定については墳丘と思われる地点を中心に尾根筋に沿ってメイントレンチを設定し、それに直交するようにサブトレンチを設定した。試掘に際しては、調査対象面積の５％を基準としてトレンチを設定し、遺物包含層および無遺物自然堆積層までの層厚の確認と柱状断面図、断面写真の作成を基本方針とした。遺跡の有無の判定については調査対象面積の20％を上限とした。

基本層序（第２図）

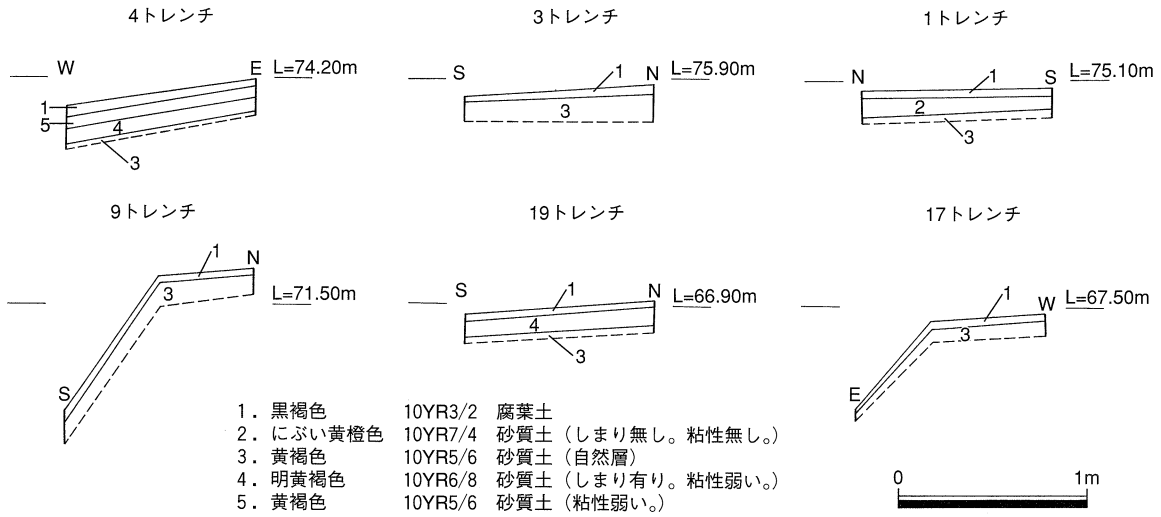
表土（腐葉土）直下は岩盤風化土、あるいは和泉層群起因の泥岩・砂岩の岩盤層となっており、安定した遺物包含層・遺構面は確認することができなかった。

まとめ

調査に際し、平板地形測量を実施した。地形測量から墳丘の可能性が考えられる部分を中心に試掘トレンチを設定し、19基のトレンチを開口した。各トレンチとも基本的な層序は、表土直下は和泉層群の岩盤層である。墳丘状の高まりは自然地形の風化によるものと確認され、また調査区２ヵ所でみられた段状の部分は、後世の開墾時の改変によるものであった。試掘の結果、遺構・遺物共に発見されなかったため、調査区全域において遺跡は存在しないと考えられる。よって本調査区域では試掘調査のみで終了した。



第１図　地形平面・トレンチ配置図



1．黒褐色　10YR3/2　腐葉土
2．にぶい黄橙色　10YR7/4　砂質土（しまり無し。粘性無し。）
3．黄褐色　10YR5/6　砂質土（自然層）
4．明黄褐色　10YR6/8　砂質土（しまり有り。粘性弱い。）
5．黄褐色　10YR5/6　砂質土（粘性弱い。）

第２図　模式柱状土層図

6　中谷山古墳群（Ⅱ）

調査成果

遺跡の位置（Ⅰ-第１図およびⅡ-第１・３・11図）

阿讃山脈南麓、標高52～61mの南北に延びる尾根上に位置する。現況は山林である。周辺には愛宕山古墳・谷口山古墳など多くの古墳が存在する。

トレンチの設定（第１・２図）

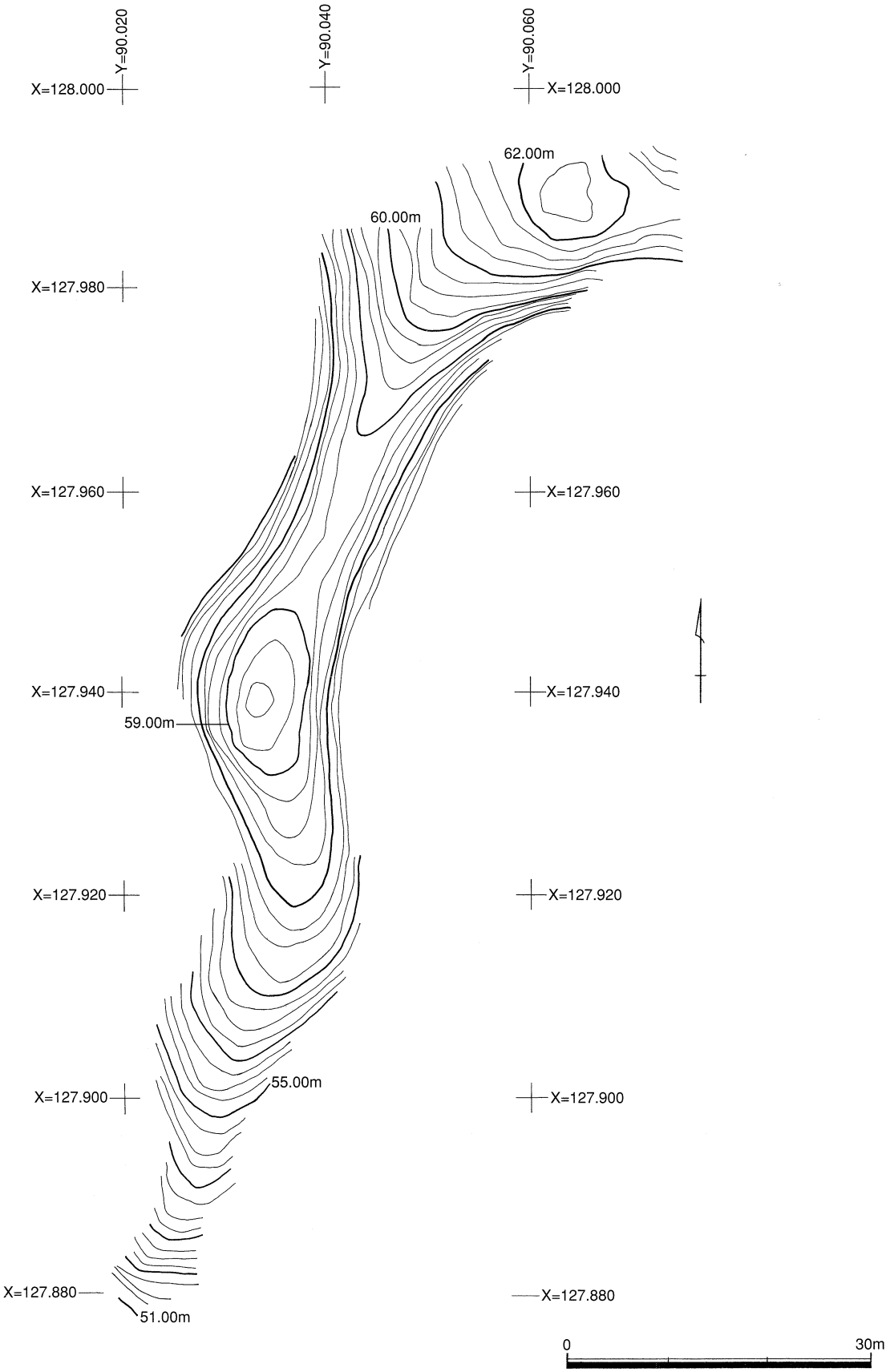
調査に際し、現況の地形測量を実施した。墳丘と思われる高まりを確認した後、試掘トレンチを設定し、掘削作業を行った。トレンチの設定については墳丘と思われる地点を中心に尾根筋に沿ってメイントレンチを設定し、それに直交するようにサブトレンチを設定した。試掘に際しては、調査対象面積の５％を基準としてトレンチを設定し、遺物包含層および無遺物自然堆積層までの層厚の確認と柱状断面図、断面写真の作成を基本方針とした。遺跡の有無の判定については調査対象面積の20％を上限とした。

基本層序（第３図）

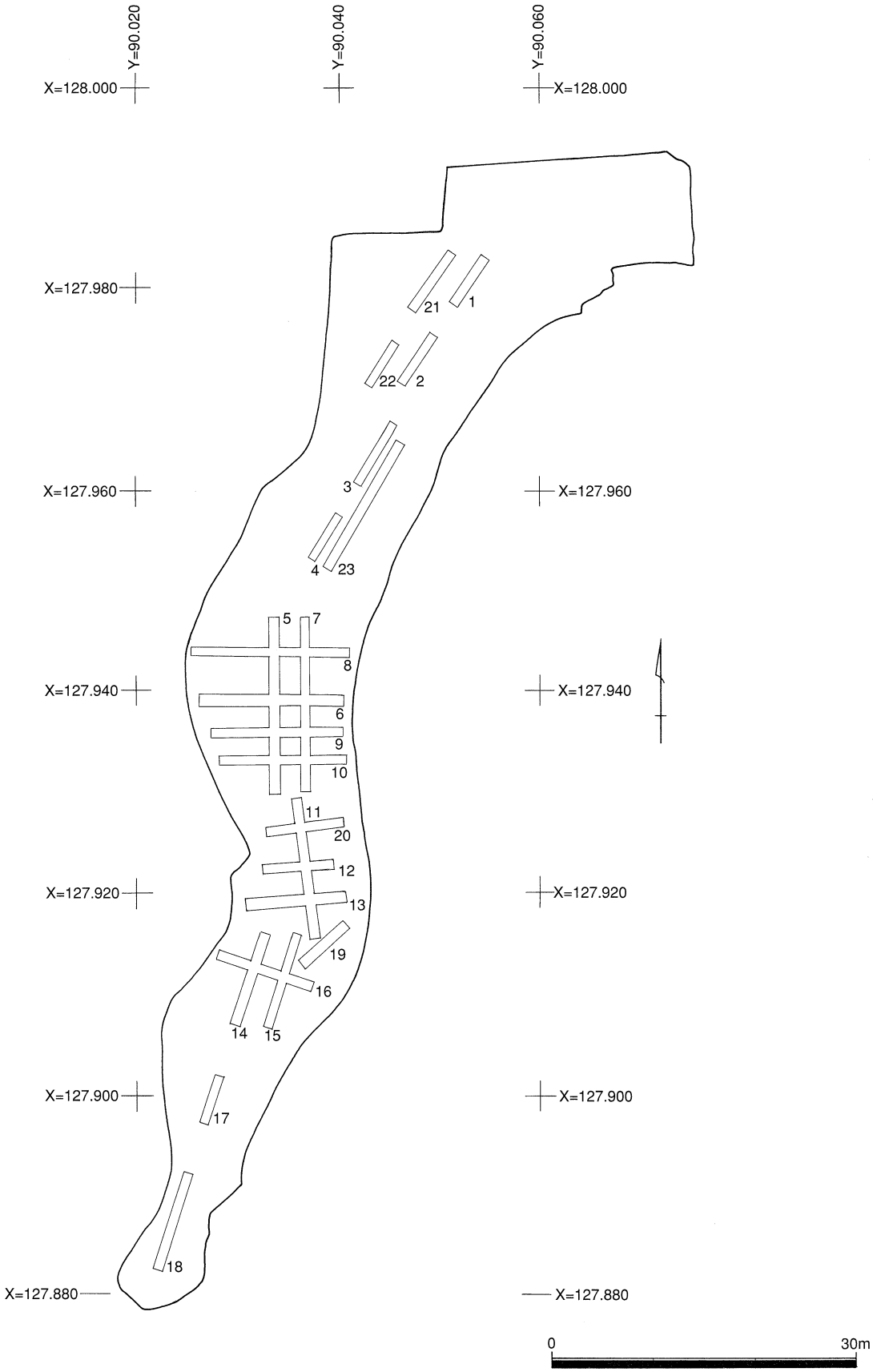
表土（腐葉土）直下は岩盤風化土、あるいは和泉層群起因の泥岩・砂岩の岩盤層となっており、安定した遺物包含層・遺構面は確認することができなかった。

まとめ

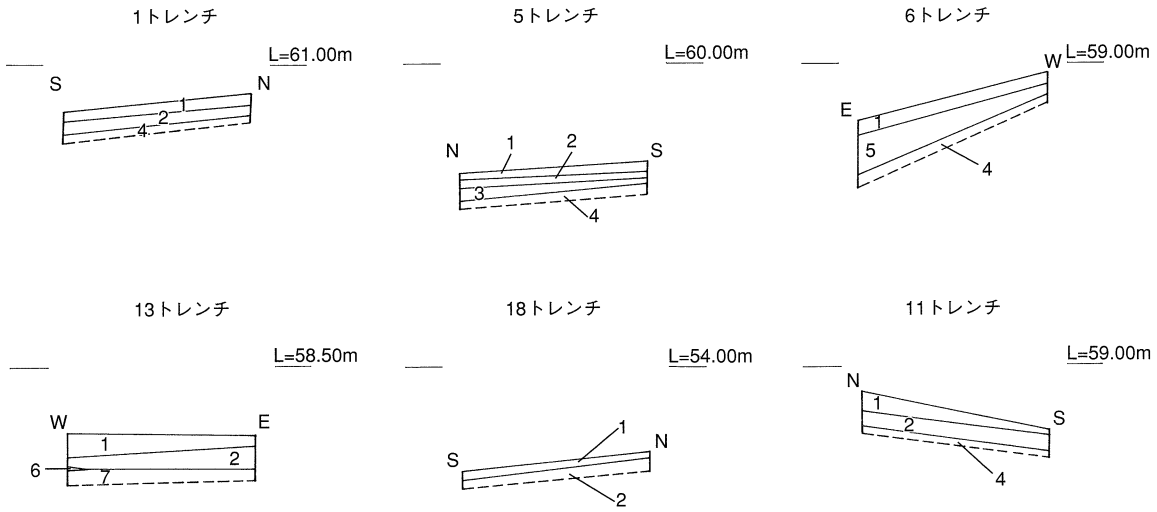
調査に際し、平板地形測量を実施した。その結果を基に試掘トレンチを設定し、23基のトレンチを開口した。試掘の結果、表土直下は和泉層群の岩盤の風化層及び岩盤であり、遺構・遺物共に発見されなかった。よって、調査区全域において遺構は存在しないと考えられるため、本調査区域では試掘調査のみで終了した。


Y=90.020
Y=90.040
Y=90.060
X=128.000
X=128.000
62.00m
60.00m
X=127.980
X=127.960
X=127.960
X=127.940
X=127.940
59.00m
X=127.920
X=127.920
55.00m
X=127.900
X=127.900
X=127.880
X=127.880
51.00m
0
30m

第１図　地形平面図


Y=90.020
Y=90.040
Y=90.060
X=128.000
X=128.000
X=127.980
X=127.960
X=127.960
X=127.940
X=127.940
X=127.920
X=127.920
X=127.900
X=127.900
X=127.880
X=127.880
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
0
30m

第２図　トレンチ配置図



1．腐葉土
2．にぶい黄褐色　10YR4/3　砂質土（しまり無し。）
3．明黄褐色　10YR6/6　砂質土（しまり有り。粘性やや有り。）
4．明黄褐色　10YR7/6　自然の岩盤
5．褐色　10YR4/4　砂質土（しまり無し。）
6．にぶい黄橙色　10YR6/4　シルト（粘性やや有り。）
7．にぶい黄橙色　10YR6/4　砂質土（しまり有り。粘性弱い。）

0　1m

第３図　模式柱状土層図

7　中谷山古墳群（Ⅲ）

調査成果

遺跡の位置（Ⅰ-第１図およびⅡ-第１・３・11図）

阿讃山脈南麓、標高約45m前後の南北に延びる尾根上に位置する。現況は山林となっている。

トレンチの設定（第１図）

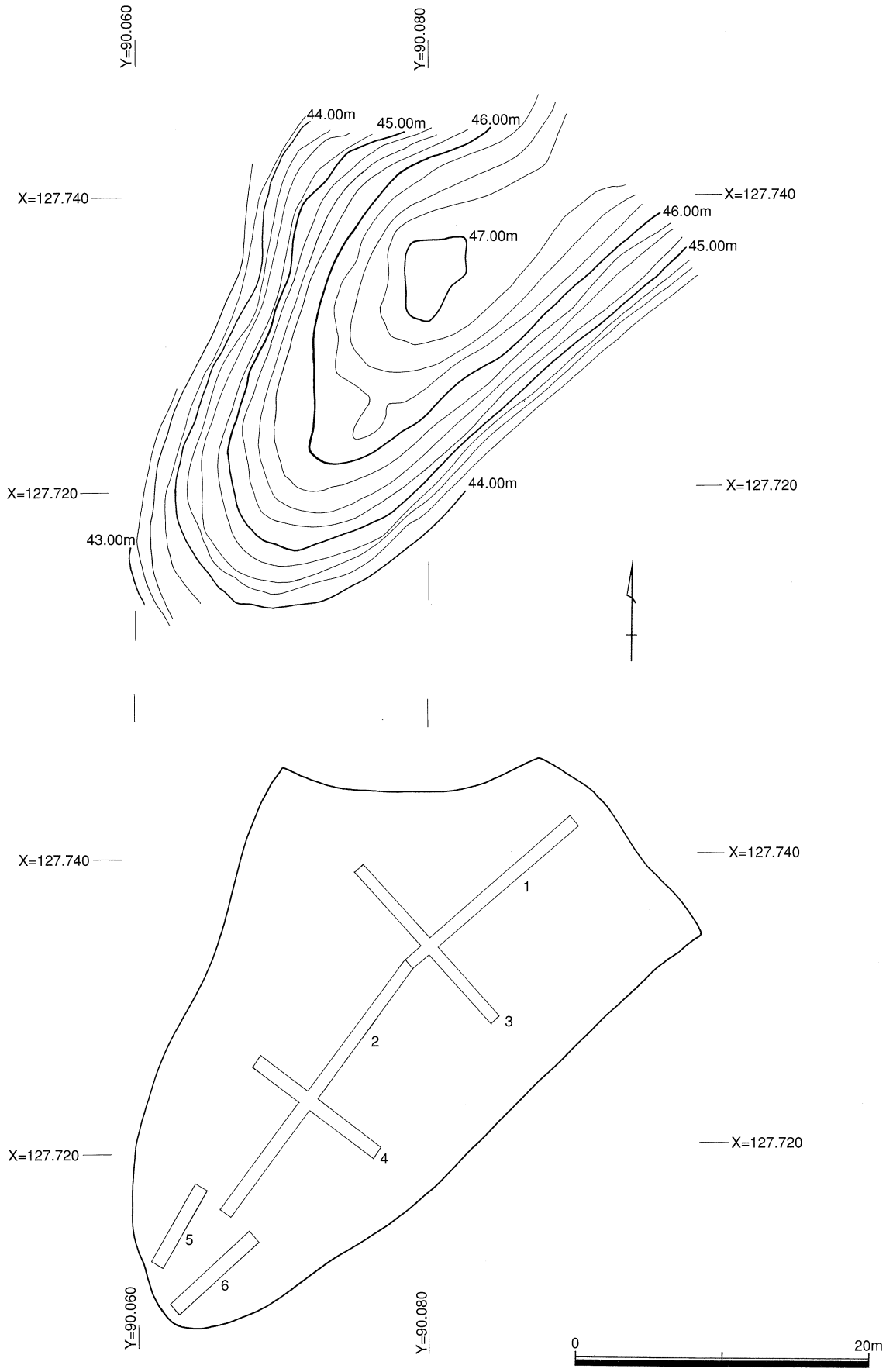
調査に際し、現況の地形測量を実施した。墳丘と思われる高まりを確認した後、試掘トレンチを設定し、掘削作業を行った。トレンチの設定については墳丘と思われる地点を中心に尾根筋に沿ってメイントレンチを設定し、それに直交するようにサブトレンチを設定した。試掘に際しては、調査対象面積の５％を基準としてトレンチを設定し、遺物包含層および無遺物自然堆積層までの層厚の確認と柱状断面図、断面写真の作成を基本方針とした。遺跡の有無の判定については調査対象面積の20％を上限とした。

基本層序（第２図）

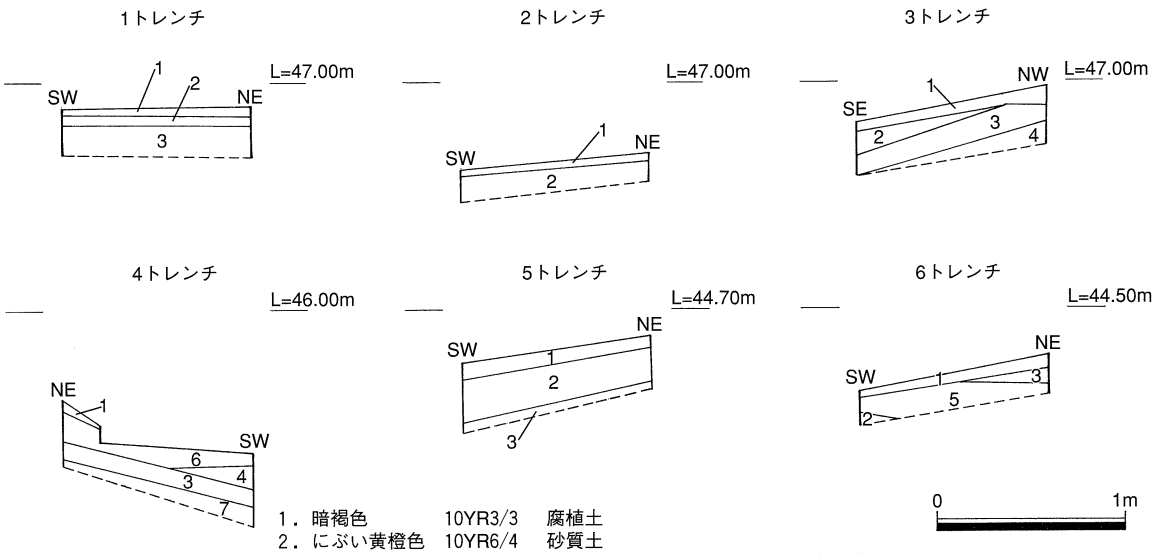
表土（腐植土）直下は岩盤風化土、あるいは和泉層群起因の泥岩・砂岩の岩盤層となっており、安定した遺物包含層・遺構面は確認することができなかった。

まとめ

調査に際し、平板地形測量を実施した。その結果に基づき尾根筋に沿ってメイントレンチを、それに直交するようにサブトレンチを設定し、６基のトレンチを開口した。表土直下は和泉層群の岩盤層であり、試掘の結果、遺構・遺物共に確認することはできなかった。よって、調査区全域において遺構は存在しないと考えられるため、本調査区域では試掘調査のみで終了した。



第１図　地形平面・トレンチ配置図



1．暗褐色　10YR3/3　腐植土
2．にぶい黄橙色　10YR6/4　砂質土
3．にぶい黄橙色　10YR7/4　シルト（粘性やや有り。しまり有り。）
4．明黄褐色　10YR6/6　砂質土（覆土）
5．明黄褐色　10YR6/6　3層の風化土
6．褐色　10YR4/4　砂質土
7．浅黄色　2.5YR7/3　岩盤（砂岩）

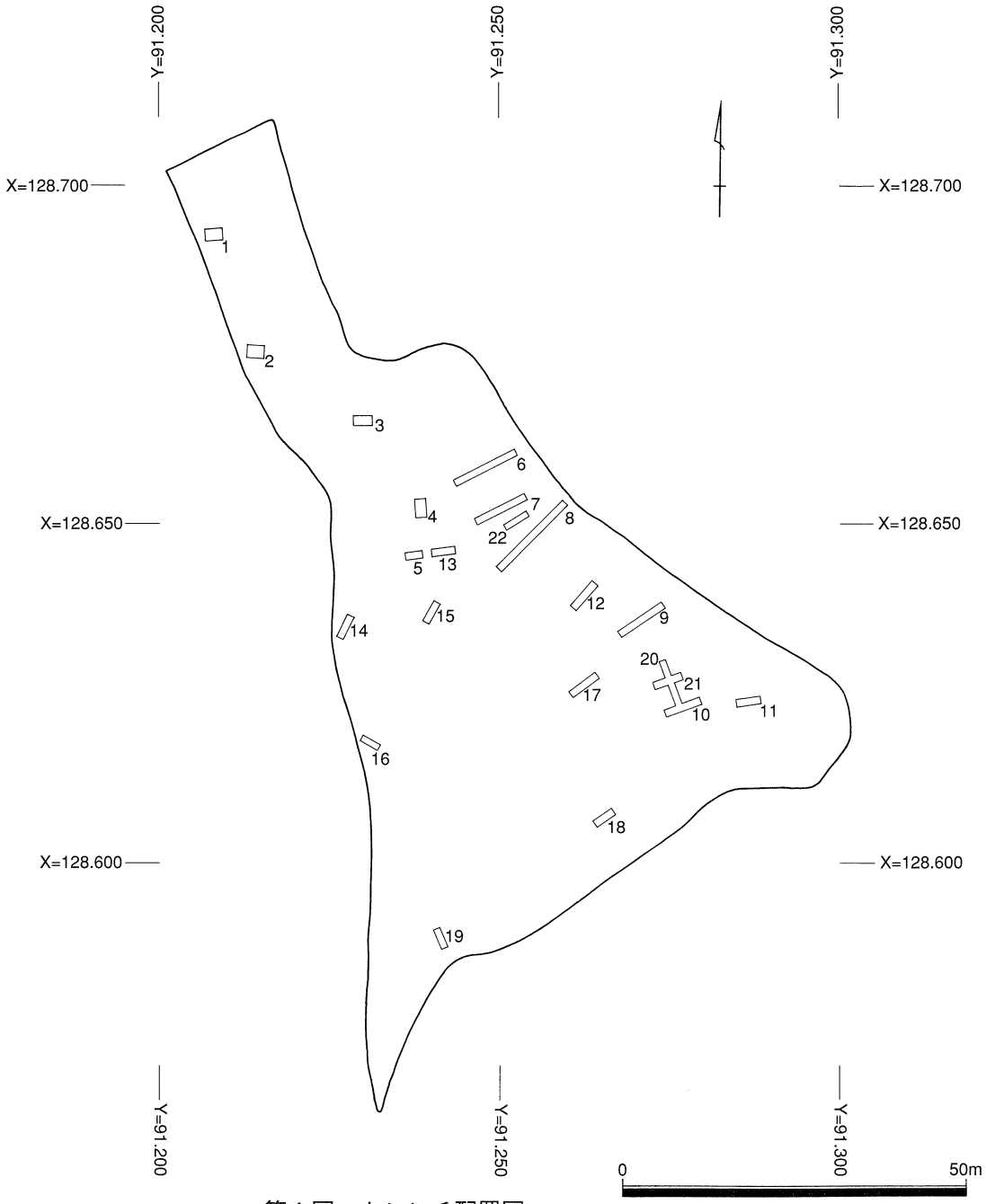
第2図　模式柱状土層図

8　桧西谷遺跡

調査成果

遺跡の位置（Ⅰ-第１図およびⅡ-第１・４・13図）

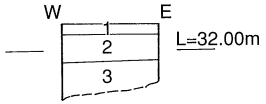
調査対象地は阿讃山脈南麓、標高25～32mの低位段丘上に位置する。現況は畑地となっている。本調査地に隣接して東側の尾根上には、弥生時代の集落が営まれた桧はちまき山遺跡が所在する。



第１図　トレンチ配置図

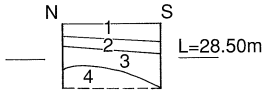
第2図　土層断面図

1トレンチ



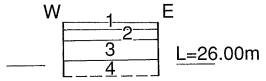
1．にぶい黄褐色　10YR4/3　砂質土（現表土）
2．明黄褐色　10YR6/6　砂質土
3．明黄褐色　10YR6/8　砂質土
（φ＝10～20cmの風化砂岩礫を多く含む。）

4トレンチ



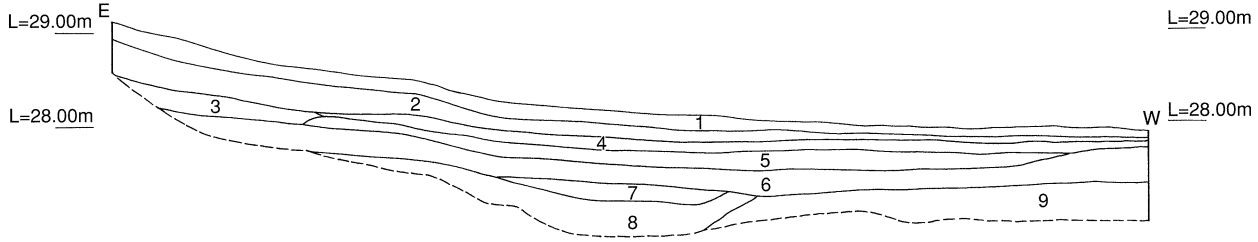
1．暗褐色　10YR3/4　砂質土（現表土）
2．にぶい黄褐色　10YR4/3　砂質土
3．にぶい黄褐色　2.5YR6/4　砂質土
4．明黄褐色　10YR6/6　砂質土

11トレンチ



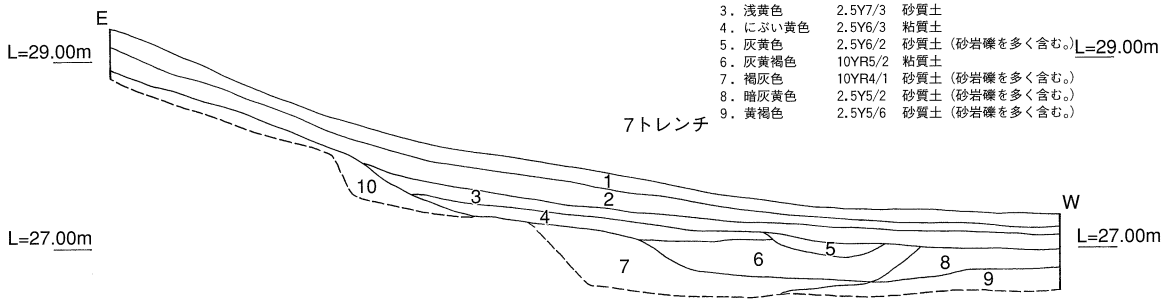
1．黒褐色　10YR3/2　砂質土（現表土）
2．にぶい黄褐色　10YR5/3　砂質土
3．にぶい黄橙色　10YR6/3　粘質土
4．にぶい黄褐色　10YR5/4　粘質土

6トレンチ



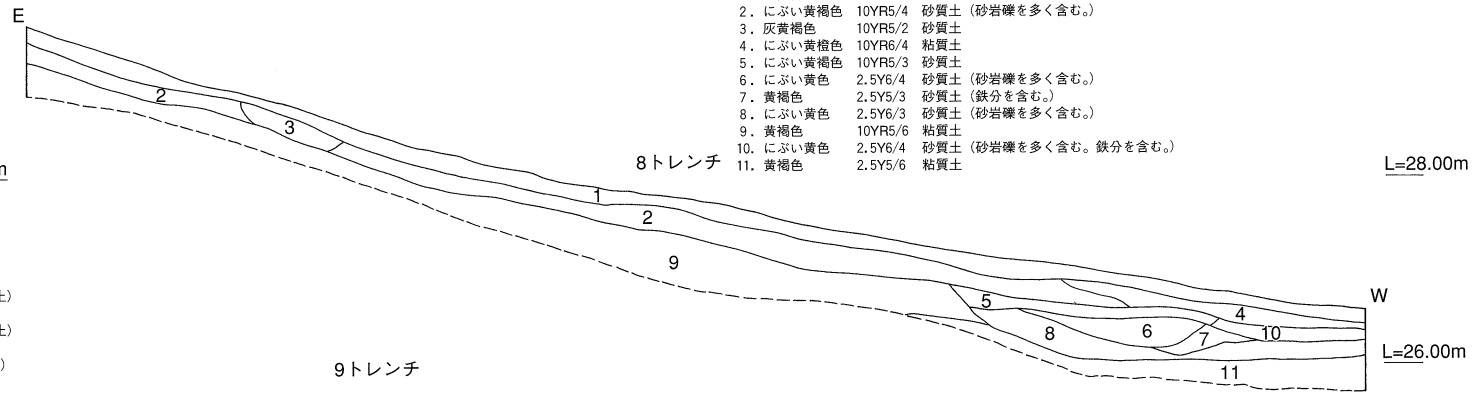
1．灰黄褐色　10YR4/2　砂質土（現表土）
2．にぶい黄褐色　10YR5/4　砂質土
3．浅黄色　2.5Y7/3　砂質土
4．にぶい黄色　2.5Y6/3　粘質土
5．灰黄色　2.5Y6/2　砂質土（砂岩礫を多く含む。）
6．灰黄褐色　10YR5/2　粘質土
7．褐灰色　10YR4/1　砂質土（砂岩礫を多く含む。）
8．暗灰黄色　2.5Y5/2　砂質土（砂岩礫を多く含む。）
9．黄褐色　2.5Y5/6　砂質土（砂岩礫を多く含む。）

7トレンチ



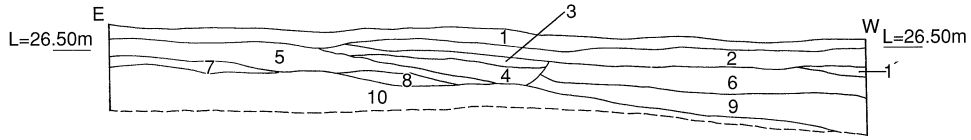
1．灰黄褐色　10YR4/2　砂質土（現表土）
2．にぶい横褐色　10YR5/4　砂質土
3．にぶい横褐色　10YR5/3　砂質土
4．灰黄褐色　10YR5/2　砂質土（砂岩礫を多く含む。）
5．褐灰色　10YR4/1　粘質土
6．黄灰色　2.5Y4/1　砂質土（砂岩礫を多く含む。）
7．にぶい黄色　2.5Y6/3　粘質土（砂岩礫を多く含む。）
8．黄灰色　2.5Y5/1　砂礫層
9．黄褐色　2.5Y5/6　砂質土（砂岩礫を多く含む。）
10．黄褐色　2.5Y5/6　砂質土

8トレンチ



1．灰黄褐色　10YR4/2　砂質土（現表土）
2．にぶい黄褐色　10YR5/4　砂質土（砂岩礫を多く含む。）
3．灰黄褐色　10YR5/2　砂質土
4．にぶい黄橙色　10YR6/4　粘質土
5．にぶい黄褐色　10YR5/3　砂質土
6．にぶい黄色　2.5Y6/4　砂質土（砂岩礫を多く含む。）
7．黄褐色　2.5Y5/3　砂質土（鉄分を含む。）
8．にぶい黄色　2.5Y6/3　砂質土（砂岩礫を多く含む。）
9．黄褐色　10YR5/6　粘質土
10．にぶい黄色　2.5Y6/4　砂質土（砂岩礫を多く含む。鉄分を含む。）
11．黄褐色　2.5Y5/6　粘質土

9トレンチ



1．暗褐色　10YR3/4　砂質土（現表土）
1'．暗褐色　10YR3/3　砂質土
2．にぶい黄褐色　10YR5/3　砂質土
3．明黄褐色　2.5Y6/6　粘質土（客土）
4．にぶい黄褐色　10YR4/3　粘質土（客土旧耕作土）
5．褐色　10YR4/4　砂質土（客土）
6．にぶい黄褐色　10YR4/3　粘質土（客土旧耕作土）
7．にぶい黄褐色　10YR5/3　砂質土
8．褐色　10YR4/4　砂質土（6層と類似。）
9．にぶい黄褐色　10YR5/4　黄灰色砂質土
（φ＝10～20cmの礫を多く含む。）
10．にぶい黄褐色　10YR5/4　砂質土

0　4m

トレンチの設定（第１図）

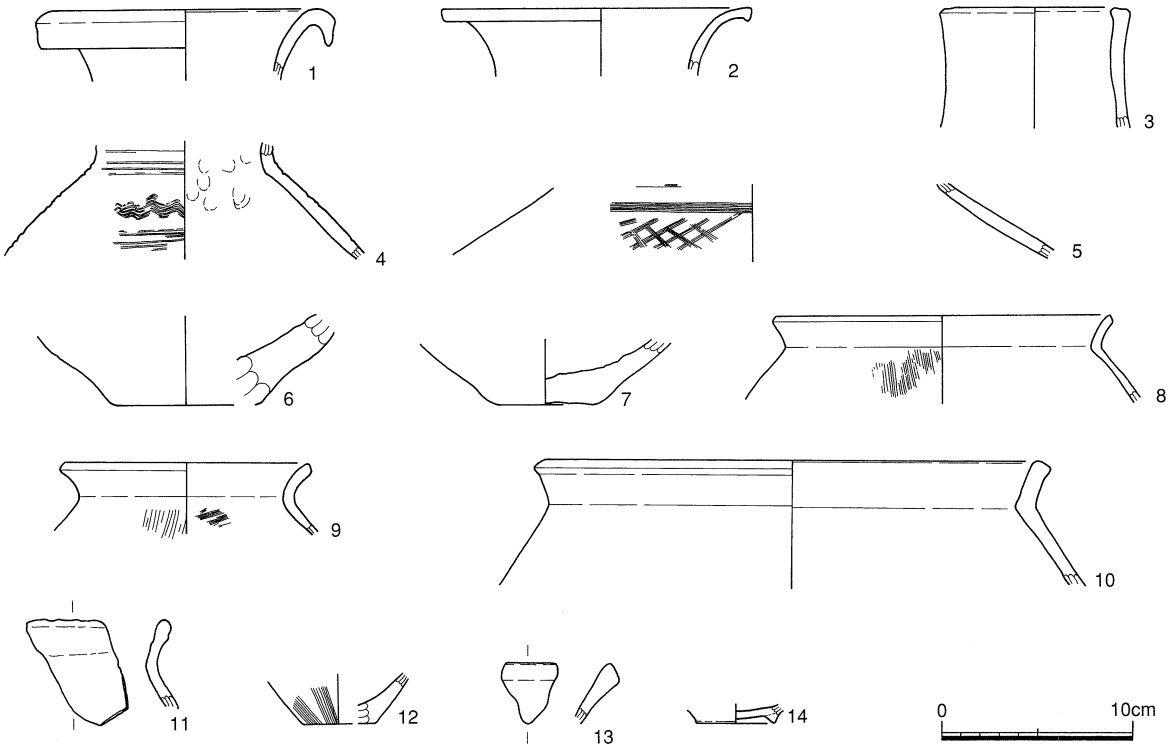
斜面に直交するかたちでトレンチを設定した。試掘に際しては、調査対象面積の５％を基準としてトレンチを設定し、遺物包含層および無遺物自然堆積層までの層厚の確認と柱状断面図、断面写真の作成を基本方針とした。遺跡の有無の判定については調査対象面積の20％を上限とした。

基本層序（第２図）

調査地点は尾根裾部の谷状地形あるいは山裾を巡る流路状の地形であったと思われ、粘質土および砂礫あるいは砂が互層に堆積している状況が確認された。これらは尾根からの土砂の流入と考えられ、現在の地形は谷状地形が埋没して形成された傾斜地であると思われる。また耕作地開墾による削平あるいは客土等の改変も著しく、安定した遺物包含層・遺構面は確認することができなかった。

出土遺物（第３図）

１～13は弥生土器で、１～７は壺、８～12は甕である。13は鉢の口縁部と思われる。時期的には弥生時代中期後半～末頃と考えられる。14は土師質土器椀の底部である。



第３図　出土遺物

まとめ

22基の試掘トレンチを開口したが、遺構を確認するには至らなかった。いくつか弥生土器片等の出土がみられたが、これらは東に隣接する桧はちまき山遺跡からの流入と考えられる。試掘の結果、調査区全域において遺構は存在しないと考えられ、本調査区域では試掘調査のみで終了した。

桧西谷遺跡　土器観察表
包含層

報告書掲載番号	遺構	出土地点	層位	器種	残存率	口径(cm)	体部最大径(cm)	底径(cm)	頸部(脚柱)径(cm)	器高・残存高(cm)	その他の法量(cm)	部位	形態	調整	含有物組成	色調	備考
1	№6トレンチ			弥生土器壺	口縁部1/5	14.2				3.8		口縁部	口縁部で大きく外反し、端部は断面三角形の垂下口縁を呈する。	外面：ナデ。 内面：調整不明。	石英・赤色斑粒	外面：灰白 内面：灰白	焼成非常に良好。
2	№7トレンチ			弥生土器壺	口縁部1/8	16.5				3.6		口縁部	口縁部外反し、端部は下方に拡張し方形状に収める。	外面：ナデ。 内面：調整不明。	石英・長石・結晶片岩	外面：橙 内面：明黄褐	焼成良好。
3	№7トレンチ	拡張部	谷の堆積土	弥生土器直口壺	口縁部1/8	9.6				6.3		口縁部	頸部直立し、口縁端部で僅かに内側に拡張し、やや尖り気味に収める。端面はやや凹む。	外面：調整不明。 内面：ナデ。	石英	外面：にぶい黄橙 内面：橙	焼成良好。1～2㎜の石英粒を多く含む。
4	№6トレンチ			弥生土器壺	不明				9.3	6.3		頸部～体部	頸部直立し、体部外下方に延びる。	外面：頸部櫛描直線文。体部波状文。櫛描直線文。 内面：ユビオサエ。摩滅により調整不明。	石英・長石・チャート	外面：灰白 内面：灰白	焼成良好。
5	№7トレンチ	拡張部	谷の堆積土	弥生土器壺	不明					3.5		不明		外面：櫛描格子文。 内面：調整不明。	石英・結晶片岩	外面：橙 内面：にぶい黄橙	焼成良好。中期中～後3様式～4様式。
6	№6トレンチ			弥生土器壺	底部1/4			7.3		4.7		底部	体部外上方に延びる。	外面：調整不明。 内面：調整不明。	石英・長石・赤色斑粒・結晶片岩	外面：褐灰 内面：にぶい橙	焼成並。
7	№7トレンチ	拡張部	谷の堆積土	弥生土器壺	底部1/4			5.0		3.4		底部	体部外上方に延びる。	外面：ナデ。 内面：調整不明。	石英・長石・赤色斑粒・結晶片岩	外面：黒褐 内面：にぶい黄橙	焼成並。
8	№7トレンチ		南壁	弥生土器甕	口縁部1/9	17.5			16.6	4.7		口縁部	体部内彎気味に立ち上がる。口縁部で若干外反し端部を方形状に収める。	外面：口縁部横ナデ。体部縦ハケ(9条／cm)。 内面：摩滅のため調整不明。	石英・長石・雲母・結晶片岩	外面：橙 内面：褐灰	焼成良好。外表面に橙色の化粧土をほどこす。
9	№17トレンチ		下層	弥生土器甕	口縁部1/20	12.8			11.4	3.7		口縁部	体部内彎気味に立ち上がる。口縁部で若干外反し端部を方形状に収める。	外面：縦ハケ（6条／cm)。 内面：横ハケ（13条／cm)。	石英・長石	外面：灰白 内面：灰白	焼成良好。
10	№6トレンチ			弥生土器甕	口縁～頸部1/12	26.2			25.8	6.7		口縁～頸部	体部内彎気味に立ち上がる。口縁部で若干外反し端部を方形状に収める。	外面：摩滅のため調整不明。 内面：摩滅のため調整不明。	石英・長石・結晶片岩	外面：橙 内面：黄灰	焼成良好。
11	№6トレンチ			弥生土器甕	破片					5.1	縦5.5 横4.3 厚さ0.5	不明		外面：調整不明。 内面：調整不明。	石英・長石・結晶片岩	外面：明赤褐 内面：明赤褐	焼成並。
12	№7トレンチ	拡張部	谷の堆積土	弥生土器甕	底部1/6			3.8		2.6		底部	体部外上方に延びる。	外面：ハケ(8条／cm)。 内面：調整不明。	石英・長石	外面：明黄褐 内面：橙	焼成良好。石英の細粒（0.1）以下を多く含む。
13	№6トレンチ		下層	弥生土器鉢	口縁部1/14	13.9				3.1		口縁部	口縁部で若干外反し、端部は上下に拡張し方形状に収める。	外面：ナデ。 内面：ナデ。	石英・赤色斑粒	外面：にぶい橙 内面：にぶい橙	焼成良好。
14	№6トレンチ			土師質椀	底部1/1			4.2		1.0	高台高0.5	底部	貼り付け高台でハの字に開き、断面を逆三角形状に収める。	外面：ナデ。 内面：ナデ。	石英	外面：にぶい黄橙 内面：浅黄橙	焼成良好。石英粒多く含む。

9　板東塚鼻遺跡

調査成果

遺跡の位置（Ⅰ-第１図およびⅡ-第１・５・15図）

調査対象地は阿讃山脈南麓、板東谷川によって形成された標高約23～28mの扇状地上に位置し、西を板東谷川、東を樋殿谷川に挟まれている。現況は田・畑となっている。調査対象面積は約33,500㎡と広範囲であるため、調査同意の得られた地区から順次、試掘調査を実施した。

トレンチの設定（第１図）

調査区は横断道の路線に沿って、扇状地上を東西に横断するかたちでトレンチを設定した。試掘に際しては、調査対象面積の５％を基準としてトレンチを設定し、遺物包含層および無遺物自然堆積層までの層厚の確認と柱状断面図、断面写真の作成を基本方針とした。遺跡の有無の判定については調査対象面積の20％を上限とした。

基本層序（第２図）

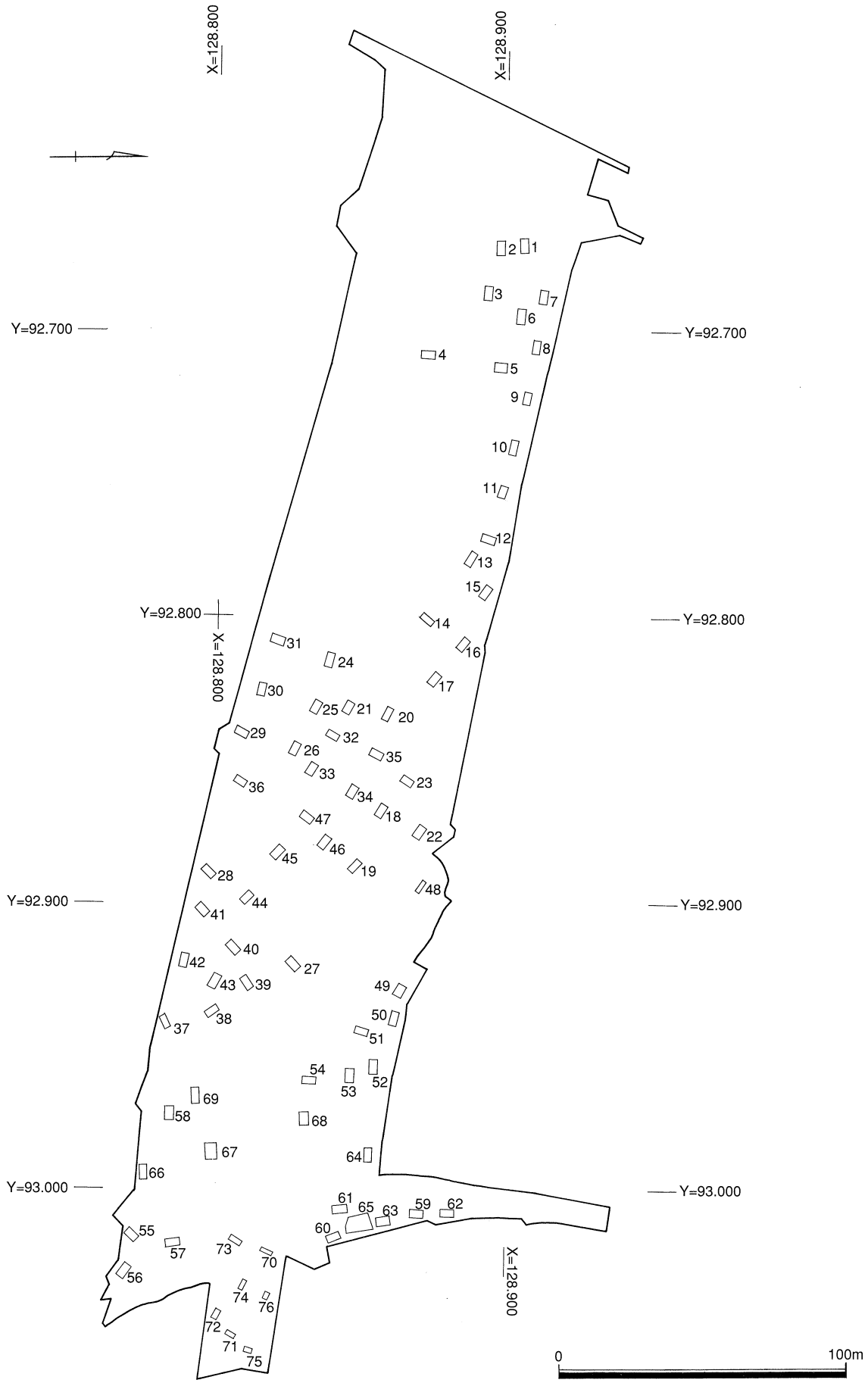
調査地点は耕作地開墾による削平あるいは客土等の改変が著しい。表土以下は客土と思われるシルト質の粘質土あるいは扇状地性の砂礫層の堆積となっており、安定した遺物包含層・遺構面は確認することができなかった。

出土遺物（第３図）

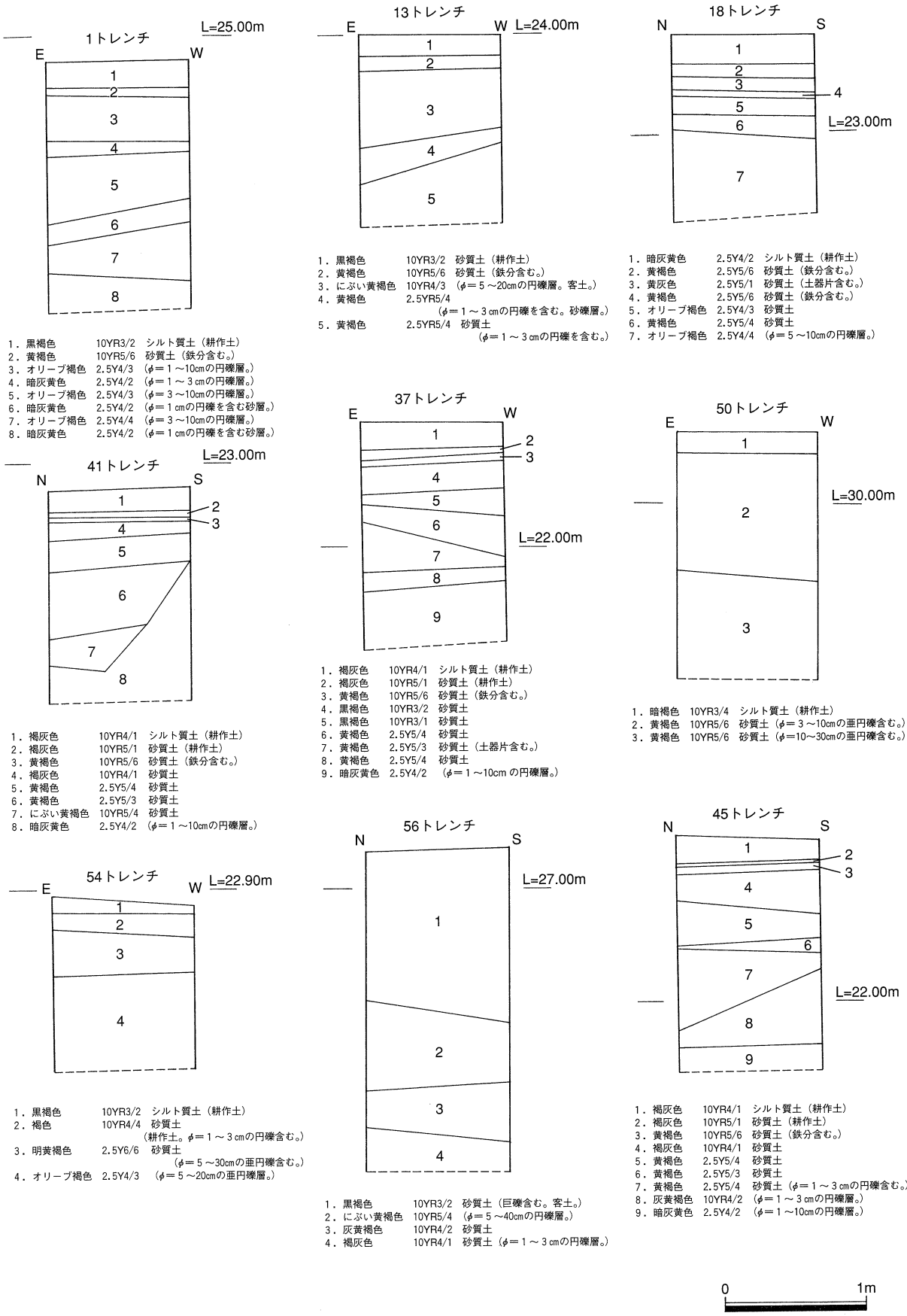
１～３は弥生土器で、１は長頸壺、２は甕、３は壺の底部と思われる。時期的には弥生時代後期頃と思われる。４は古墳時代後期頃と思われる須恵器の杯身である。

まとめ

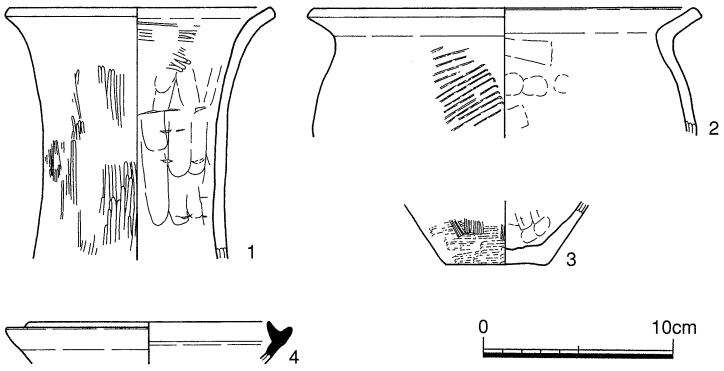
約70基のトレンチを開口した。試掘トレンチ規模は５ｍ×１ｍを基本とし、必要に応じて拡張あるいは深掘りを行い、遺跡の有無の確認に努めた。各トレンチにおいて基本的な土層堆積は、耕作土直下が板東谷川の氾濫による円礫または砂質土の扇状地性の堆積である。出土した弥生土器等の遺物も流れ込みによるものと考えられ、原位置は遊離しているものと思われる。調査区周辺に弥生時代の遺跡が存在したことが推測されるが、試掘では遺構は検出できなかったため、調査区全域において遺構は存在しないと考えられる。よって本調査区域では試掘調査のみで終了した。



第１図　トレンチ配置図


1トレンチ
E
W
L=25.00m
1
2
3
4
5
6
7
8
1．黒褐色　10YR3/2　シルト質土（耕作土）
2．黄褐色　10YR5/6　砂質土（鉄分含む。）
3．オリーブ褐色　2.5Y4/3　（φ＝1～10cmの円礫層。）
4．暗灰黄色　2.5Y4/2　（φ＝1～3cmの円礫層。）
5．オリーブ褐色　2.5Y4/3　（φ＝3～10cmの円礫層。）
6．暗灰黄色　2.5Y4/2　（φ＝1cmの円礫を含む砂層。）
7．オリーブ褐色　2.5Y4/4　（φ＝3～10cmの円礫層。）
8．暗灰黄色　2.5Y4/2　（φ＝1cmの円礫を含む砂層。）
41トレンチ
N
S
L=23.00m
1
2
3
4
5
6
7
8
1．褐灰色　10YR4/1　シルト質土（耕作土）
2．褐灰色　10YR5/1　砂質土（耕作土）
3．黄褐色　10YR5/6　砂質土（鉄分含む。）
4．褐灰色　10YR4/1　砂質土
5．黄褐色　2.5Y5/4　砂質土
6．黄褐色　2.5Y5/3　砂質土
7．にぶい黄褐色　10YR5/4　砂質土
8．暗灰黄色　2.5Y4/2　（φ＝1～10cmの円礫層。）
54トレンチ
E
W
L=22.90m
1
2
3
4
1．黒褐色　10YR3/2　シルト質土（耕作土）
2．褐色　10YR4/4　砂質土
（耕作土。φ＝1～3cmの円礫含む。）
3．明黄褐色　2.5Y6/6　砂質土
（φ＝5～30cmの亜円礫含む。）
4．オリーブ褐色　2.5Y4/3　（φ＝5～20cmの亜円礫層。）
13トレンチ
E
W
L=24.00m
1
2
3
4
5
1．黒褐色　10YR3/2　砂質土（耕作土）
2．黄褐色　10YR5/6　砂質土（鉄分含む。）
3．にぶい黄褐色　10YR4/3　（φ＝5～20cmの円礫層。客土。）
4．黄褐色　2.5YR5/4
（φ＝1～3cmの円礫を含む。砂礫層。）
5．黄褐色　2.5YR5/4　砂質土
（φ＝1～3cmの円礫を含む。）
37トレンチ
E
W
L=22.00m
1
2
3
4
5
6
7
8
9
1．褐灰色　10YR4/1　シルト質土（耕作土）
2．褐灰色　10YR5/1　砂質土（耕作土）
3．黄褐色　10YR5/6　砂質土（鉄分含む。）
4．黒褐色　10YR3/2　砂質土
5．黒褐色　10YR3/1　砂質土
6．黄褐色　2.5Y5/4　砂質土
7．黄褐色　2.5Y5/3　砂質土（土器片含む。）
8．黄褐色　2.5Y5/4　砂質土
9．暗灰黄色　2.5Y4/2　（φ＝1～10cm の円礫層。）
56トレンチ
N
S
L=27.00m
1
2
3
4
1．黒褐色　10YR3/2　砂質土（巨礫含む。客土。）
2．にぶい黄褐色　10YR5/4　（φ＝5～40cmの円礫層。）
3．灰黄褐色　10YR4/2　砂質土
4．褐灰色　10YR4/1　砂質土（φ＝1～3cmの円礫層。）
18トレンチ
N
S
L=23.00m
1
2
3
4
5
6
7
1．暗灰黄色　2.5Y4/2　シルト質土（耕作土）
2．黄褐色　2.5Y5/6　砂質土（鉄分含む。）
3．黄灰色　2.5Y5/1　砂質土（土器片含む。）
4．黄褐色　2.5Y5/6　砂質土（鉄分含む。）
5．オリーブ褐色　2.5Y4/3　砂質土
6．黄褐色　2.5Y5/4　砂質土
7．オリーブ褐色　2.5Y4/4　（φ＝5～10cmの円礫層。）
50トレンチ
E
W
L=30.00m
1
2
3
1．暗褐色　10YR3/4　シルト質土（耕作土）
2．黄褐色　10YR5/6　砂質土（φ＝3～10cmの亜円礫含む。）
3．黄褐色　10YR5/6　砂質土（φ＝10～30cmの亜円礫含む。）
45トレンチ
N
S
L=22.00m
1
2
3
4
5
6
7
8
9
1．褐灰色　10YR4/1　シルト質土（耕作土）
2．褐灰色　10YR5/1　砂質土（耕作土）
3．黄褐色　10YR5/6　砂質土（鉄分含む。）
4．褐灰色　10YR4/1　砂質土
5．黄褐色　2.5Y5/4　砂質土
6．黄褐色　2.5Y5/3　砂質土
7．黄褐色　2.5Y5/4　砂質土（φ＝1～3cmの円礫含む。）
8．灰黄褐色　10YR4/2　（φ＝1～3cmの円礫層。）
9．暗灰黄色　2.5Y4/2　（φ＝1～10cmの円礫層。）
0
1m

第2図　模式柱状土層図



第３図　出土遺物

板東塚鼻遺跡　土器観察表
包含層

報告書掲載番号	遺構	出土地点	層位	器種	残存率	口径(cm)	体部最大径(cm)	底径(cm)	頸部(脚柱)径(cm)	器高・残存高(cm)	その他の法量(cm)	部位	形態	調整	含有物組成	色調	備考
1	No37トレンチ		7層下層部	弥生土器壺	口縁～頸部3/4	13.8			9.0	13.3		口縁～頸部	頸部直立し、口縁部で若干外反し、端部を方形状に収める。	外面：口縁部ヨコナデ。頸部ミガキ。内面：口縁部摩滅により調整不明。頸部ミガキ。ユビナデ。	石英・雲母・赤色斑粒・結晶片岩	外面：橙内面：にぶい橙	焼成良好。接合痕5ヶ所。
2	No37トレンチ		7層下層部	弥生土器甕	口縁部1/16	20.2			17.9	6.7		口縁部	体部内彎しながら立ち上がり、口縁部で外反し端部を方形状に収める。	外面：タタキ。内面：板ナデ。ユビオサエ。	雲母・赤色斑粒・結晶片岩	外面：橙内面：橙	焼成良好。
3	No38トレンチ		6層	弥生土器壺	底部1/2			5.5		3.3		底部	平底。体部外上方に延びる。	外面：板ナデ。ヨコナデ。内面：ユビオサエ。板ケズリ。	石英・長石・赤色斑粒	外面：にぶい褐内面：灰褐	焼成良好。
4	No16トレンチ		4層客土下層	須恵器杯身	口縁部1/10	12.6	15.1			2.2		口縁部	かえしは短く内傾し、端部を丸く収める。	外面：ロクロナデ。内面：ロクロナデ。	石英	外面：灰白内面：灰白	焼成良好。

10　西山田古墳群（Ⅱ）

調査成果

遺跡の位置（Ⅰ-第１図およびⅡ-第１・５・16図）

調査対象地は、阿讃山脈南麓の標高約64～73mの尾根上に位置する。現況は山林である。周辺には天河別神社古墳群・萩原墳墓群・愛宕山古墳などが所在する。

トレンチの設定（第１・２図）

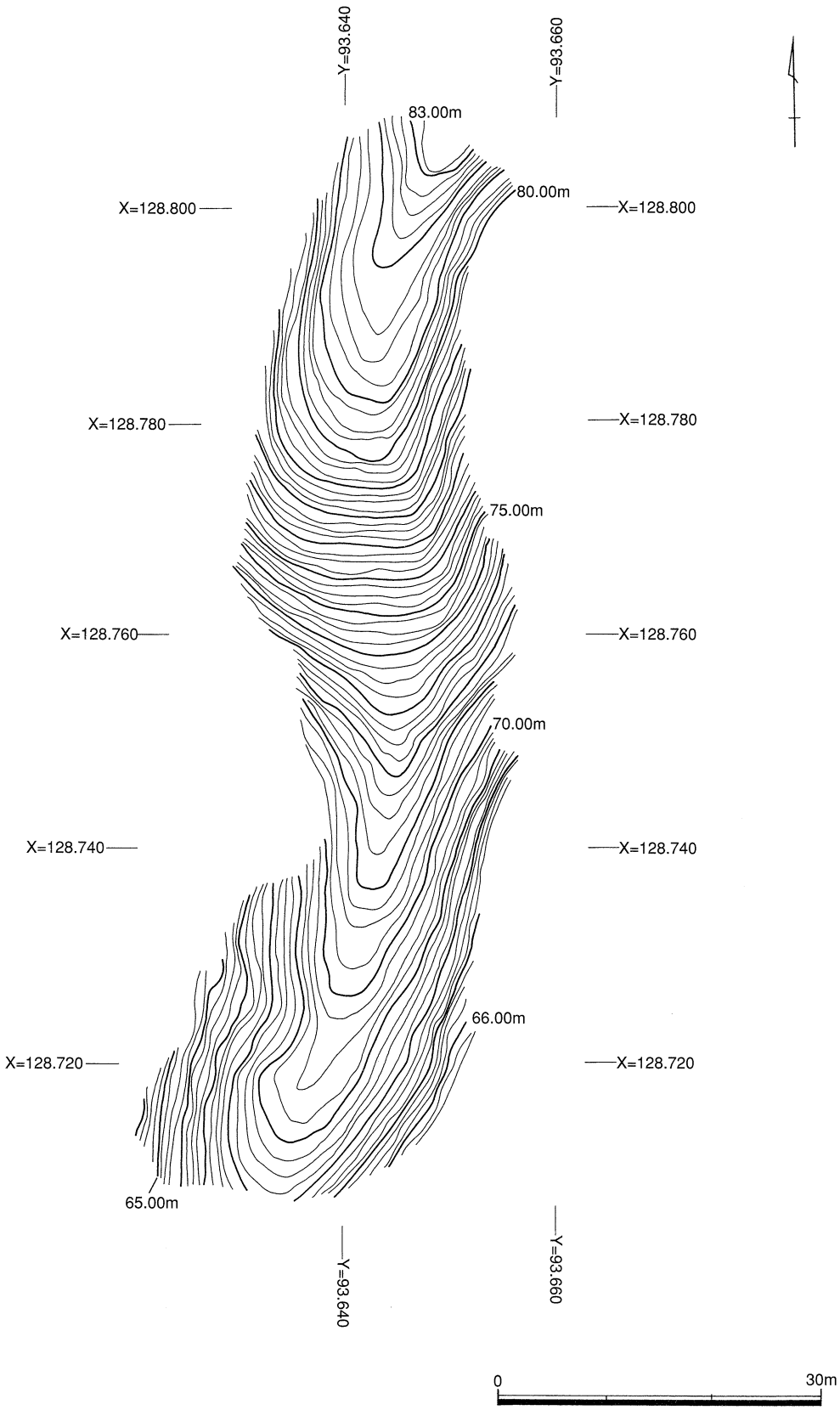
調査に際し、現況の地形測量を実施した。墳丘と思われる高まりを確認した後、試掘トレンチを設定し、掘削作業を行った。トレンチの設定については墳丘と思われる地点を中心に尾根筋に沿ってメイントレンチを設定し、それに直交するようにサブトレンチを設定した。試掘に際しては、調査対象面積の５％を基準としてトレンチを設定し、遺物包含層および無遺物自然堆積層までの層厚の確認と柱状断面図、断面写真の作成を基本方針とした。遺跡の有無の判定については調査対象面積の20％を上限とした。

基本層序（第３図）

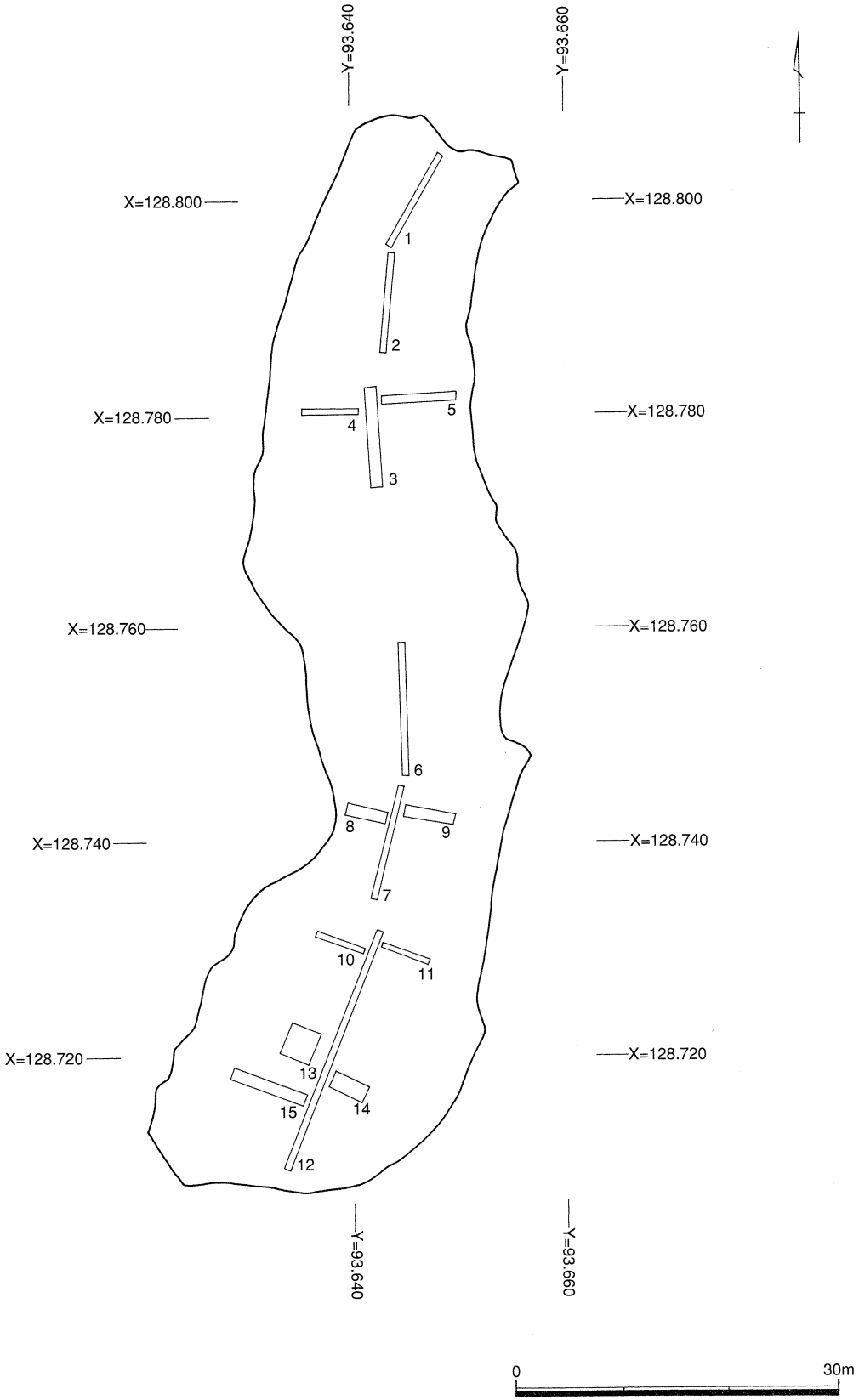
表土（腐葉土）直下は岩盤風化土、あるいは和泉層群起因の泥岩・砂岩の岩盤層となっており、安定した遺物包含層・遺構面は確認することができなかった。

まとめ

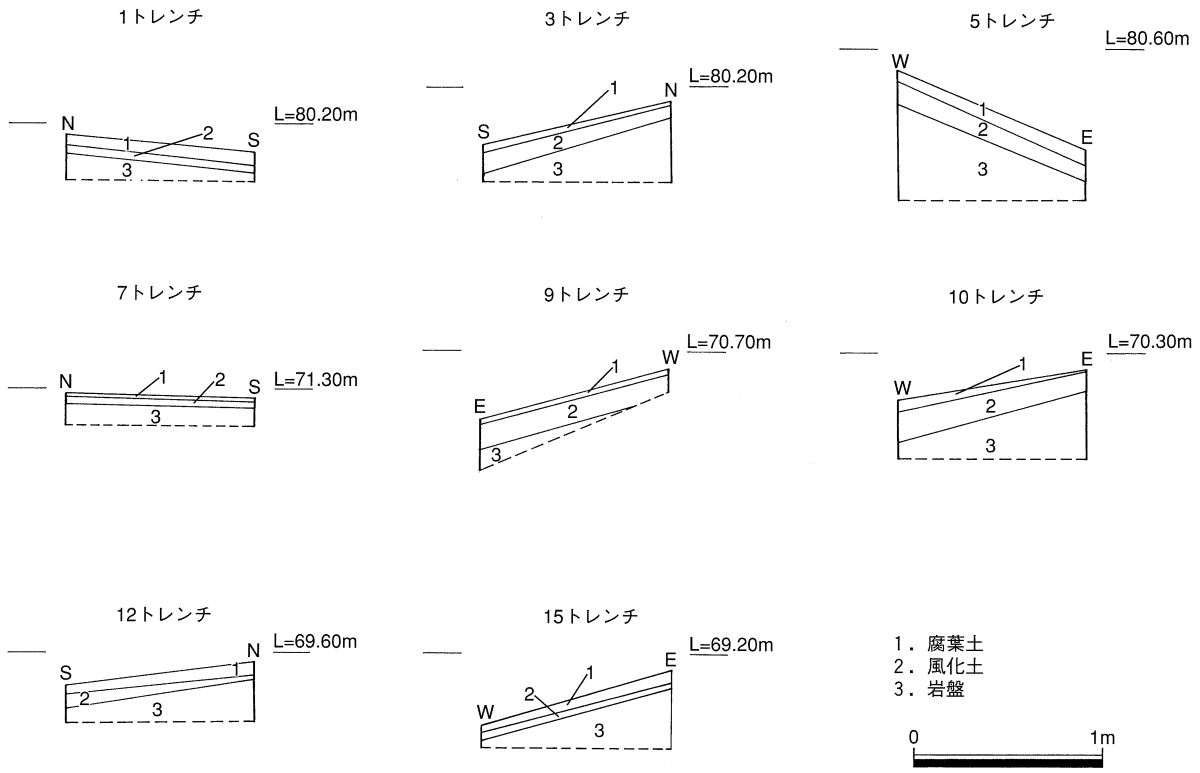
調査に際し、地形測量を実施した。地形測量の結果をふまえ、試掘トレンチを設定した。調査区北および南側に地形変換点がみられ、何らかの埋葬施設の存在が予想された。しかし、試掘の結果、各トレンチとも表土（腐葉土）直下は岩盤若しくは岩盤の風化土が僅かに堆積するのみであり、15基のトレンチを開口したが、各トレンチとも遺構・遺物はまったく検出されなかった。よって、調査区全域において遺構は存在しないと考えられ、本調査区域では試掘調査のみで終了した。


Y=93.640
Y=93.660
83.00m
80.00m
X=128.800
X=128.800
X=128.780
X=128.780
75.00m
X=128.760
X=128.760
70.00m
X=128.740
X=128.740
66.00m
X=128.720
X=128.720
65.00m
Y=93.640
Y=93.660
0
30m

第１図　地形平面図


Y=93.640
Y=93.660
X=128.800
X=128.780
X=128.760
X=128.740
X=128.720
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
0
30m

第２図　トレンチ配置図


1トレンチ
N
S
1
2
3
L=80.20m
3トレンチ
S
N
1
2
3
L=80.20m
5トレンチ
W
E
1
2
3
L=80.60m
7トレンチ
N
S
1
2
3
L=71.30m
9トレンチ
E
W
1
2
3
L=70.70m
10トレンチ
W
E
1
2
3
L=70.30m
12トレンチ
S
N
1
2
3
L=69.60m
15トレンチ
W
E
1
2
3
L=69.20m
1．腐葉土
2．風化土
3．岩盤
0
1m

第３図　模式柱状土層図

11　カネガ谷西古墳群

調査成果

遺跡の位置（Ⅰ-第１図およびⅡ-第１・５・16図）

調査対象地は、阿讃山脈南麓の標高約68～80mの細長い尾根上に位置し、周辺の尾根上には多くの古墳が所在する。また調査地点の東側の尾根上には弥生時代後期の高地性集落のカネガ谷遺跡が所在している。現況は山林である。

トレンチの設定（第１・２図）

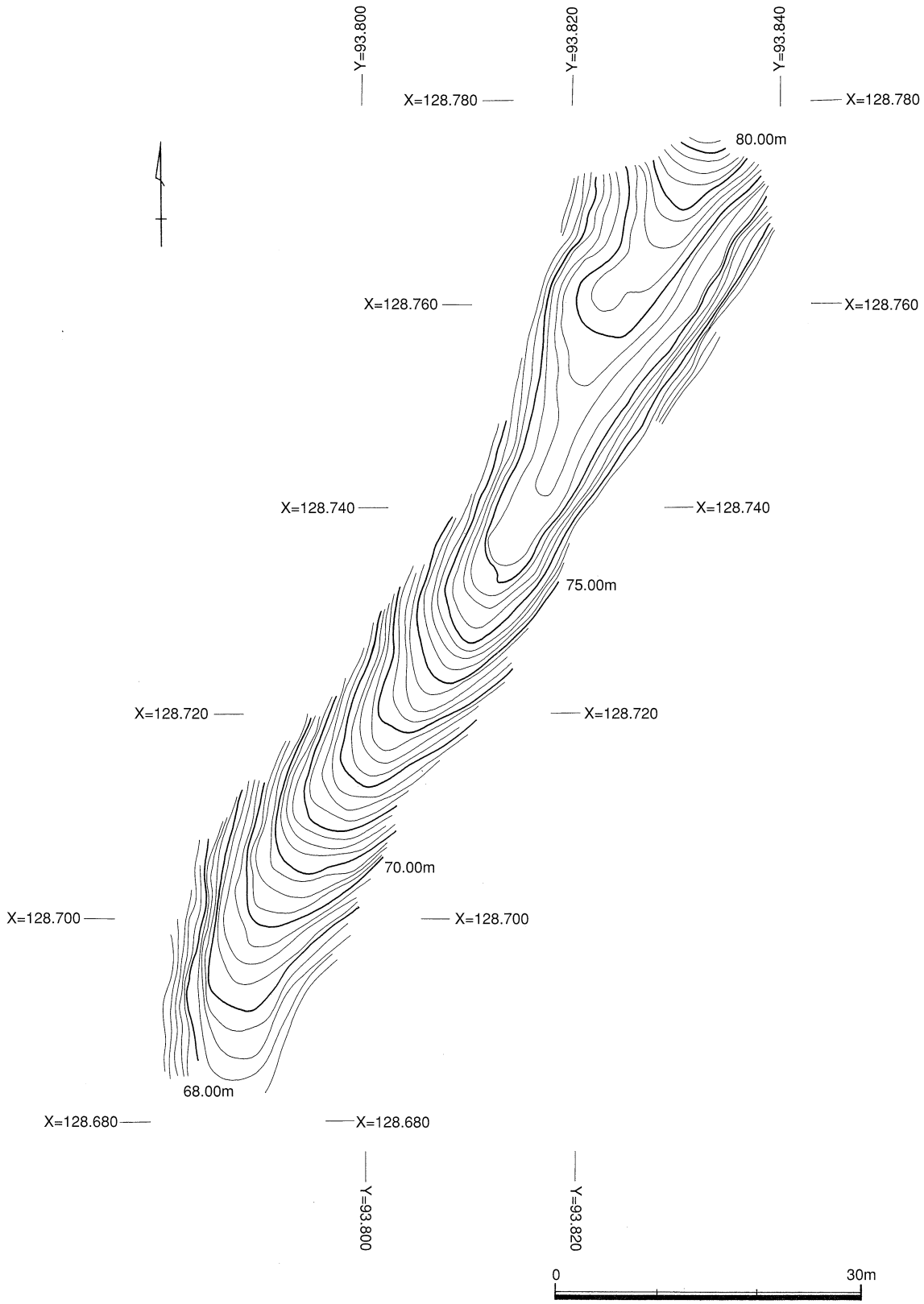
調査に際し、現況の地形測量を実施した。墳丘と思われる高まりを確認した後、試掘トレンチを設定し、掘削作業を行った。トレンチの設定については墳丘と思われる地点を中心に尾根筋に沿ってメイントレンチを設定し、それに直交するようにサブトレンチを設定した。試掘に際しては、調査対象面積の５％を基準としてトレンチを設定し、遺物包含層および無遺物自然堆積層までの層厚の確認と柱状断面図、断面写真の作成を基本方針とした。遺跡の有無の判定については調査対象面積の20％を上限とした。

基本層序（第３図）

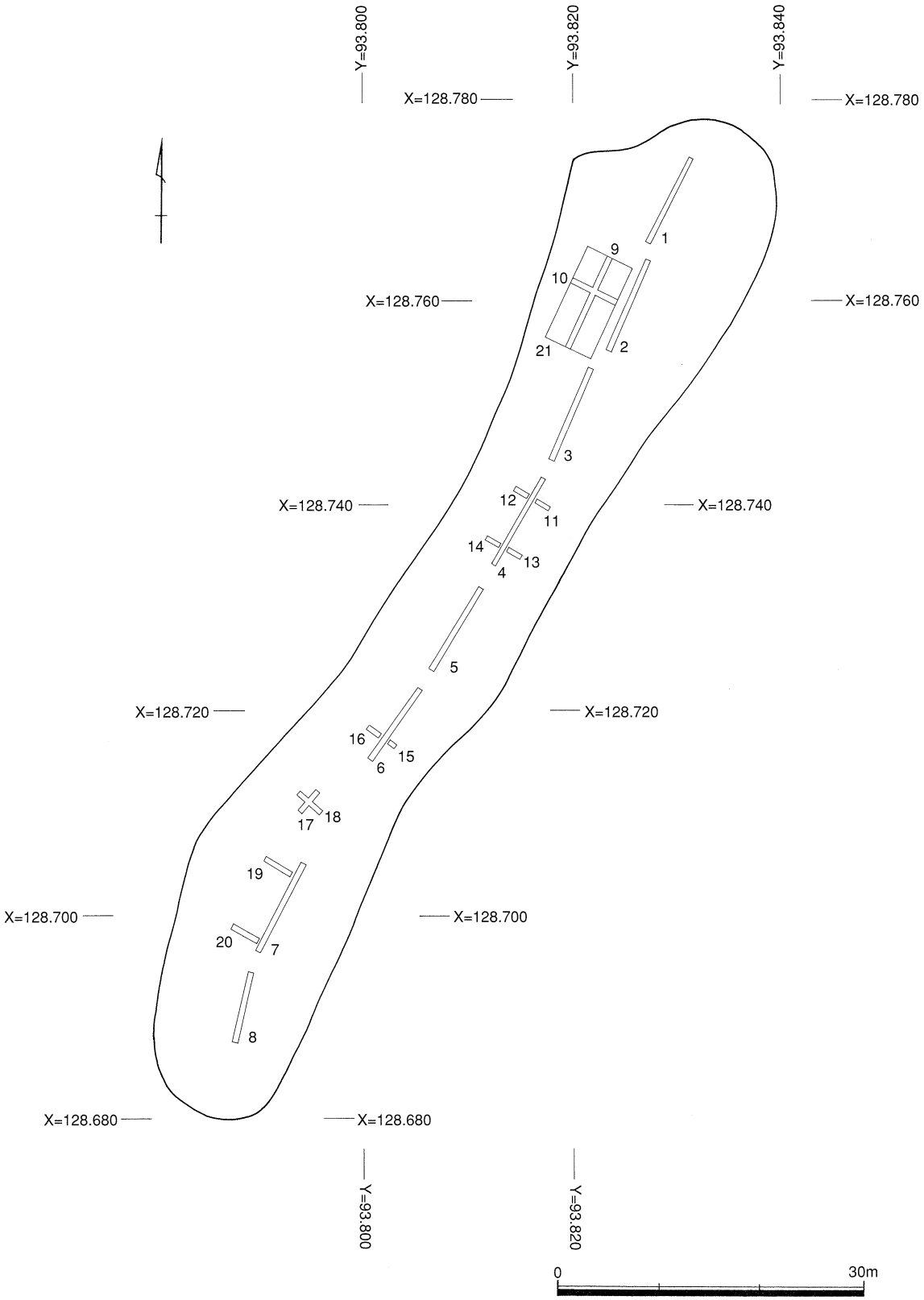
表土（腐葉土）直下は岩盤風化土、あるいは和泉層群起因の泥岩・砂岩の岩盤層となっており、安定した遺物包含層・遺構面は確認することができなかった。

まとめ

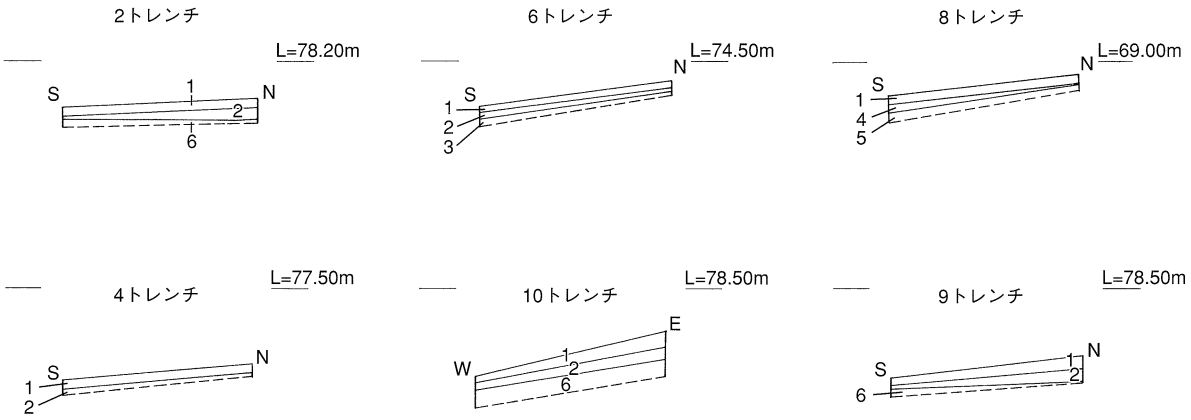
調査に際し、地形測量を実施した。地形測量の結果をふまえ、試掘トレンチを設定した。試掘の結果、21基のトレンチを開口したが、いずれも表土（腐葉土）の直下は岩盤若しくは岩盤の風化土であり、堆積も10数cmと非常に浅く、遺構・遺物ともに全く検出できなかった。試掘の結果、調査区全域において遺構は存在しないと考えられる。よって本調査区域では試掘調査のみで終了した。


Y=93.800
Y=93.820
Y=93.840
X=128.780
X=128.780
80.00m
X=128.760
X=128.760
X=128.740
X=128.740
75.00m
X=128.720
X=128.720
70.00m
X=128.700
X=128.700
68.00m
X=128.680
X=128.680
Y=93.800
Y=93.820
0
30m

第１図　地形平面図


Y=93.800
Y=93.820
Y=93.840
X=128.780
X=128.780
X=128.760
X=128.760
X=128.740
X=128.740
X=128.720
X=128.720
X=128.700
X=128.700
X=128.680
X=128.680
Y=93.800
Y=93.820
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
0
30m

第２図　トレンチ配置図



1．腐葉土
2．オリーブ褐色　2.5Y4/3　風化土
3．黄褐色　2.5Y5/4　風化土
4．黄褐色　2.5Y5/3　風化土
5．にぶい黄褐色　10YR4/3　風化土
6．にぶい黄色　2.5Y6/4　風化土

0　1m

第３図　模式柱状土層図

12　王子八幡神社古墳群

調査成果

遺跡の位置（Ⅰ-第１図およびⅡ-第１・５・17図）

調査対象地は、讃岐山脈南麓の標高約57～72mの尾根上に位置する。現況は山林である。

トレンチの設定（第１・２図）

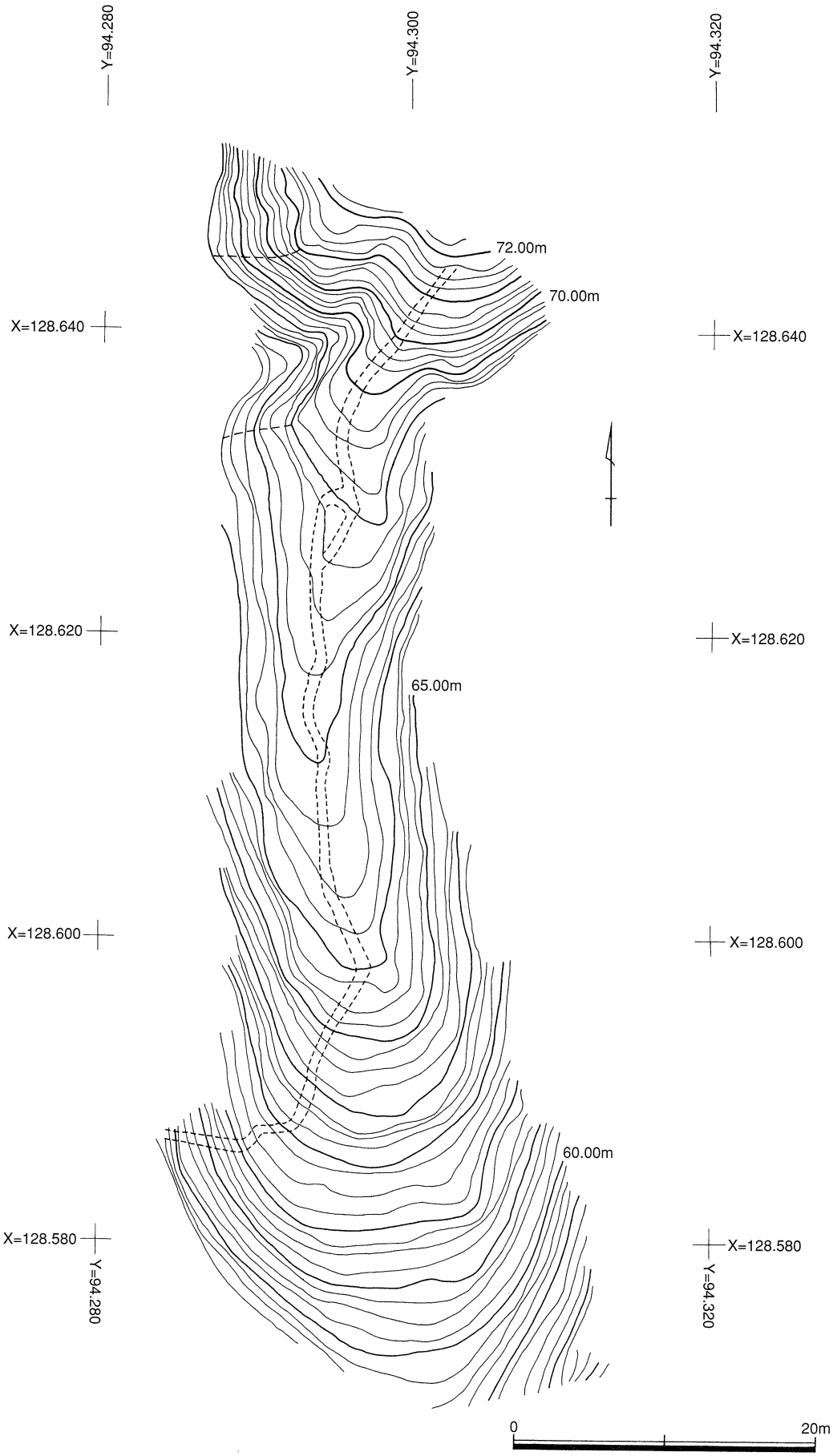
調査に際し、現況の地形測量を実施した。墳丘と思われる高まりを確認した後、試掘トレンチを設定し、掘削作業を行った。トレンチの設定については墳丘と思われる地点を中心に尾根筋に沿ってメイントレンチを設定し、それに直交するようにサブトレンチを設定した。試掘に際しては、調査対象面積の５％を基準としてトレンチを設定し、遺物包含層および無遺物自然堆積層までの層厚の確認と柱状断面図、断面写真の作成を基本方針とした。遺跡の有無の判定については調査対象面積の20％を上限とした。

基本層序（第３図）

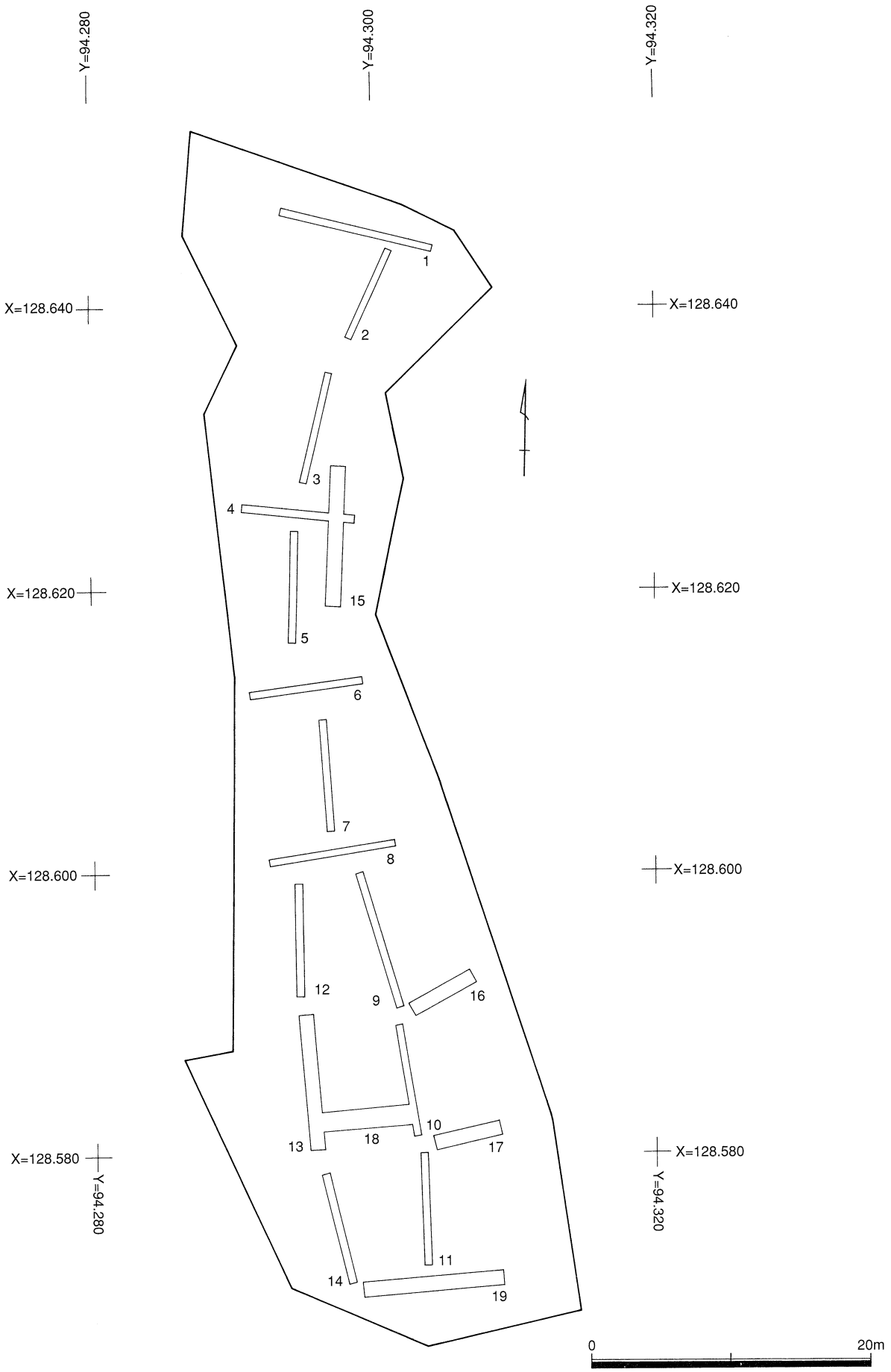
表土（腐植土）直下は岩盤風化土、あるいは和泉層群起因の泥岩・砂岩の岩盤層となっており、安定した遺物包含層・遺構面は確認することができなかった。

まとめ

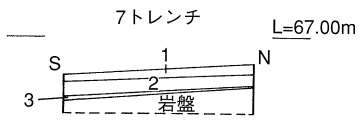
調査に際し、地形測量を実施した。地形測量の結果をふまえ、19基の試掘トレンチを設定した。試掘の結果、いずれのトレンチも表土（腐植土）の直下は岩盤もしくは岩盤の風化土の土層堆積であり、遺構・遺物ともに検出できなかった。調査区全域において遺構は存在しないと考えられるため、本調査区域では試掘調査のみで終了した。


Y=94.280
Y=94.300
Y=94.320
72.00m
70.00m
X=128.640
X=128.640
X=128.620
X=128.620
65.00m
X=128.600
X=128.600
60.00m
X=128.580
X=128.580
Y=94.280
Y=94.320
0
20m

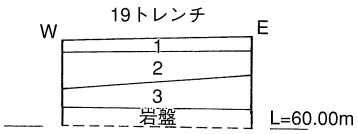
第１図　地形平面図


Y=94.280
Y=94.300
Y=94.320
X=128.640
X=128.620
X=128.600
X=128.580
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
0
20m

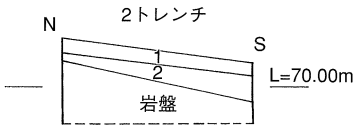
第２図　トレンチ配置図



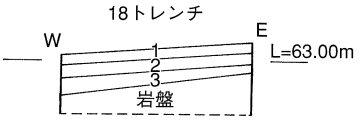
1．黒褐色　7.5YR3/2　腐植土
（しまりなし。粘性なし。）
2．黄褐色　10YR5/6　シルト
（しまりあり。粘性なし。φ＝1～5㎝の角礫を集中的に含む。）
3．明黄褐色　10YR6/6　シルト
（しまりあり。粘性なし。φ＝1～2㎝の角礫を3％含む。）



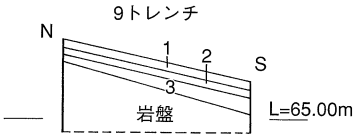
1．黒褐色　7.5YR3/2　腐植土
（しまりなし。粘性なし。）
2．黄褐色　10YR5/6　シルト
（しまりあり。粘性なし。φ＝1㎝程の角礫を2％含む。）
3．にぶい黄橙色　10YR6/4　シルト
（しまりあり。粘性あり。φ＝5㎝の角礫を部分的に含む。）



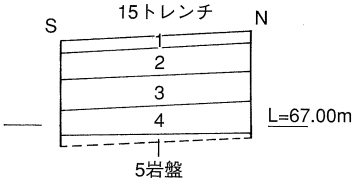
1．黒褐色　7.5YR3/2　腐植土
（しまりなし。粘性なし。）
2．にぶい黄褐色　10YR4/3　シルト
（しまりあり。粘性なし。φ＝5㎜～2㎝の角礫を10％含む。集中的にφ＝5㎝の角礫を含む。）



1．黒褐色　7.5YR3/2　腐植土
（しまりなし。粘性なし。）
2．褐色　10YR4/4　シルト
（しまりあり。粘性なし。φ＝1㎝の角礫を3％含む。）
3．にぶい黄褐色　10YR5/4　シルト
（しまりあり。粘性なし。φ＝3～5㎝の角礫を1％含む。）



1．黒褐色　7.5YR3/2　腐植土
（しまりなし。粘性なし。）
2．にぶい黄橙色　10YR6/4　シルト
（しまりあり。粘性なし。φ＝2～3㎝の角礫を10％含む。）
3．黄褐色　10YR5/6　シルト
（しまりあり。粘性なし。φ＝2㎝の角礫を3％含む。）



1．黒褐色　7.5YR3/2　腐植土
（しまりなし。粘性なし。）
2．黄褐色　10YR5/6　シルト
（しまりあり。粘性なし。）
3．にぶい黄褐色　10YR5/3　シルト
（しまりあり。粘性あり。）
4．黄褐色　10YR5/6　シルト
（しまりあり。粘性あり。）
5．にぶい黄褐色　10YR5/4　シルト
（しまりあり。粘性あり。φ＝5㎝の角礫を少量含む岩盤。）

第3図　模式柱状土層図

13　長谷古墳群

調査成果

遺跡の位置（Ⅰ-第１図およびⅡ-第１・５・17図）

調査対象地は、阿讃山脈南麓、標高約62～77mの尾根上に位置する。現況は山林である。

トレンチの設定（第１図）

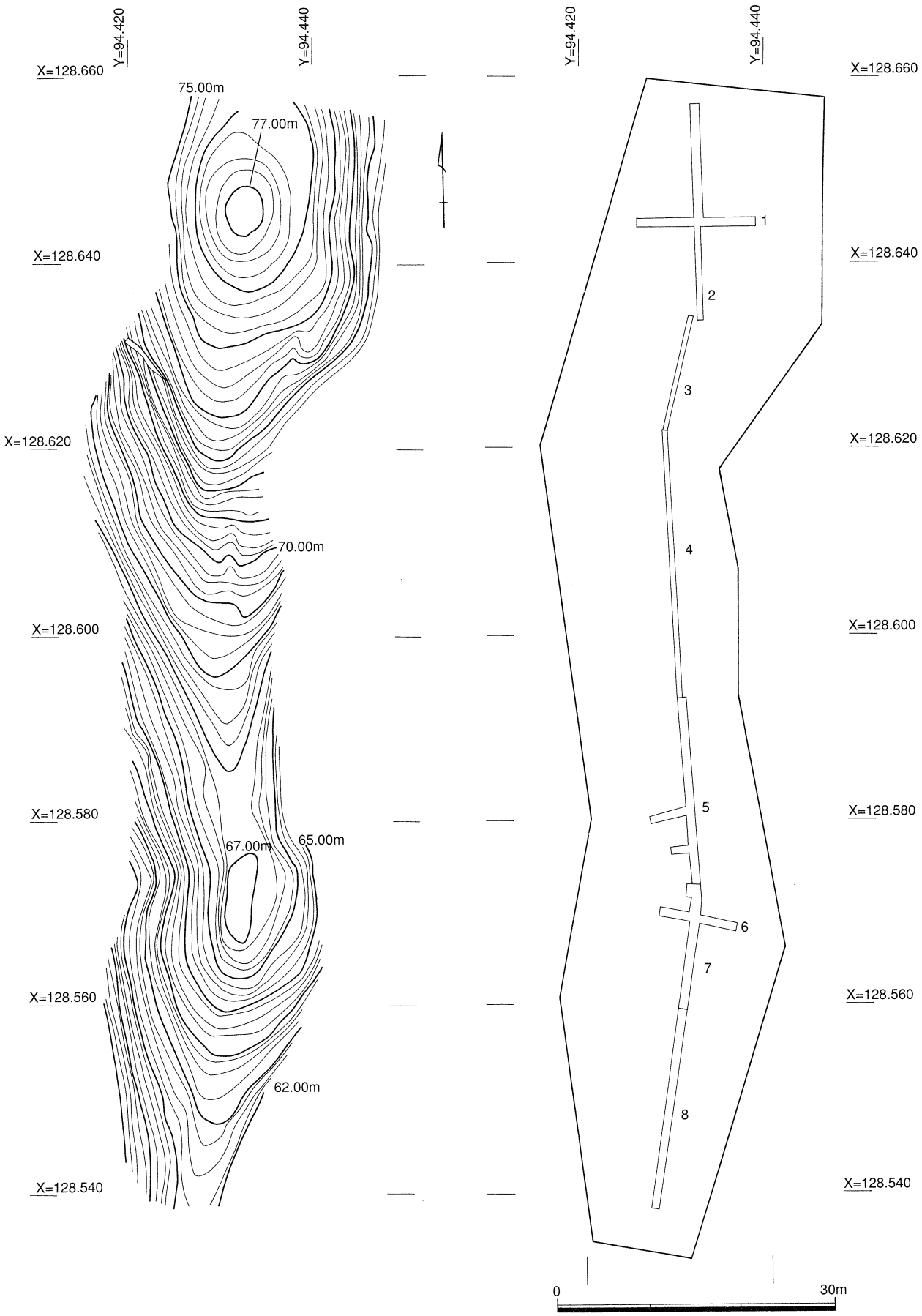
調査に際し、現況の地形測量を実施した。墳丘と思われる高まりを確認した後、試掘トレンチを設定し、掘削作業を行った。トレンチの設定については墳丘と思われる地点を中心に尾根筋に沿ってメイントレンチを設定し、それに直交するようにサブトレンチを設定した。試掘に際しては、調査対象面積の５％を基準としてトレンチを設定し、遺物包含層および無遺物自然堆積層までの層厚の確認と柱状断面図、断面写真の作成を基本方針とした。遺跡の有無の判定については調査対象面積の20％を上限とした。

基本層序（第２図）

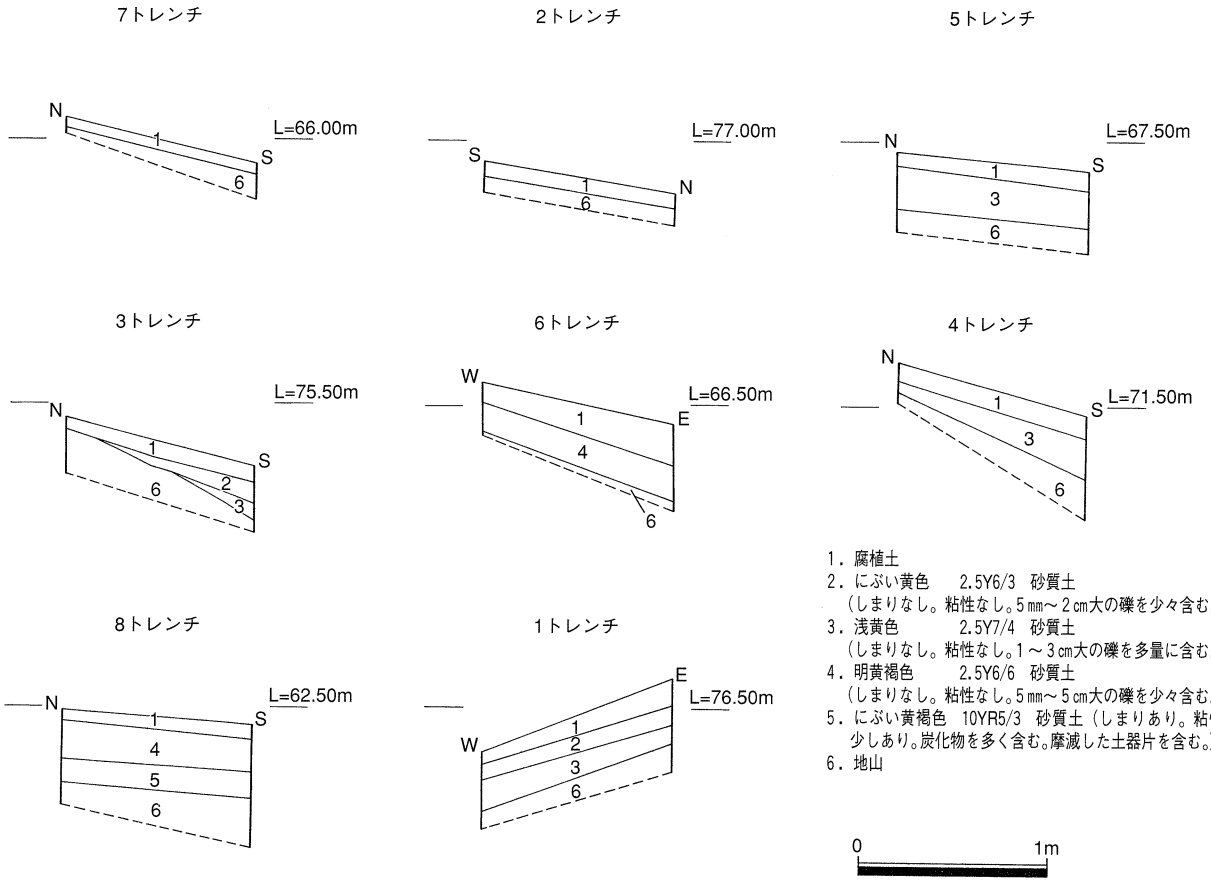
表土（腐植土）直下は岩盤風化土、あるいは和泉層群起因の泥岩・砂岩の岩盤層となっており、安定した遺物包含層・遺構面は確認することができなかった。

まとめ

地形測量の結果を基に、尾根筋に沿ってメイントレンチを設定し、それに直交するようにサブトレンチを設定した。８基のトレンチを開口したが、いずれも表土（腐植土）直下は、岩盤の風化土および岩盤（地山）であり、遺構・遺物共にまったく検出されなかった。よって、調査区全域において遺構は存在しないと考えられるため、本調査区域では試掘調査のみで終了した。



第１図　地形平面・トレンチ配置図



1．腐植土
2．にぶい黄色　2.5Y6/3　砂質土
（しまりなし。粘性なし。5㎜～2㎝大の礫を少々含む。）
3．浅黄色　2.5Y7/4　砂質土
（しまりなし。粘性なし。1～3㎝大の礫を多量に含む。）
4．明黄褐色　2.5Y6/6　砂質土
（しまりなし。粘性なし。5㎜～5㎝大の礫を少々含む。）
5．にぶい黄褐色　10YR5/3　砂質土（しまりあり。粘性少しあり。炭化物を多く含む。摩滅した土器片を含む。）
6．地山

0　1m

第2図　模式柱状土層図

14　滝ヶ谷古墳群

調査成果

遺跡の位置（Ⅰ-第１図およびⅡ-第１・５・17図）

調査対象地は、阿讃山脈南麓の標高約56～78mの尾根上に位置する。現況は山林である。

トレンチの設定（第１図）

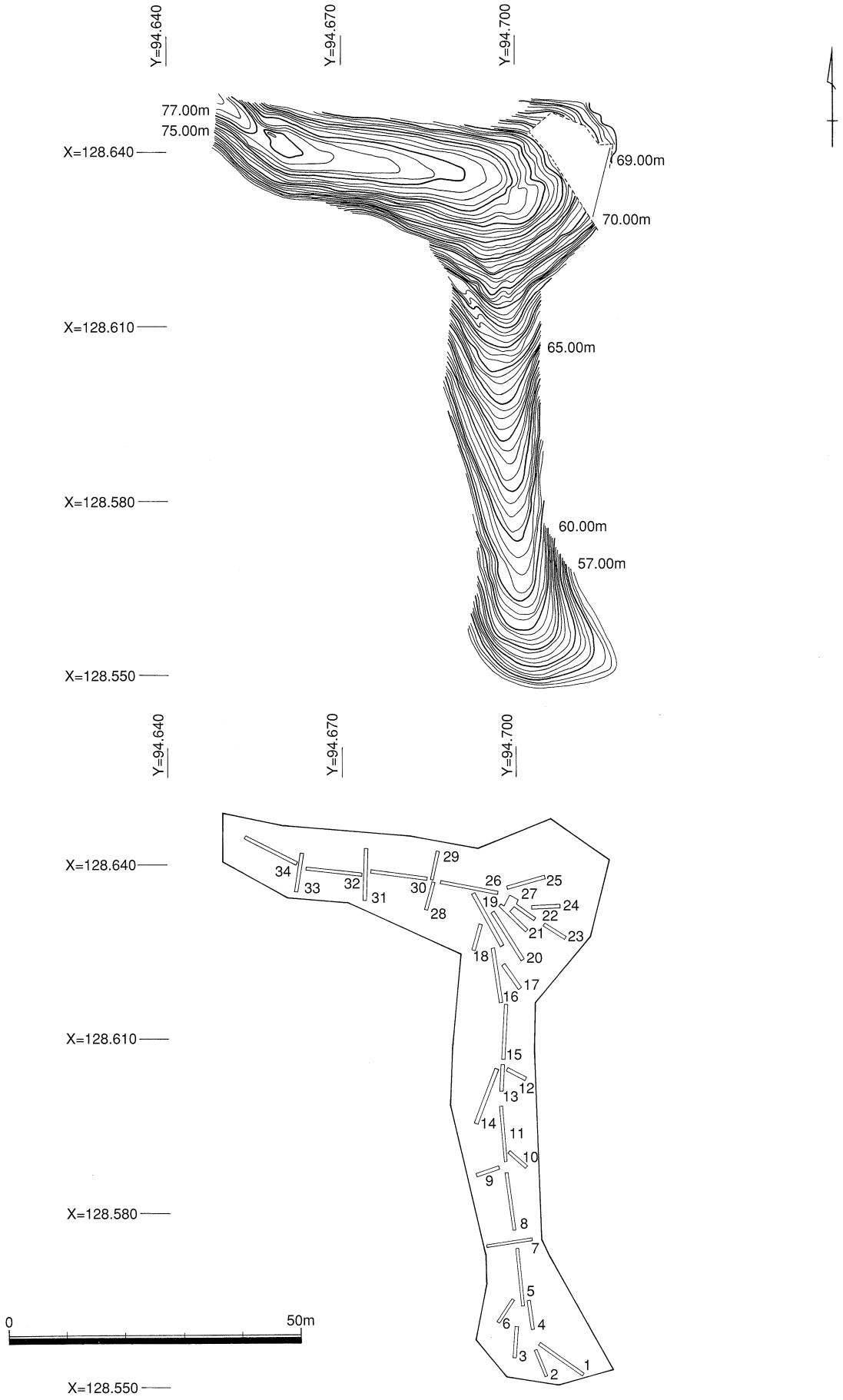
調査に際し、現況の地形測量を実施した。墳丘と思われる高まりを確認した後、試掘トレンチを設定し、掘削作業を行った。トレンチの設定については墳丘と思われる地点を中心に尾根筋に沿ってメイントレンチを設定し、それに直交するようにサブトレンチを設定した。試掘に際しては、調査対象面積の５％を基準としてトレンチを設定し、遺物包含層および無遺物自然堆積層までの層厚の確認と柱状断面図、断面写真の作成を基本方針とした。遺跡の有無の判定については調査対象面積の20％を上限とした。

基本層序（第２図）

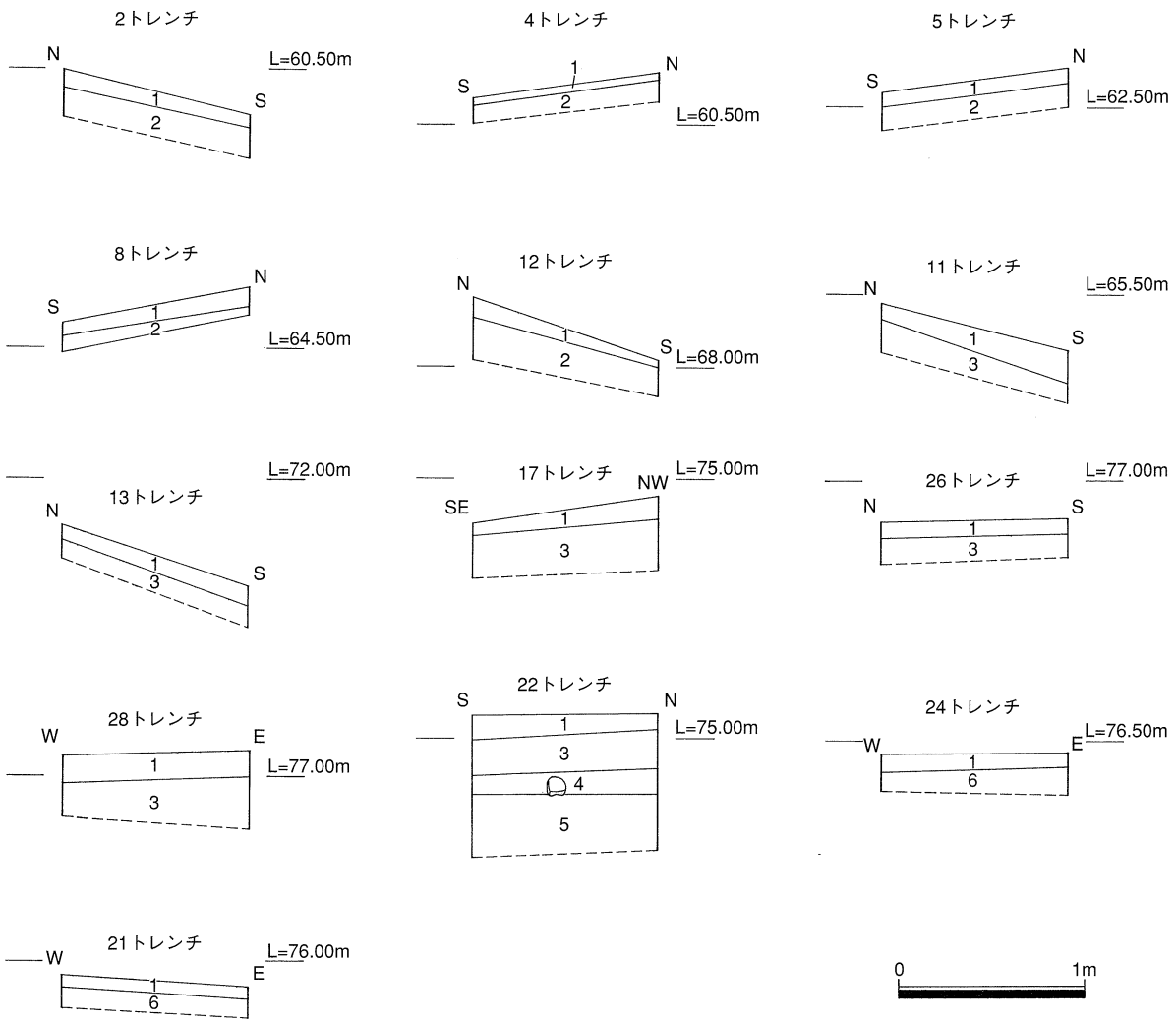
表土（腐葉土）直下は岩盤風化土、あるいは和泉層群起因の泥岩・砂岩の岩盤層となっており、安定した遺物包含層・遺構面は確認することができなかった。

まとめ

地形測量の結果をもとに、墳丘の可能性があると思われる地点を中心に34基のトレンチを開口した。いずれも表土（腐葉土）直下は、岩盤風化土層あるいは岩盤（地山）となっており、遺構・遺物共にまったく検出されなかったため、調査区全域において遺構は存在しないと考えられる。よって本調査区域では試掘調査のみで終了した。



第１図　地形平面・トレンチ配置図



1．黒褐色　7.5YR2/2　腐葉土
2．にぶい黄褐色　10YR4/3　砂質シルト（しまりややあり。粘性弱い。岩盤風化土。）
3．褐色　10YR4/4　砂質シルト（しまりややあり。粘性弱い。岩盤風化土。）
4．黄褐色　10YR5/6　砂質シルト（ややもろい。和泉層群の砂質泥岩。礫層。岩盤。）
5．明黄褐色　10YR6/6　砂質シルト（和泉層群の砂質泥岩。礫層。岩盤風化土。）
6．黄褐色　10YR5/6　砂質シルト（しまりややあり。粘性弱い。岩盤風化土。）

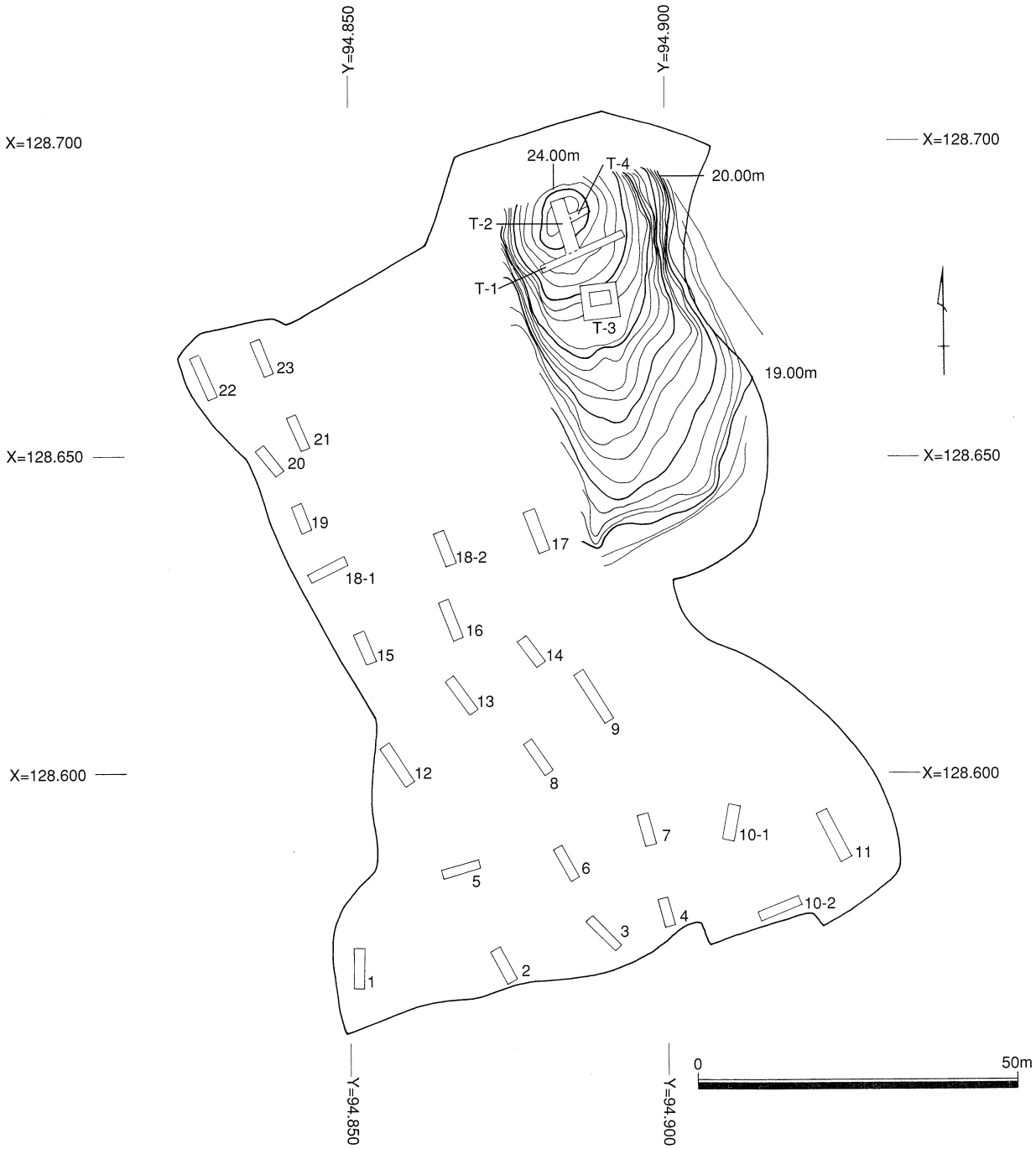
第２図　模式柱状土層図

15　中内遺跡

調査成果

遺跡の位置（Ⅰ-第１図およびⅡ-第１・５・17図）

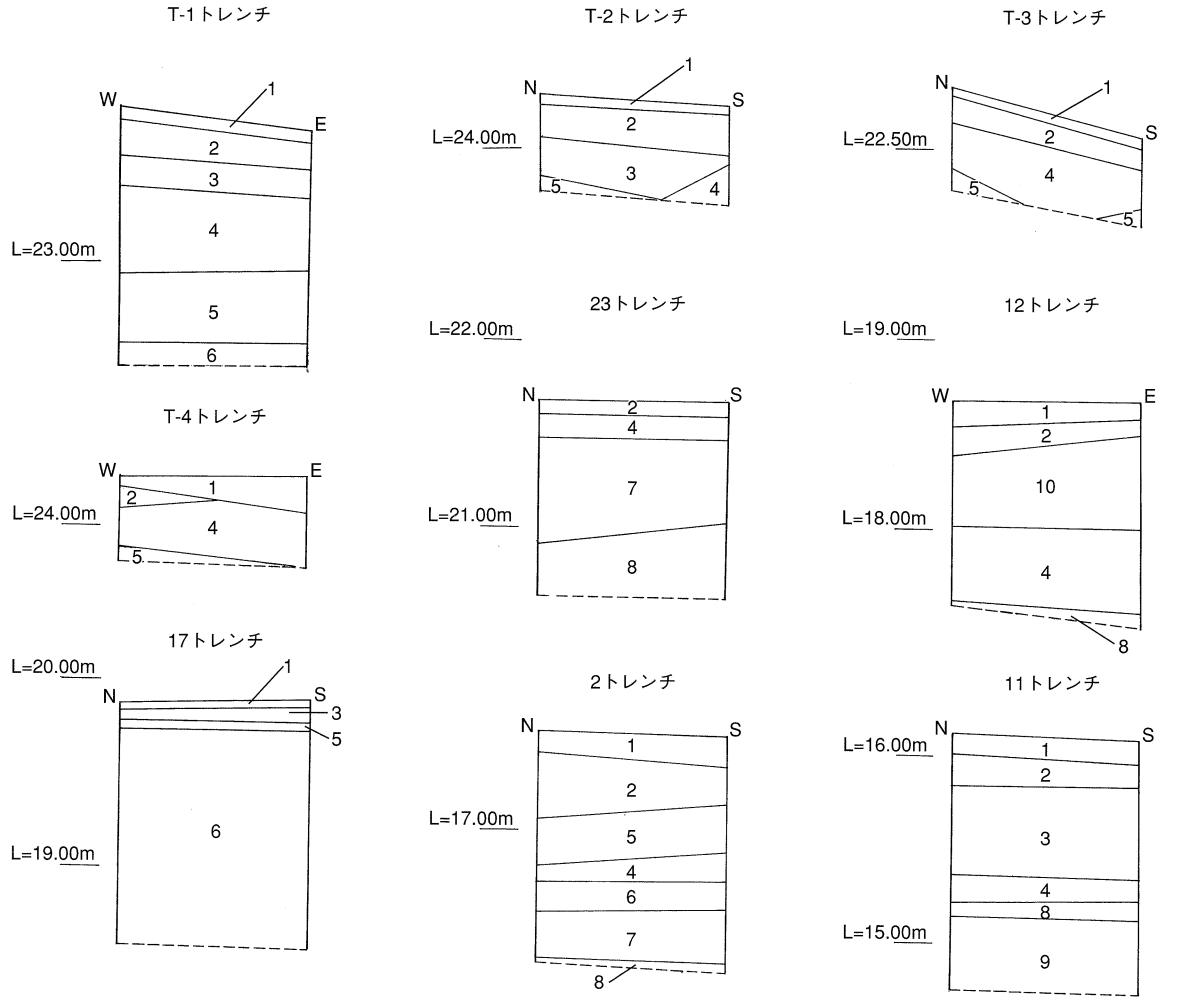
調査対象地は、阿讃山脈南麓、中内谷川によって形成された扇状地の扇央部に位置する。標高は17～24mで、北から南へ緩やかに傾斜する。現況は畑地となっている。



第１図　地形平面・トレンチ配置図

トレンチの設定（第１図）

調査に際し、現況の地形測量を実施し、掘削作業を行った。トレンチの設定については扇状地の傾斜に直交するかたちで南北方向にトレンチを設定した。試掘に際しては、調査対象面積の５％を基準としてトレンチを設定し、遺物包含層および無遺物自然堆積層までの層厚の確認と柱状断面図、断面写真の作成を基本方針とした。遺跡の有無の判定については調査対象面積の20％を上限とした。



T-1～T-4トレンチ
1．黒褐色　10YR3/2　砂質土
（φ＝１cm程度の礫をわずかに含む。）
2．黄褐色　2.5Y5/4　砂質土
（φ＝５mm～３cmの礫をわずかに含む。）
3．黄褐色　2.5Y5/3　砂層
（φ＝５mm程度の礫をわずかに含む。）
4．黄褐色　2.5Y5/4　砂質土
（φ＝５mm～５cm程度の礫を多量に含む。）
5．黄褐色　2.5Y5/4　砂質土
（φ＝５mm～１cm程度の礫を含む。砂質土と砂層が交互に堆積。）
6．黄褐色　2.5Y5/4　砂質土
（φ＝５mm～５cmの礫をわずかに含む。）

2・11・12トレンチ
1．にぶい黄褐色　10YR4/3　粘性砂質土（耕作土）
2．褐色　10YR4/4　粘性砂質土（床土・客土）
3．オリーブ褐色　2.5Y4/4　砂礫層
（φ＝２mm～15cm大の礫層。客土。撹乱。）
4．褐色　10YR4/4　砂礫層
（φ＝２mm～５cm大の礫を多く含む。扇状地の押し出し。）
5．褐色　10YR4/4　砂礫層
（φ＝２mm～５cm大の礫を多く含む。φ＝１cm程度の円礫層が互層に堆積。扇状地の押し出し。）
6．黄褐色　2.5Y5/4　砂質土
（φ＝２mm～３cm大の礫を含む。粘性しまり若干あり。）
7．オリーブ褐色　2.5Y4/4　砂質土
（φ＝２mm～５cm程度の礫を多く含む。扇状地の押し出し。）
8．にぶい黄褐色　10YR5/4　粘性砂質土
（φ＝３mm～４cm大の礫を若干含む。）
9．褐色　10YR4/4　砂礫層（扇状地の押し出し。）
10．褐色　10YR4/4　粘性砂質土
（φ＝２～３cm弱の礫を含む。粘性若干あり。しまりややあり。）

17・23トレンチ
1．にぶい黄褐色　10YR4/3　粘性砂質土（耕作土）
2．暗褐色　10YR3/3　粘性砂質土
（φ＝３mm～２cm大の礫を少量含む。粘性しまり若干あり。耕作土。）
3．褐色　10YR4/4　粘性砂質土
（φ＝２mm～３cm大の礫を若干含む。粘性しまり若干あり。床土。客土。）
4．褐色　10YR4/4　砂質土
（φ＝２mm～５cm大の礫を若干含む。粘性しまり若干あり。床土。客土。）
5．褐色　10YR4/4　粘性砂質土
（φ＝２mm～５cm大の礫を少量含む。盛土。撹乱。）
6．オリーブ褐色　2.5Y4/4　砂礫層（φ＝２mm～15cm大の礫。）
7．褐色　10YR4/4　砂質土
（φ＝５mm～５cm大の礫を含む。粘性しまり若干あり。）
8．褐色　10YR4/4　砂礫層（扇状地の押し出し。）

0　1m

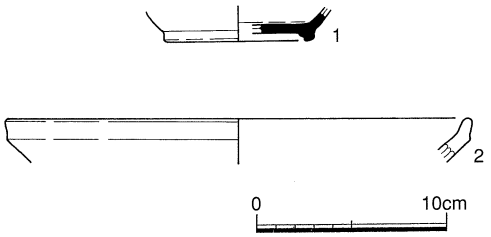
第２図　模式柱状土層図

基本層序（第２図）

調査地点は耕作地開墾による削平あるいは客土等の改変が著しい。表土以下は客土と思われるシルト質の粘質土あるいは扇状地性の砂礫層の堆積となっており、安定した遺物包含層・遺構面は確認することができなかった。

出土遺物（第３図）

１は須恵器の椀である。２は土師質土器の甕口縁である。小片であるため詳細な時期決定は困難であるが、いずれも10世紀頃のものと思われる。



第３図　出土遺物

まとめ

23基のトレンチを開口した。基本的な土層堆積は、表土（耕作土・客土）直下は、扇状地性の礫混じりの堆積であり、遺構の存在は確認できなかった。また遺物はすべて表土（耕作土・客土）からの出土であった。試掘の結果、調査区全域において遺構は存在しないと考えられ、よって本調査区域では試掘調査のみで終了した。

中内遺跡　土器観察表
包含層

報告書掲載番号	遺構	出土地点	層位	器種	残存率	口径(cm)	体部最大径(cm)	底径(cm)	頸部(脚柱)径(cm)	器高・残存高(cm)	その他の法量(cm)	部位	形態	調整	含有物組成	色調	備考
1	No10トレンチ		2層床土層	須恵器椀	底部1/9			7.6		1.7	高台高0.6	底部	体部外上方に延びる。削り出し高台でハの字に開き、断面を逆台形状に収める。	外面：ロクロナデ。内面：ロクロナデ。	石英・長石	外面：灰内面：灰白	焼成良好。
2	No5トレンチ		3層客土層	土師質土器甕	口縁部1/15	24.4				2.3		口縁部	口縁部外反し、端部を上方につまみ上げ、丸く収める。	不明。	長石	外面：にぶい褐内面：橙	焼成良好。

16　袖もぎ古墳群

調査成果

遺跡の位置（Ⅰ-第１図およびⅡ-第１・５・18図）

調査対象地は、阿讃山脈南麓、標高60～80mの尾根上に位置する。現況は山林である。周辺には東林院古墳群・宝幢寺古墳群・天河別神社古墳群など多くの古墳群が所在する。

トレンチの設定（第１図）

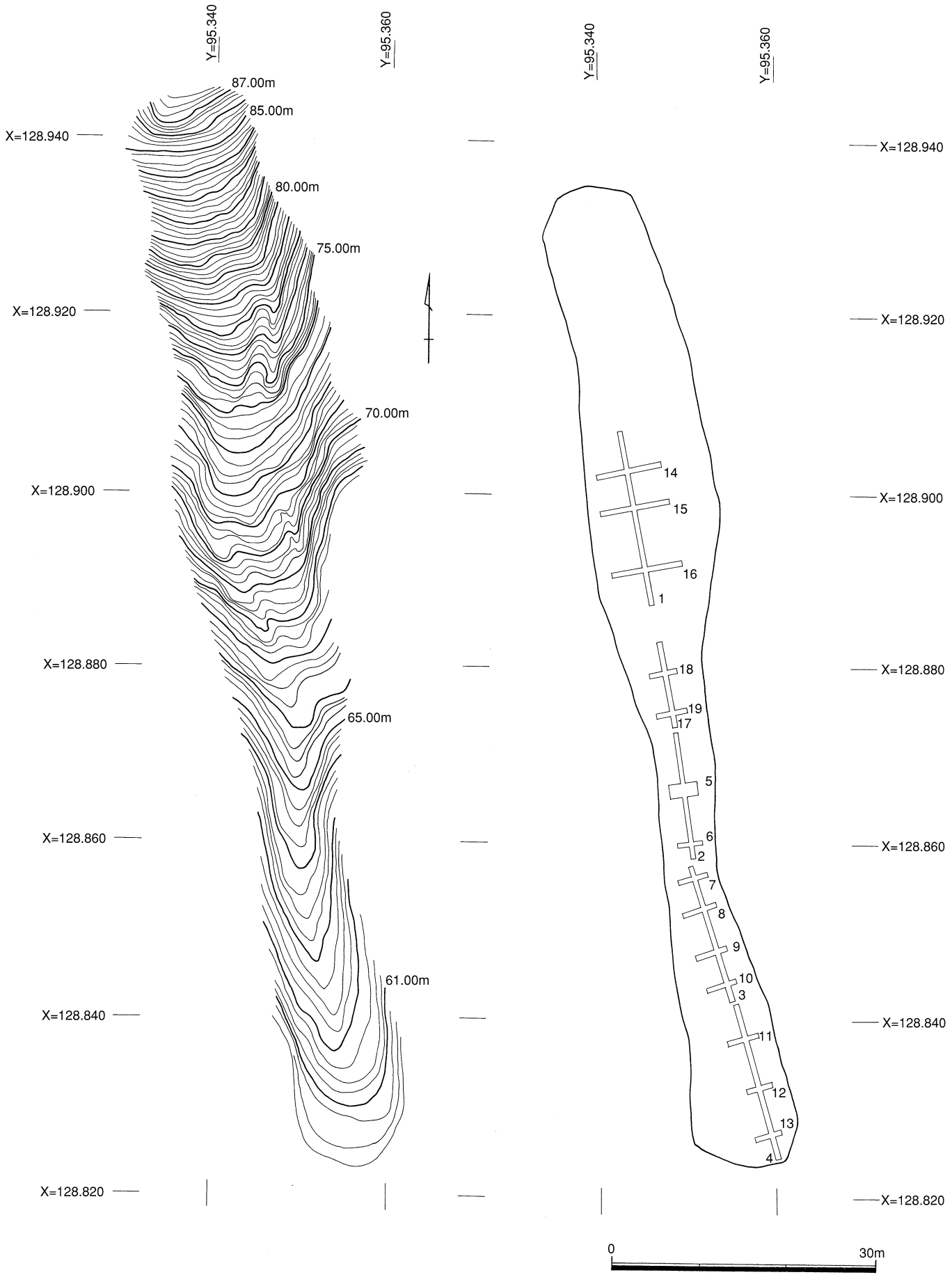
調査に際し、現況の地形測量を実施した。墳丘と思われる高まりを確認した後、試掘トレンチを設定し、掘削作業を行った。トレンチの設定については墳丘と思われる地点を中心に尾根筋に沿ってメイントレンチを設定し、それに直交するようにサブトレンチを設定した。試掘に際しては、調査対象面積の５％を基準としてトレンチを設定し、遺物包含層および無遺物自然堆積層までの層厚の確認と柱状断面図、断面写真の作成を基本方針とした。遺跡の有無の判定については調査対象面積の20％を上限とした。

基本層序（第２図）

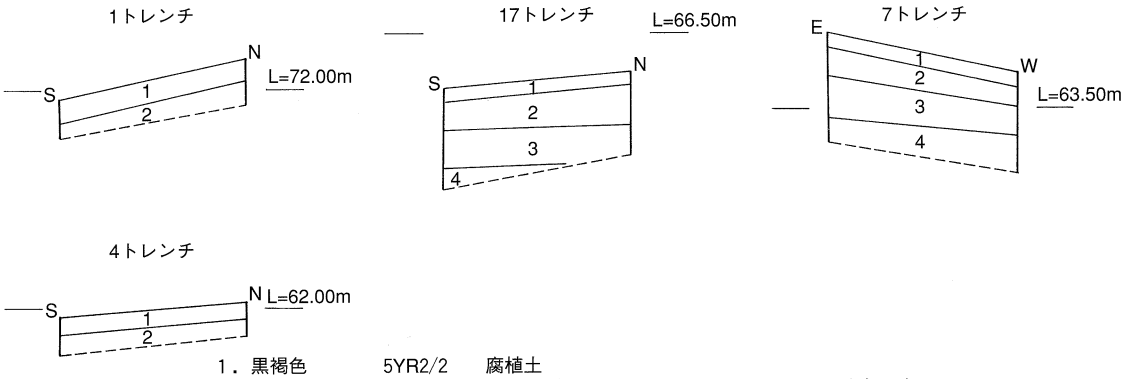
表土（腐植土）直下は岩盤風化土、あるいは和泉層群起因の泥岩・砂岩の岩盤層となっており、安定した遺物包含層・遺構面は確認することができなかった。

まとめ

調査に先立ち、平板地形測量を実施した。その結果を基に19基のトレンチを設定した。各トレンチいずれも表土（腐植土）直下は、岩盤もしくは岩盤風化土であり、遺構は検出できなかった。遺物も表土から出土した土師器小片のみであり、時代の特定可能なものはなかった。調査区全域において遺構は存在しないと考えられる。よって本調査区域では試掘調査のみで終了した。



第１図　地形平面・トレンチ配置図



1．黒褐色　5YR2/2　腐植土
2．オリーブ褐色　2.5YR4/4　砂質土（粘性しまり弱い。ϕ＝1～3㎝の礫含む。）
3．黄褐色　2.5YR5/4　砂質土（2層より粘性しまりあり。礫は少ない。）
4．にぶい黄色　2.5YR6/4　砂質土（3層よりしまりあり。ϕ＝1～3㎝の礫含む。）

第2図　模式柱状土層図

0　1m

17　宇志比古神社古墳群

調査成果

遺跡の位置（Ⅰ-第１図およびⅡ-第１・５・19図）

調査対象地は、讃岐山脈南麓、標高約63～68mの北から南へ緩やかに傾斜する尾根上に位置する。現況は山林となっている。周辺には東林院古墳群・西山谷古墳群など多くの古墳が所在する。

トレンチの設定（第１・２図）

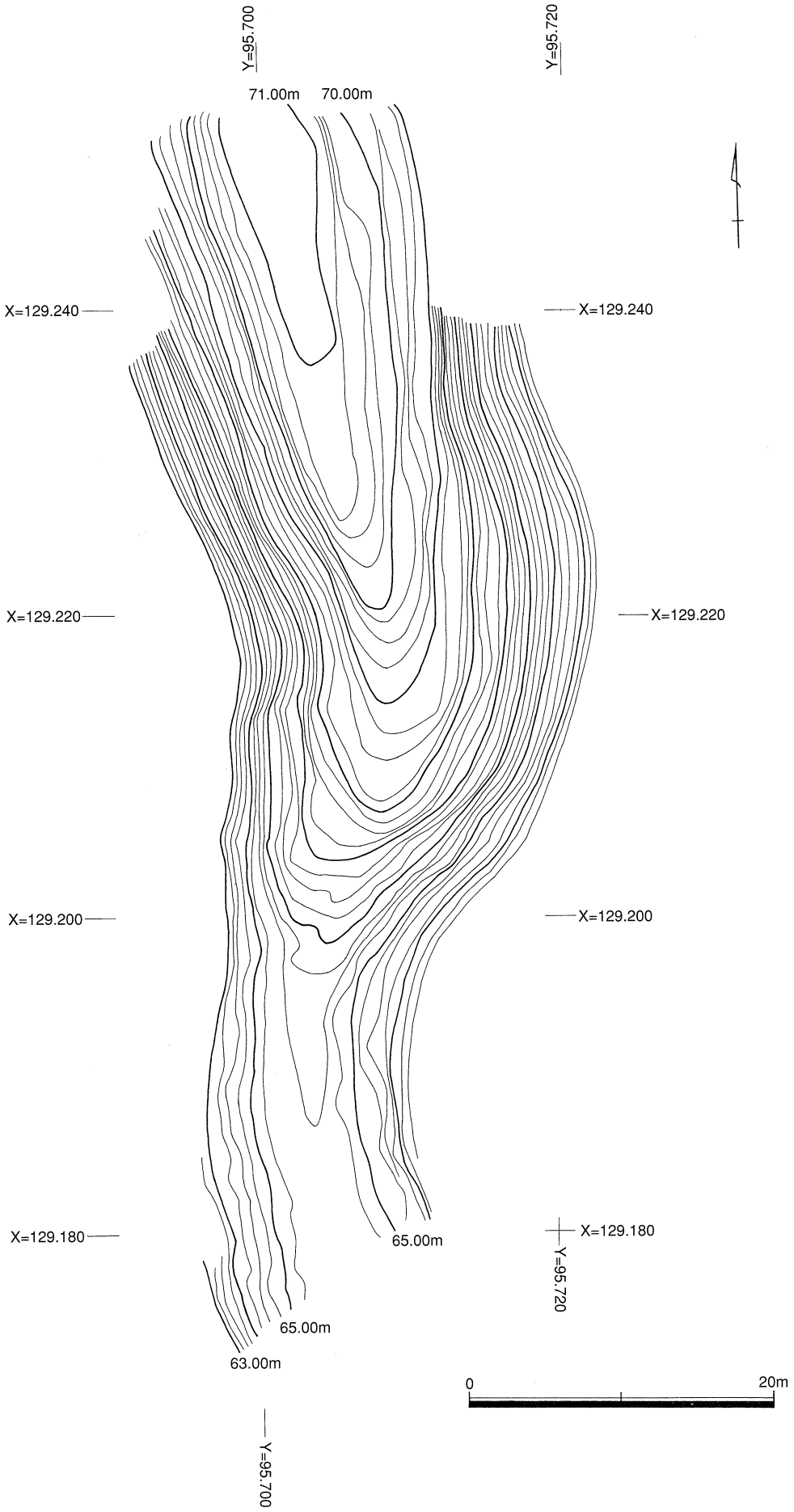
調査に際し、現況の地形測量を実施した。墳丘と思われる高まりを確認した後、試掘トレンチを設定し、掘削作業を行った。トレンチの設定については墳丘と思われる地点を中心に尾根筋に沿ってメイントレンチを設定し、それに直交するようにサブトレンチを設定した。試掘に際しては、調査対象面積の５％を基準としてトレンチを設定し、遺物包含層および無遺物自然堆積層までの層厚の確認と柱状断面図、断面写真の作成を基本方針とした。遺跡の有無の判定については調査対象面積の20％を上限とした。

基本層序（第３図）

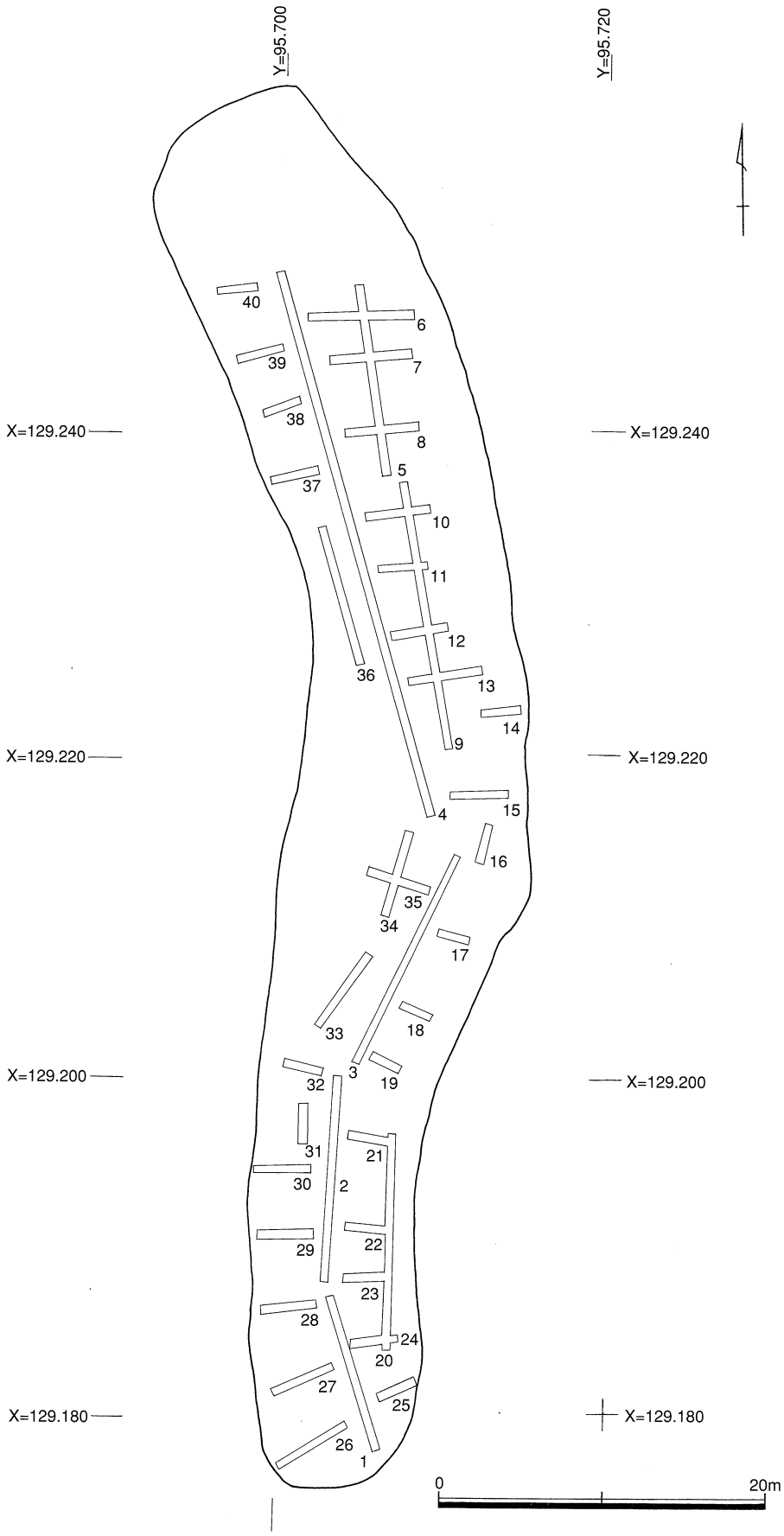
表土（腐植土）直下は岩盤風化土、あるいは和泉層群起因の泥岩・砂岩の岩盤層となっており、安定した遺物包含層・遺構面は確認することができなかった。

まとめ

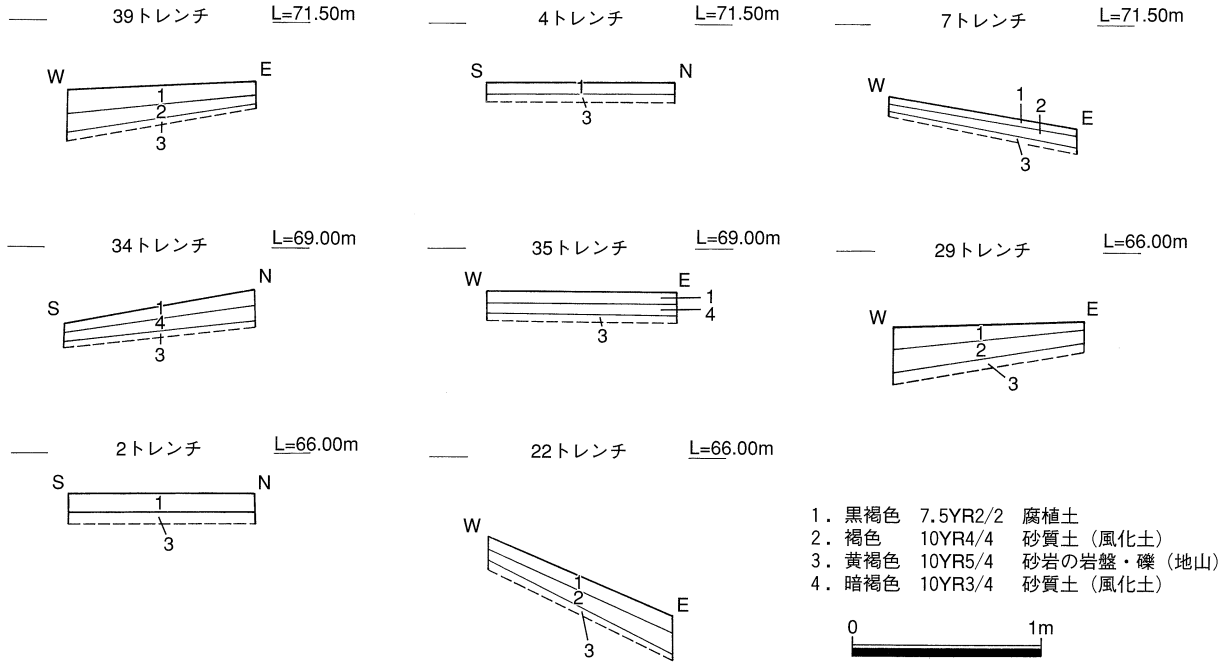
調査に先立ち、地形測量を実施した。その結果を基に40基のトレンチを設定し掘削を行った。試掘の結果、各トレンチとも表土（腐植土）の直下は岩盤あるいは岩盤の風化土であり、遺構・遺物は検出できなかった。調査区全域において遺構は存在しないと考えられるため、本調査区域では試掘調査のみで終了した。


Y=95.700
Y=95.720
71.00m
70.00m
X=129.240
X=129.240
X=129.220
X=129.220
X=129.200
X=129.200
X=129.180
X=129.180
65.00m
65.00m
63.00m
Y=95.720
Y=95.700
0
20m

第１図　地形平面図



第２図　トレンチ配置図


39トレンチ
L=71.50m
W
E
1
2
3
4トレンチ
L=71.50m
S
N
1
3
7トレンチ
L=71.50m
W
1
2
E
3
34トレンチ
L=69.00m
S
N
1
4
3
35トレンチ
L=69.00m
W
E
1
4
3
29トレンチ
L=66.00m
W
E
1
2
3
2トレンチ
L=66.00m
S
N
1
3
22トレンチ
L=66.00m
W
1
2
E
3
1．黒褐色　7.5YR2/2　腐植土
2．褐色　10YR4/4　砂質土（風化土）
3．黄褐色　10YR5/4　砂岩の岩盤・礫（地山）
4．暗褐色　10YR3/4　砂質土（風化土）
0
1m

第３図　模式柱状土層図

18　東山谷遺跡

調査成果

遺跡の位置（Ⅰ-第１図およびⅡ-第１・５・20図）

調査対象地は阿讃山脈南麓、大谷川左岸の標高17～28mの斜面上に位置する。現況は山林となっている。大谷川の両岸には近世に創業した大谷焼の窯元が現在も多く存在する。

トレンチの設定（第１・２図）

調査に際し、現況の地形測量を実施した。マウンド状の高まりを確認した後、試掘トレンチを設定し、掘削作業を行った。トレンチの設定については墳丘と思われる地点を中心に尾根筋に沿ってメイントレンチを設定し、それに直交するようにサブトレンチを設定した。試掘に際しては、調査対象面積の５％を基準としてトレンチを設定し、遺物包含層および無遺物自然堆積層までの層厚の確認と柱状断面図、断面写真の作成を基本方針とした。遺跡の有無の判定については調査対象面積の20％を上限とした。

基本層序（第３図）

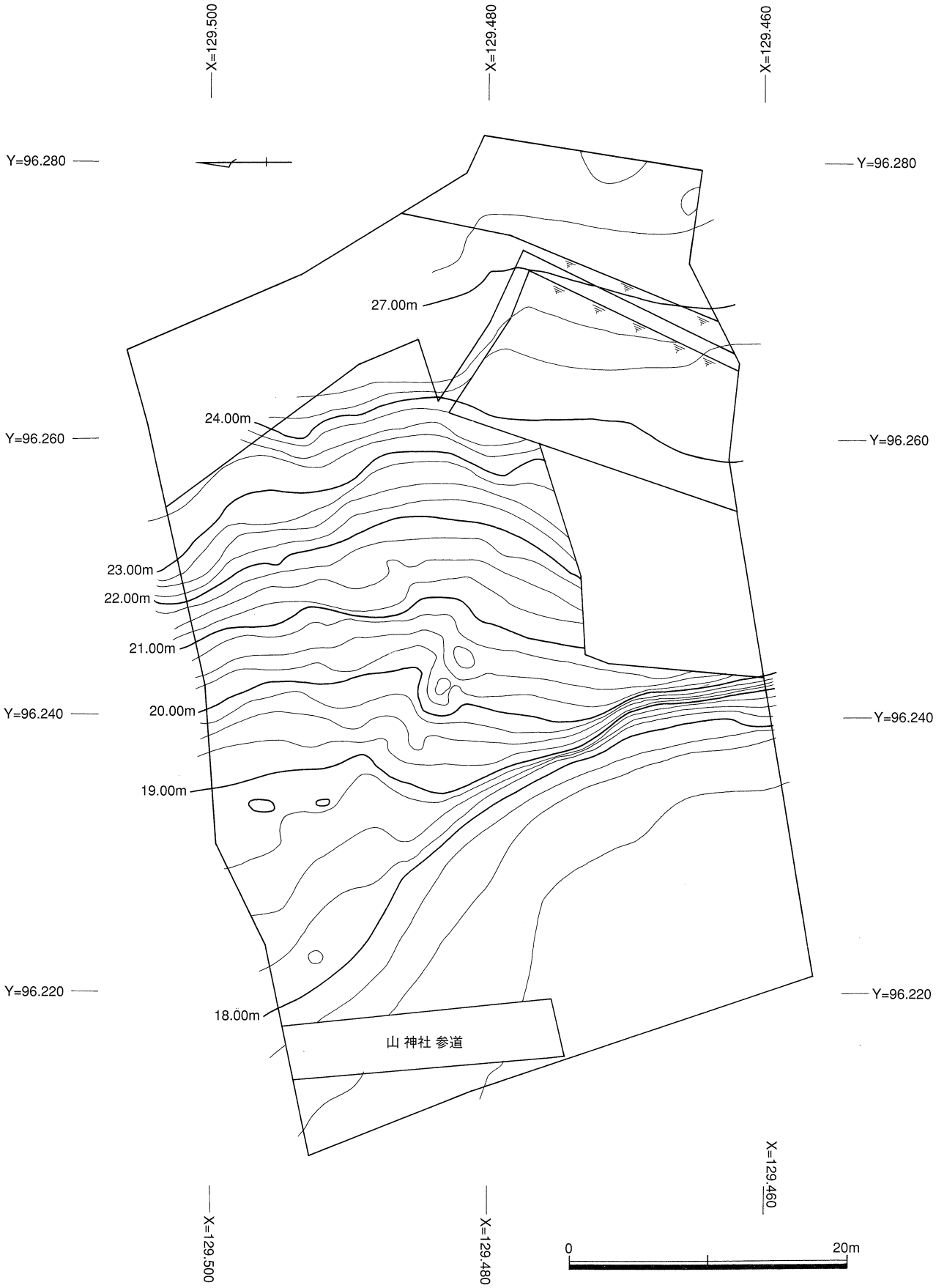
表土（腐葉土）以下は扇状地性の礫層の堆積層となっており、安定した遺物包含層・遺構面は確認することができなかった。

出土遺物（第４図）

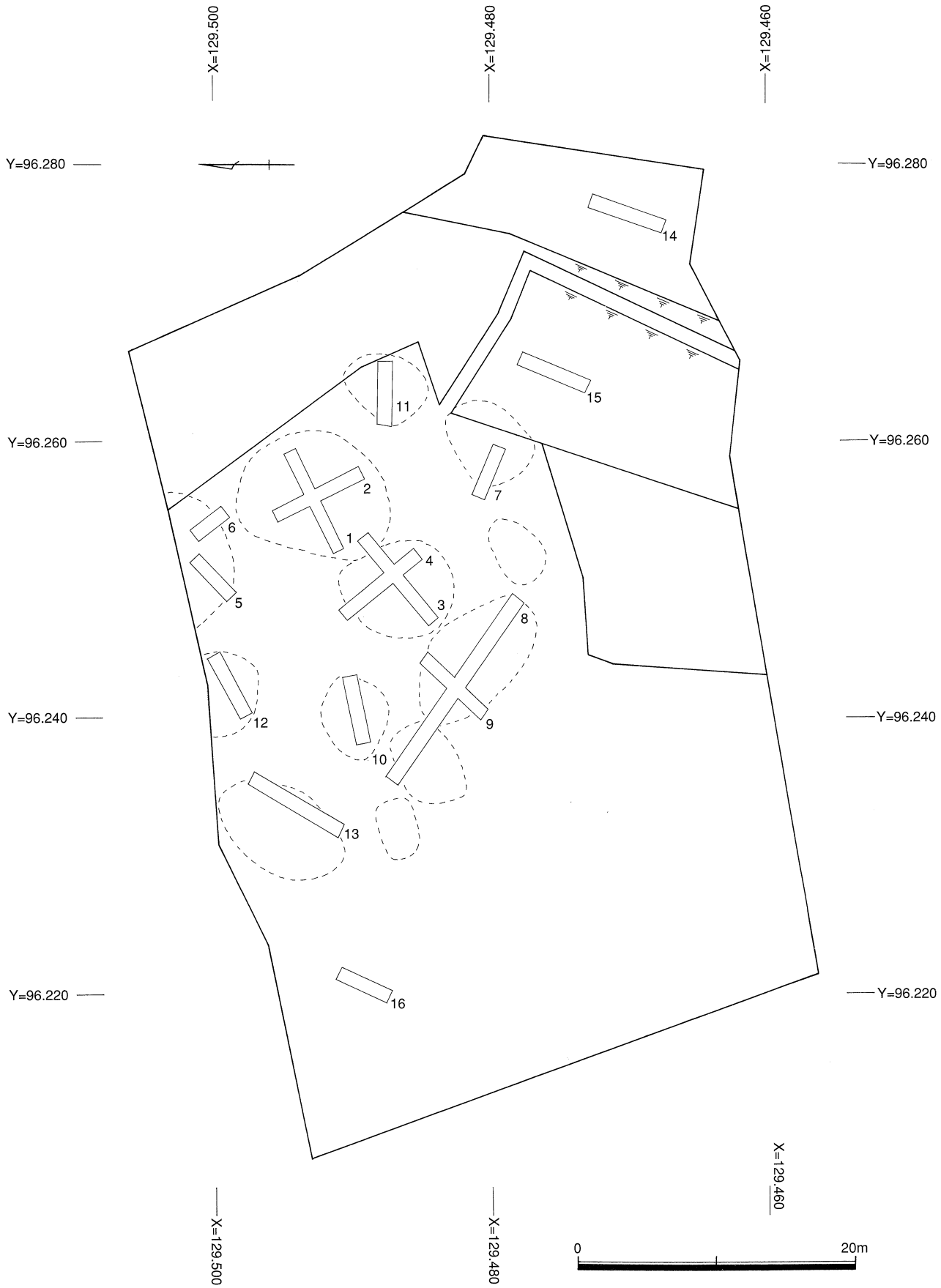
１～５（３は除く。）は大谷焼である。３は須恵器の壺と思われる底部である。３以外は近世以降の遺物である。４の底部内面には焼成時に重ねた窯道具の痕跡が残っている。６～10は窯道具である。７には底部に直径約７cmの孔があいている。これらの出土遺物や周辺の環境などから、近隣に大谷焼の窯が存在していたと思われる。11は寛永通寶である。

まとめ

地形測量を基にマウンド状の地形の高まりを中心に16基のトレンチを開口した。当初、近世窯跡の存在が予想されたが、試掘の結果、マウンド状の高まりは斜面からの崩落した礫の堆積したものであった。各トレンチとも表土直下は斜面押し出しの和泉層群起源の礫の堆積となっており、遺構は確認できなかった。また遺物はほとんどが表土上面からの出土であった。調査区全域において遺構の存在が確認できなかったため、調査区域では試掘調査のみで終了した。

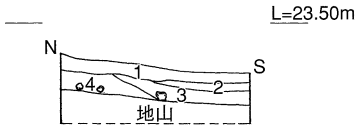

X=129.500
X=129.480
X=129.460
Y=96.280
Y=96.260
Y=96.240
Y=96.220
27.00m
24.00m
23.00m
22.00m
21.00m
20.00m
19.00m
18.00m
山神社 参道
0
20m

第１図　地形平面図

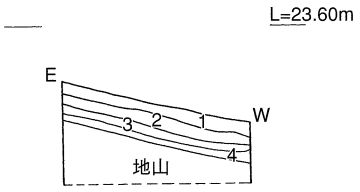

X=129.500
X=129.480
X=129.460
Y=96.280
Y=96.260
Y=96.240
Y=96.220
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
0
20m

第２図　トレンチ配置図

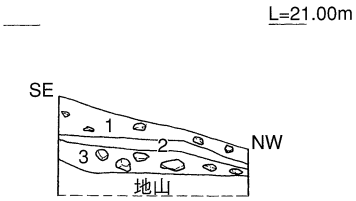
6トレンチ（東壁）



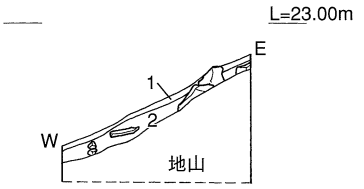
1トレンチ（南壁）



8トレンチ（西壁）

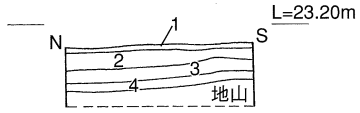


5トレンチ（北壁）



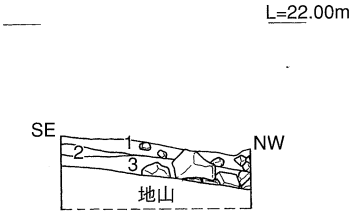
5・6トレンチ
1．褐色　10YR4/4　粘土質砂（腐植土。甕片、礫を含む。時代を示す遺物含まず。）
2．にぶい黄橙色　10YR6/4　粘土混じり砂（腐植物含む。礫などからなる撹拌層。時代を示す遺物含まず。）
3．灰オリーブ色　5Y5/2　粘土混じり砂（風化礫や、暗灰色の粘土を所により含む。時代を示す遺物含まず。）
4．灰オリーブ色　5Y5/2　砂混じり粘土（所によりϕ=10～20cmの砂質角礫を含む。時代を示す遺物含まず。風化礫を含む。）

2トレンチ（東壁）



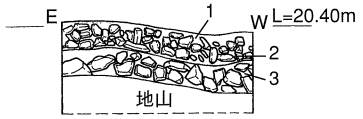
1・2トレンチ
1．褐色　10YR4/4　粘土質砂（腐植土。ϕ=直径10～20cmの砂岩、結晶片岩礫を含む。大谷焼片、窯壁レンガ片、須恵器片を含むが時代は不詳。）
2．にぶい黄橙色　10YR6/4　粘土混じり砂（ϕ=3～4cmの砂岩角礫を部分的に多く含む。須恵器片、窯壁片を含むが時代は不詳。）
3．にぶい赤褐色～暗褐色　5YR5/4～10YR4/3　粘土混じり砂（ϕ=3～4cmの角礫、土器片含む。攪乱されている。暗灰色の粘土が所により混じる。時代を示す遺物含まず。）
4．灰オリーブ色　5Y5/2　砂混じり粘土（所によりϕ=10～20cmの砂質角礫を含む。時代を示す遺物含まず。）

8トレンチ（西壁）



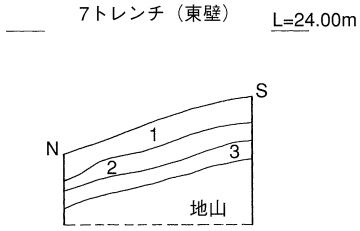
8トレンチ
1．褐色　10YR4/4　礫混じり粘性砂質土（腐植土。こぶし大の砂岩角礫からϕ=30cmの砂岩円礫までを不規則に積んでいる。時代を示す遺物なし。）
2．にぶい黄褐色　10YR5/6　粘性砂質土（所により礫を含む。風化礫を含む。時代を示す遺物なし。）
3．黄橙色　10YR7/8　粘性砂質土（ϕ=20～30cmの亜角礫を不規則に積んでいる所あり。時代を示す遺物なし。）

9トレンチ（南壁）



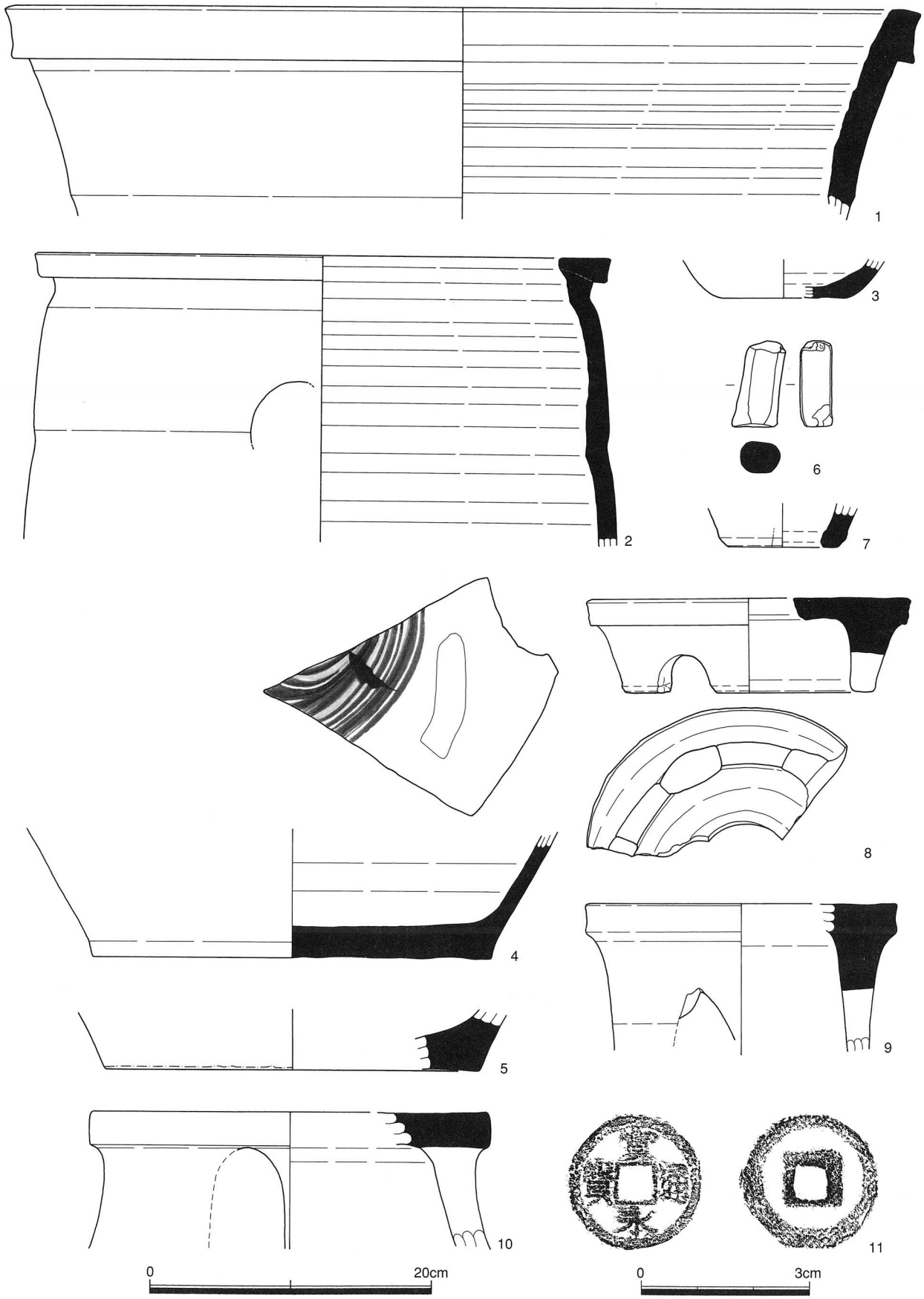
9トレンチ
1．褐色　10YR4/4　粘性砂質土（腐植土。ϕ=10cm程度の砂岩角礫を多く含む。）
2．黄褐色　2.5Y5/4　礫混じり粘性砂質土（所により腐植土や5cm程度の砂岩角礫を含む。）
3．黄褐色　2.5Y5/4　礫混じりの粘性砂質土（風化土。20～30cmの砂岩角礫を含む。）

7トレンチ（東壁）



7トレンチ
1．灰褐色　7.5YR4/2　砂混じり粘土（腐植土。ϕ=7～8cmの砂岩角礫が混じる。甕片などが混じるが時代は不詳。）
2．灰褐色～黄褐色　7.5YR4/2～10YR5/6　粘土混じりの砂（ϕ=7～8cmの砂岩角礫を多く含む。風化礫混入。時代を示す遺物含まない。）
3．黄褐色　10YR5/6　粘土混じり砂（風化土。ϕ=3cmの亜円礫や直径10～20cmの砂岩の角礫を含む。風化礫含む。時代を示す遺物は含まない。）

第3図　模式柱状土層図



第４図　出土遺物

東山谷遺跡　土器観察表
包含層

報告書掲載番号	遺構	出土地点	層位	器種	残存率	口径(cm)	体部最大径(cm)	底径(cm)	頸部(脚柱)径(cm)	器高・残存高(cm)	その他の法量(cm)	部位	形態	調整	含有物組成	色調	備考
1	No.5 トレンチ		1層表土	陶器 甕	口縁部 1/6	63.0				15.0		口縁部	口縁外反し、端部は上下に拡張する。	外面：ロクロナデ。施釉。 内面：ロクロナデ。施釉。	石英	釉：鉄釉 くらいグレイみのブラウン 胎：にぶい赤褐	焼成良好。
2	No.7 トレンチ		1層表土	陶器 甕	口縁部 1/4	40.0				20.6		口縁部	体部直立し、口縁端部で上下に拡張し、方形状に収める。端部面は平坦。直径7cm位の穴が開いている。	外面：ロクロナデ。施釉。 内面：ロクロナデ。施釉。	石英	釉：鉄釉 くらいグレイみのブラウン 胎：にぶい赤褐	焼成良好。
3	No.3 トレンチ		1層表土	須恵器 壺	底部 1/3			8.9		2.7		底部	体部外上方に延びる。	外面：ロクロナデ。自然釉。 内面：ロクロナデ。自然釉。	長石	外面：灰白 内面：オリーブ黒	焼成良好。内面にグレイみのオリーブグリーンの自然釉。
4	No.7 トレンチ		2層	陶器 甕	底部 1/5			28.4		8.9		底部	平底。体部外上方に延びる。	外面：ロクロナデ。 内面：ロクロナデ。 施釉。	石英・長石	釉：鉄釉 くらいグレイみのブラウン 胎：にぶい赤褐	焼成良好。焼成時底部に他遺物と重なっていた跡有り。砂目痕。
5	No.2 トレンチ		1層	陶器 甕	底部 1/8			26.6		4.4		底部	体部外上方に延びる。底部内面に砂目跡。	外面：ロクロナデ。 内面：ロクロナデ。	石英・長石	釉：鉄釉 くらいグレイみのブラウン 胎：にぶい赤褐	焼成良好。鉢？
6	No.2 トレンチ		1層	陶器 窯道具 ハマ	破片						縦6.1 横3.3 厚さ2.1	不明		外面：ナデ。板ナデ。	石英・長石	外面：にぶい赤褐	
7	No.2 トレンチ		1層	窯道具	底部 1/5			7.9		2.8		底部	体部外上方に延びる。	外面：横ナデ。 底部空気孔らしき跡。 内面：横ナデ。 底部砂粒がついている。	石英	外面：灰赤	焼成良好。
8	No.2 トレンチ		1層	陶器 窯道具 ハマ	全体 1/3	22.0				6.8		全体	体部下方に延びる。	外面：ナデ。 内面：ナデ。	石英	外面：赤褐 内面：赤褐	
9	No.1 トレンチ		1層	陶器 窯道具 ハマ	上部 1/5	22.2				10.5		上部	体部下方に延びる。	外面：ロクロナデ。 内面：ロクロナデ。	石英	外面：赤褐 内面：赤褐	
10	No.1 トレンチ		1層	陶器 窯道具 ハマ	上部 1/3	28.0				9.8		上部	体部外下方に延びる。	外面：ロクロナデ。 内面：ロクロナデ。	石英・長石・赤色斑粒	外面：にぶい赤褐 内面：明赤褐	

東山谷遺跡　銅銭観察表
包含層

報告書掲載番号	遺構	出土地点	層位	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	その他の法量(cm)	残存率	部位	備考
11	No.13 トレンチ		3層	銭	2.4		0.5	2.0				青銅

19　姫田宮尾神社古墳群

調査成果

遺跡の位置（Ⅰ-第１図およびⅡ-第１・６・21図）

調査対象地は阿讃山脈南麓、標高58～88mの尾根上に位置する。現況は山林である。周辺には多くの古墳群が存在する。

トレンチの設定（第１・２図）

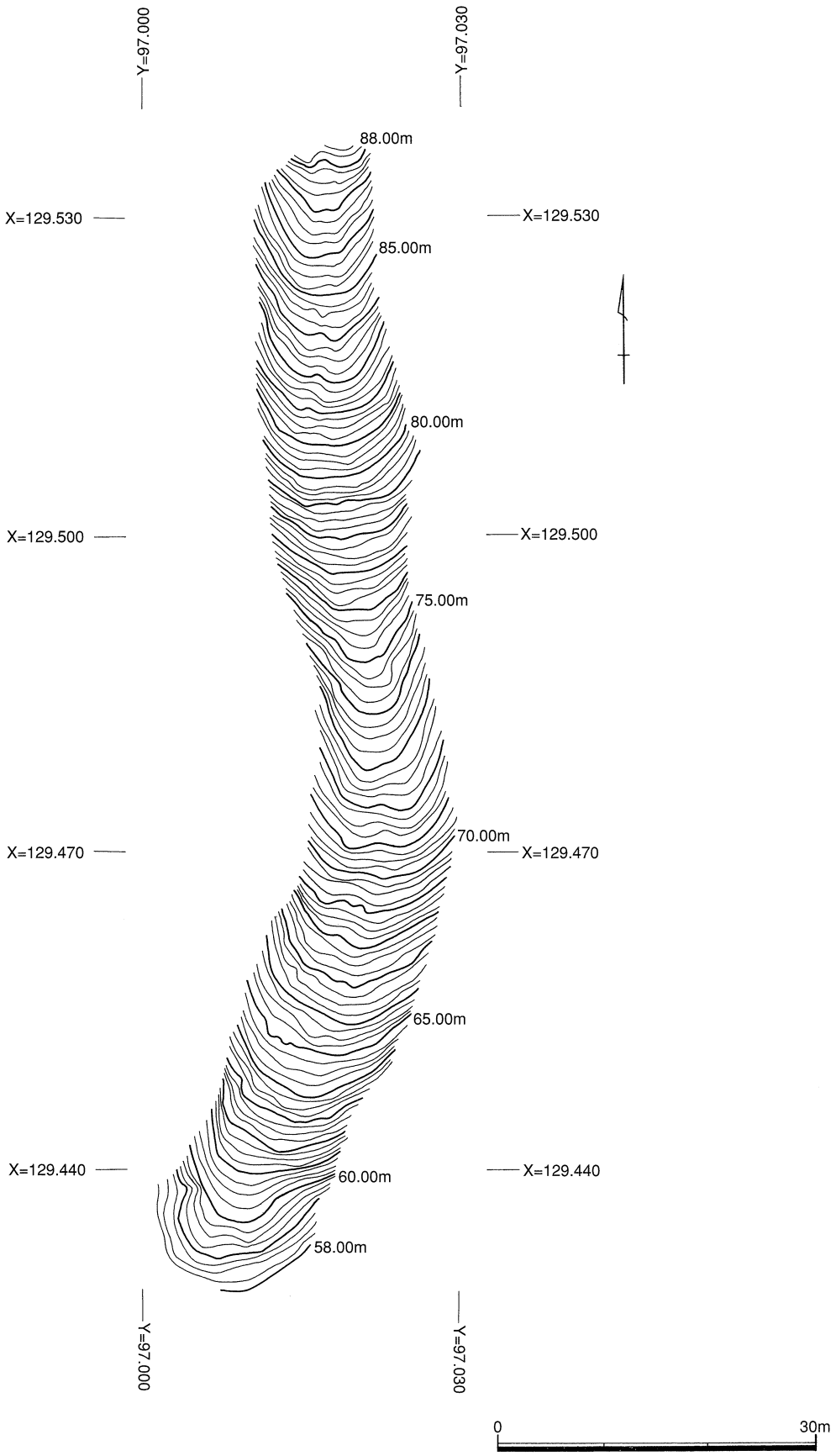
調査に際し、現況の地形測量を実施した。墳丘と思われる高まりを確認した後、試掘トレンチを設定し、掘削作業を行った。トレンチの設定については墳丘と思われる地点を中心に尾根筋に沿ってメイントレンチを設定し、それに直交するようにサブトレンチを設定した。試掘に際しては、調査対象面積の５％を基準としてトレンチを設定し、遺物包含層および無遺物自然堆積層までの層厚の確認と柱状断面図、断面写真の作成を基本方針とした。遺跡の有無の判定については調査対象面積の20％を上限とした。

基本層序（第２図）

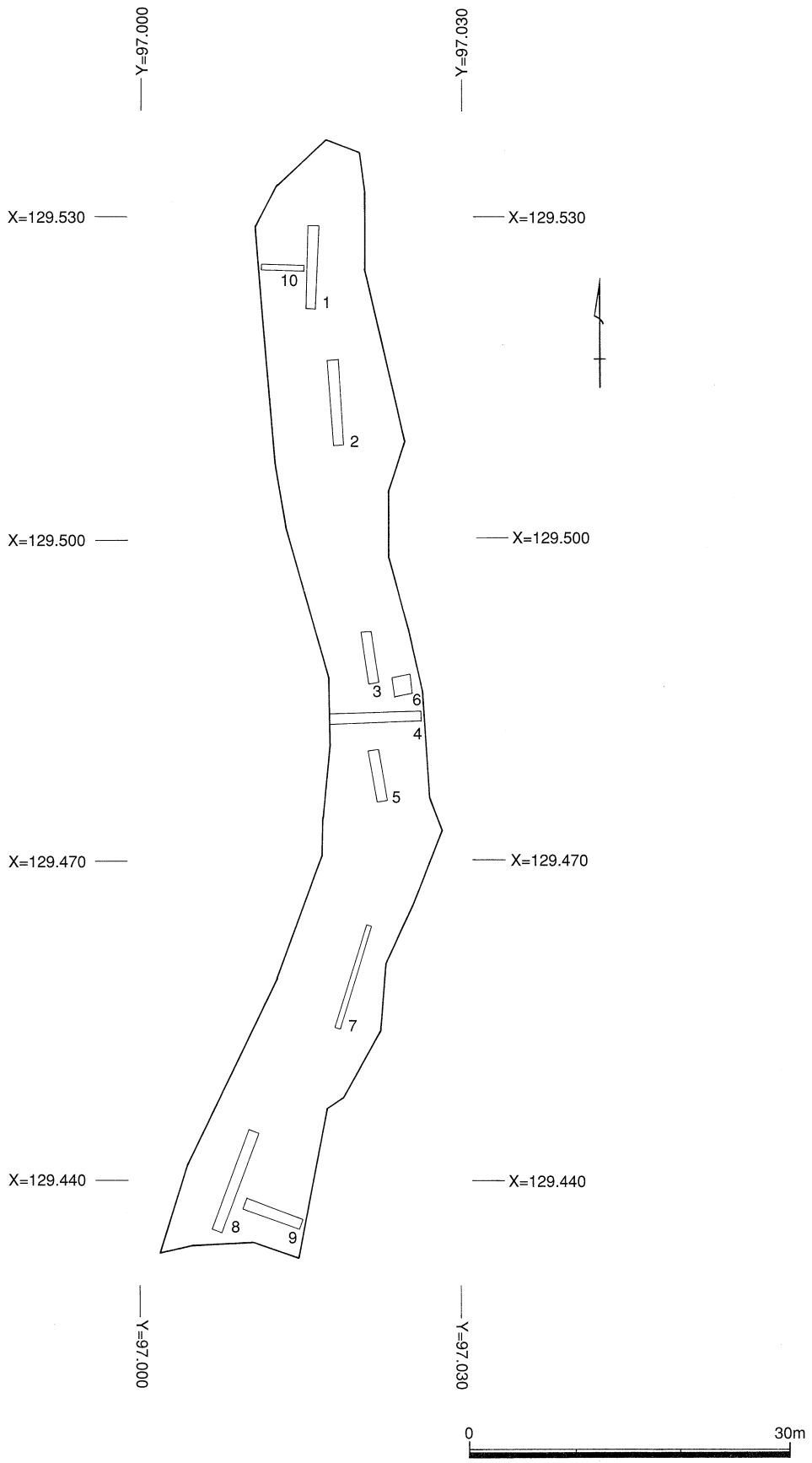
表土（腐葉土）直下は岩盤風化土、あるいは和泉層群起因の泥岩・砂岩の岩盤層となっており、安定した遺物包含層・遺構面は確認することができなかった。

まとめ

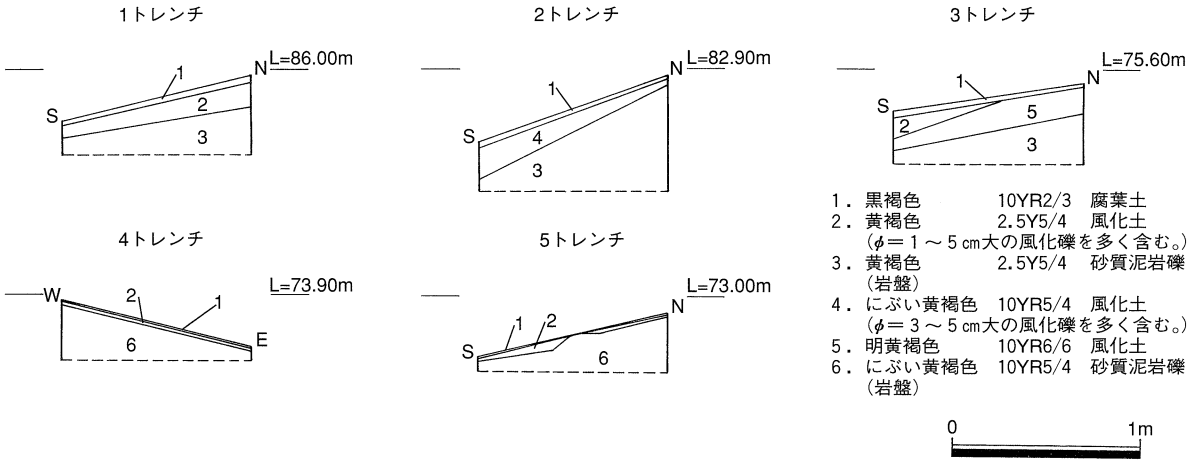
試掘トレンチ掘削に先立ち、現況地形を実施し、その結果を基に10基のトレンチを設定・掘削した。地形測量により墳丘と思われたマウンド状の高まりは、露呈していた岩脈に岩盤風化土が堆積した自然地形であった。また当初、古墳に関わる構築物と考えられていた石列状のものも和泉層群の岩脈の風化したものであった。試掘の結果、各トレンチとも遺構・遺物の出土は皆無であり、調査区全域において遺構は存在しないと考えられるため、本調査区域では試掘調査のみで終了した。


Y=97.000
Y=97.030
88.00m
X=129.530
X=129.530
85.00m
80.00m
X=129.500
X=129.500
75.00m
70.00m
X=129.470
X=129.470
65.00m
X=129.440
X=129.440
60.00m
58.00m
Y=97.000
Y=97.030
0
30m

第１図　地形平面図


Y=97.000
Y=97.030
X=129.530
X=129.500
X=129.470
X=129.440
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
0
30m

第２図　トレンチ配置図


1トレンチ
L=86.00m
S
N
1
2
3
2トレンチ
L=82.90m
S
N
1
4
3
3トレンチ
L=75.60m
S
N
1
2
5
3
4トレンチ
L=73.90m
W
E
2
1
6
5トレンチ
L=73.00m
S
N
1
2
6
1．黒褐色　10YR2/3　腐葉土
2．黄褐色　2.5Y5/4　風化土
（φ＝1～5㎝大の風化礫を多く含む。）
3．黄褐色　2.5Y5/4　砂質泥岩礫
（岩盤）
4．にぶい黄褐色　10YR5/4　風化土
（φ＝3～5㎝大の風化礫を多く含む。）
5．明黄褐色　10YR6/6　風化土
6．にぶい黄褐色　10YR5/4　砂質泥岩礫
（岩盤）
0
1m

第３図　模式柱状土層図

20　タキケ谷古墳群

調査成果

遺跡の位置（Ⅰ-第１図およびⅡ-第１・６・21図）

調査対象地は、阿讃山脈南麓の隆起扇状地が中小河川の削刻により形成された、標高62～99mの尾根上に位置する。現況は山林である。

トレンチの設定（第１・２図）

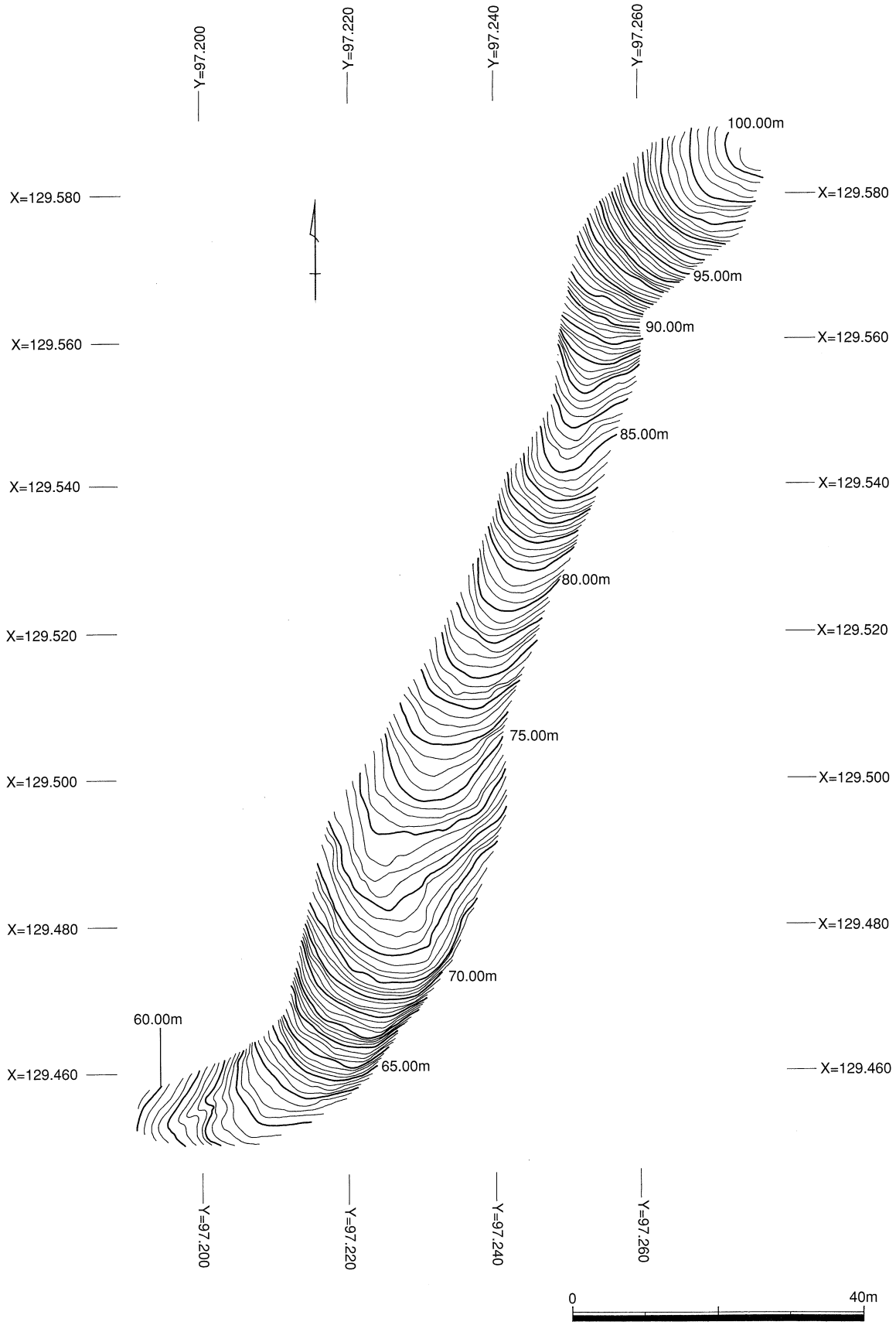
調査に際し、現況の地形測量を実施した。墳丘と思われる高まりを確認した後、試掘トレンチを設定し、掘削作業を行った。トレンチの設定については墳丘と思われる地点を中心に尾根筋に沿ってメイントレンチを設定し、それに直交するようにサブトレンチを設定した。試掘に際しては、調査対象面積の５％を基準としてトレンチを設定し、遺物包含層および無遺物自然堆積層までの層厚の確認と柱状断面図、断面写真の作成を基本方針とした。遺跡の有無の判定については調査対象面積の20％を上限とした。

基本層序（第３図）

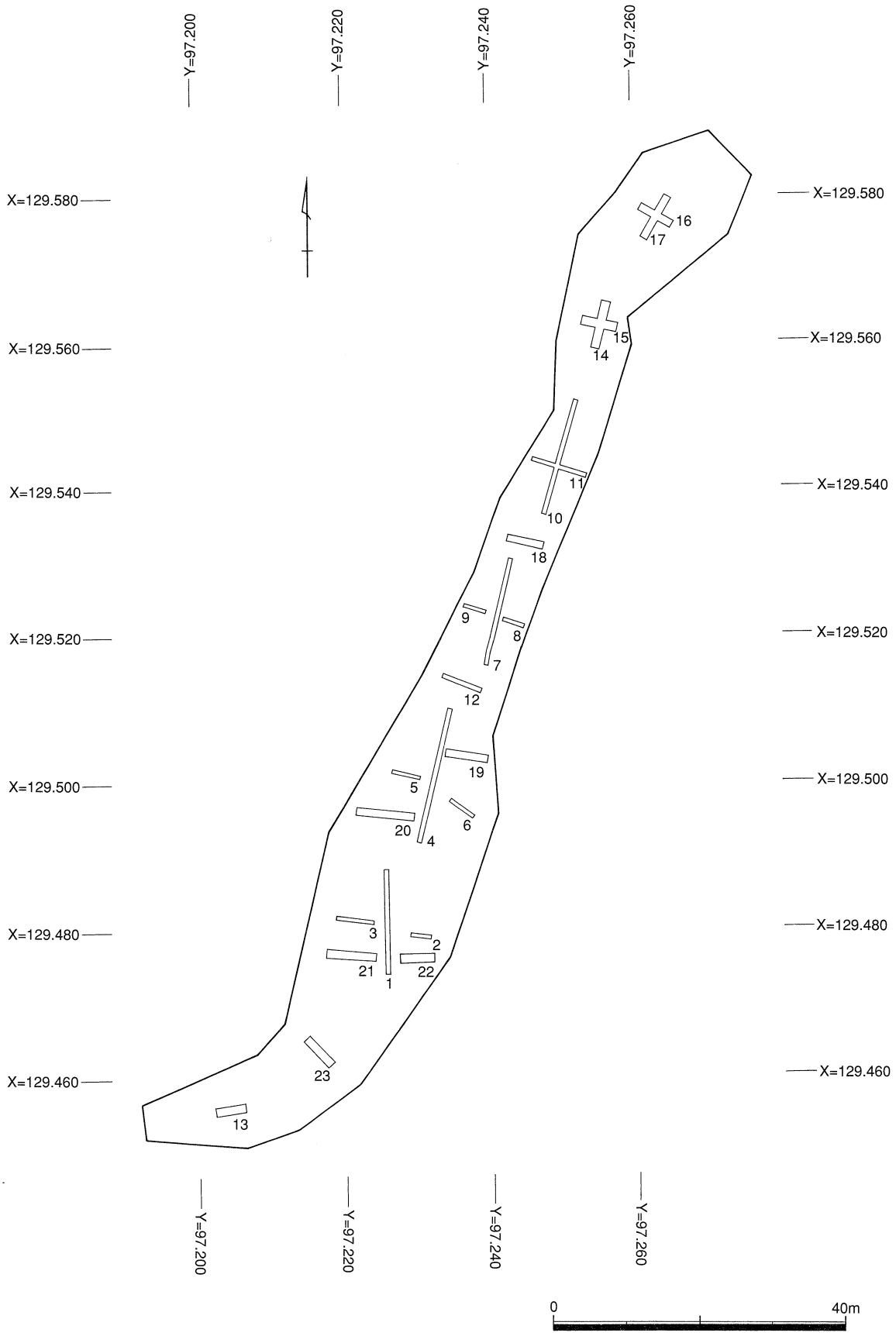
表土（腐葉土）直下は岩盤風化土、あるいは和泉層群起因の泥岩・砂岩の岩盤層となっており、安定した遺物包含層・遺構面は確認することができなかった。

まとめ

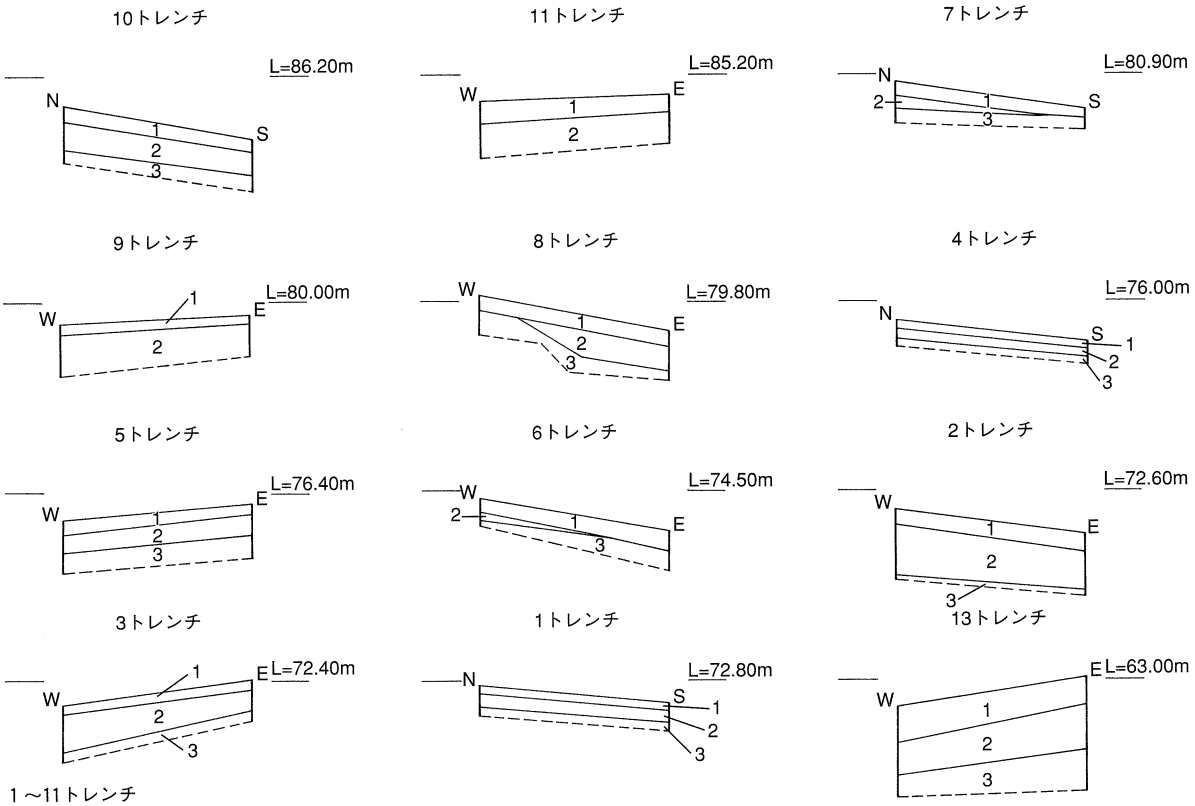
試掘に際し、平板地形測量を実施した。その結果を基にして、墳丘と思われる高まりを中心に尾根筋にメイントレンチを、それに直交するようにサブトレンチを設定し掘削を行った。地形測量から墳丘の存在が想定された高まりは、露頭していた岩脈に岩盤風化土が堆積しマウンド状の高まりを形成したものであった。ほとんどのトレンチにおいて、表土（腐葉土）の下は岩盤風化土及び和泉層群の砂質泥岩礫層の土層堆積状況はあり、遺構・遺物の出土はみられなかった。試掘結果から、調査区全域において遺構は存在しないと考えられ、本調査区域では試掘調査のみで終了した。しかし調査区外、南方の標高55m 前後の地点に径10m 程度の円墳と見られる高まりが存在している。


Y=97.200
Y=97.220
Y=97.240
Y=97.260
X=129.580
X=129.560
X=129.540
X=129.520
X=129.500
X=129.480
X=129.460
100.00m
95.00m
90.00m
85.00m
80.00m
75.00m
70.00m
65.00m
60.00m
0
40m

第１図　地形平面図


Y=97.200
Y=97.220
Y=97.240
Y=97.260
X=129.580
X=129.560
X=129.540
X=129.520
X=129.500
X=129.480
X=129.460
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
0
40m

第２図　トレンチ配置図



1～11トレンチ
1．黒褐色　10YR2/3　砂質土（表土・腐葉土。）
2．明黄褐色　10YR6/6　砂質土（岩盤風化土。やや粘性あり。ϕ＝3～5㎝程度の砂質泥岩の角礫を含む。地山・無遺物層。）
3．明黄褐色　10YR6/6　砂質土（岩盤・和泉層群の砂質泥岩礫層。ϕ＝10～30㎝程度の砂質泥岩の角礫を含む。地山・無遺物層。）

13トレンチ
1．黒褐色　10YR2/3　砂質土（表土・腐葉土。）
2．にぶい黄褐色　10YR5/3　砂質土（岩盤風化土。やや粘性あり。ϕ＝2～5㎝程度の砂質泥岩の角礫を含む。地山・無遺物層。1トレンチ2層対応。）
3．にぶい黄褐色　10YR5/4　砂質土（岩盤・和泉層群の砂質泥岩礫層。ϕ＝10～30㎝程度の砂質泥岩の角礫を含む。地山・無遺物層。1トレンチ3層対応。）

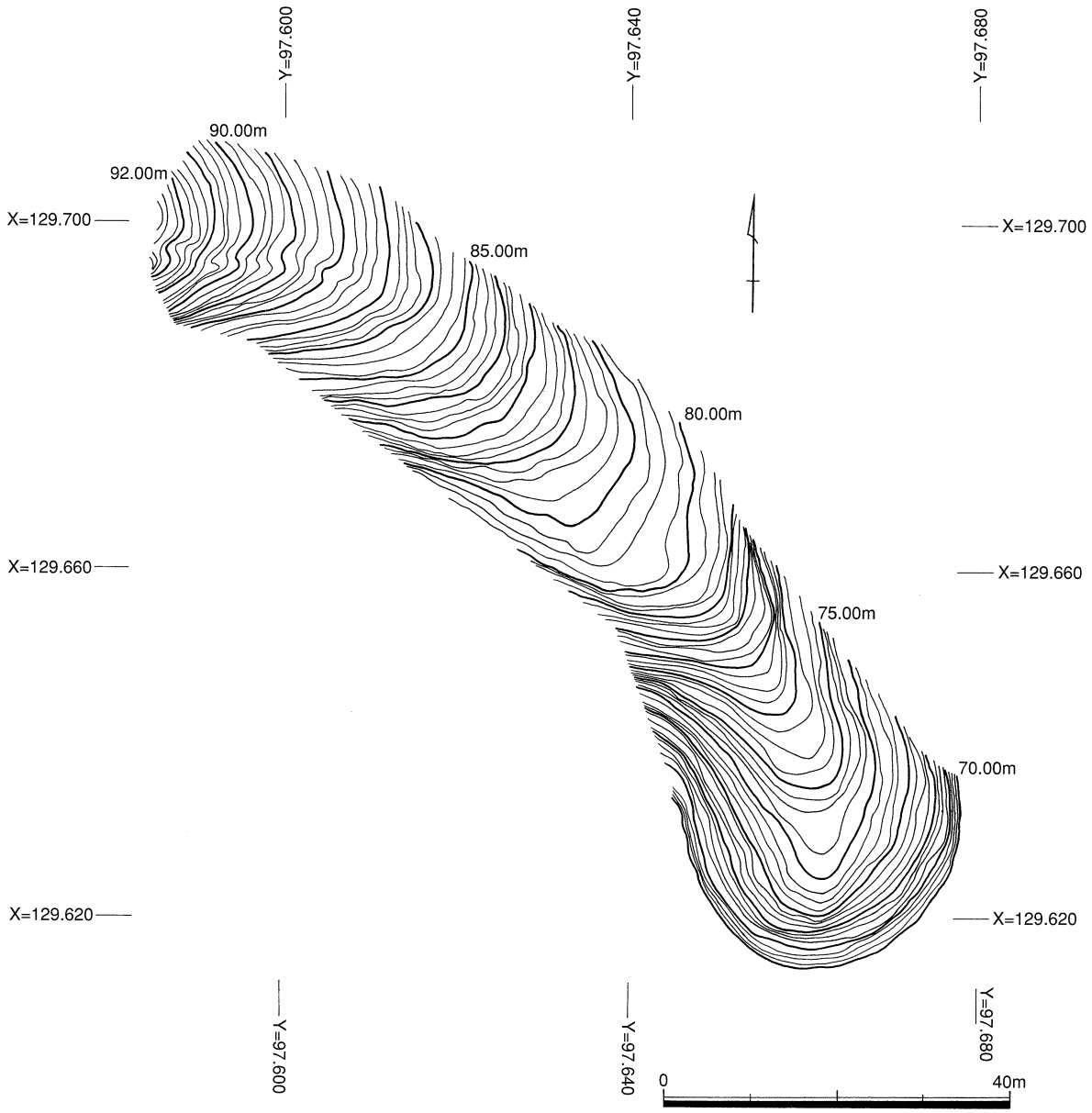
第3図　模式柱状土層図

21　小森宮尾神社古墳群

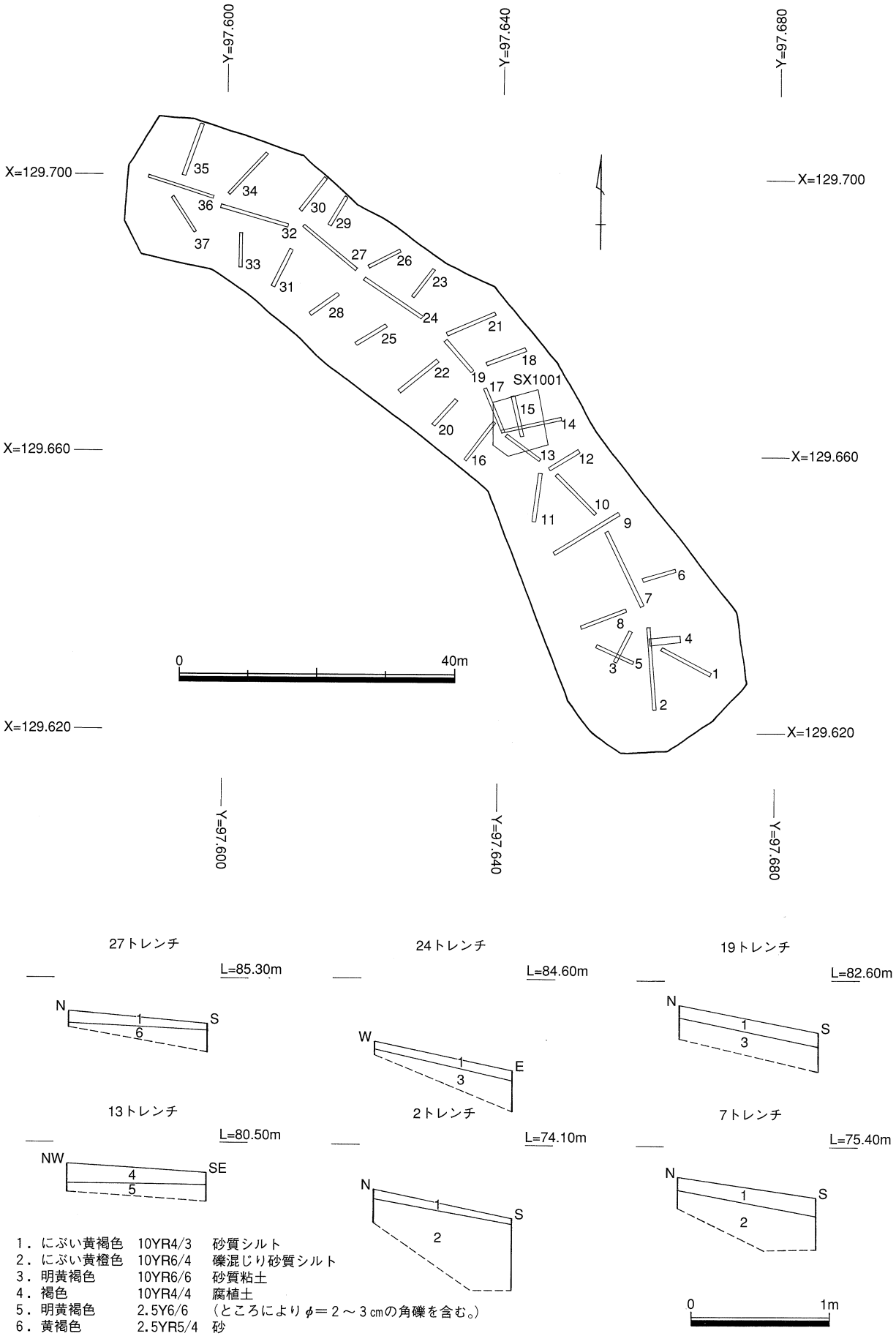
調査成果

遺跡の位置（Ⅰ-第１図およびⅡ-第１・６・22図）

調査対象地は、阿讃山脈南麓の尾根上、標高約70～91mの斜面上に位置する。斜面の南端は中央構造線による断層崖となっている。現況は山林である。



第１図　地形平面図



第2図　トレンチ配置・模式柱状土層図

トレンチの設定（第１・２図）

調査に際し、現況の地形測量を実施した。墳丘と思われる高まりを確認した後、試掘トレンチを設定し、掘削作業を行った。トレンチの設定については墳丘と思われる地点を中心に尾根筋に沿ってメイントレンチを設定し、それに直交するようにサブトレンチを設定した。試掘に際しては、調査対象面積の５％を基準としてトレンチを設定し、遺物包含層および無遺物自然堆積層までの層厚の確認と柱状断面図、断面写真の作成を基本方針とした。遺跡の有無の判定については調査対象面積の20％を上限とした。

基本層序（第２図）

表土（腐植土）直下は岩盤風化土、あるいは和泉層群起因の泥岩・砂岩の岩盤層となっており、安定した遺物包含層・遺構面は確認することができなかった。

まとめ

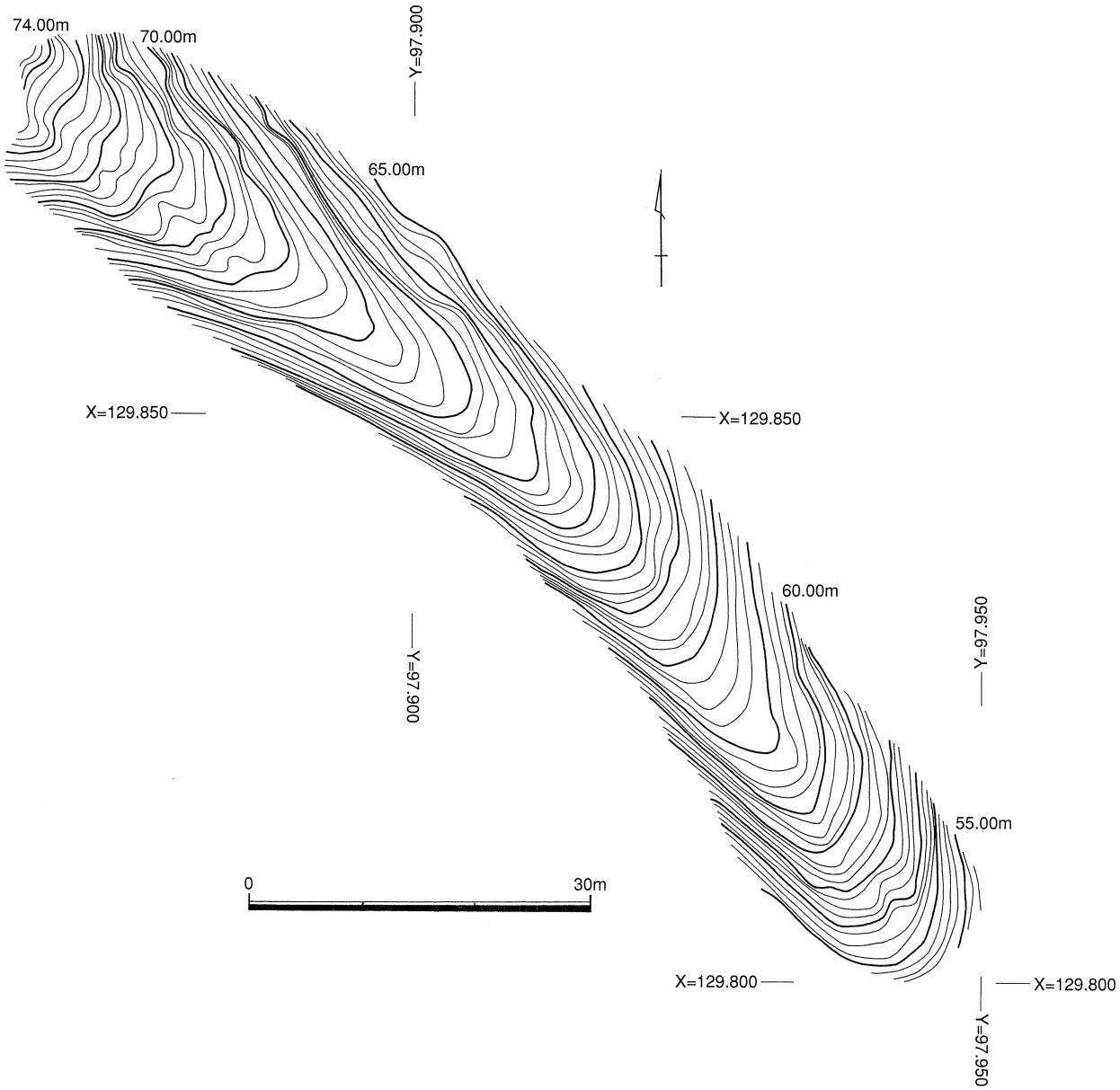
試掘に際し地形測量を実施し、その結果を基に37基のトレンチを設定し掘削を行った。いずれのトレンチも表土（腐植土）直下は岩盤もしくは岩盤風化土であり、堆積も10～30数cmと非常に浅く、遺構・遺物共に全く検出できなかった。調査区中央部の窪地には砂層・粘土層があるが、級化が見られ水中で堆積したと考えられ、池状になっていたと思われる。この窪地からも遺構・遺物共に検出されなかった。試掘の結果、調査区全域において遺構は存在しないと考えられ、本調査区域では試掘調査のみで終了した。

22　宮ヶ谷古墳群

調査成果

遺跡の位置（Ⅰ-第１図およびⅡ-第１・６・22図）

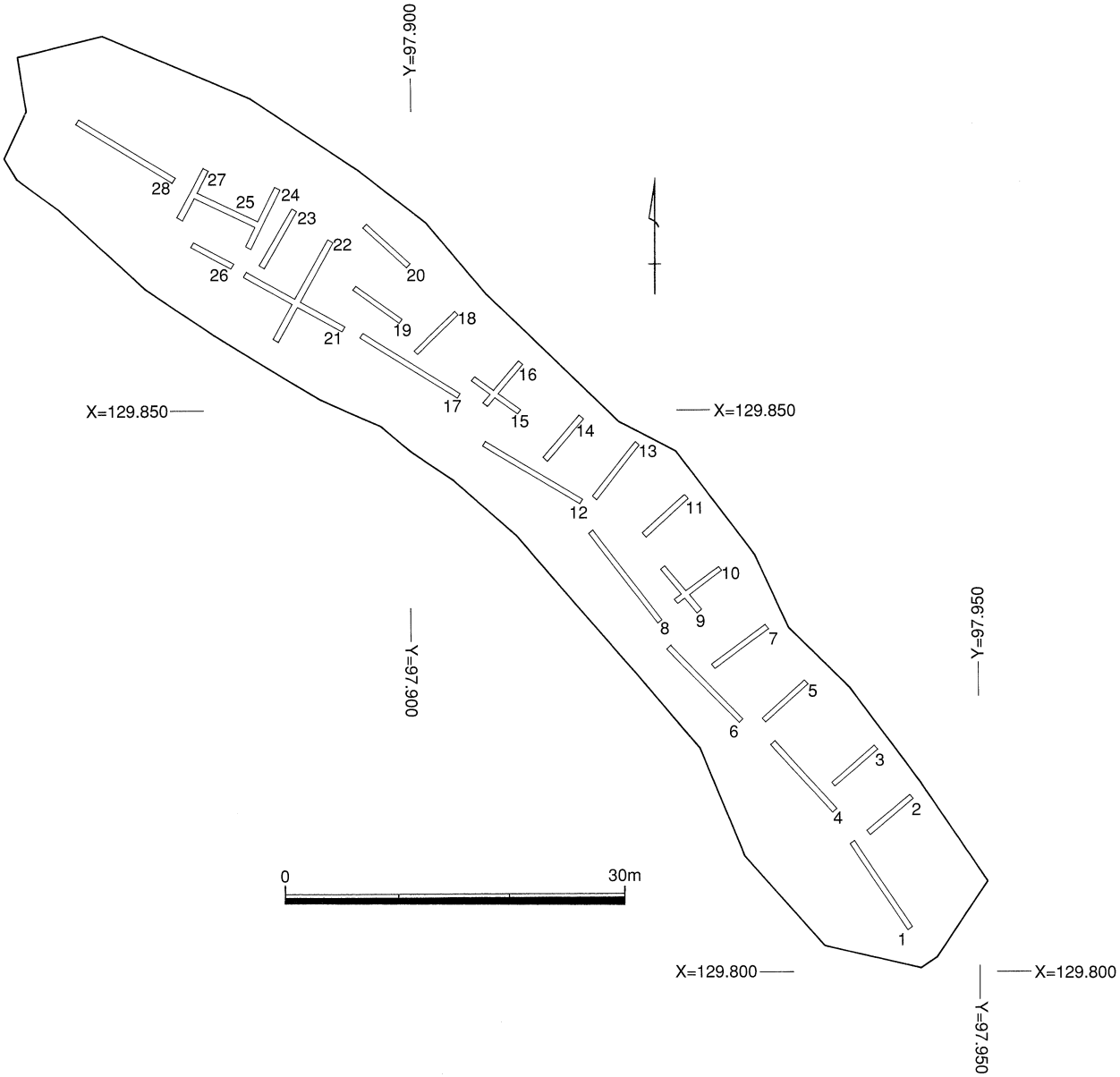
調査対象地は、阿讃山脈南麓、標高約55～75mの尾根上の斜面に位置する。斜面の南端は中央構造線による断層崖となっている。現況は山林である。



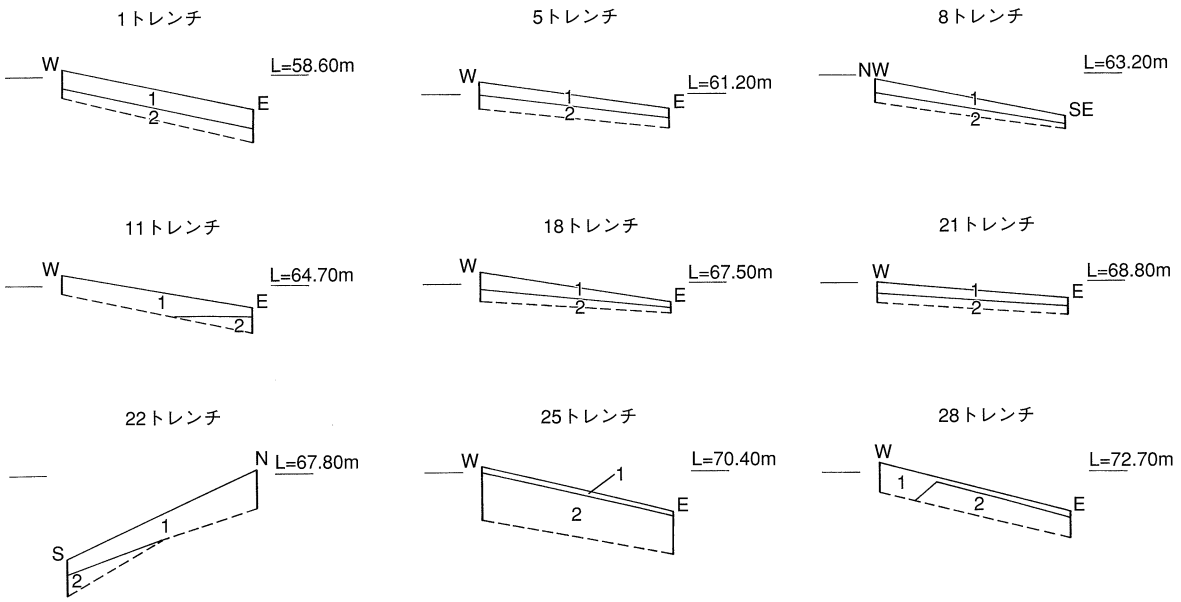
第１図　地形平面図

トレンチの設定（第１・２図）

調査に際し、現況の地形測量を実施した。墳丘と思われる高まりを確認した後、試掘トレンチを設定し、掘削作業を行った。トレンチの設定については墳丘と思われる地点を中心に尾根筋に沿ってメイントレンチを設定し、それに直交するようにサブトレンチを設定した。試掘に際しては、調査対象面積の５％を基準としてトレンチを設定し、遺物包含層および無遺物自然堆積層までの層厚の確認と柱状断面図、断面写真の作成を基本方針とした。遺跡の有無の判定については調査対象面積の20％を上限とした。



第２図　トレンチ配置図



1．暗褐色　10YR3/4　砂質シルト
（腐植土。遺物含まない。）
2．にぶい黄褐色　10YR5/4　砂質シルト
（しまり粘性なし。岩盤の風化土。遺物含まない。）

0　1m

第３図　模式柱状土層図

基本層序（第３図）

表土（腐植土）直下は岩盤風化土、あるいは和泉層群起因の泥岩・砂岩の岩盤層となっており、安定した遺物包含層・遺構面は確認することができなかった。

まとめ

試掘に際し地形測量を実施し、その結果を基に28基のトレンチを設定し掘削を行った。いずれのトレンチも表土（腐植土）直下は岩盤もしくは岩盤風化土であり、遺構・遺物共に全く検出できなかった。19トレンチには焼土がみられたが、明確な遺構・遺物は検出されなかった。試掘の結果、調査区全域において遺構は存在しないと考えられ、本調査区域では試掘調査のみで終了した。

23　大代谷遺跡

調査成果

遺跡の位置（Ⅰ-第１図およびⅡ-第１・６・23図）

調査対象地は、大代谷川左岸の標高９ｍ前後の低位河岸段丘上に位置する。現況は果樹園（梨畑）である。

トレンチの設定（第１図）

斜面に直交するかたちでトレンチを設定した。試掘に際しては、調査対象面積の５％を基準としてトレンチを設定し、遺物包含層および無遺物自然堆積層までの層厚の確認と柱状断面図、断面写真の作成を基本方針とした。遺跡の有無の判定については調査対象面積の20％を上限とした。

基本層序（第１図）

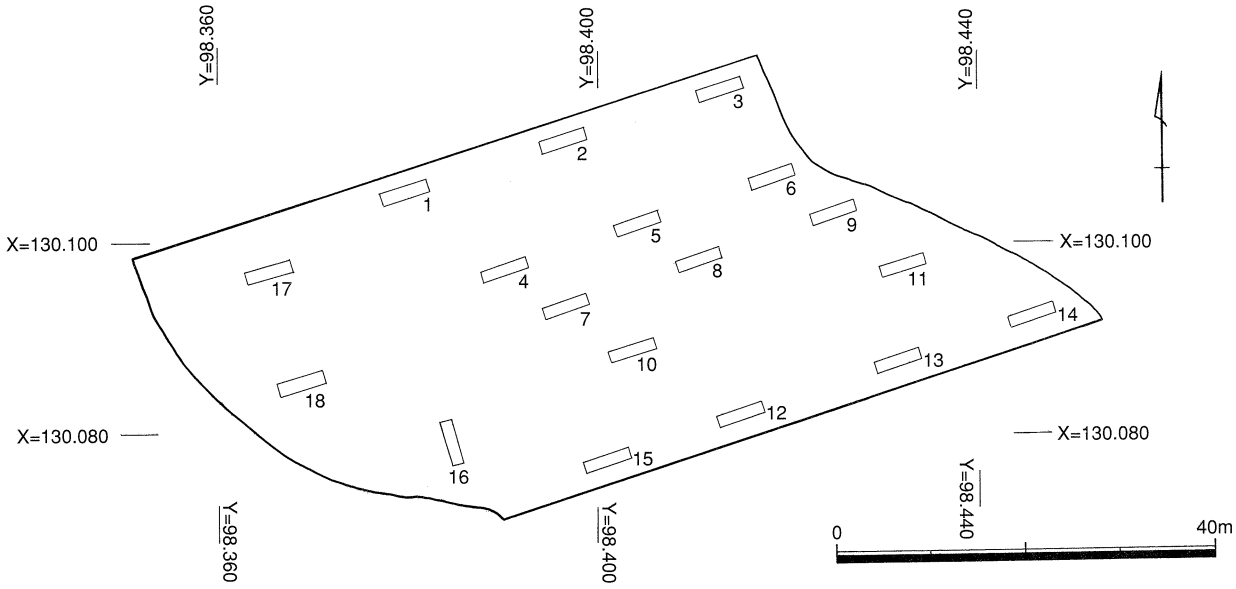
調査地点は尾根裾部の谷状地形にあたり、大代谷川によって形成された自然堤防上の微高地にあたる。表土以下は粘質土および砂礫あるいは砂が厚く堆積している状況が確認された。現在の地形は谷状地形が埋没して形成されたものと思われる。また耕作地開墾による削平あるいは客土等の改変も著しく、安定した遺物包含層・遺構面は確認することができなかった。

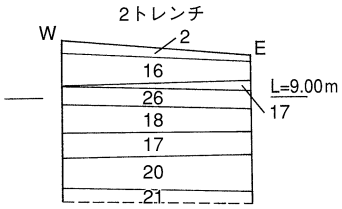
出土遺物（第２図）

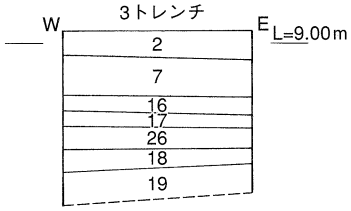
１は土師質土器皿、２は鍋である。３は平瓦である。４は大谷焼の徳利で外面に文字が線刻されている。小片のため詳細な時期決定は困難であるが、これらの出土遺物や周辺の環境などから、中世以降のものと考えられる。

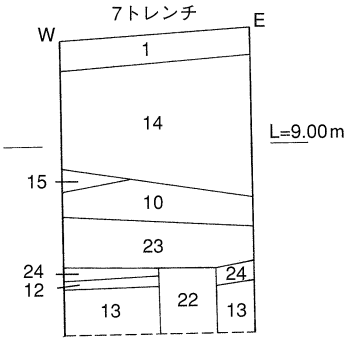
まとめ

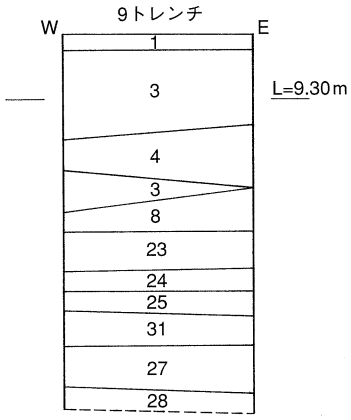
18基のトレンチを開口した。７トレンチより明治期のものと思われる暗渠が検出されたが、それ以外の遺構は確認できなかった。出土遺物もすべて小片で流れ込みによるものと考えられ、原位置を遊離しているものと思われる。当初は戦国期に所在したとされる大代谷城関連の遺構・遺物の出土が想定されたが、試掘の結果、調査区全域において遺構は存在しないと考えられる。よって本調査区域では試掘調査のみで終了した。

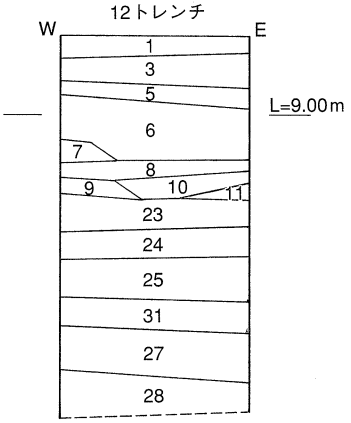


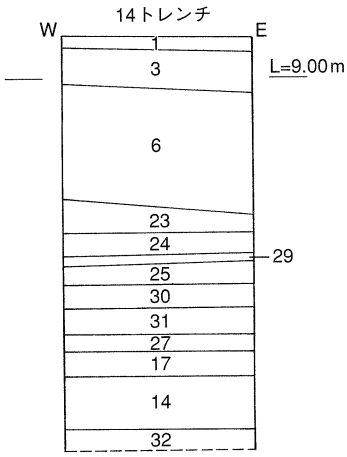








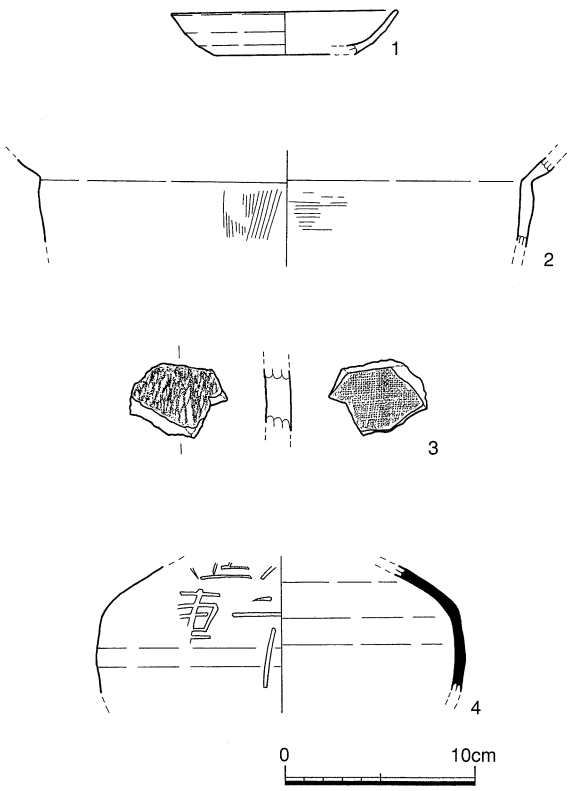




1．黒褐色　10YR2/3　砂質土（しまり不良。やや粘性あり。炭化物・マンガン粒少量含む。表土。）
2．灰黄褐色　10YR4/2　砂質土（しまり不良。やや粘性あり。炭化物・マンガン粒若干含む。盛土。）
3．灰黄褐色　10YR6/2　粘土　（しまり良。粘性強い。炭化物・マンガン粒若干含む。盛土。）
4．灰黄褐色　10YR5/2　砂質土（しまり良。やや粘性あり。炭化物・マンガン粒若干含む。盛土。）
5．暗褐色　10YR3/4　砂質土（しまり不良。粘性弱い。炭化物・マンガン粒若干含む。盛土。）
6．にぶい黄色　2.5Y6/4　砂質土（しまり良。やや粘性あり。炭化物・マンガン粒若干含む。盛土。）
7．オリーブ褐色　2.5Y4/3　砂質土（しまり不良。やや粘性あり。炭化物・マンガン粒若干含む。盛土。）
8．オリーブ褐色　2.5Y4/4　砂質土（しまり不良。砂性強い。炭化物・マンガン粒若干含む。盛土。）
9．暗オリーブ褐色　2.5Y3/3　砂質土（しまり不良。粘性弱い。炭化物・マンガン粒若干含む。盛土。）
10．オリーブ褐色　2.5Y4/6　砂質土（しまり不良。砂性強い。炭化物・マンガン粒若干含む。盛土。）
11．黒褐色　2.5Y3/2　砂質土（しまり不良。やや粘性あり。炭化物・マンガン粒若干含む。盛土。）
12．黄褐色　2.5Y5/6　砂質土（しまり良。やや粘性あり。炭化物・マンガン粒若干含む。）
13．暗灰黄色　2.5Y5/2　砂質土（しまり不良。粘性弱い。炭化物・マンガン粒若干含む。）
14．灰黄色　2.5Y6/2　砂質土（しまり不良。やや粘性あり。炭化物・マンガン粒若干含む。盛土。）
15．明黄褐色　2.5Y6/6　砂質土（しまり不良。粘性弱い。炭化物・マンガン粒若干含む。盛土。）
16．暗灰黄色　2.5Y4/2　砂質土（しまり良。やや粘性あり。炭化物・マンガン粒若干含む。盛土。）
17．黄褐色　2.5Y5/3　砂質土（しまり良。やや粘性あり。炭化物・マンガン粒若干含む。）
18．暗灰黄色　2.5Y5/2　砂質土（しまり良。粘性弱い。炭化物・マンガン粒若干含む。）
19．黄褐色　2.5Y5/6　砂質土（しまり不良。砂性弱い。炭化物・マンガン粒若干含む。）
20．黄灰色　2.5Y4/1　砂質土（しまり不良。粘性弱い。炭化物・マンガン粒若干含む。）
21．黄灰色　2.5Y5/1　砂質土（しまり不良。粘性弱い。炭化物・マンガン粒若干含む。）
22．暗灰黄色　2.5Y4/2　砂質土（しまり不良。やや粘性あり。炭化物・マンガン粒若干含む。板材含む。
φ=10cm程度の石含む。明治期の暗渠。四方を薄い板で囲み φ=20～25cm程度の礫を詰め込んでいる。）
23．暗灰黄色　2.5Y4/2　砂質土（しまり良。粘性強い。炭化物・マンガン粒若干含む。遺物包含層。）
24．黄褐色　2.5Y5/4　砂質土（しまり良。やや粘性あり。炭化物・マンガン粒若干含む。）
25．にぶい黄色　2.5Y6/4　砂質土（しまり良。粘性強い。炭化物・マンガン粒若干含む。）
26．黄褐色　2.5Y5/4　砂質土（しまり良。粘性強い。炭化物・マンガン粒若干含む。）
27．黄褐色　2.5Y5/4　砂質土（しまり不良。やや粘性あり。炭化物・マンガン粒若干含む。）
28．灰黄色　2.5Y6/2　砂質土（しまり不良。やや粘性あり。炭化物・マンガン粒若干含む。）
29．黄褐色　10YR5/6　砂質土（しまり良。やや粘性あり。炭化物・マンガン粒若干含む。）
30．明黄褐色　2.5Y6/6　砂質土（しまり良。粘性強い。炭化物・マンガン粒若干含む。）
31．黄褐色　2.5Y5/4　砂質土（しまり不良。粘性強い。炭化物・マンガン粒若干含む。）
32．黄灰色　2.5Y5/1　砂質土（しまり不良。やや粘性あり。炭化物・マンガン粒若干含む。）

0　1m

第1図　トレンチ配置・模式柱状土層図



第２図　出土遺物

大代谷遺跡　土器観察表
包含層

報告書掲載番号	遺構	出土地点	層位	器種	残存率	口径(cm)	体部最大径(cm)	底径(cm)	頸部(脚柱)径(cm)	器高・残存高(cm)	その他の法量(cm)	部位	形態	調整	含有物組成	色調	備考
1	No.6トレンチ			土師質土器皿	口縁部1/5	12.0				2.3		口縁～体部	体部外上方へ内彎しながら短く立ち上がり、端部を丸く収める。	外面：ナデ。 内面：ナデ。	石英・雲母	外面：浅黄橙 内面：浅黄橙	焼成良好。
2	No.6トレンチ			土師質土器鍋	頸部1/26				25.8	4.7		頸部	体部外上方へ直線的に立ち上がり、口縁部で外反する。	外面：口縁部ナデ。体部ハケ（5条／cm）。 内面：ナデ。	石英・雲母・赤色斑粒	外面：浅黄橙 内面：浅黄橙	焼成やや不良。
3	No.6トレンチ			平瓦	破片						縦3.9 横5.1 厚さ1.3	不明		外面：縄席文。 内面：布目痕。	石英	外面：にぶい橙 内面：灰白	焼成やや不良。
4	No.4トレンチ			大谷焼徳利	体部1/8		19.4			6.6		体部	体部内彎しながら立ち上がり、肩部で内側に屈曲し、口頸部に延びる。	外面：ロクロナデ。 内面：ロクロナデ。	緻密	釉：グレイみのブラウン 胎：赤褐	焼成良好。

24　東口古墳群

調査成果

遺跡の位置（Ⅰ-第１図およびⅡ-第１・６・23図）

調査対象地は、阿讃山脈南麓の標高約48～50mの尾根上に位置する。現況は山林である。

トレンチの設定（第１図）

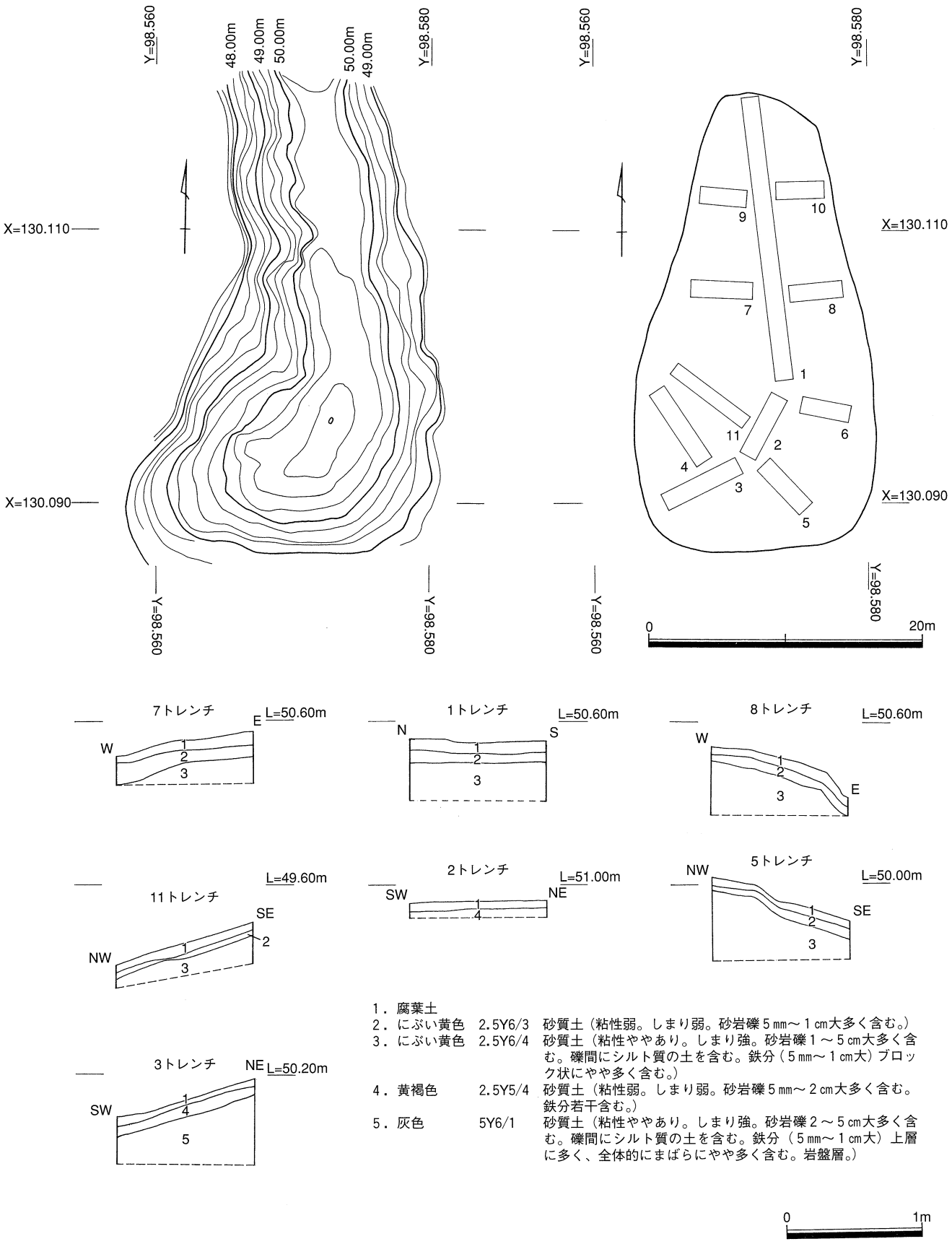
調査に際し、現況の地形測量を実施した。墳丘と思われる高まりを確認した後、試掘トレンチを設定し、掘削作業を行った。トレンチの設定については墳丘と思われる地点を中心に尾根筋に沿ってメイントレンチを設定し、それに直交するようにサブトレンチを設定した。試掘に際しては、調査対象面積の５％を基準としてトレンチを設定し、遺物包含層および無遺物自然堆積層までの層厚の確認と柱状断面図、断面写真の作成を基本方針とした。遺跡の有無の判定については調査対象面積の20％を上限とした。

基本層序（第１図）

表土（腐葉土）直下は岩盤風化土、あるいは和泉層群起因の泥岩・砂岩の岩盤層となっており、安定した遺物包含層・遺構面は確認することができなかった。

まとめ

調査に際し平板地形測量を行い、その結果を基に11基のトレンチを設定して試掘を実施した。いずれのトレンチも表土（腐葉土）の直下は岩盤もしくは岩盤風化土であり、遺構・遺物共に全く検出できなかった。墳丘状の高まりの部分も岩盤風化土の堆積による自然地形であることが確認された。試掘の結果、調査区全域において遺構は存在しないと考えられるため、本調査区域では試掘調査のみで終了した。



第1図　地形平面・トレンチ配置・模式柱状土層図

25　日開谷東古墳群

調査成果

遺跡の位置（Ⅰ-第１図およびⅡ-第１・６・24図）

調査対象地は、阿讃山脈南麓の標高25～40mの尾根上に位置する。現況は山林である。

トレンチの設定（第１・２図）

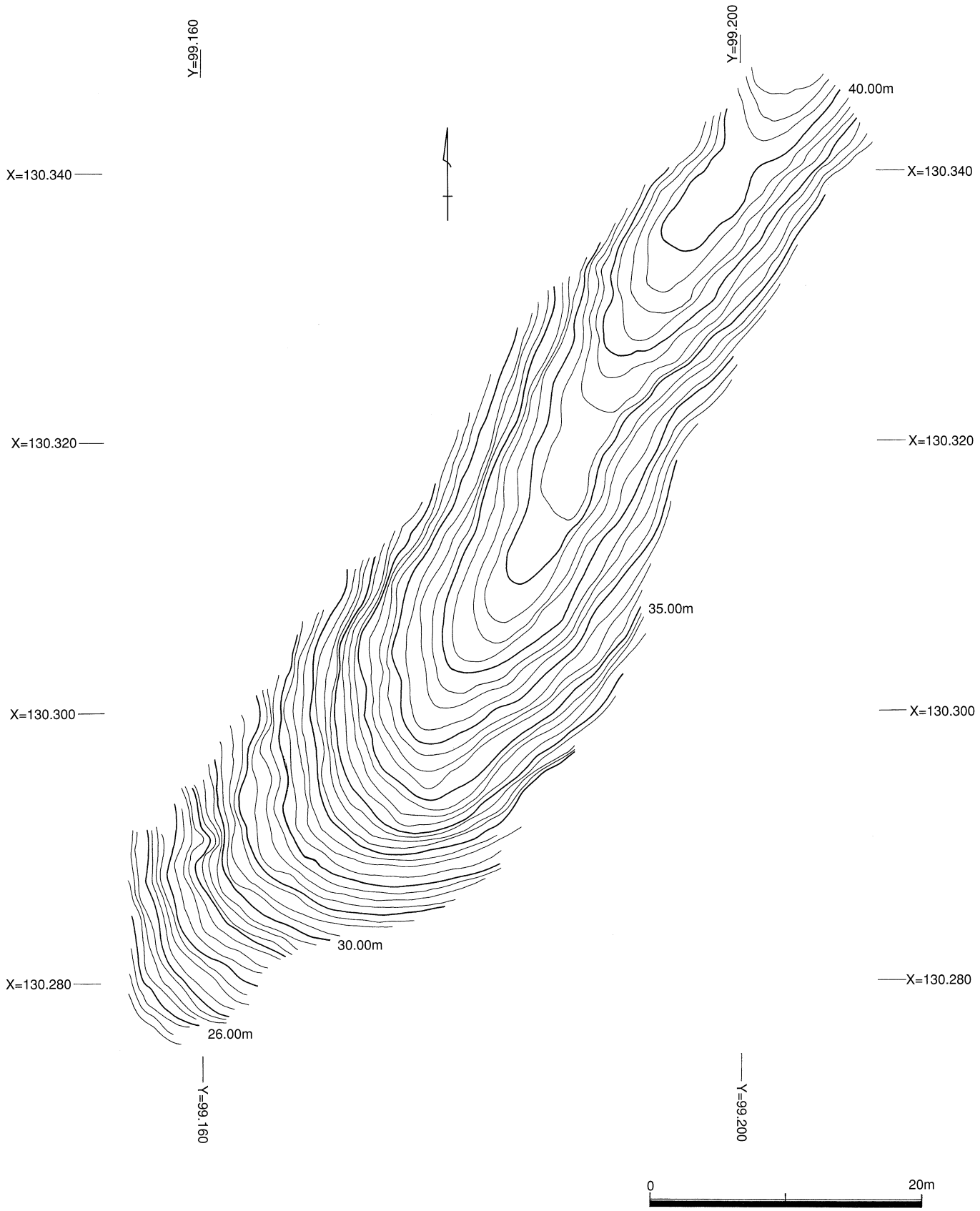
調査に際し、現況の地形測量を実施した。墳丘と思われる高まりを確認した後、試掘トレンチを設定し、掘削作業を行った。トレンチの設定については墳丘と思われる地点を中心に尾根筋に沿ってメイントレンチを設定し、それに直交するようにサブトレンチを設定した。試掘に際しては、調査対象面積の５％を基準としてトレンチを設定し、遺物包含層および無遺物自然堆積層までの層厚の確認と柱状断面図、断面写真の作成を基本方針とした。遺跡の有無の判定については調査対象面積の20％を上限とした。

基本層序（第３図）

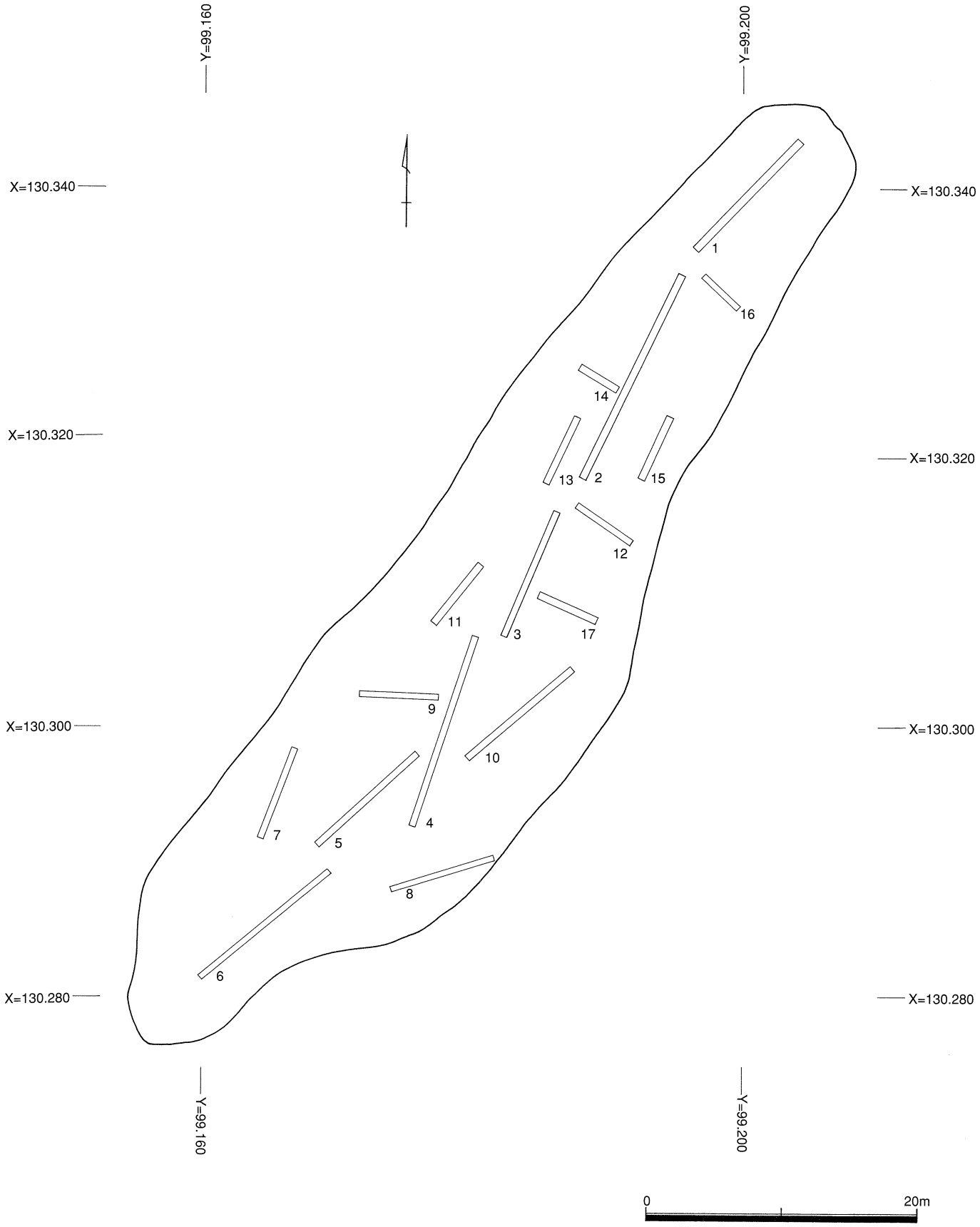
表土（腐植土）直下は岩盤風化土、あるいは和泉層群起因の泥岩・砂岩の岩盤層となっており、安定した遺物包含層・遺構面は確認することができなかった。

まとめ

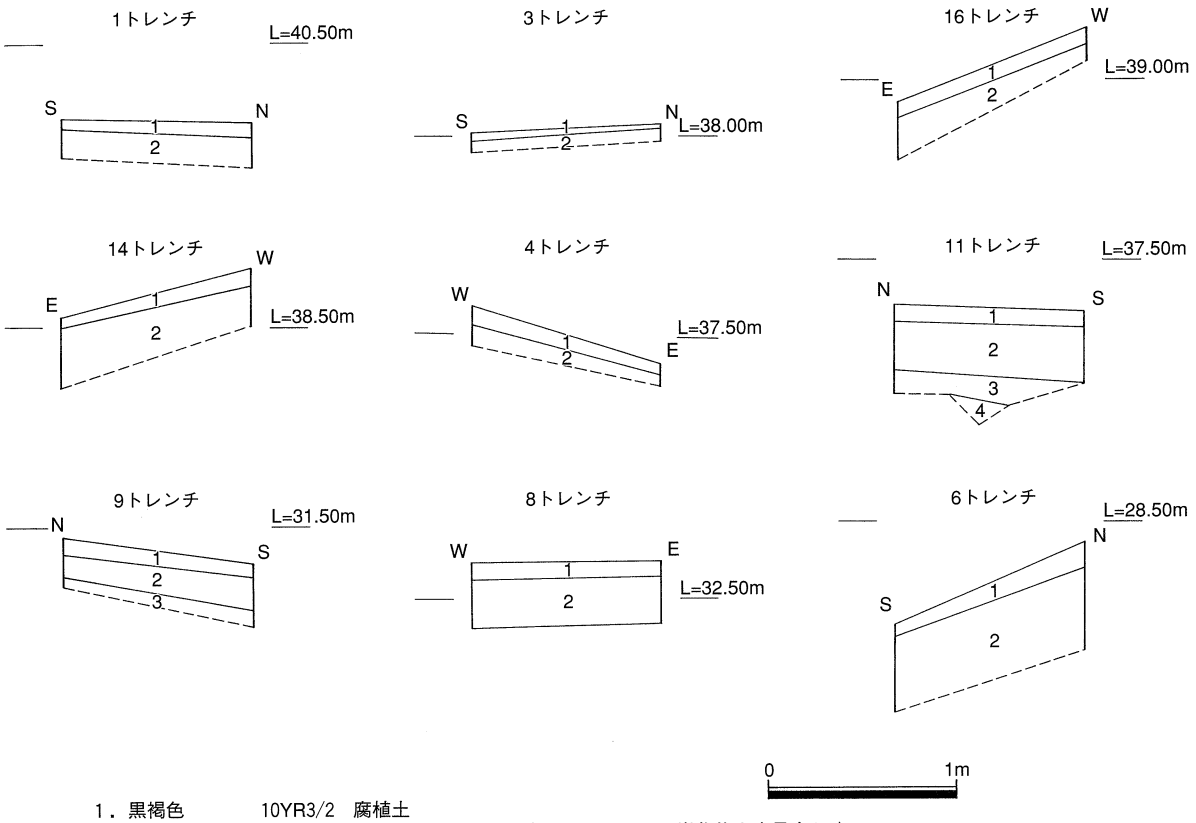
調査に際し平板地形測量を行い、その結果を基に17基のトレンチを開口した。いずれのトレンチも表土（腐植土）の直下は岩盤もしくは岩盤風化土であり、遺構・遺物共に全く検出できなかった。試掘の結果、調査区全域において遺構は存在しないと考えられる。よって本調査区域では試掘調査のみで終了した。


Y=99.160
Y=99.200
40.00m
X=130.340
X=130.340
X=130.320
X=130.320
35.00m
X=130.300
X=130.300
30.00m
X=130.280
X=130.280
26.00m
Y=99.160
Y=99.200
0
20m

第１図　地形平面図


Y=99.160
Y=99.200
X=130.340
X=130.320
X=130.300
X=130.280
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
0
20m

第２図　トレンチ配置図



1．黒褐色　10YR3/2　腐植土
2．にぶい黄褐色　10YR5/4　砂質土（しまりやや有り。1～3㎝の炭化物を少量含む。）
3．にぶい黄橙色　10YR6/4　砂質土（しまりやや有り。5㎜程の炭化物・赤色炭化物を少量含む。）
4．にぶい黄橙色　10YR6/4　砂質土（しまり有り。1㎝程の炭化物を少量含む。）

第3図　模式柱状土層図

26　原山古墳群

調査成果

遺跡の位置（Ⅰ-第１図およびⅡ-第１・６・24図）

調査対象地は、阿讃山脈南麓の標高約44～60mの尾根上に位置する。現況は山林である。

トレンチの設定（第１図）

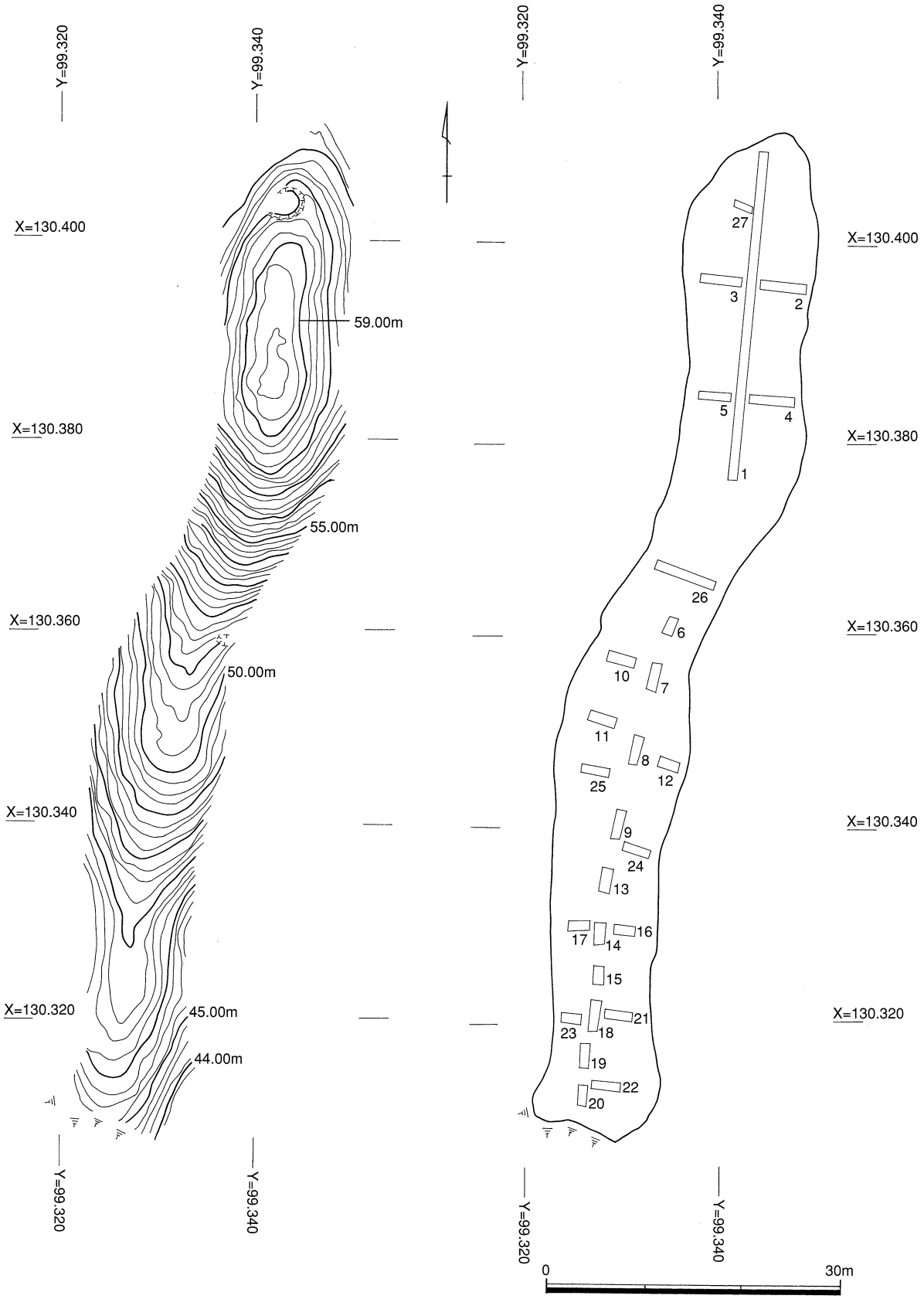
調査に際し、現況の地形測量を実施した。墳丘と思われる高まりを確認した後、試掘トレンチを設定し、掘削作業を行った。トレンチの設定については墳丘と思われる地点を中心に尾根筋に沿ってメイントレンチを設定し、それに直交するようにサブトレンチを設定した。試掘に際しては、調査対象面積の５％を基準としてトレンチを設定し、遺物包含層および無遺物自然堆積層までの層厚の確認と柱状断面図、断面写真の作成を基本方針とした。遺跡の有無の判定については調査対象面積の20％を上限とした。

基本層序（第２図）

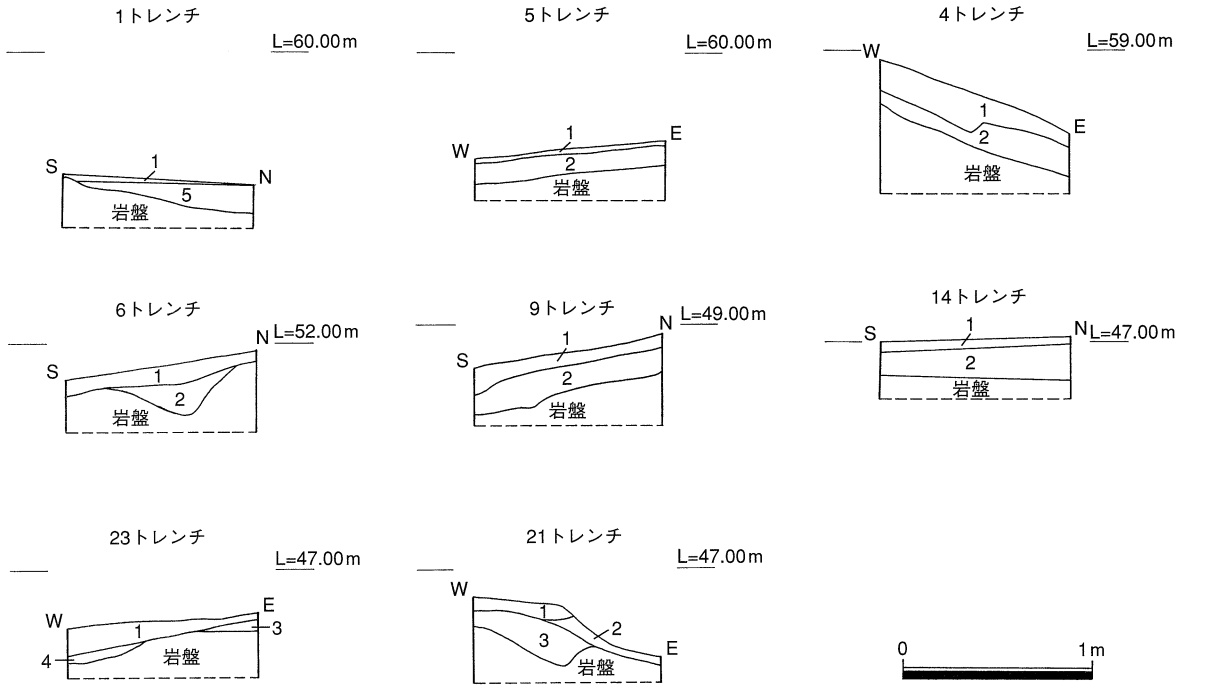
表土（腐葉土）直下は岩盤風化土、あるいは和泉層群起因の泥岩・砂岩の岩盤層となっており、安定した遺物包含層・遺構面は確認することができなかった。

まとめ

27基のトレンチを開口した。地形測量の結果、調査地の北部には前方後円墳状の地形が確認されたが、試掘トレンチの結果、いずれも表土（腐葉土）下は岩盤もしくは岩盤風化土であり、遺構・遺物共に全く検出できず、尾根の浸食による自然地形であることが確認された。調査区全域において遺構は存在しないと考えられるため、本調査区域では試掘調査のみで終了した。



第１図　地形平面・トレンチ配置図



1．暗灰黄色　2.5Y4/2　砂質土（しまりやや弱い。表土。）
2．にぶい黄色　2.5Y6/3　砂質土（しまりやや弱い。）
3．黄褐色　2.5Y5/3　砂質土（しまりやや弱い。）
4．浅黄色　2.5Y7/4　砂質土（しまり弱い。）
5．灰オリーブ色　5Y5/3　砂質土（しまりやや弱い。）

第２図　模式柱状土層図

Ⅳ　中谷山古墳群（Ⅰ）

例　　言

1　本章は四国横断自動車道建設に伴う中谷山古墳群（Ⅰ）の発掘調査報告書である。

2　所在地　板野郡板野町川端字中谷山20-1他

調査対象面積　10,000m²

試掘面積　168m²

本調査面積　225m²

3　発掘調査期間及び報告書作成の実施期間は次の通りである。

発掘調査期間　平成10年１月５日～平成10年３月31日（試掘）

平成10年４月１日～平成10年５月31日（本掘）

報告書作成期間　平成14年４月１日～平成15年３月31日

4　遺物番号・挿図番号・図版番号は通し番号とした。遺物番号は本文・挿図・表・図版と一致する。

5　本遺跡の地理的・歴史的環境については、「Ⅱ　調査地点の立地と環境」を参照されたい。

1　調査の経過

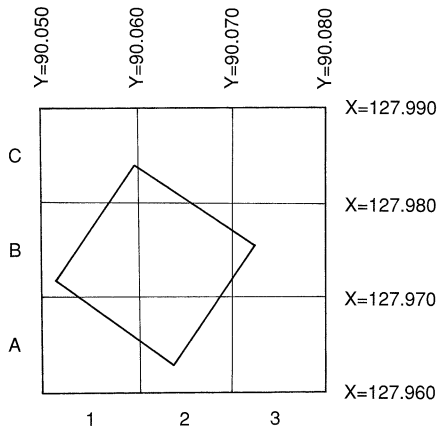
（1）調査の経過

中谷山古墳群（Ⅰ）は阿讃山脈南麓の板野郡の東部に位置する板野町川端に所在し、以前から古墳群が密集する地域として周知されていた。事前の分布調査の際にも阿讃山脈から張り出す尾根上に古墳の存在する可能性が指摘されていた。したがって分布調査で推定された遺跡の範囲の内1,765㎡を調査対象面積として平成９年度に試掘調査を実施した。当該地域では無墳丘の箱式石棺が点在しており、その分布状況の把握や調査に要する期間の算定は困難であるため、調査対象地全域の立木伐採を前提にした試掘調査や全面調査が必要と考えられた。中谷山古墳は横断自動車道建設に伴う最初の古墳調査であり、JHの要請もふまえて、効率的かつ効果的な調査手法を検討するため、地下レーダー探査の有効性と試掘調査結果との整合性を試行した。地下レーダー探査の有効性は、かつて徳島市矢野遺跡の銅鐸埋納坑周辺で実施し、竪穴住居跡の分布について実証済みであった。今回は電磁波が斜角に入った頁岩層に反応することが多く、地質条件等から効果的でないと判断した。したがって、当該事業では調査対象地を全面伐採し、試掘調査を実施することを決定した。

地形測量時において、直径８ｍ、高さ50㎝程度の古墳状隆起が北西地点で確認された。地下レーダー探査では微弱な反射像がみられた地点である。試掘の結果をふまえ、この地点を対象に225㎡の範囲を対象に本調査へ移行した。本調査は平成10年５月31日に終了した。

（2）発掘調査の方法（第１図）

調査を始めるにあたり、グリッドの配置に際しては、発掘統一基準にならい、第Ⅳ系国土座標を基準とし、５ｍメッシュを１グリッドとして調査対象地を包み込む形で設定した。南西隅を基準として北にＡ・Ｂ・Ｃ…、東に１・２・３…の順に記号・番号をふり、その組み合わせで各グリッド名を表すこととした。遺構記号・番号は検出時に順次決定した。



第１図　グリッド配置図

（3）調査日誌抄

中谷山古墳群（Ⅰ）調査日誌抄

1998年

4月1日　調査準備。

4月7日　図面作成。遺構検出。遺構精査。

4月17日　遺構掘削。図面作成。

5月1日　遺構掘削。石列除去。完掘写真。

5月8日　図面整理。

5月12日　埋め戻し。等高線測量。

2　調査成果

（1）遺跡の位置（Ⅰ-第1図およびⅡ-第1・3・11図）

調査対象地点は、阿讃山脈南麓の隆起扇状地が中小河川の浸食により形成された標高59～62mの尾根上に位置する。現況は山林となっている。

（2）基本層序（第2・3・4図）

トレンチ配置状況と土層堆積状況

調査に際し、現況の地形測量および地下レーダー探査を実施した。墳丘と思われる高まりを確認した後、地下レーダー探査の成果もふまえて試掘トレンチを設定し、掘削作業を行った。トレンチの設定については墳丘と思われる地点を中心に尾根筋に沿ってメイントレンチを設定し、それに直交するようにサブトレンチを設定した。試掘の結果、横穴式石室を1基確認したため、225m²の範囲を対象に本調査へ移行した。

土層堆積状況は各トレンチとも類似しており、基本層序は以下の通りほぼ対応する。

1．…黒褐色 10YR2/3 砂質土（表土、腐植土。）

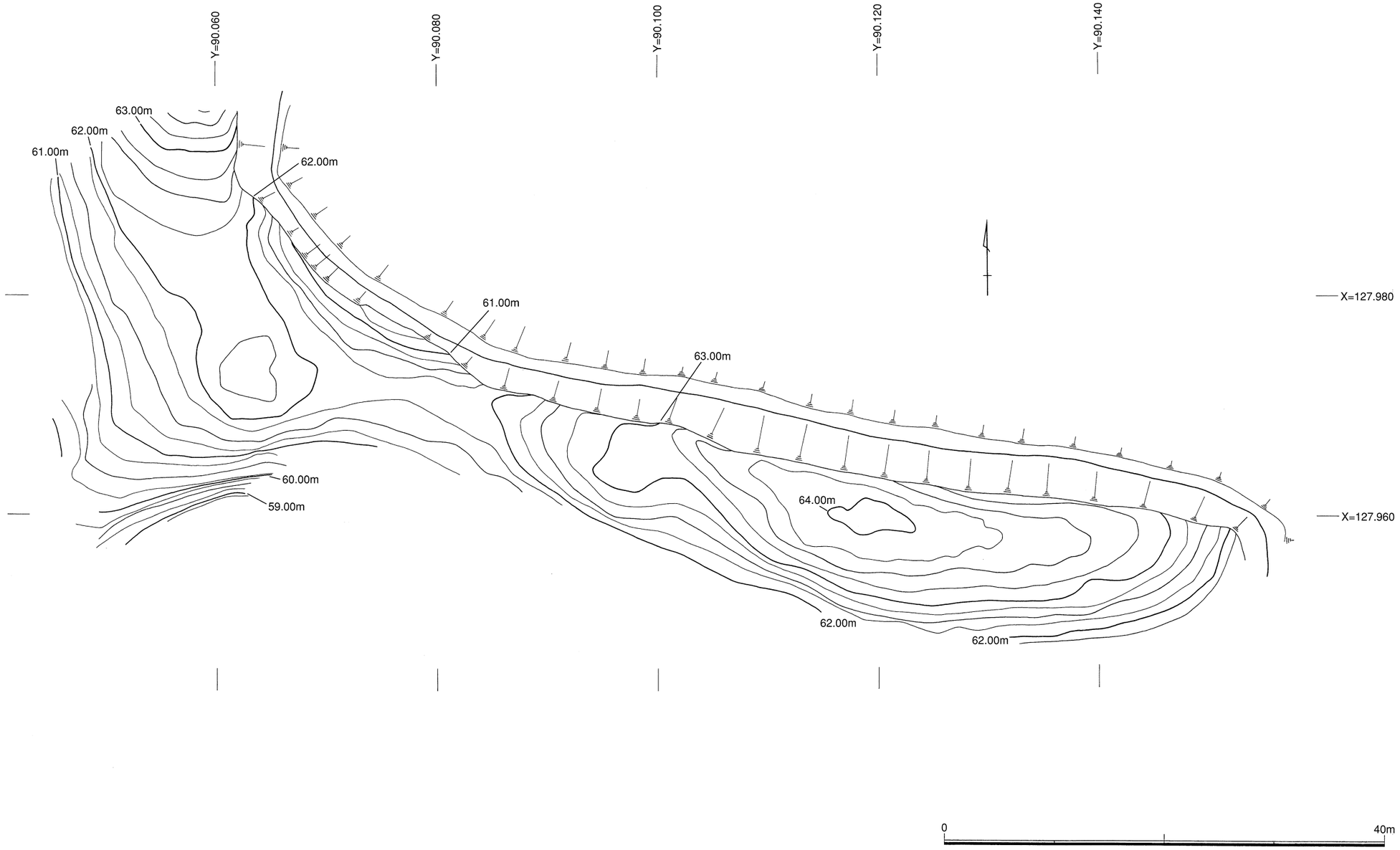
2．…にぶい黄褐色 10YR6/4 砂質土（やや砂性強い。しまり弱い。）

3．…明黄褐色 10YR6/6 砂質土（しまり弱い。）

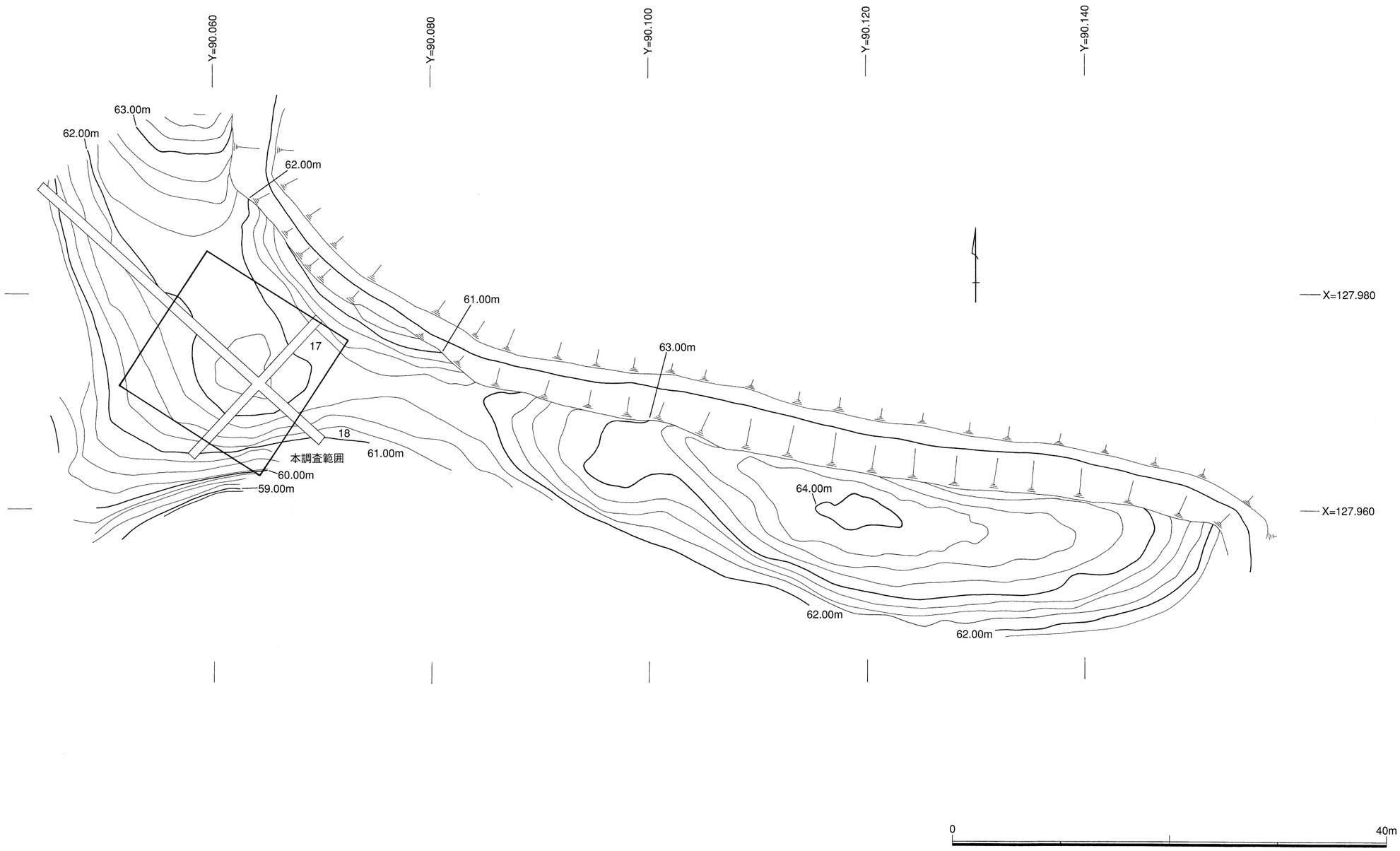
4．…にぶい黄褐色 10YR5/4 砂質土（やや粘性強い。ややしまり強い。）

5．…明黄褐色 10YR5/6 砂質土（ややしまり強い。古墳盛土の可能性あり。）

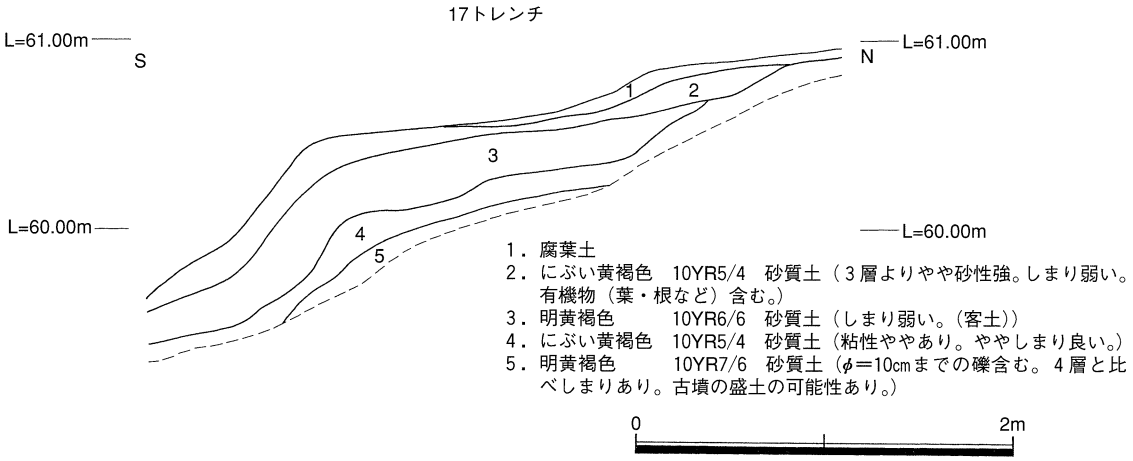
6．…明黄褐色 10YR6/8 粘性砂質土（岩盤風化土、ϕ＝3～5㎝程度の礫を含む。部分的に灰黄褐色 10YR6/3 粘土が混じる。）


Y=90.060
Y=90.080
Y=90.100
Y=90.120
Y=90.140
X=127.980
X=127.960
63.00m
62.00m
61.00m
62.00m
61.00m
63.00m
60.00m
59.00m
64.00m
62.00m
62.00m
0
40m

第２図　地形平面図



第３図　トレンチ配置図・本調査範囲



第4図　トレンチ土層断面図

（3）遺構と遺物

出土遺構（第5図）

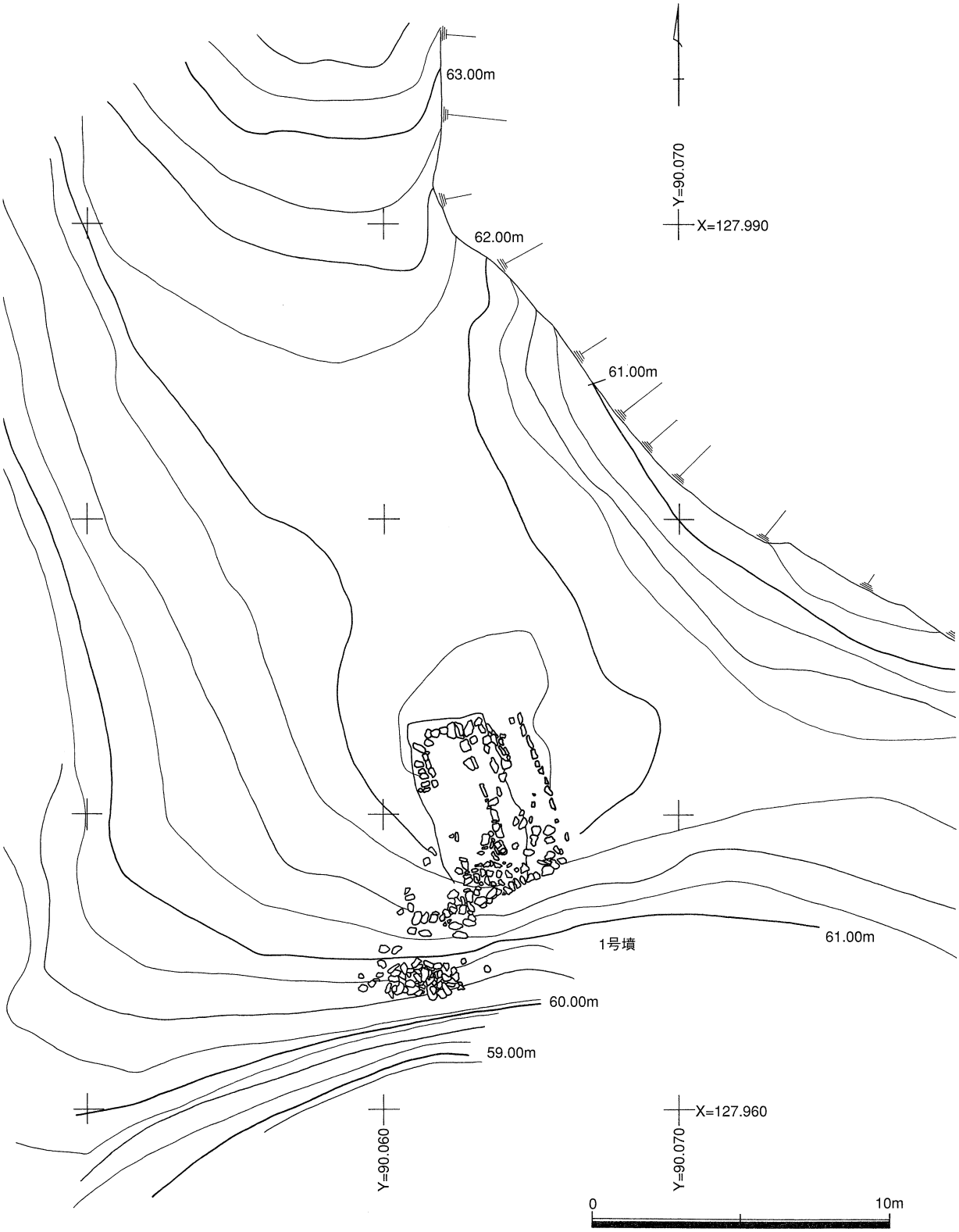
表土直下に横穴式石室を主体部とする古墳を1基確認した。地形測量時において径8m、高さ50cm程度の古墳状隆起が北西地点で確認され、地下レーダー探査では微弱な反射像がみられた地点である。

SM1001（1号墳）（第6・7・8図）

横穴式石室を主体部とする。砂岩を用いた横穴式石室の基底部一段が検出され、主軸方向はN-18°-Eで南に開口する。玄室部は床面まで攪乱が及んでおり、西側壁の遺存状況は悪いが、両袖式で羨道部が「ハ」字形に開く。石室は全長5.6mで、玄室長3.6m、幅1.2mである。玄門部は幅0.8m、開口部幅1.8mで右袖石は立石状に据えられていた。羨道部には敷石をとどめ、玄室奥壁はわずかに隅丸を呈している。墳丘は削平されて残存していないが、東西6m、南北5mに外護列石の1ないし2段の基底が遺存しており、北および西側の2辺は不明であるが、一辺6mの方墳であったと考えられる。南辺は羨道の端部から左右に延びた外護列石を形成しており、斜面に沿って貼石状に構築する。羨道端部は列石により閉塞しており、垂直に積み上げている。さらに南辺では外方に4個の砂岩の角礫を、階段状に積み上げた列石が残っており、2段の外護列石が形成されていたことが確認される。

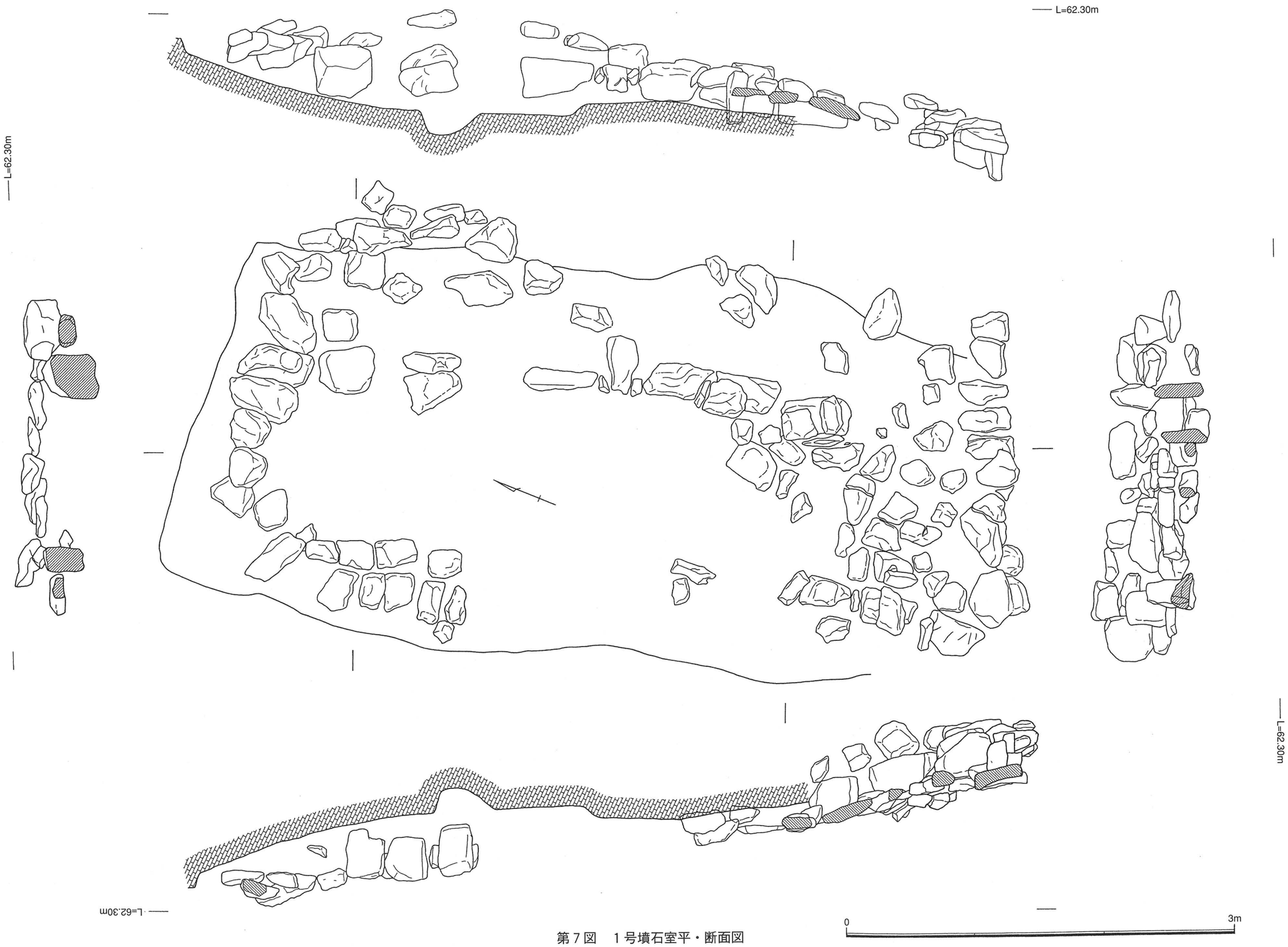
出土遺物（第9図）

平成9年度の試掘調査において須恵器の小片が僅かに出土しているが、本掘では遺物の出土は皆無である。1は杯蓋、2・3は甕の一部と思われるが、詳細な形状・時期の決定は困難である。

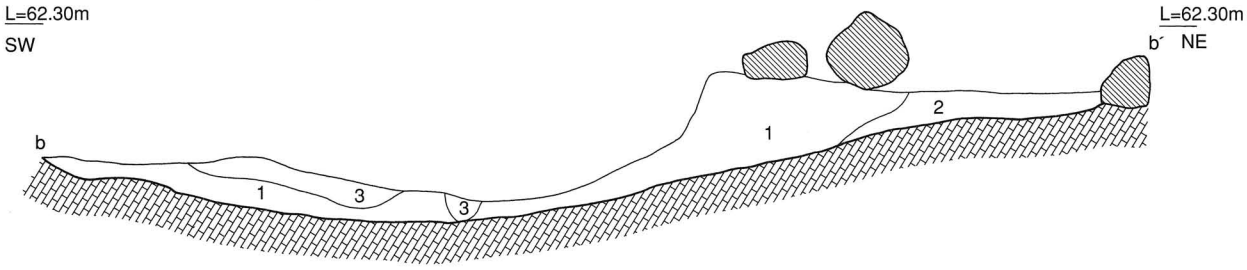

63.00m
62.00m
61.00m
Y=90.070
X=127.990
1号墳
61.00m
60.00m
59.00m
X=127.960
Y=90.060
Y=90.070
0
10m

第５図　遺構配置図

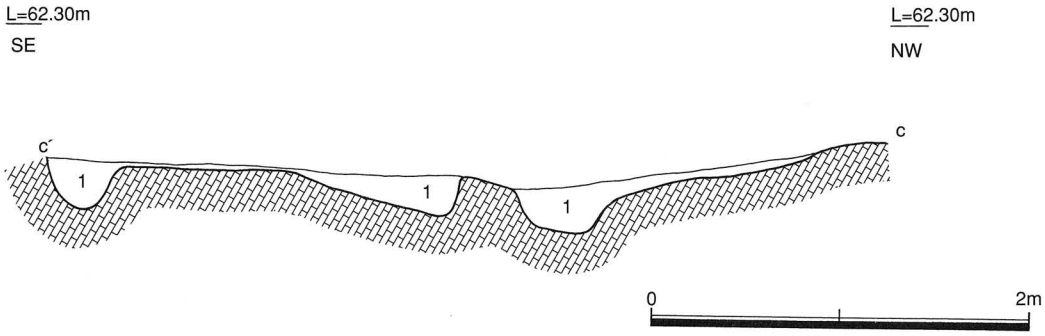
第６図　１号墳主体部平・断面図



第７図　１号墳石室平・断面図

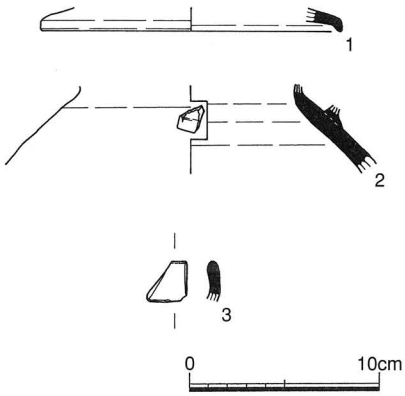


1．明黄褐色　10YR6/6　砂質土（粘性ややあり。しまりなし。φ＝5㎝までの礫を含む。）
2．明黄褐色　10YR6/6　砂質土（粘性なし。しまりややあり。※自然層）
3．にぶい黄色　2.5Y6/4　砂質土（粘性なし。しまりあり。炭化物を多く含む。）



1．にぶい黄色　2.5Y6/4　砂質土
（粘性なし。しまりあり。炭化物を多く含む。）

第８図　１号墳主体部土層断面図



第９図　包含層出土遺物

（４）まとめ

詳細な時期決定のできうる出土遺物はないが、主体部の構築・形態などから、本遺跡の築造年代は７世紀前半と考えられる。

中谷山古墳群（Ⅰ）
第１表　出土遺構一覧表
SM

遺構名	グリッド	墳丘形態	墳丘規模	墓壙平面形態	墓壙断面形態	墓壙長軸（m）	墓壙短軸（m）	墓壙深度（m）	石室長軸（m）	石室短軸（m）	石室深度（m）	玄室長（m）	羨道長軸（m）	羨道短軸（m）	主軸方向	備　　考
SM1001	A-1･2	方墳	一辺６ｍ程度。	長方形	Ｄ字状（浅い台形状）	6.0	3.0	0.6	5.6	1.2	0.4	3.6	2.0	玄門部の巾 0.8 南端の巾 1.8	N-18°-E	石室の外側に長軸６ｍ、短軸５ｍの列石が直交。 横穴式石室。

第２表　出土遺物観察表
包含層（土器）

報告書掲載番号	遺　構	出土地点	層　位	器　種	残存率	口　径（cm）	体　部最大径（cm）	底　径（cm）	頸部（脚柱）径（cm）	器高・残存高（cm）	その他の法量（cm）	部位	形　　態	調　　整	含有物組　成	色　調	備　考
1		北側斜面	２層（腐葉土含む）	須恵器蓋	口縁部 1/16	15.8	16.0			1.3		口縁部	扁平な器形で、口縁端部を尖り気味に収める。	外面：ナデ。 内面：ナデ。	石英・長石	外面：灰白 内面：灰	焼成良好。
2		南斜面集石西横	腐植土下20cm	須恵器甕	頸部 1/10				11.7	4.7		頸部	外面突起貼り付け。	外面：ナデ。 内面：ナデ。	石英	外面：灰白 内面：灰白	焼成良好。断面に自然釉有り。
3		北側斜面	２層	須恵器甕	破片						縦2.1 横2.05 厚さ0.5	口縁部		外面：ナデ。 内面：ナデ。	石英	外面：灰 内面：灰	焼成良好。

V　川端奥郷遺跡

例　　言

1　本章は四国横断自動車道建設に伴う川端奥郷遺跡の発掘調査報告書である。

2　所在地　板野郡板野町川端字馬越38-1他

調査対象面積　21,850㎡

試掘面積　1,455㎡

本調査面積　400㎡

3　発掘調査期間及び報告書作成の実施期間は次の通りである。

発掘調査期間　平成11年１月１日～平成11年３月31日（試掘）

平成11年５月１日～平成11年６月30日（本掘）

報告書作成期間　平成14年４月１日～平成15年３月31日

4　遺構番号、挿図番号、図版番号は通し番号とした。遺物番号は本文・挿図・表・図版と一致する。

5　本遺跡の地理的・歴史的環境については、「Ⅱ　調査地点の立地と環境」を参照されたい。

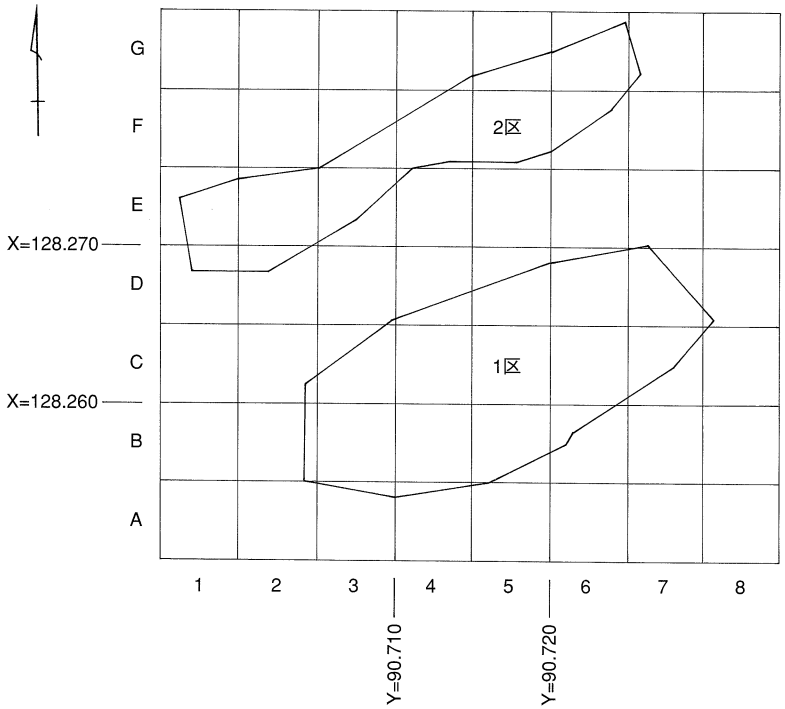
1　調査の経過

（1）調査の経過

川端奥郷遺跡は阿讃山脈南麓裾の三方を尾根に囲まれた平野部（谷）の板野郡板野町川端地区に位置する。調査地点周辺は、谷口山古墳や阿王塚古墳等の古墳群が密集する地域として周知されていた。事前の分布調査の際にも阿讃山脈から張り出す尾根上に古墳の存在する可能性が指摘されていた。したがって分布調査で推定された遺跡の範囲の内21,850㎡を調査対象面積として試掘調査を実施した。試掘調査は平成10年度および平成11年度にかけて試掘の承諾可能な地区より順次、重機および人力掘削によるトレンチ調査を計1,455㎡実施した。試掘の結果、調査対象地東端の尾根裾部において須恵器片や土師器片などを集中的に含む層が確認されたため、遺物包含の分布状況の把握も含め、400㎡の範囲を対象に本調査へ移行した。本調査は平成11年６月30日に終了した。

（2）発掘調査の方法（第１図）

調査を始めるにあたり、グリッドの配置に際しては、発掘統一基準にならい、第Ⅳ系国土座標を基準とし、５ｍメッシュを１グリッドとして調査対象地を包み込む形で設定した。南西隅を基準として北にA・B・C…、東に１・２・３…の順に記号・番号をふり、その組み合わせで各グリッド名を表すこととした。遺構記号・番号は検出時に順次決定することとした。



第１図　グリッド配置図

（3）調査日誌抄

1999年

5月6日　調査準備。

5月7日　機械掘削開始。表土除去。

5月12日　試掘トレンチ配置図作成。

5月26日　機械埋め戻し完了。作業終了。

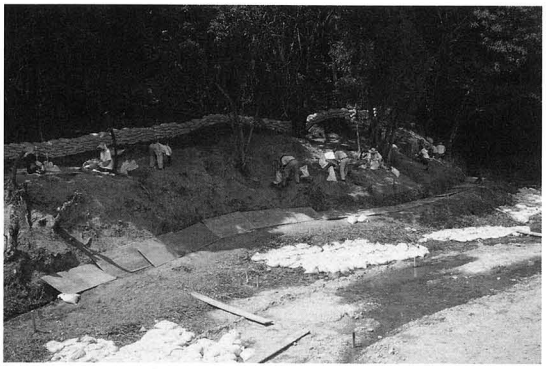
6月1日　調査準備。

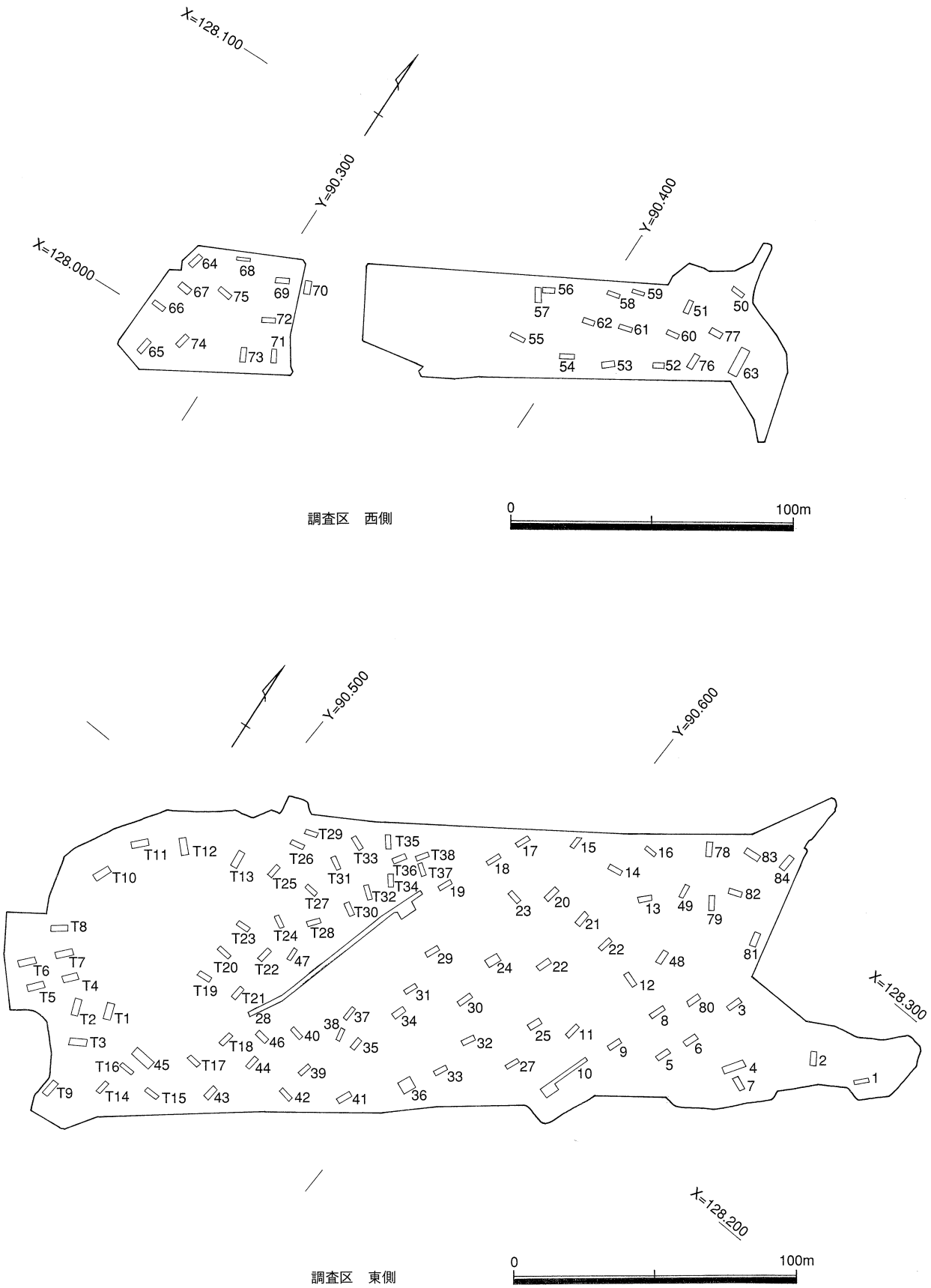
6月2日　グリッド設定。尾根部地形測量。

6月8日　表土除去。

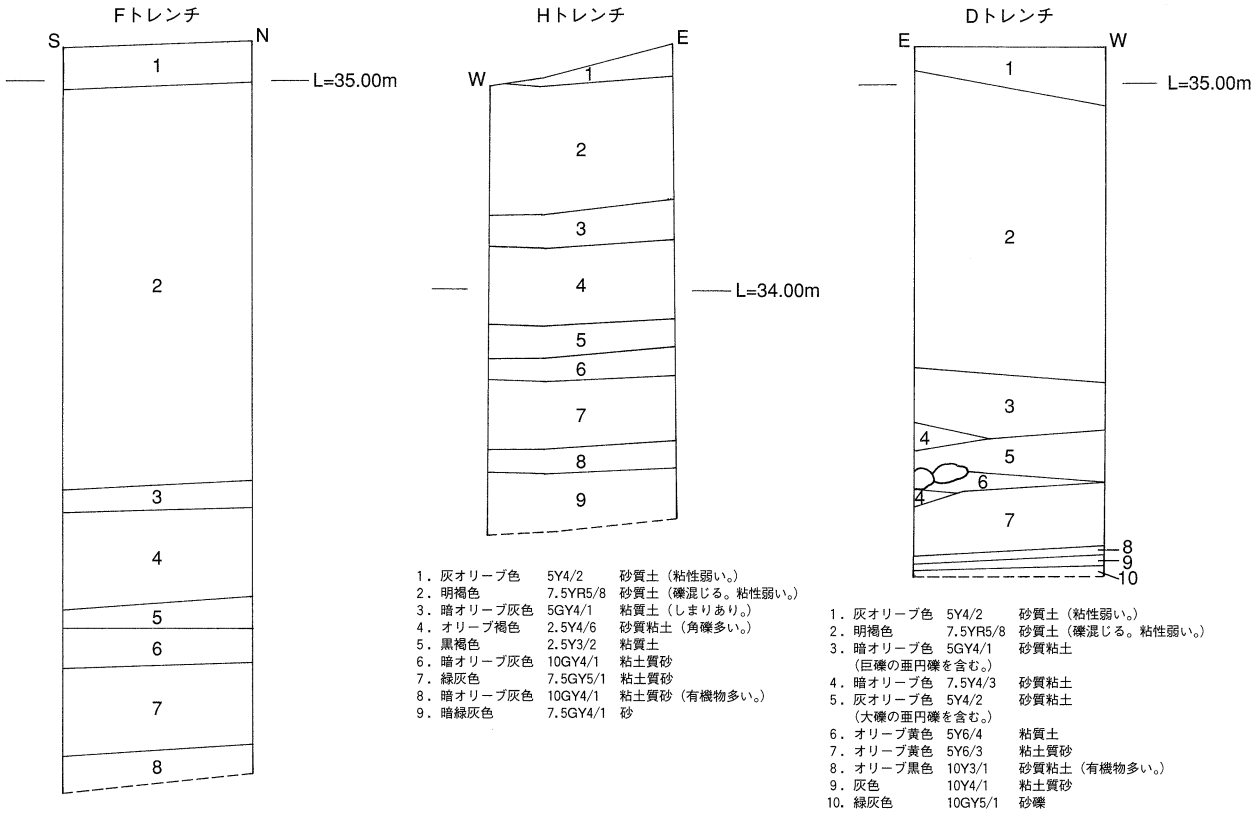
6月16日　トレンチ掘削。土層断面図作成。

6月21日　現場埋め戻し。物品運搬。現場撤収。





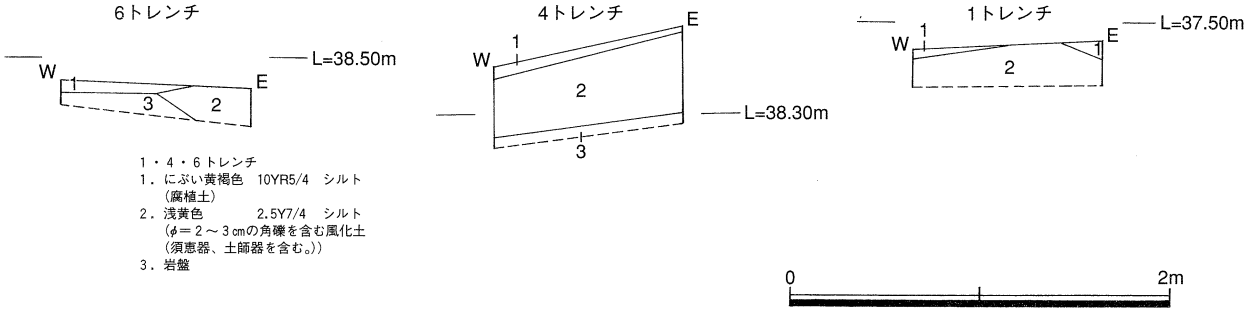
第２図　調査区トレンチ配置図



1．灰オリーブ色　5Y4/2　砂質土（粘性弱い。）
2．明褐色　7.5YR5/8　砂質土（礫混じる。粘性弱い。）
3．暗オリーブ灰色　5GY4/1　粘質土（しまりあり。）
4．オリーブ褐色　2.5Y4/6　砂質粘土（角礫多い。）
5．黒褐色　2.5Y3/2　粘質土
6．暗オリーブ灰色　10GY4/1　粘土質砂
7．緑灰色　7.5GY5/1　粘土質砂
8．暗青灰色　10GY4/1　粘土質砂（有機物多い。）
9．暗緑灰色　7.5GY4/1　砂

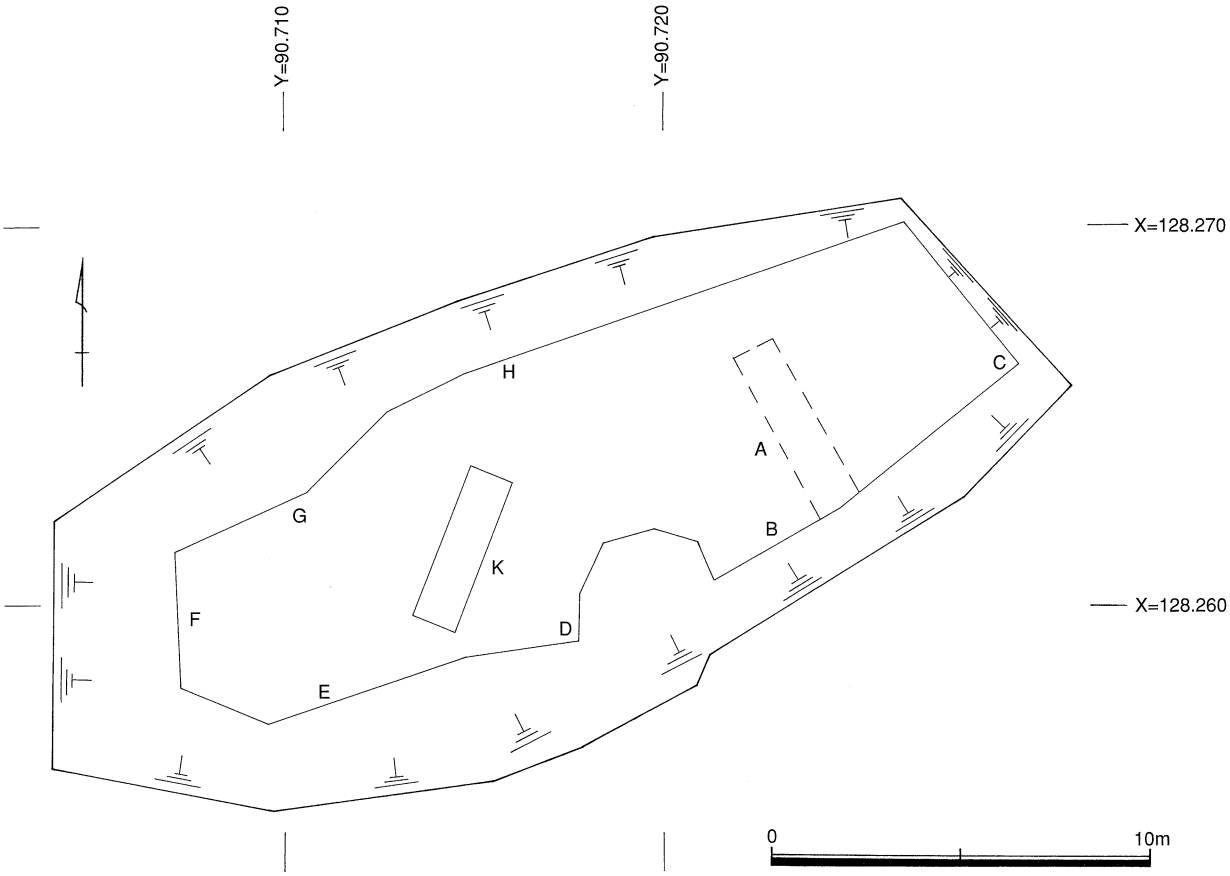
1．灰オリーブ色　5Y4/2　砂質土（粘性弱い。）
2．明褐色　7.5YR5/8　砂質土（礫混じる。粘性弱い。）
3．暗オリーブ色　5GY4/1　砂質粘土
（巨礫の亜円礫を含む。しまりあり。）
4．暗オリーブ色　7.5Y4/3　砂質粘土
5．灰オリーブ色　5Y4/2　砂質粘土
（大礫の亜円礫を含む。）
6．オリーブ黄色　5Y6/4　粘質土
7．オリーブ黄色　5Y6/3　粘土質砂
8．オリーブ黒色　10Y3/1　砂質粘土（有機物多い。）
9．灰色　10Y4/1　粘土質砂
10．緑灰色　10GY5/1　砂礫

1．明褐色　7.5YR5/8　砂質土（礫混じる。粘性弱い。）
3．暗オリーブ灰色　5GY4/1　砂質粘土
（巨礫の亜円礫を含む。しまりあり。）
4．オリーブ褐色　2.5Y4/6　砂質粘土（角礫多い。）
5．明褐色　7.5YR5/8　粘質土（20cmの角礫混じる。）
6．緑灰色　7.5GY5/1　砂質粘土
7．暗青灰色　10BG4/1　砂質粘土
8．暗青灰色　10BG3/1　粘土質砂（有機物多い。）



1・4・6トレンチ
1．にぶい黄褐色　10YR5/4　シルト
（腐植土）
2．浅黄色　2.5Y7/4　シルト
（φ＝2～3cmの角礫を含む風化土
（須恵器、土師器を含む。））
3．岩盤

第3図　模式柱状土層図



第４図　１区トレンチ配置図

2　調査成果

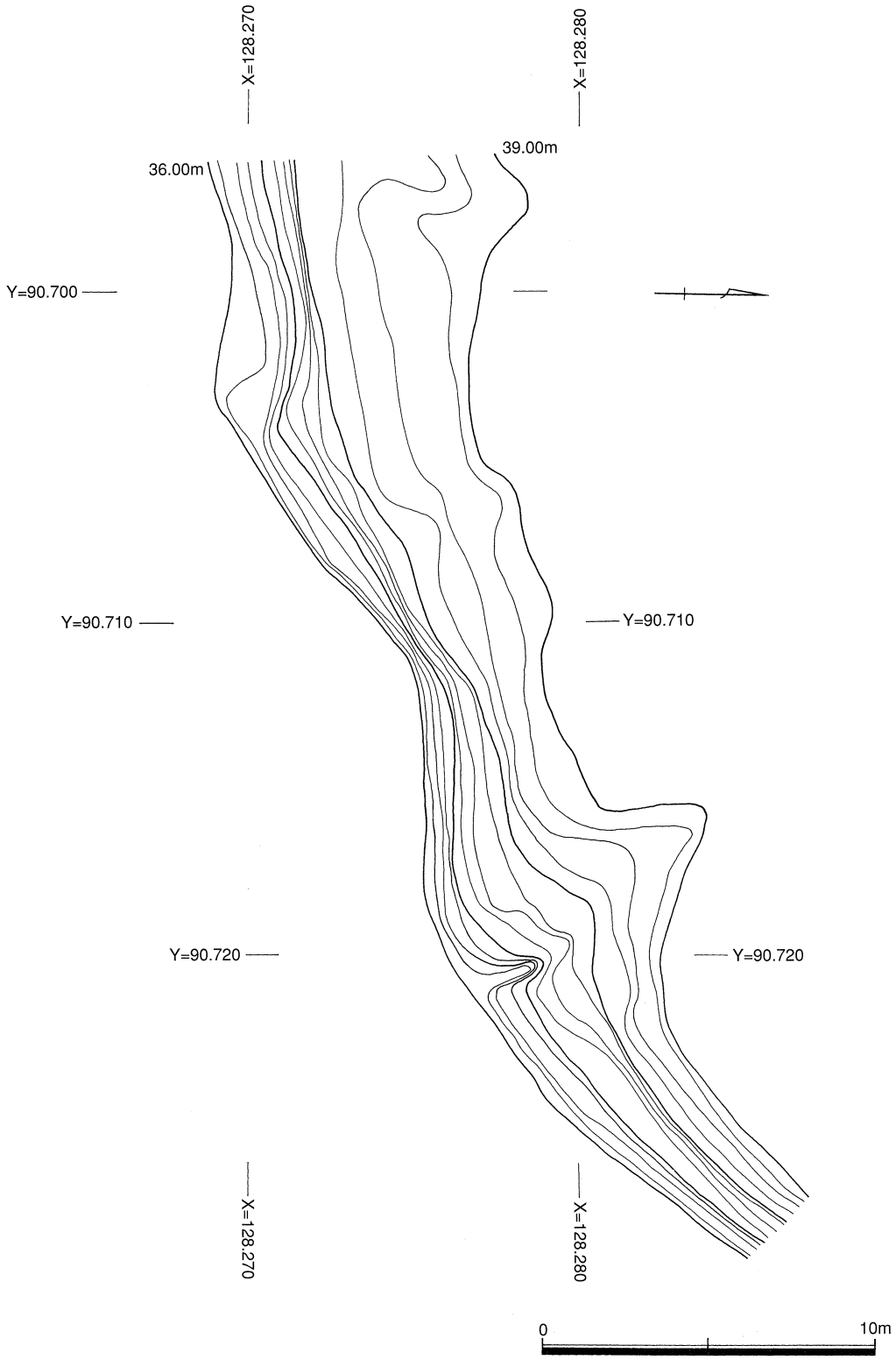
（１）基本層序

トレンチ配置状況と土層堆積状況（第２～４・６・７図）

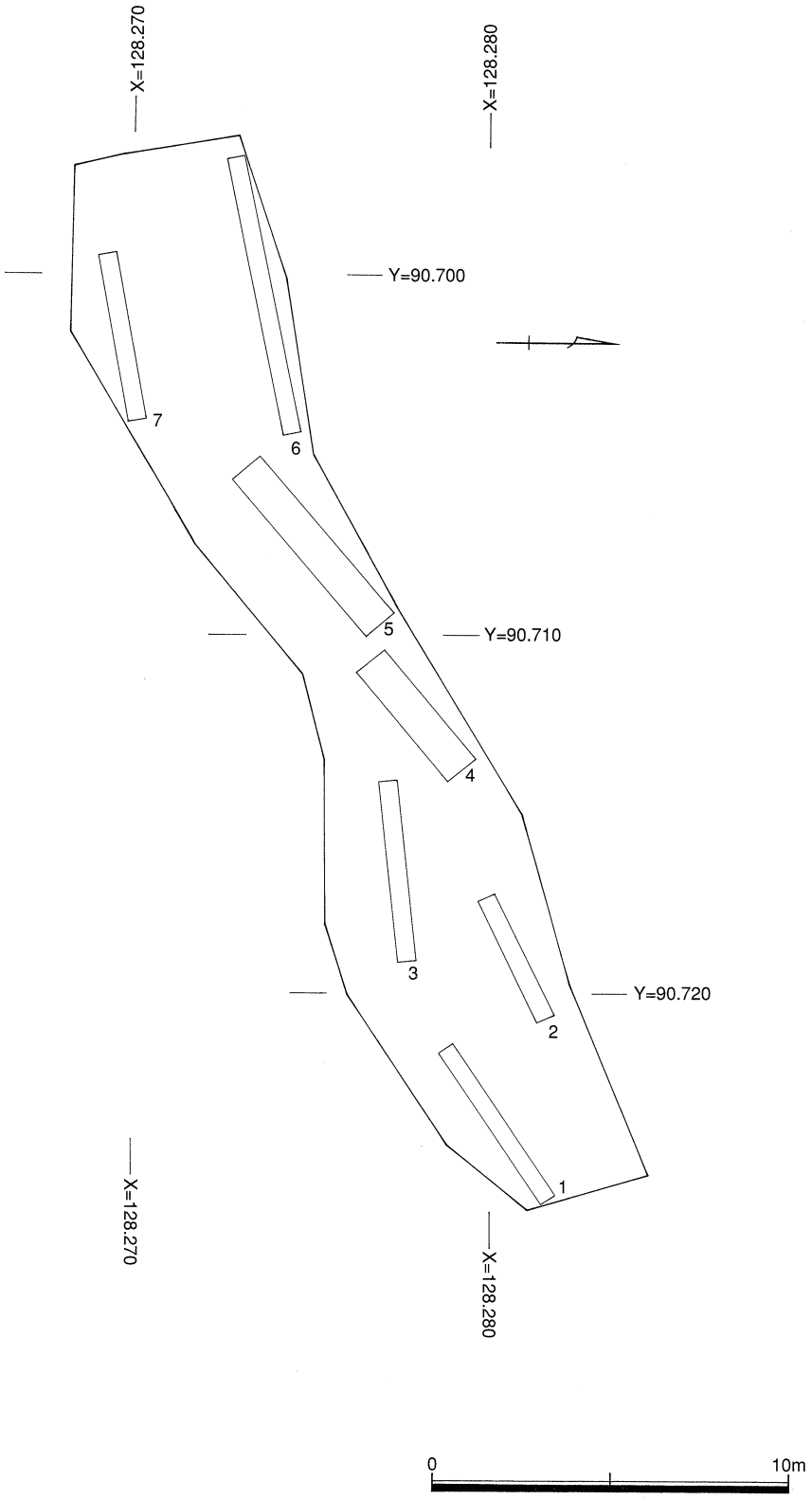
試掘トレンチは横断道の路線に沿って、扇状地上を東西に横断するかたちでトレンチを設定した。試掘に際しては、調査対象面積の５％を基準としてトレンチを設定し、遺物包含層および無遺物自然堆積層までの層厚の確認と柱状断面図、断面写真の作成を基本方針とした。遺跡の有無の判定については調査対象面積の20％を上限とした。

試掘の結果、調査対象地東端の尾根裾部において須恵器片や土師器片などを集中的に含む層が確認されたため、遺物包含の分布状況の把握も含め、400㎡の範囲を対象に本調査へ移行した。また調査区東端の調査に際し、現況の地形測量を実施した。

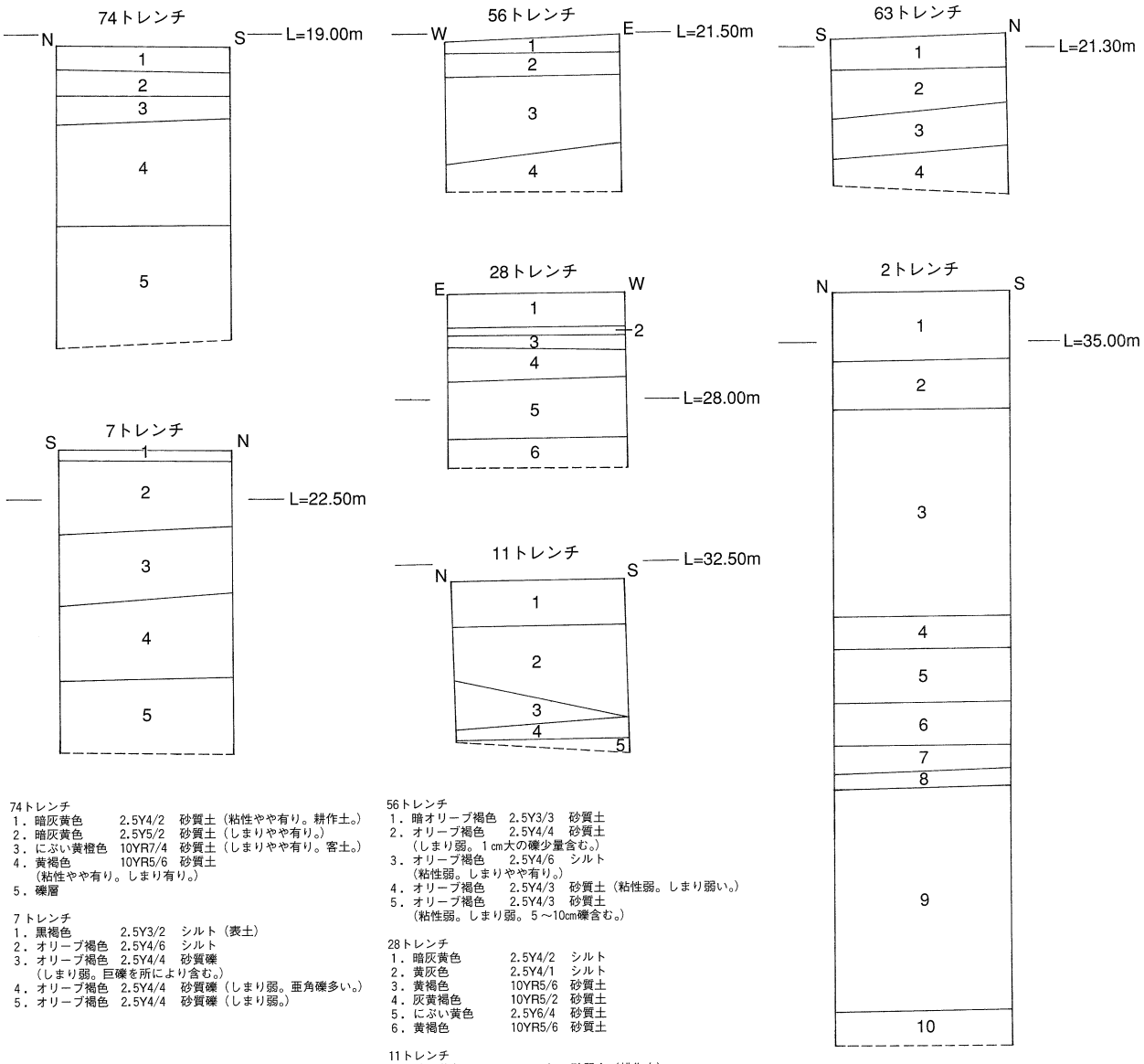
土層堆積状況は各トレンチにより若干の差異はあるものの、調査地点は耕作地開墾による削平あるいは客土等の改変が著しい。表土以下は客土と思われるシルト質の粘質土あるいは扇状地性の砂礫層の堆積となっており、安定した遺物包含層・遺構面は確認することができなかった。


X=128.270
X=128.280
36.00m
39.00m
Y=90.700
Y=90.710
Y=90.710
Y=90.720
Y=90.720
X=128.270
X=128.280
0
10m

第５図　２区地形平面図



第６図　２区トレンチ配置図



74トレンチ
1．暗灰黄色　2.5Y4/2　砂質土（粘性やや有り。耕作土。）
2．暗灰黄色　2.5Y5/2　砂質土（しまりやや有り。）
3．にぶい黄橙色　10YR7/4　砂質土（しまりやや有り。客土。）
4．黄褐色　10YR5/6　砂質土
（粘性やや有り。しまり有り。）
5．礫層

7トレンチ
1．黒褐色　2.5Y3/2　シルト（表土）
2．オリーブ褐色　2.5Y4/6　シルト
3．オリーブ褐色　2.5Y4/4　砂質礫
（しまり弱。巨礫を所により含む。）
4．オリーブ褐色　2.5Y4/4　砂質礫（しまり弱。亜角礫多い。）
5．オリーブ褐色　2.5Y4/4　砂質礫（しまり弱。）

56トレンチ
1．暗オリーブ褐色　2.5Y3/3　砂質土
2．オリーブ褐色　2.5Y4/4　砂質土
（しまり弱。1㎝大の礫少量含む。）
3．オリーブ褐色　2.5Y4/6　シルト
（粘性弱。しまりやや有り。）
4．オリーブ褐色　2.5Y4/3　砂質土（粘性弱。しまり弱い。）
5．オリーブ褐色　2.5Y4/3　砂質土
（粘性弱。しまり弱。5～10㎝礫含む。）

28トレンチ
1．暗灰黄色　2.5Y4/2　シルト
2．黄灰色　2.5Y4/1　シルト
3．黄褐色　10YR5/6　砂質土
4．灰黄褐色　10YR5/2　砂質土
5．にぶい黄色　2.5Y6/4　砂質土
6．黄褐色　10YR5/6　砂質土

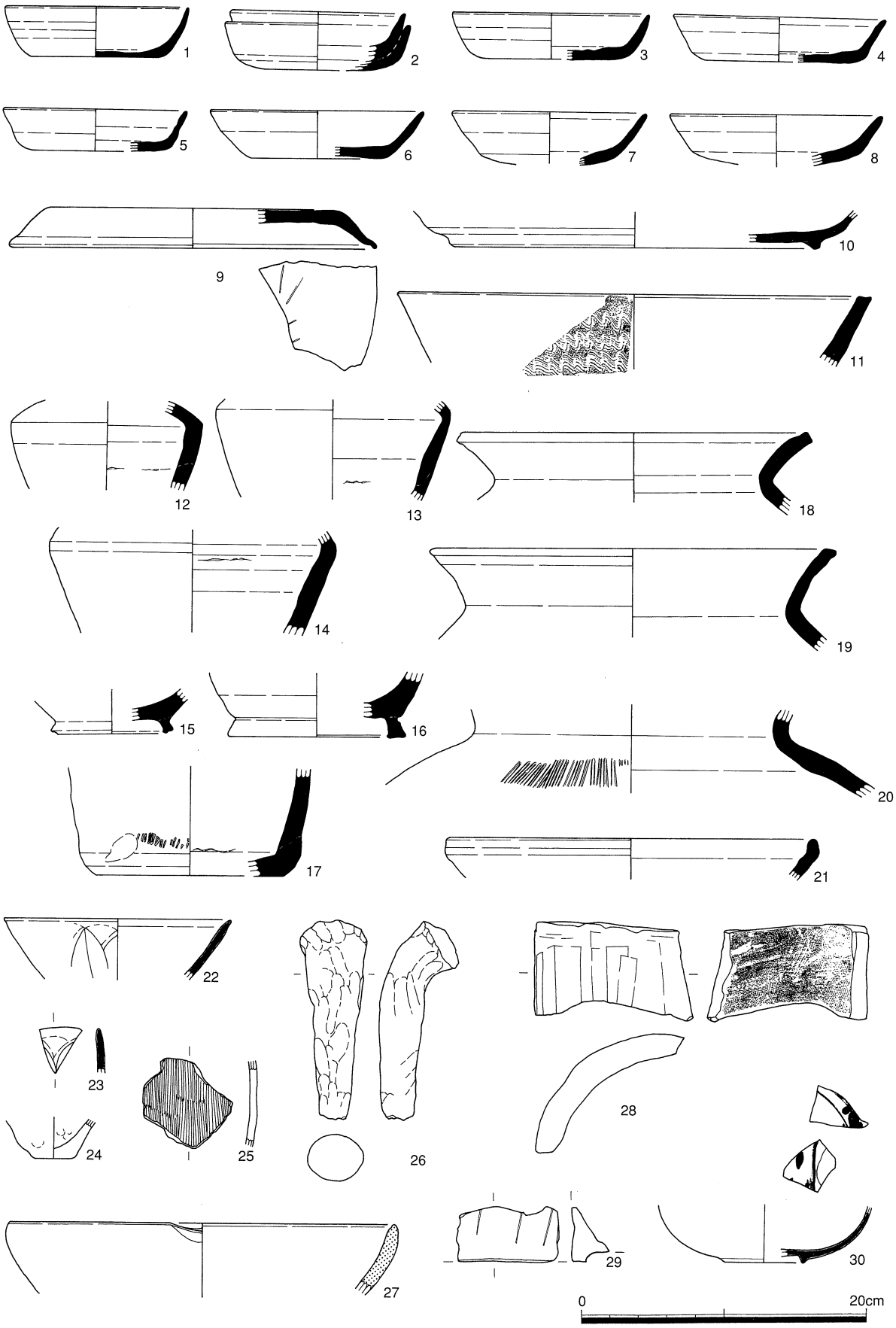
11トレンチ
1．暗灰黄色　2.5Y5/2　砂質土（耕作土）
2．明黄褐色　10YR7/6　砂質土
（粘性やや有り。しまり弱。3～5㎝礫含む。客土。）
3．暗灰黄色　2.5Y5/2　砂質土
（粘性弱。しまりやや有り。）
4．黄褐色　10YR5/6　砂質土
（粘性弱。しまりやや有り。）
5．浅黄色　2.5Y7/3　砂質土
（粘性弱。しまり有り。1～5㎝の礫含む。地山層。）

0　2m

63トレンチ
1．暗オリーブ褐色　2.5Y3/3　砂質土（耕作土）
2．黄褐色　2.5Y5/4　シルト
（しまり弱。土器片。ガラス片含む。）
3．黄褐色　2.5Y5/4　砂質土（しまりやや有り。）
4．砂礫層

2トレンチ
1．灰オリーブ色　5Y4/2　砂質土（粘性弱。耕作土。）
2．灰色　10Y5/1　シルト（粘性弱。しまり弱い。）
3．明褐色　7.5Y5/8　砂質土
（粘性弱。礫多量含む。埋立土。）
4．オリーブ灰色　10Y5/2　粘質土
（粘性やや有り。しまりやや有り。）
5．灰オリーブ色　7.5Y5/3　粘質土
（粘性有り。しまり有り。鉄分含む。）
6．5．と同じ　（鉄分多く含む。）
7．黄灰色　2.5Y5/1　粘質土
（粘性有り。しまりやや有り。）
8．5．と同じ（粘性有り。しまり少し有り。）
9．灰色　N6/0　シルト
（粘性有り。しまり有り。5～10㎝の礫含む。）
10．暗灰色　N3/0　粘質土（粘性強。しまり弱。）

第7図　1・2区模式柱状土層図


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
0
20cm

第８図　出土遺物１

（2）遺構と遺物

遺跡の位置（Ⅰ-第1図およびⅡ-第1・3・12図）

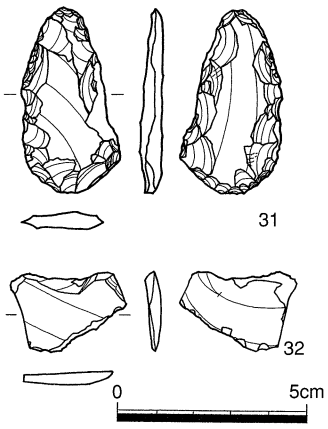
調査対象地は阿讃山脈南麓の低位段丘面の北端から尾根の最下部にかけての標高35～38mの地点に位置する。

出土遺構

遺物の出土はみられたが、安定した遺物包含層・遺構面は確認することができなかった。

出土遺物（第8・9図）

出土遺物は時期的に古墳時代後期から近世のものが出土しており、詳細な所属時期の決定は困難である。出土遺物の大半は7～9世紀頃と思われる須恵器がほとんどである。その中に融着したもの、あるいは使用痕のまったく見られないものが含まれることから、付近に焼成窯が存在した可能性がある。



第9図　出土遺物2

（3）まとめ

遺物包含層と見られた地層は植物片など有機物に富むピート層（粘質土層）であることから、遺物は周辺の遺跡から、池などの湿地あるいは流路に流れ込み堆積したものと考えられる。遺構面の特定はできず、調査区全域において遺構は存在しないと考えられる。

川端奥郷遺跡
第１表　出土遺物観察表
包含層（土器）

報告書掲載番号	遺構	出土地点	層位	器種	残存率	口径(cm)	体部最大径(cm)	底径(cm)	頸部(脚柱)径(cm)	器高・残存高(cm)	その他の法量(cm)	部位	形態	調整	含有物組成	色調	備考
1	No１トレンチ		９層	須恵器杯	全体1/4	12.8	13.0	9.0		3.5		口縁～底部	体部外上方へ直線的に立ち上がり、口縁端部を尖り気味に収める。	外面：ロクロナデ。内面：ロクロナデ。	長石	外面：青灰内面：青灰	焼成良好。
2		C-7		須恵器杯	全体1/6	12.0 12.7		7.4		4.1 3.3		口縁～底部	２個が融着して体部外上方に立ち上がり、端部を丸く収める。断面にφ=0.1～1.5㎜程度の空洞が多く見られる。	外面：ロクロナデ。自然釉（薄い）。ロクロケズリ跡有り。内面：ロクロナデ。	石英・結晶片岩	外面：灰白内面：灰白	焼成良好。外面口縁部から底部まで薄く自然釉がかかっていることから、焼成時、伏せて置かれていたと思われる。
3		C-5		須恵器杯	全体1/2	13.9		9.3		3.3		口縁～底部	体部外上方に直線的に立ち上がり、口縁端部を尖り気味に収める。	外面：ロクロナデ。内面：ロクロナデ。	長石	外面：青灰内面：明青灰	焼成良好。
4		P５より東６ｍ	オリーブ褐色層下	須恵器杯	全体1/5	14.8	15.0	10.2		3.1		口縁～底部	体部外上方へ直線的に開く。口縁部で僅かに外反し、端部を丸く収める。	外面：ロクロナデ。内面：ロクロナデ。自然釉。	白色斑粒	外面：灰白内面：灰白	焼成良好。内面に自然釉がかかっている。上を向けて焼かれたと思われる。
5			礫層	須恵器杯	全体1/6	12.8		9.9		2.9		口縁～底部	体部外上方へ直線的に立ち上がり、口縁端部を丸く収める。	外面：ロクロナデ。内面：ロクロナデ。	長石・黒色斑粒	外面：灰白内面：灰白	焼成良好。外面上半に自然釉付着。
6		P５より東６ｍ	オリーブ褐色層下	須恵器杯	全体1/6	14.8		9.0		3.5		口縁～底部	体部外上方に直線的に立ち上がり、口縁端部を丸く収める。	外面：ロクロナデ。内面：ロクロナデ。底部：回転ヘラ切りのちナデ。	長石	外面：灰白内面：灰白	焼成良好。
7		C-4		須恵器高杯（杯部）	全体1/8	13.5				3.6		口縁～底部	体部外上方へ直線的に立ち上がり、口縁端部を丸く収める。	外面：ロクロナデ。体下部回転ヘラケズリ。内面：ロクロナデ。	長石・白色斑粒	外面：暗青灰内面：暗青灰	焼成良好。
8		P５より東６ｍ	オリーブ褐色層下	須恵器杯	全体1/4	14.8				3.6		口縁～底部	体部外上方へ開き、口縁端部を丸く収める。	外面：ロクロナデ。内面：ロクロナデ。底部：ナデ。	長石	外面：灰白内面：灰白	焼成良好。底部に輪積み痕と思われる同心円状の窪み有り。
9			５層	須恵器蓋	全体1/15	25.7	26.0			2.7		天井部～口縁	扁平な器形で、天井部は平坦。緩やかなカーブで口縁に至り、口縁端部を丸く収める。	外面：ロクロナデ。内面：ロクロナデ・内面に線刻４条。	石英・長石・白色斑粒	外面：灰内面：灰	焼成良好。
10		C-6		須恵器皿	底部1/10			25.2		2.6	高台高0.5	底部	扁平な盤形。体部緩やかに内彎しながら短く立ち上がり、口縁部で外反する。貼り付け高台はハの字に開き、断面逆台形に収める。	外面：ナデ。内面：ナデ。	長石・雲母	外面：にぶい黄橙内面：橙	焼成良好。断面の色より陶器または土師器の可能性有り。
11		C-5		須恵器器台	口縁部1/12	33.2				4.9		口縁部	体部外上方に直線的に立ち上がり口縁端部を方形状に収める。端面は凹んでいる。	外面：ロクロナデ。自然釉。櫛描波状文。内面：ロクロナデ。自然釉。	白色斑粒・黒色斑粒	外面：オリーブ灰内面：灰白	焼成良好。内外面共に自然釉。
12		C-5		須恵器壺	体部1/5		13.4			6.2		体部	肩部強く内方に屈曲する。	外面：ロクロナデ。内面：ロクロナデ。	石英・長石・白色斑粒	外面：青灰内面：灰	焼成良好。接合痕有り。
13		C-6		須恵器壺	体部1/8		16.4			7.1		体部	肩部強く内方に屈曲する。	外面：ロクロナデ。内面：ロクロナデ。接合痕有り。	長石・黒色斑粒	外面：明青灰内面：明青灰	焼成良好。
14		C-5		須恵器壺	体部1/8		20.2			7.3		体部	肩部で内方に屈曲する。	外面：ロクロナデ。自然釉。内面：ロクロナデ。	石英・雲母・長石	外面：オリーブ灰内面：灰白	焼成良好。接合痕有り。
15		C-4		須恵器壺	底部1/5			8.4		3.0	高台高0.9	底部	体部外上方へ延びる。貼り付け高台でハの字に開き、断面を方形状に収める。	外面：ロクロナデ。内面：ロクロナデ。	白色斑粒	外面：青灰内面：青灰	焼成良好。高台部を貼り付けた後ナデている。
16		C･D-6		須恵器壺	底部1/3			12.5		4.6	高台高1.2	底部	体部若干内彎気味に外上方に立ち上がる。貼り付け高台でハの字に開き、底面は左右に張り出した断面台形状を呈する。	外面：ロクロナデ。内面：ロクロナデ。	長石	外面：灰内面：灰	焼成良好。
17		C-5		須恵器壺	底部1/5			13.2		7.6		底部	体部外上方に直線的に立ち上がる。	外面：タタキのちナデ。ユビオサエ。内面：ナデ。接合痕有り。	石英・長石・白色斑粒・黒色斑粒	外面：暗青灰内面：暗青灰	焼成良好。
18		C-4		須恵器甕	口縁～頸部1/9	24.0			19.5	5.0		口縁～頸部	体部外上方へ内彎しながら立ち上がり、口縁部で外反し、端部を方形状に収め、端面に沈線２条、端部下にも沈線１条有り。	外面：ロクロナデ。内面：ロクロナデ。	白色斑粒・黒色斑粒	外面：青灰内面：明青灰	焼成良好。

報告書掲載番号	遺構	出土地点	層位	器種	残存率	口径(cm)	体部最大径(cm)	底径(cm)	頸部(脚柱)径(cm)	器高・残存高(cm)	その他の法量(cm)	部位	形態	調整	含有物組成	色調	備考
19		P5より東6m	オリーブ褐色層上	須恵器甕	口縁～頸部1/8	27.0			23.4	7.2		口縁～頸部	体部外上方へ内彎しながら立ち上がり、口縁部で僅かに外反し、端部を方形状に収め、端面は平坦に仕上げる。	外面：ナデ。 内面：ナデ。	石英・結晶片岩	外面：灰白 内面：灰白	焼成不良。 外面に赤斑有り。
20		P5より東6m	オリーブ褐色層の上	須恵器甕	頸部1/8				22.2	6.1		頸部	体部内彎しながら立ち上がり、口縁部で外反する。	外面：ナデ。 タタキ2条／cm。 内面：ナデ。	結晶片岩・赤色斑粒	外面：灰白 内面：浅黄橙	焼成不良。
21		T-29	3層	須恵器鉢	口縁部1/16	25.3	26.2			2.8		口縁部	口縁部若干内彎気味に立ち上がる。口縁端部を丸く収める。	外面：ロクロナデ。 内面：ロクロナデ。	石英・長石	外面：灰白 内面：灰	焼成良好。
22	№28トレンチ		排土	青磁碗	口縁部1/6	16.0				4.2		口縁	体部外上方へ直線的に立ち上がり、口縁端部を尖り気味に収める。	外面：ロクロナデのち施釉。 鎬蓮弁文片切彫。 内面：ロクロナデのち施釉。	緻密	釉：グレイみのオリーブ 胎：灰白	龍泉窯系。 焼成良好。 蓮弁14枚。
23	№19トレンチ		排土	青磁碗	破片						縦3.2 横3.0 厚さ0.5	口縁	－	外面：ロクロナデのち施釉。 鎬蓮弁文片切彫。 内面：ロクロナデのち施釉。	緻密	釉：グレイみの黄 胎：灰白	龍泉窯系。 焼成良好。
24		D-6		土師器鉢	底部1/1			2.8		2.8		底部	体部外上方に延びる。	外面：ユビオサエ。 摩滅のため調整不明。 内面：ユビオサエ。 摩滅のため調整不明。	石英・長石	外面：浅黄橙 内面：灰白	焼成良好。 手捏ね土器。
25			下位礫層	土師質焙烙	破片					6.3		不明	－	外面：ハケ7条／cm。 内面：ナデ。	石英・長石	外面：黒褐 内面：暗灰黄	焼成やや不良。 外面に炭化物付着。
26	№28トレンチ		3層	土師質土器鍋	脚部2/3						残存長13.9 幅4.3	脚部	－	外面：ケズリのちユビナデ。	石英・長石・雲母・結晶片岩	外面：にぶい黄橙	焼成良好。
27		C-4		瓦質注口鉢	口縁～体部1/16	27.2	27.6			5.0		口縁～体部	口縁部若干内彎気味に立ち上がる。口縁端部を丸く収める。注口有り。	外面：ナデ。 内面：ナデ。	石英	外面：灰 内面：灰	焼成良好。
28		C-4		須恵質丸瓦	不明					8.3	縦6.8 横11.3 厚さ2.0	不明	－	外面：ヘラナデ。 内面：布目痕。	石英・長石・黒色斑点	外面：灰白 内面：灰	焼成良好。 4、5などと同時に同じ土で焼かれたと思われる。
29		C-7		瓦質瓦	不明						縦3.9 横7.1 厚さ2.6	不明	－	外面：ケズリのちナデ。 3条の線刻。 内面：ユビオサエ。	石英・長石・赤色斑粒	外面：灰	焼成良好。 飾り瓦の一部。
30	№43トレンチ		4層	磁器皿	底部1/6			5.6		4.0	高台高0.3	底部	体部外上方へゆるやかに立ち上がる。削り出し高台でハの字に開き、断面を逆台形状に収める。畳付のみ無釉。	染付（呉須）。 外面：ロクロナデのち施釉。 内面：ロクロナデのち施釉。	緻密	透明釉 釉：緑みの白 胎：灰白	肥前系。 焼成良好。

川端奥郷遺跡　石器・石製品観察表
包含層

報告書掲載番号	遺構	出土地点	層位	石材	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	その他の法量(cm)	残存率	部位	備考
31	№28トレンチ		3層	サヌカイト	打製石鏃	4.9	2.6	0.6	7.2		1/1		石鏃未製品。
32	№28トレンチ	拡張部南	3層	サヌカイト	剥片	2.1	3.1	0.4	2.5				全欠。

Ⅵ　川端馬越古墳群

例　　言

1　本章は四国横断自動車道建設に伴う川端馬越古墳群の発掘調査報告書である。

2　所在地　板野郡板野町川端字唐土谷3-28他

調査対象面積　4,400㎡

試掘面積　220㎡

本調査面積　200㎡

3　発掘調査期間及び報告書作成の実施期間は次の通りである。

発掘調査期間　平成10年２月１日～平成10年３月31日（試掘）

平成10年４月１日～平成10年５月31日（本掘）

報告書作成期間　平成14年４月１日～平成15年３月31日

4　遺構番号、挿図番号、図版番号は通し番号とした。遺物番号は本文・挿図・表・図版と一致する。

5　本遺跡の地理的・歴史的環境については、「Ⅱ　調査地点の立地と環境」を参照されたい。

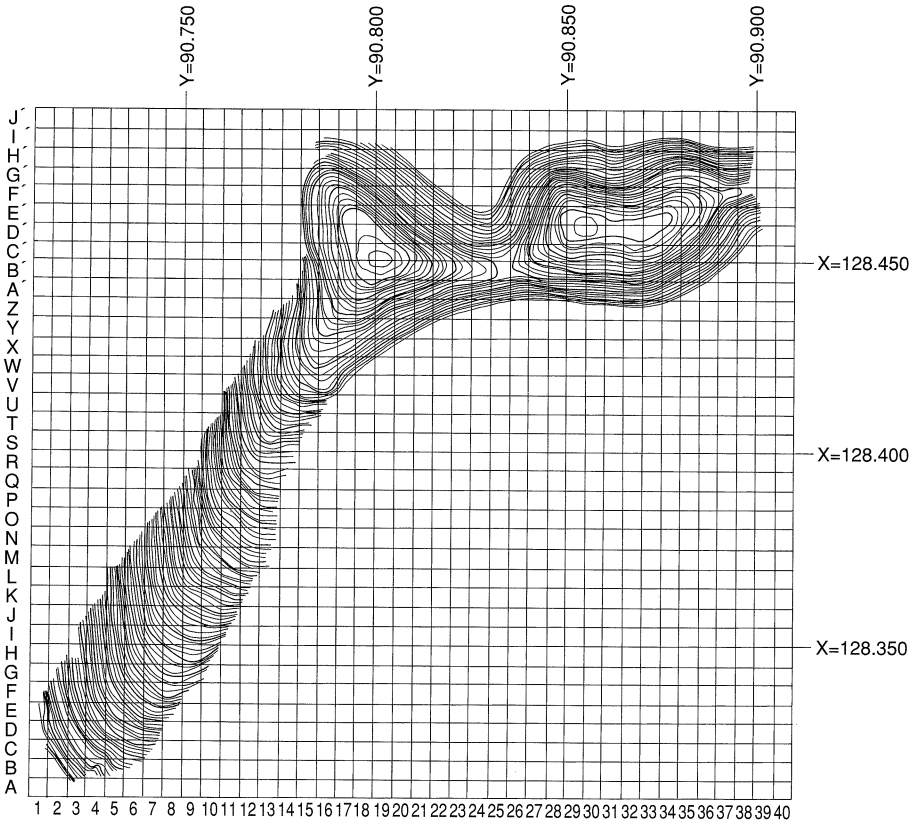
1　調査の経過

（1）調査の経過（Ⅰ-第1図およびⅡ-第1・3・12図）

調査対象地は阿讃山脈南麓の標高57～87mの北東から南西方向へ緩やかに傾斜する尾根上に位置する。調査地点周辺は、谷口山古墳や阿王塚古墳等の古墳群が密集する地域として周知されていた。事前の分布調査の際にも阿讃山脈から張り出す尾根上に古墳の存在する可能性が指摘されていた。したがって分布調査で推定された遺跡の範囲の内、4,400㎡を調査対象面積として試掘調査を実施した。試掘調査は平成10年度に試掘の承諾可能な地区より順次、人力掘削によるトレンチ調査を計220㎡実施した。試掘の結果、調査対象地西側尾根裾部において古墳の石室と思われる石列や須恵器片などを検出したため、平成11年度に200㎡の範囲を対象に本調査へ移行した。本調査は平成11年5月31日に終了した。

（2）発掘調査の方法（第1図）

調査を始めるにあたり、グリッドの配置に際しては、発掘統一基準にならい、第Ⅳ系国土座標を基準とし、5mメッシュを1グリッドとして調査対象地を包み込む形で設定した。南西隅を基準として北にA・B・C…、東に1・2・3…の順に記号・番号をふり、その組み合わせで各グリッド名を表すこととした。遺構記号・番号は検出時に順次決定した。



第1図　グリッド配置図

（3）調査日誌抄

1999年（試掘）

2月1日　調査準備。

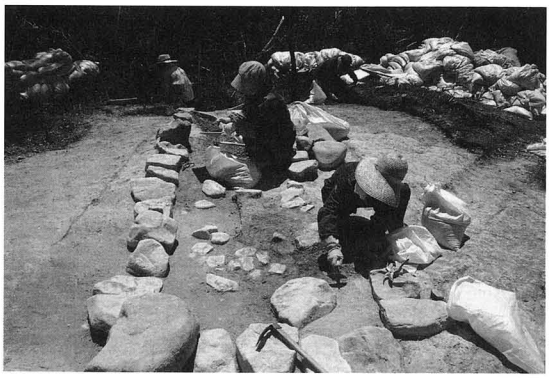
2月5日　機材運搬。

2月9日　調査地現況地形測量。

2月16日　試掘トレンチ設定。掘削開始。

3月22日　図面整理。

3月26日　図面整理。



1999年（本掘）

4月1日　調査準備。

4月7日　調査区人力掘削開始。遺構検出作業。

4月9日　遺構掘削開始。

4月15日　図面作成開始。

5月24日　埋め戻し作業。現場撤収。

2　調査成果

（1）基本層序

トレンチ配置状況と土層堆積状況（第2・3・4図）

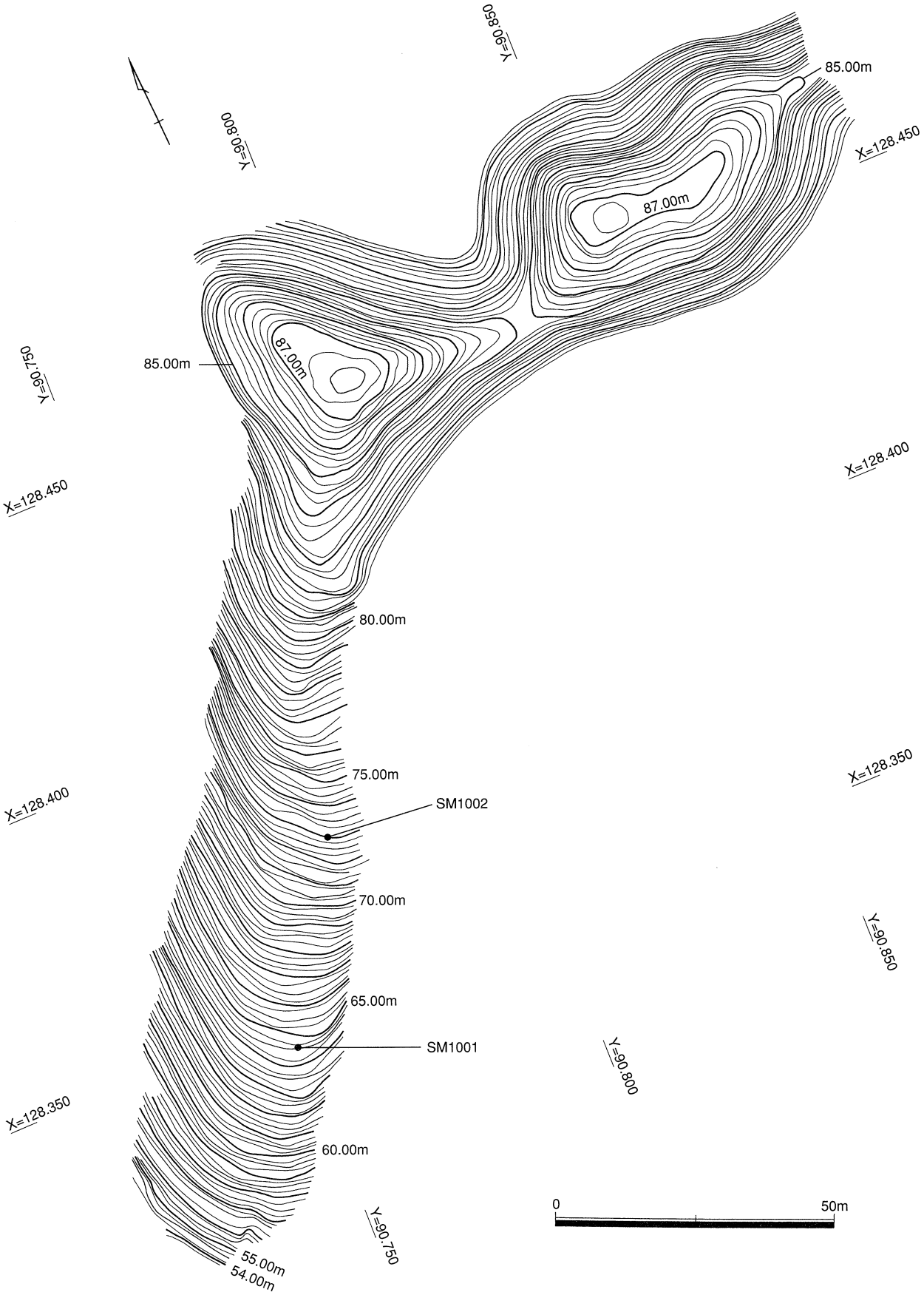
調査に際し、現況の地形測量を実施した。墳丘と思われる高まりを確認した後、試掘トレンチを設定し、掘削作業を行った。トレンチの設定については墳丘と思われる地点を中心に尾根筋に沿ってメイントレンチを設定し、それに直交するようにサブトレンチを設定した。試掘は土層堆積状況、遺構・遺物の出土層位および遺跡の範囲の把握に努めた。試掘の結果、調査区西側尾根部において石室と思われる石列を検出したため、200㎡の範囲を対象に本調査へ移行した。

土層堆積状況は各トレンチとも類似しており、基本層序は以下の通りほぼ対応する。

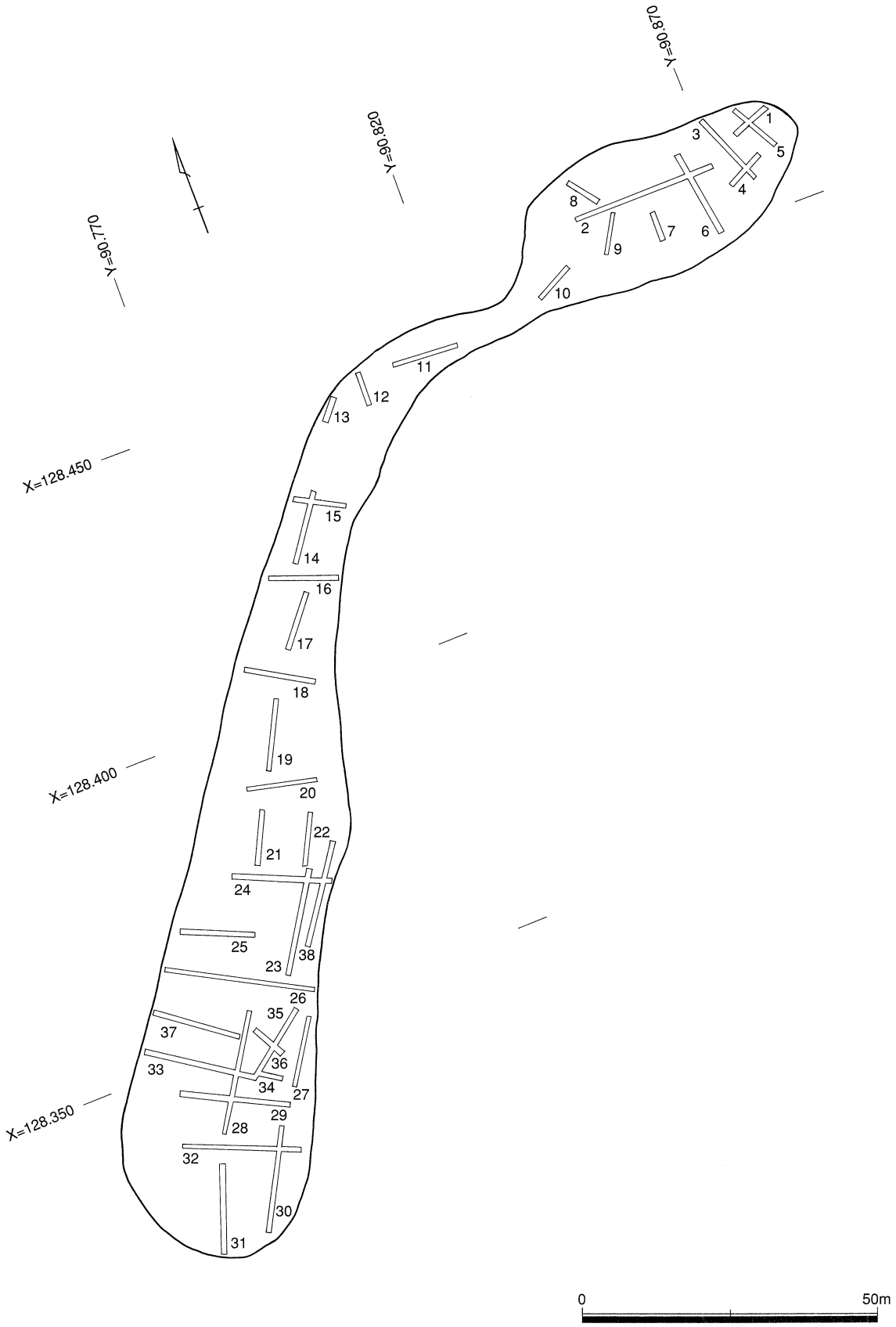
1．…黒褐色 7.5YR2/2 砂質土（表土、腐植土。）

2．…明黄褐色 10YR6/8 粘性砂質土（岩盤風化土、ϕ＝3～5㎝程度の礫を含む。部分的に灰黄褐色 10YR6/3 粘土が混じる。）

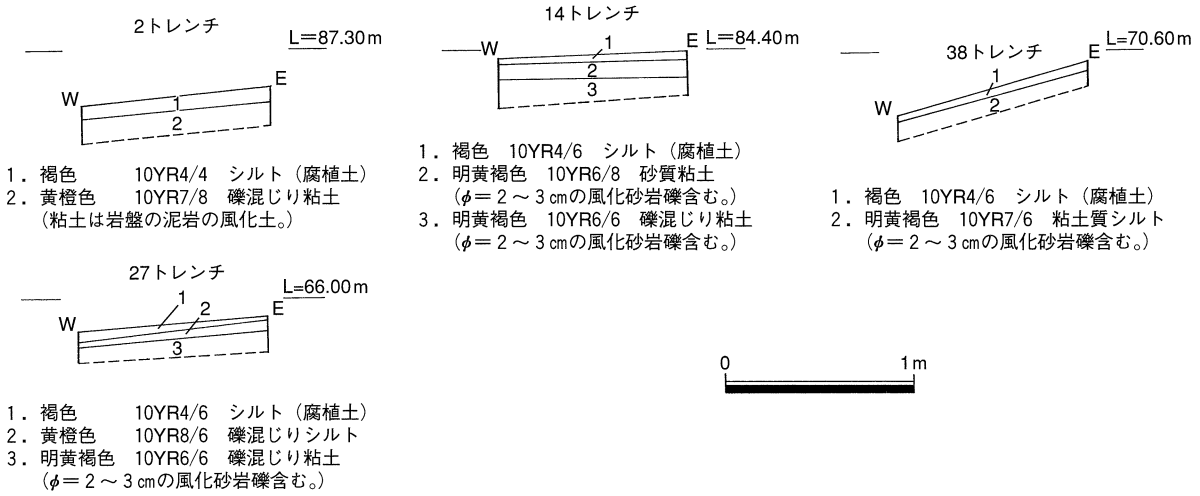
3．…黄橙色 10YR7/8 砂質土（岩盤。地山。砂岩・泥岩礫層。）



第２図　地形平面・遺構配置図


Y=90.870
Y=90.820
Y=90.770
X=128.450
X=128.400
X=128.350
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
0
50m

第３図　トレンチ配置図



第４図　模式柱状土層図

（２）遺構と遺物

出土遺構（第５・９図）

尾根筋より南東方向寄りの地点で、２基の横穴式石室が検出された。共に削平を受け、残存状況は良くないが、副葬品の一部と思われる若干の鉄器類等の遺物も検出された。遺物包含層からも須恵器片が若干出土した。

SM1001（１号墳）（第５～７図）

石室礫床の一部が検出されたのみで、壁体および上部構造はほとんど失われていた。礫床の残存部は、長軸1.50m、短軸0.9mを測る。主軸方向は、N-15°-W で、南に開口する横穴式石室とみられる。

出土遺物（第８図）

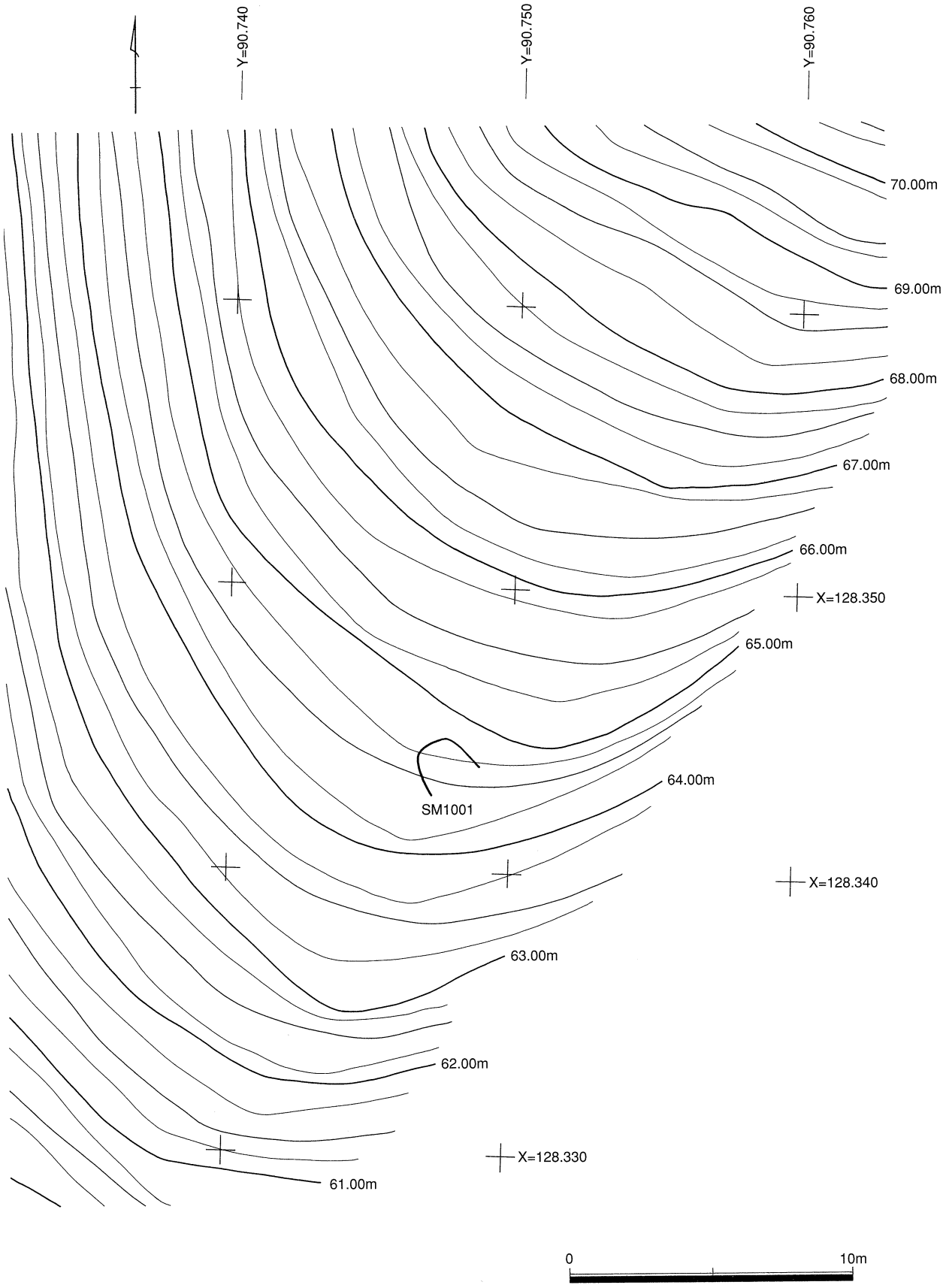
鉄器類が22点出土した。鉄鏃の茎部の他、棺を留めていたと思われる鉄釘も見られる。

SM1002（２号墳）（第９～13図）

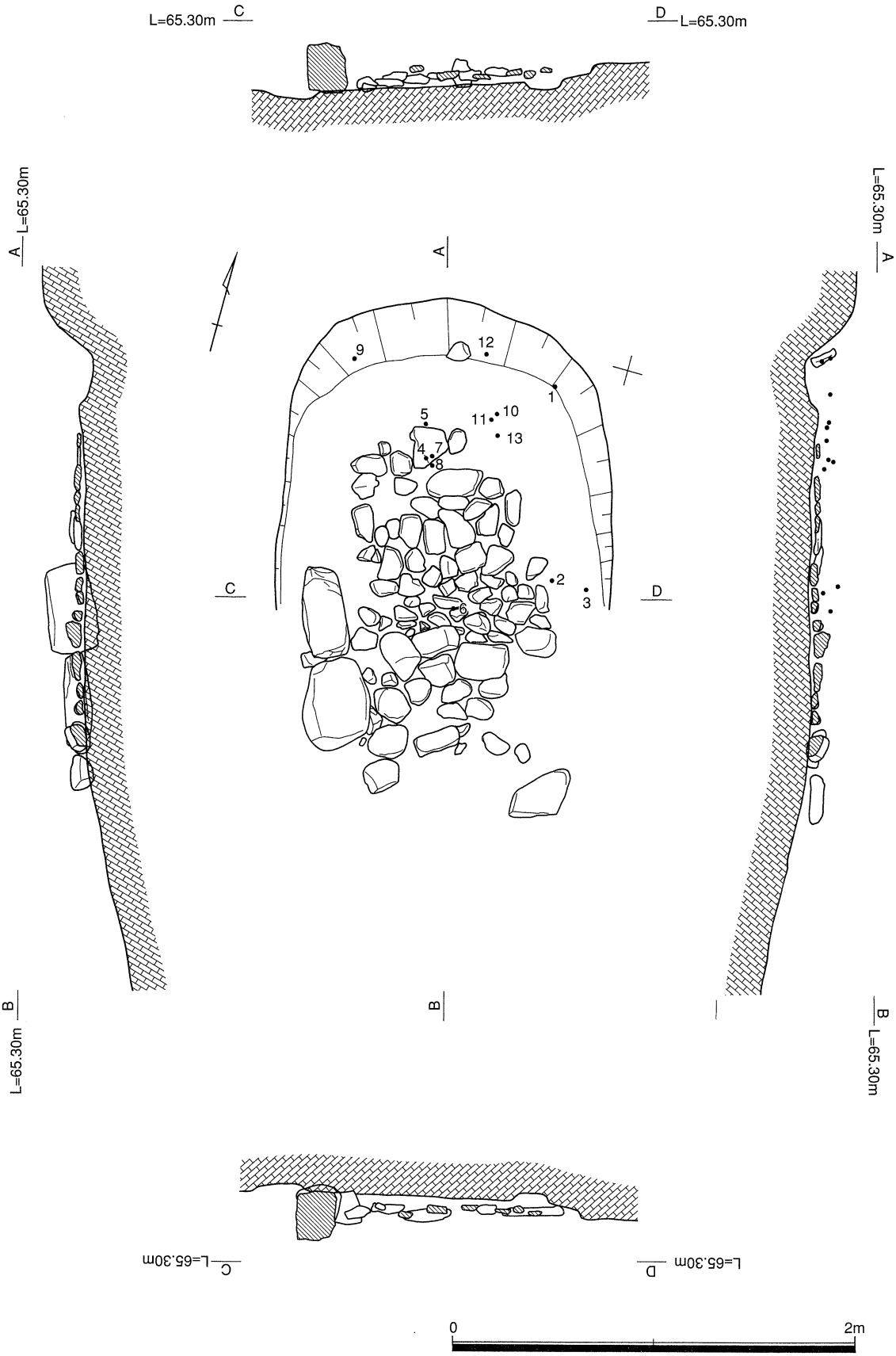
玄室部と羨道部の一部が残存する横穴式石室である。玄室部は、長軸2.50m、短軸0.9mを測る。主軸方向は、N-18°-W で南に開口する。礫床は２次床面を形成していた形跡がある。側壁部は基底部一段目がほぼ残っており、左片袖式の平面形を示す。羨道部は右側側壁部の一段目が約1.0m残存する。

出土遺物（第14図）

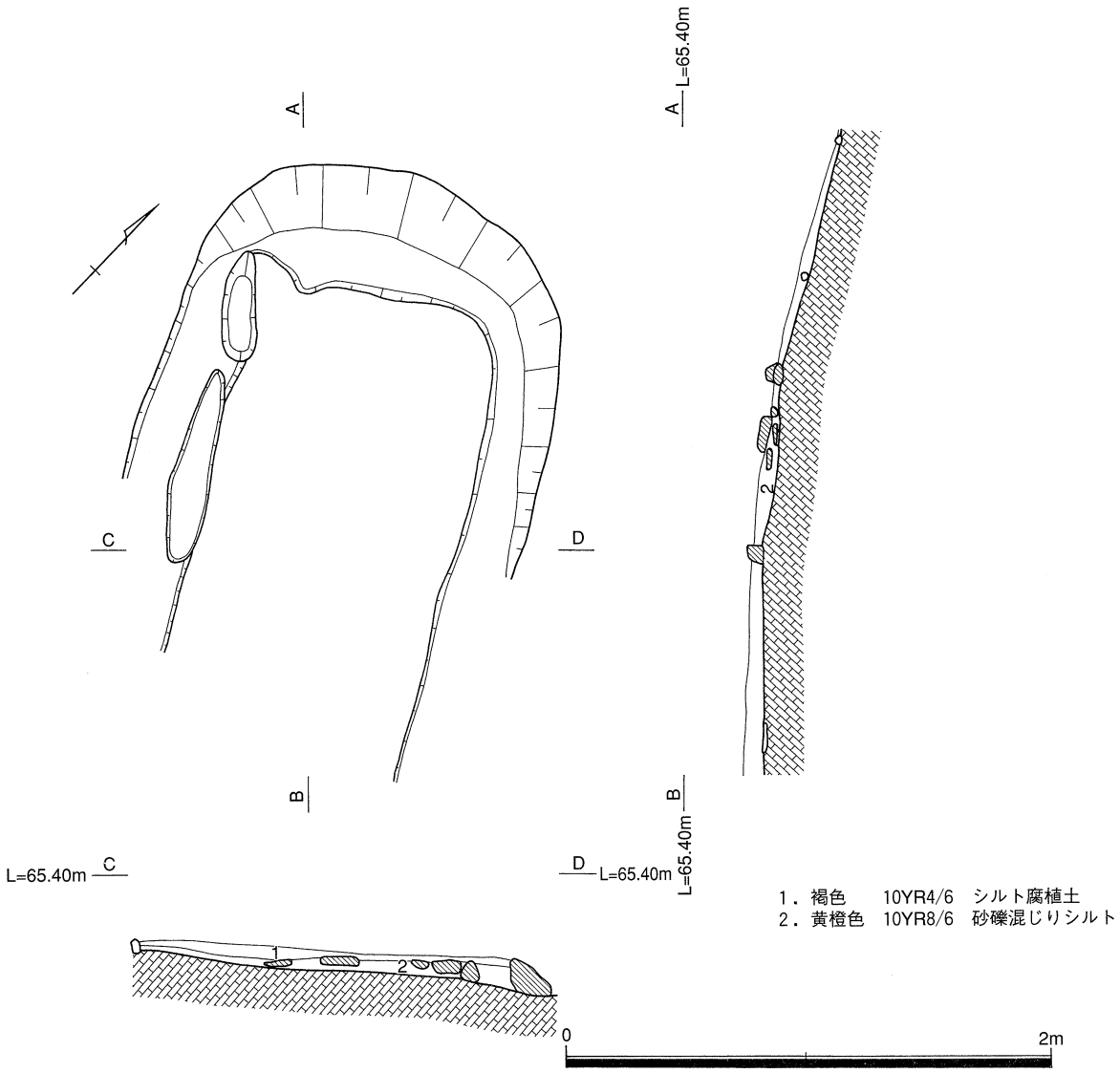
須恵器小片の他、鉄器類が25点出土した。鉄鏃の茎部をはじめ、鉋等の工具と思われる鉄器片、棺を留めていたと思われる鋲・鉄釘が出土しているが、全体が判明するものは少ない。



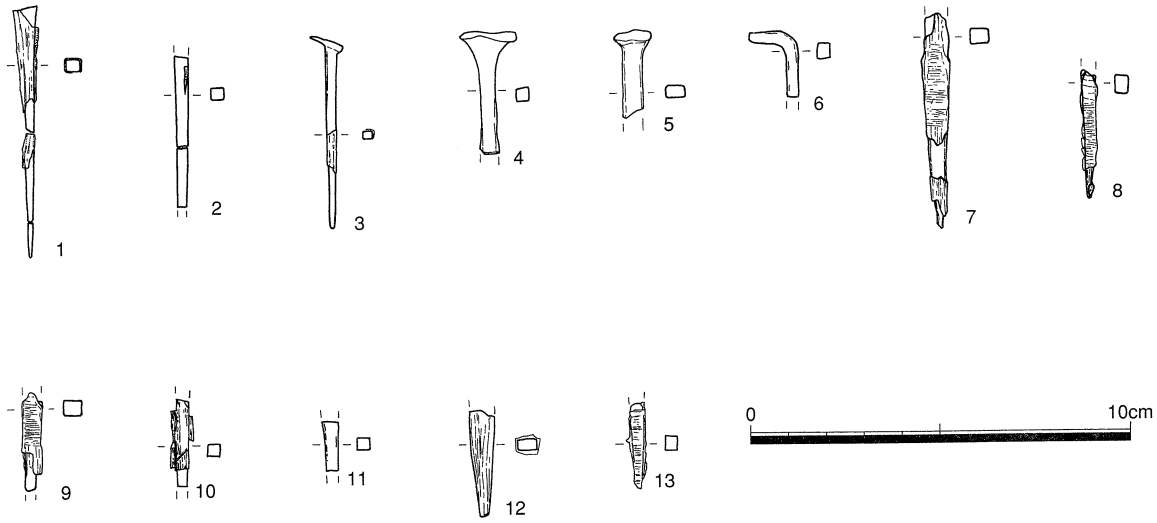
第５図　SM1001周辺地形平面図



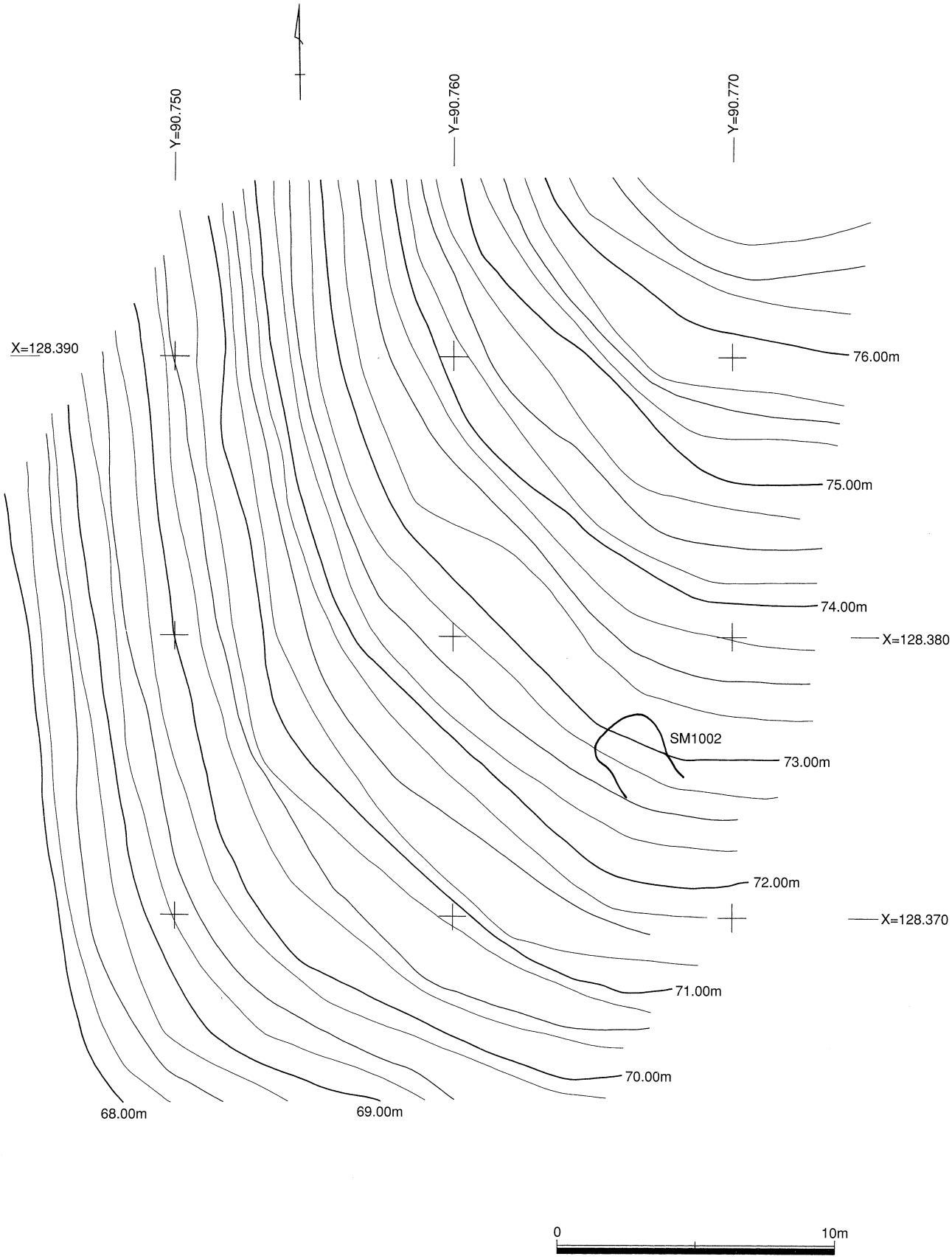
第６図　SM1001石室平・断面および遺物出土分布状況ドット図



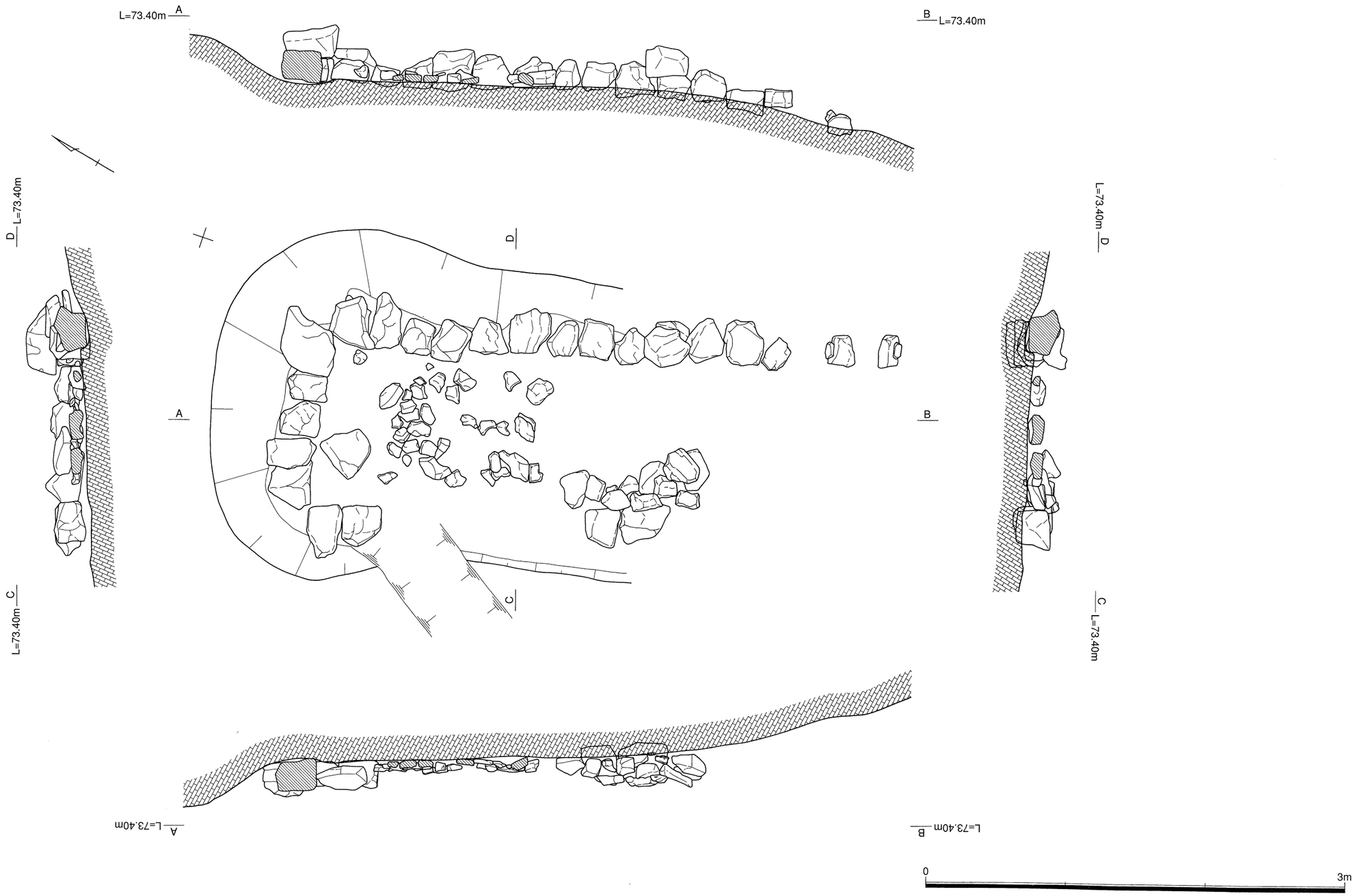
第７図　SM1001石室土層断面図



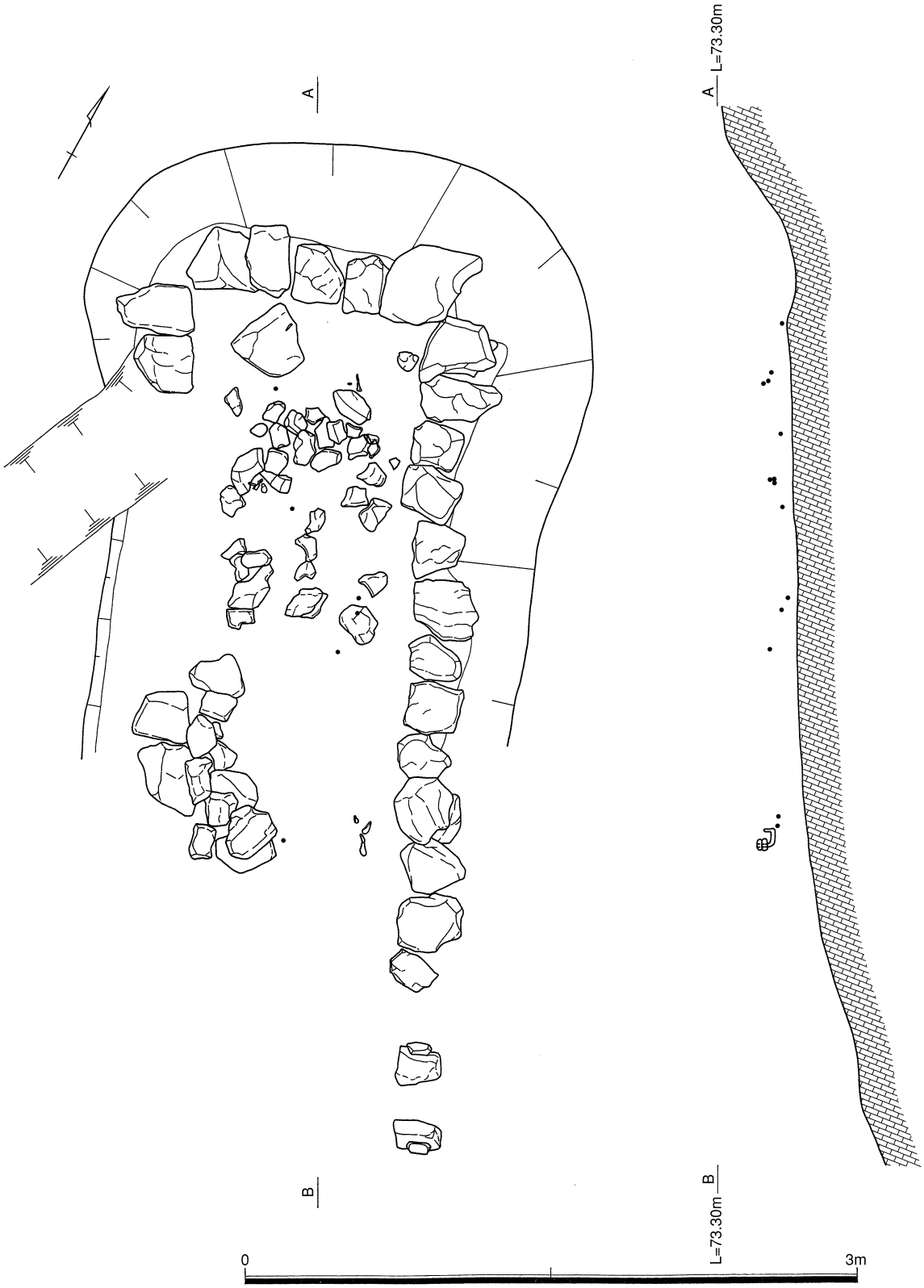
第８図　SM1001出土遺物



第９図　SM1002周辺地形平面図

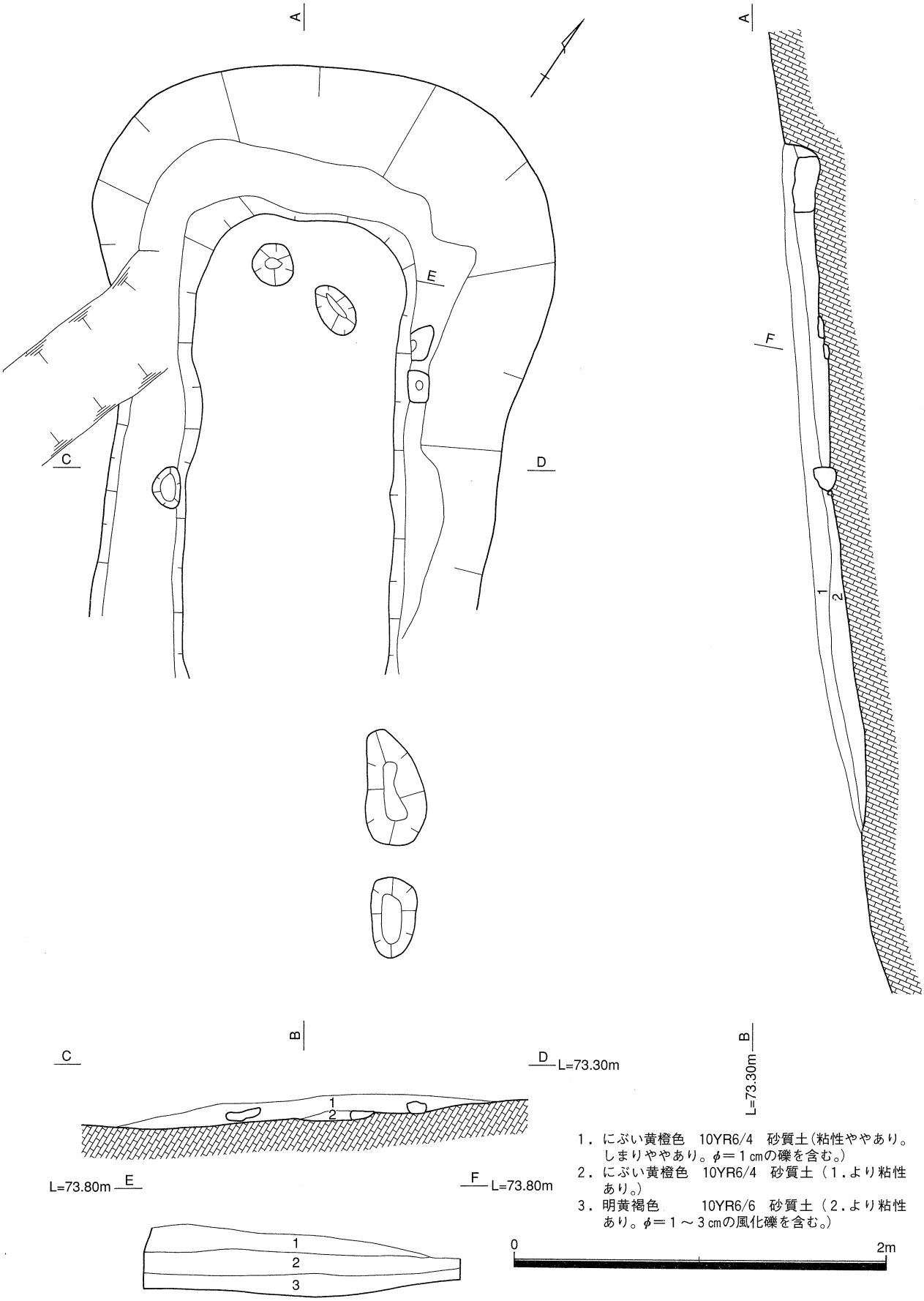


第10図　SM1002石室平・断面図

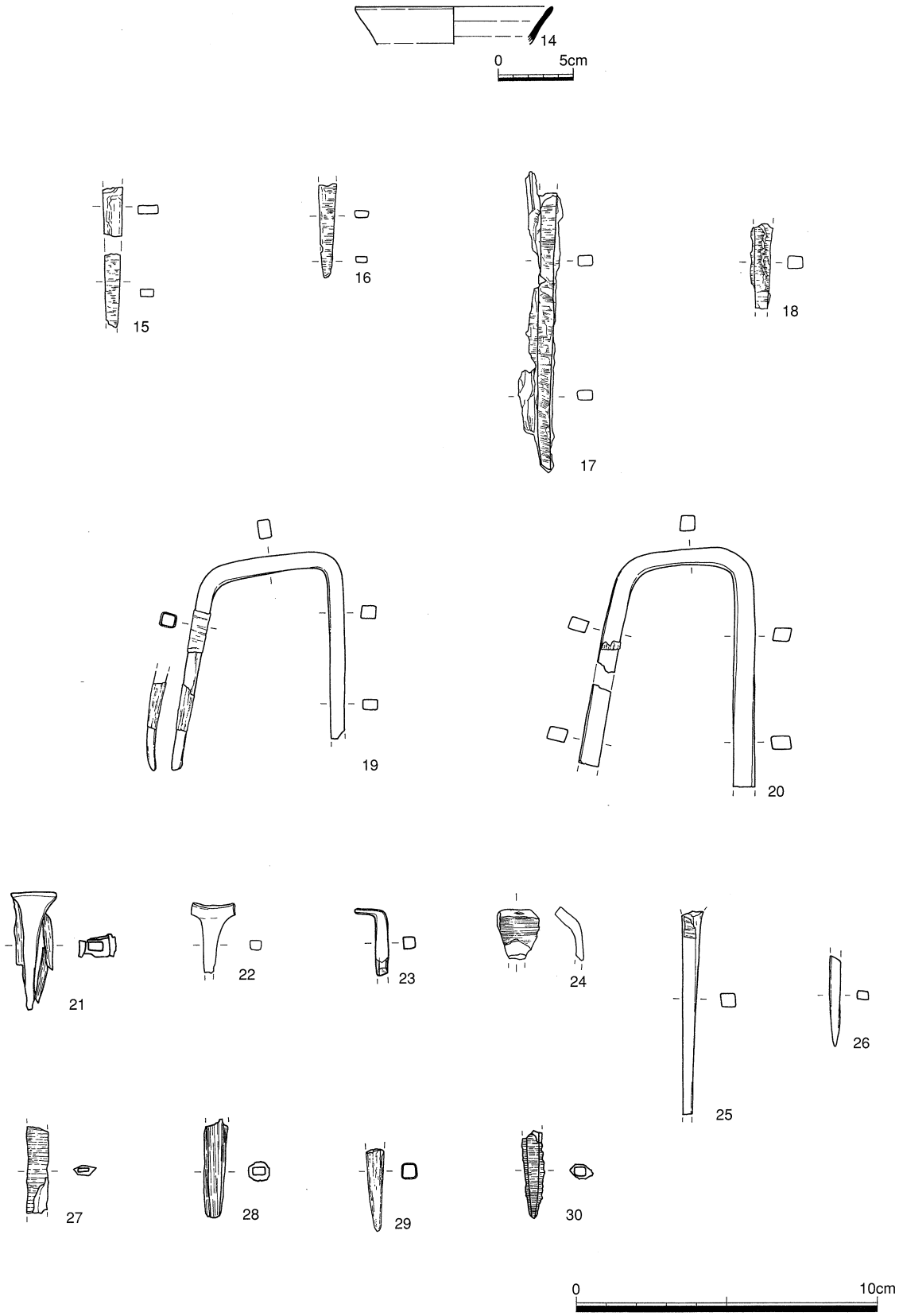


第11図　SM1002遺物出土分布状況ドット図

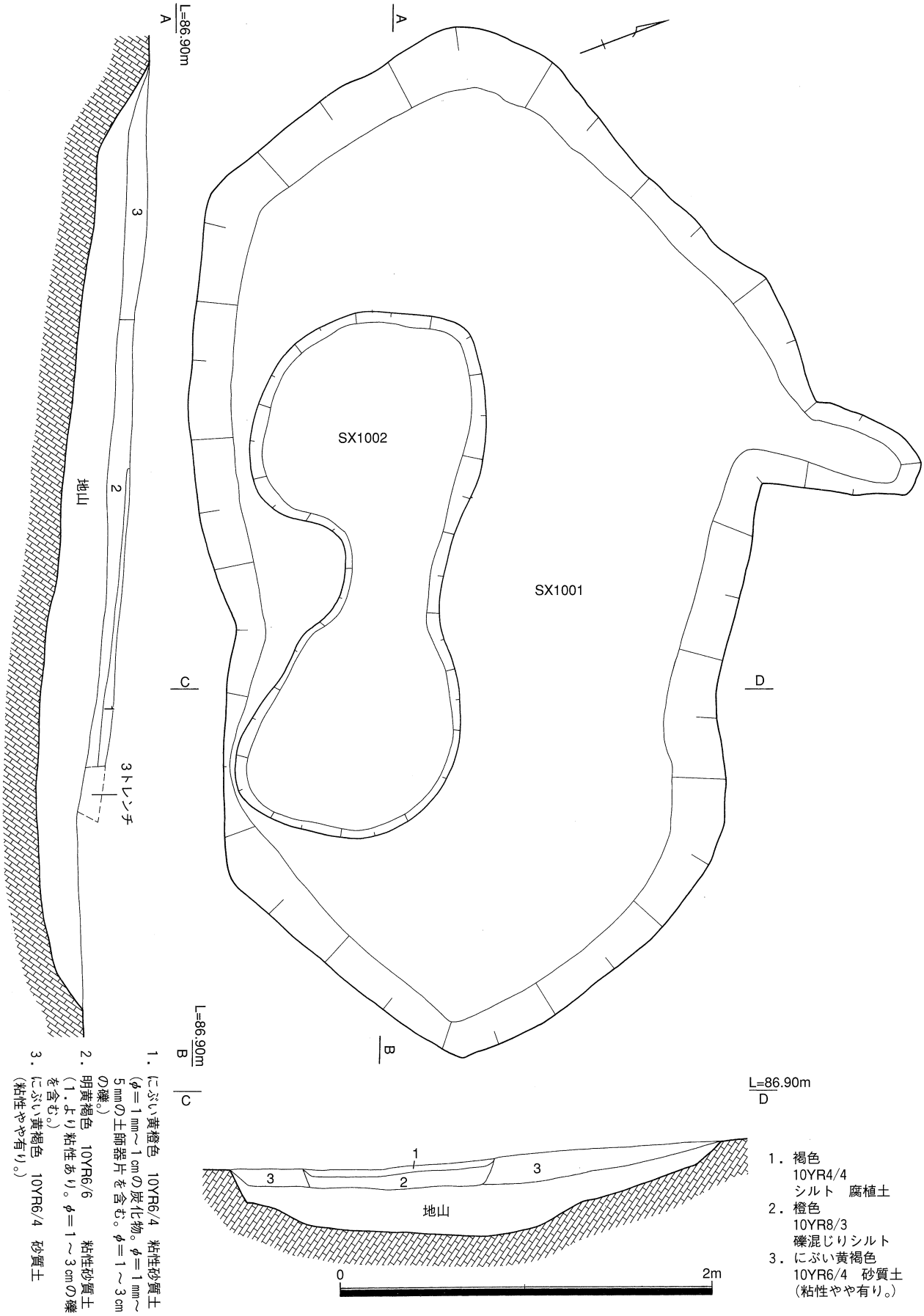
第12図　SM1002石室基底部平面図



第13図　SM1002石組除去後平・土層断面図



第14図　SM1002出土遺物



第15図　SX1001・1002平・断面図

SX1001（第15図）

浅い窪地状の遺構である。平面形はややいびつな楕円形状を呈する。浅い窪地状の自然地形に周辺の土砂が堆積したものと見られ、人為的な遺構の可能性は低い。

出土遺物

若干の須恵器小片が出土したが、実測可能な遺物は無かった。

SX1002（第15図）

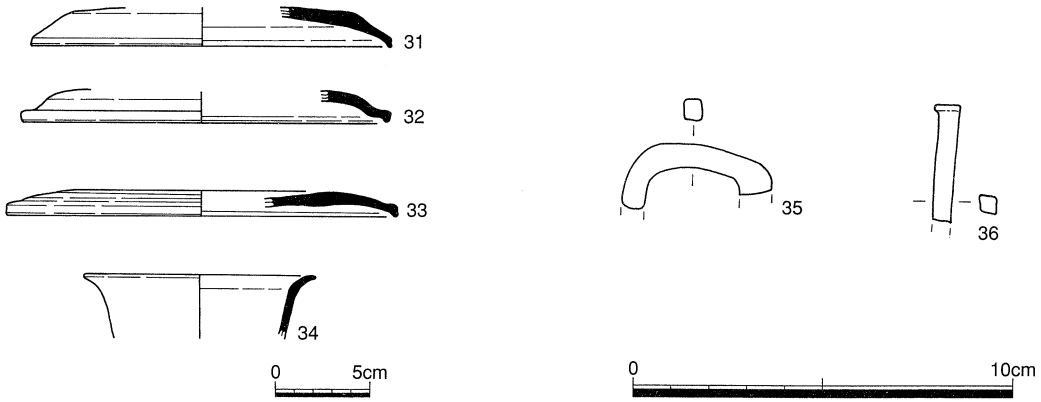
SX1001と切り合う遺構である。SX1001同様、浅い窪地状を呈し、いびつな楕円形状を呈する。

出土遺物

若干の須恵器小片が出土したが、実測可能な遺物は無かった。

包含層出土遺物（第16図）

須恵器の蓋等が出土している。いずれも小片のため、全容は不明であるが、7世紀後半以降、8・9世紀頃のものと考えられる。



第16図　包含層出土遺物

（3）まとめ

検出された2基の古墳は共に削平が著しいが、基底部の一部が遺存していた。詳細な時期決定は困難であるが、2基とも主体部に横穴式石室をもつ古墳であったと思われ、築造年代は6世紀末～7世紀初頭頃と考えられる。

2号墳石室床面上から若干の須恵器片が出土している。出土遺物から2基の石室は、6世紀末に築かれたものと考えられる。

川端馬越古墳群
第１表　出土遺構一覧表
SM

遺構名	グリッド	墓壙平面形態	墓壙断面形態	墓壙長軸（m）	墓壙短軸（m）	墓壙深度（m）	石室長軸（内法m）	石室短軸（内法m）	石室深度（内法cm）	主軸方向	備　　考
SM1001	G-8	隅丸長方形	D字状（浅い台形状）	2.5	1.6	0.25	1.5	0.9	15	N−15°−W	横穴式石室墓。
SM1002	N-12	隅丸長方形	D字状（浅い台形状）	4.6	2.1	0.25	2.5	0.9	20	N−18°−W	横穴式石室墓。 羨道部が右側側壁部一段目約１mが残存。

第２表　出土遺物観察表
SM1001（鉄器・鉄製品）

報告書掲載番号	遺　構	出土地点	層　位	器　種	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重量（g）	その他の法量（cm）	残　存　率	部　位	備　考
1	SM1001		表土下	鉄鏃（柄）	5.8	0.4	0.4	3.8		1/2	茎部	木質付着。 木目縦方向。
2	SM1001		表土下	鉄鏃（柄）	4.0	0.4	0.4	2.0				木質付着。 木目縦方向。
3	SM1001		表土下	釘	5.1	0.3	0.2	3.0		1/1		木質付着。 木目縦方向。
4	SM1001		２層	釘	3.3	0.5	0.4	2.5		1/2	頭部	
5	SM1001		２層	釘	2.3	1.0	0.5	3.1		1/3	頭部	
6	SM1001		２層	釘	1.7	0.4	0.4	2.0		1/3	頭部	
7	SM1001		基底部 列石直下	釘	5.5	0.7	0.5	5.0		2/3	先端部	木質付着。 木目横方向。
8	SM1001		２層	釘	3.3	0.5	0.5	1.5		1/2	先端部	木質付着。 木目横方向。
9	SM1001		２層	釘	2.6	0.5	0.5	2.6				木質付着。 木目横方向。
10	SM1001		基底部 列石直下	釘	2.4	0.6	0.4	1.2				木質付着。 木目縦方向。
11	SM1001		２層	釘	1.3	0.4	0.4	0.4				
12	SM1001		１層下	釘	2.9	0.6	0.3	1.9		1/3	先端部	木質付着。 木目縦方向。
13	SM1001		２層	釘	2.2	0.6	0.4	0.9		1/3	先端部	木質付着。 木目横方向。

SM1002（鉄器・鉄製品）

報告書掲載番号	遺　構	出土地点	層　位	器　種	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重量（g）	その他の法量（cm）	残　存　率	部　位	備　考
15	SM1002		埋土	鉄鏃	4.6	0.6	0.6	3.2		1/3		木質付着。
16	SM1002		埋土	鉄鏃	3.1	0.6	0.3	1.7		1/3	茎部	木質付着。 木目横方向。
17	SM1002		埋土	鉋	9.1	0.5	0.3	20.5				木質付着。 木目横方向。
18	SM1002		埋土	鉋	2.8	0.6	0.4	3.3				木質付着。 木目横方向。
19	SM1002		表土下	鑿	7.2	0.6	0.7	29.3		9/10		木質付着。
20	SM1002		埋土	鑿	13.0	0.7	0.5	41.5		4/5	身	木質付着。
21	SM1002		埋土	釘	3.9	0.2	0.8	4.2		1/3	頭部	木質付着。
22	SM1002		埋土	釘	2.4	0.5	0.3	1.6		1/2	頭部	
23	SM1002		埋土	釘	2.2	0.4	0.4	3.7		1/3	頭部	
24	SM1002		埋土	不明	1.9	1.4	0.4	2.4				
25	SM1002		埋土	釘	6.7	0.6	0.5	8.4				木質付着。 木目横方向。
26	SM1002		埋土	釘	3.0	0.4	0.3	1.8		1/2	先端部	
27	SM1002		埋土	釘	2.9	0.7	0.4	1.7				木質付着。 木目横方向。
28	SM1002		埋土	釘	3.3	0.8	0.6	3.4		1/3	先端部	木質付着。 木目縦方向。
29	SM1002		埋土	釘	2.8	0.7	0.6	1.8		1/3	先端部	木質付着。 木目縦方向。
30	SM1002		埋土	釘	2.9	0.8	0.5	1.7		1/3	先端部	木質付着。 木目横方向。

包含層（鉄器・鉄製品）

報告書掲載番号	遺構	出土地点	層位	器種	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重量（g）	その他の法量（cm）	残存率	部位	備考
35		T-3・4	包含層	鎹	4.0	1.7	0.6	7.9		1/3	身	
36		T-3・5	包含層	釘	3.1	0.4	0.5	5.1		1/2	頭部	

SM（土器）

報告書掲載番号	遺構	出土地点	層位	器種	残存率	口径（cm）	体部最大径（cm）	底径（cm）	頸部（脚柱）径（cm）	器高・残存高（cm）	その他の法量（cm）	部位	形態	調整	含有物組成	色調	備考
14	SM1002	N-12	埋土	須恵器杯	口縁部1/6	13.0		10.0		2.4		口縁部	体部外上方に直線的に立ち上がり、口縁部で僅かに外反し、端部を丸く収める。	外面：ナデ。 内面：ナデ。	石英・長石	外面：灰 内面：灰	焼成良好。

包含層（土器）

報告書掲載番号	遺構	出土地点	層位	器種	残存率	口径（cm）	体部最大径（cm）	底径（cm）	頸部（脚柱）径（cm）	器高・残存高（cm）	その他の法量（cm）	部位	形態	調整	含有物組成	色調	備考
31	№9トレンチ		2層	須恵器蓋	口縁部1/16	19.0				2.0		口縁部	扁平な器形で、緩やかなカーブで口縁に至り、口縁端部を丸く収める。	外面：ナデ。 内面：ナデ。	石英	外面：灰 内面：灰黄	焼成良好。
32	№38トレンチ		2層	須恵器蓋	口縁部1/30	19.0		19.4		1.7		口縁部	扁平な器形で、緩やかなカーブで口縁に至り、口縁端部を丸く収める。	外面：ロクロナデ。 内面：ロクロナデ。	石英	外面：灰 内面：灰	焼成良好。
33	№3トレンチ		2層 腐植土直下 表土下	須恵器蓋	全体1/6	20.4	20.7			1.3		天井部～口縁	扁平な器形で、緩やかなカーブで口縁に至り、口縁端部を丸く収める。	外面：ロクロナデ。天井部ケズリ。 内面：ロクロナデ。	石英	外面：灰 内面：灰白	焼成良好。
34	№3トレンチ		2層	須恵器壺	口縁部1/18	12.0				3.3		口縁部	口縁部外上方に立ち上がり、口縁端部で外反し、丸く収める。	外面：ロクロナデ。 内面：ロクロナデ。	石英	外面：暗青灰 内面：灰白	焼成良好。

Ⅶ　桧はちまき山遺跡

例　言

1　本章は四国横断自動車道建設に伴う桧はちまき山遺跡の発掘調査報告書である。

2　所在地　鳴門市大麻町桧字西谷山17－１他

3　発掘調査期間及び報告書作成の実施期間は次の通りである。

発掘調査期間　　平成11年９月１日～平成11年11月30日
　　平成12年４月１日～平成12年12月31日
報告書作成期間　平成14年４月１日～平成16年３月31日

調査対象面積　平成11年度　調査対象面積2,760㎡　試掘面積　400㎡
　　平成12年度　本調査5,200㎡

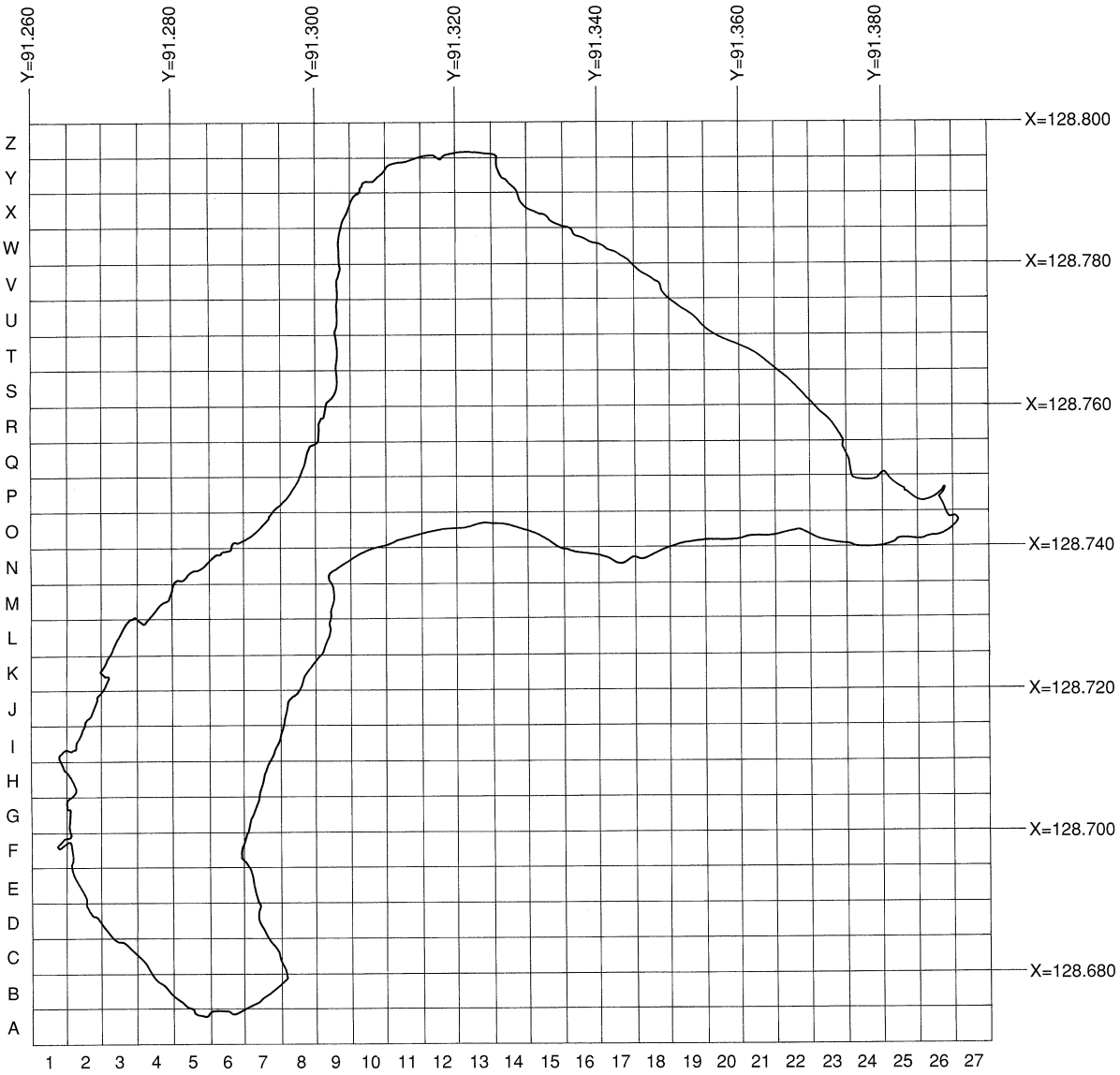
4　遺物番号・挿図番号・図版番号は通し番号とした。遺物番号は本文・挿図・表・図版と一致する。

5　本遺跡の地理的・歴史的環境については、「Ⅱ　調査地点の立地と環境」を参照されたい。

1　調査の経過

（1）調査の経過（Ⅰ-第1図およびⅡ-第1・4・13図）

桧はちまき山遺跡は阿讃山脈南麓、鳴門市大麻町桧字西谷山17-1他の標高56～86mの二股に分かれた尾根上に所在する。この地域は宮谷古墳（前方後円墳）の所在する徳島市国府町の気延山周辺と並び、周辺一帯には多数の古墳群が密集する地域として周知され、以前から古墳群の存在が指摘されている地域である。平成3年度に、調査地点の南に隣接する民間住宅地開発事業に伴い、鳴門市教委が発掘調査を実施し、弥生時代中期の集落を確認している。事前の分布調査において同時期の遺構の存在する可能性が考えられた。平成11年度に四国横断自動車道建設に伴い、分布調査で推定された遺跡の範囲の内2,760m²を調査対象面積として試掘調査を実施した。調査に際し、現況の地形測量を実施した。試掘トレンチの設定に際しては、尾根筋に沿ってメイントレンチを設定し、それに直交するようにサブトレン



第1図　グリッド配置図

チを設定した。また遺構・遺物の出土状況に応じ部分的にトレンチを拡張して遺構の広がりの把握に努めた。試掘調査は平成11年９月１日～11月30日にかけて人力掘削によるトレンチを400㎡実施した。その結果、ほぼ調査区全域にわたり弥生時代中期の土器・石器の出土がみられ、弥生時代の高地性集落であることが確認され、当初予定の調査対象面積より東側の斜面部にも遺構が広がることが明らかになった。試掘調査の結果を受けて、協議を行い、平成12年度に5,200㎡の範囲を対象に本調査を実施した。本調査は平成12年４月１日～12年12月31日の期間実施された。

（２）発掘調査の方法（第１図）

調査を始めるにあたり、グリッドの配置に際しては、発掘統一基準にならい、第Ⅳ系国土座標を基準とし、５ｍメッシュを１グリッドとして調査対象地を包み込む形で設定した。南西隅を基準として北にＡ・Ｂ・Ｃ…、東に１・２・３…の順に記号・番号をふり、その組み合わせで各グリッド名を表すこととした。遺構記号・番号は検出時に順次決定した。

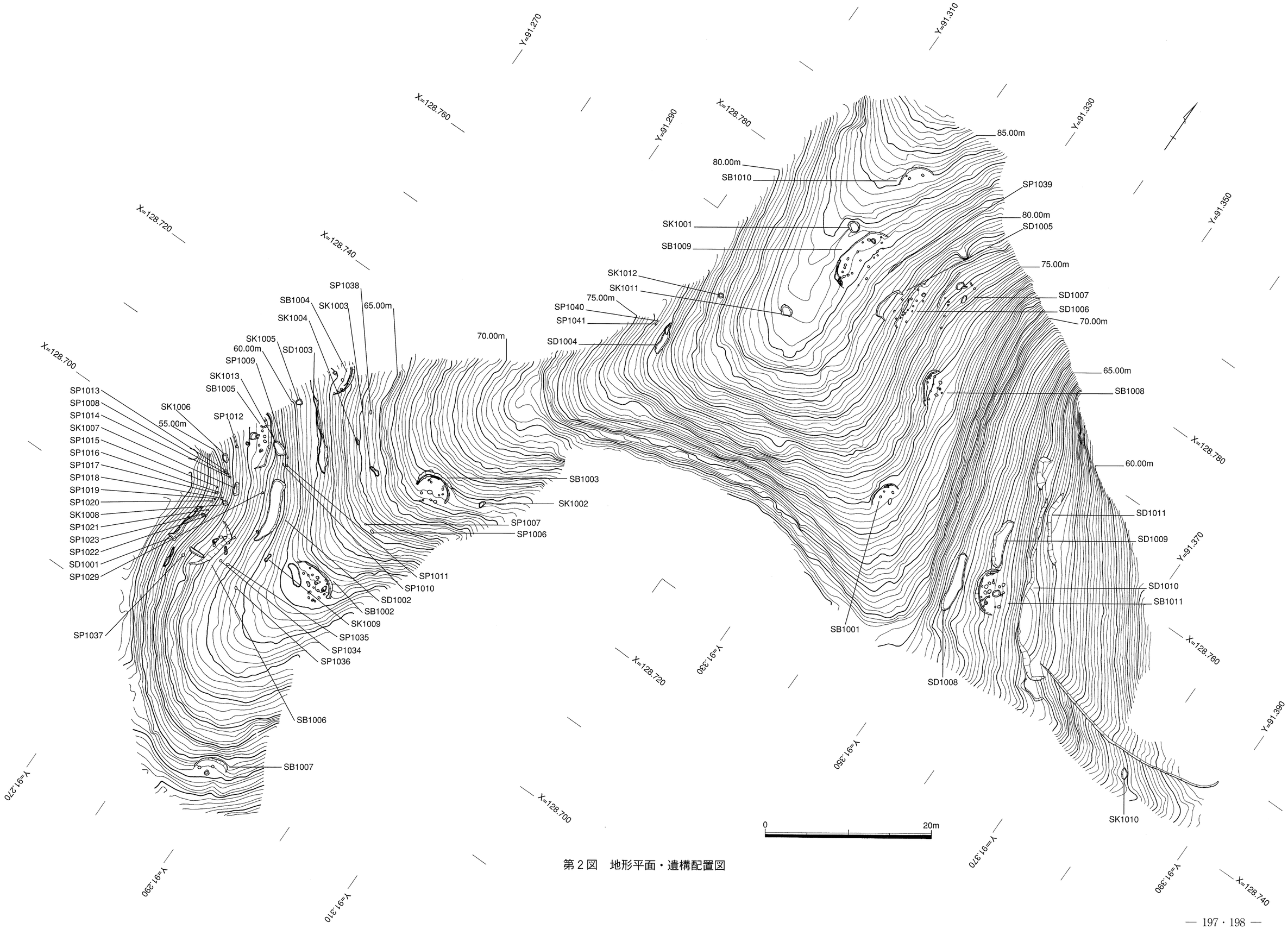
（３）調査日誌抄

1999年

９月１日　事務所引越し。
９月２日　事前準備。
９月３日　図面作成。
９月８日　トレンチ掘削開始。図面作成。図面整理。
11月26日　トレンチ掘削終了。埋め戻し。後片付け。
11月30日　図面整理。引越し。

2000年

４月１日　伐採終了。調査前写真撮影。地形平板測量開始。
５月16日　重機搬入。
５月17日　重機掘削開始。
５月30日　包含層掘削開始。
６月１日　包含層掘削（西側尾根）。
７月４日　重機掘削（北側尾根）。
７月７日　遺構面精査、竪穴住居跡・段状遺構検出（西側尾根）。包含層掘削（北側尾根）。
７月17日　遺構検出状況写真撮影（西側尾根）。重機掘削（東側尾根）。
７月18日　遺構配置図作成（西側尾根）。段状遺構検出（北側尾根）。
７月19日　遺構掘削（西側尾根）。遺構面精査。竪穴住居跡検出（北側尾根）。
８月23日　包含層掘削（東側尾根）。
８月30日　遺構検出状況写真撮影（北側尾根）。
８月31日　遺構配置図作成（北側尾根）。
９月８日　竪穴住居跡検出（東側尾根）。
９月26日　遺構面精査、段状遺構検出（東側尾根）。
９月27日　遺構検出状況写真撮影（東側尾根）。
９月28日　遺構掘削（北側尾根）。遺構配置図作成（東側尾根）。
10月24日　竪穴住居跡等遺構掘削（東側尾根）。
11月11日　航空写真撮影事前準備。航空写真撮影。遺構完掘状況写真撮影。
12月31日　調査現場作業終了。現場撤収。

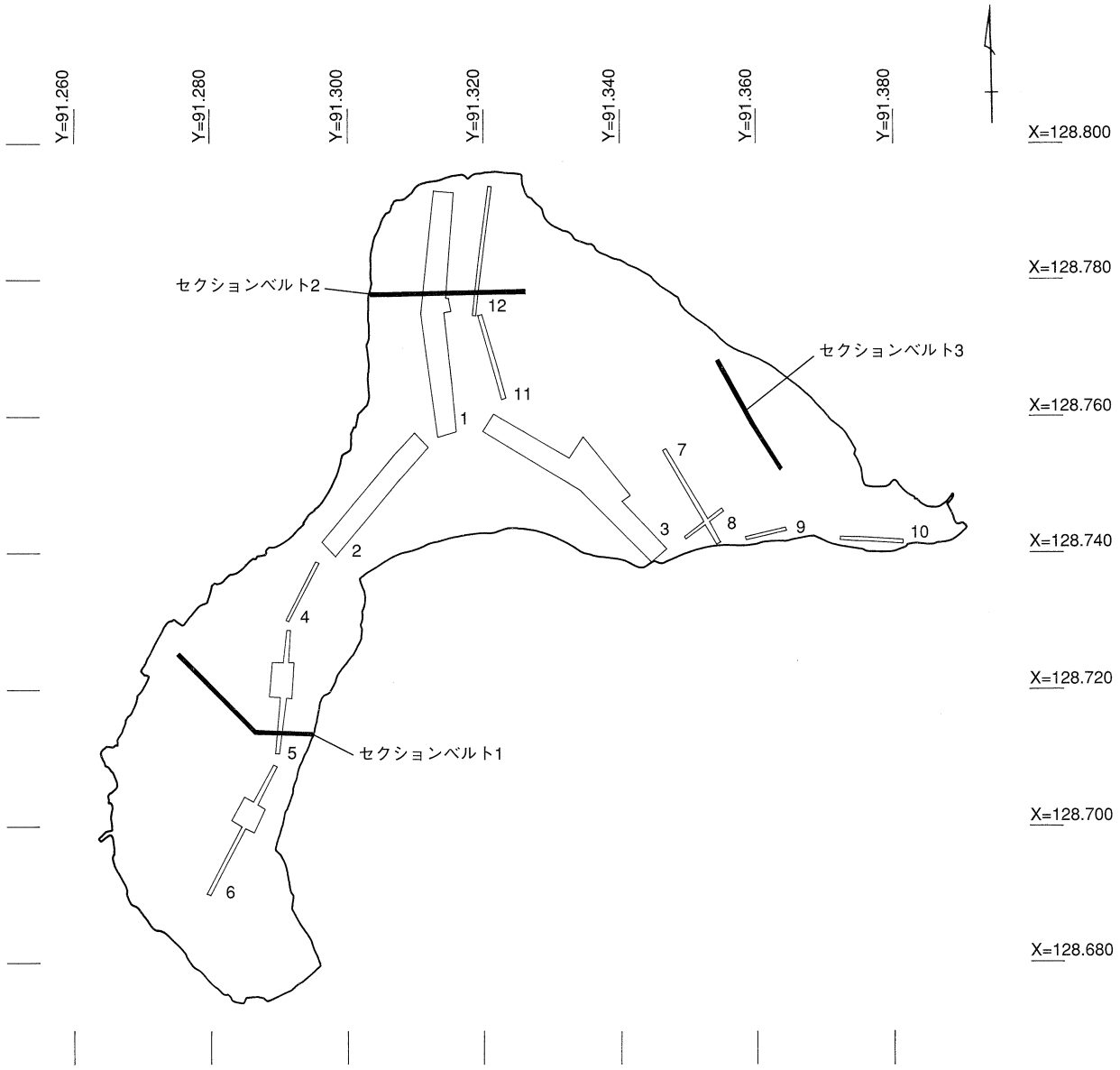


第２図　地形平面・遺構配置図

2　調査成果

（1）遺跡の概要（第２図）

桧はちまき山遺跡は四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査により存在が確認された。桧はちまき山遺跡は、鳴門市大麻町桧字西谷山の阿讃山脈南麓、標高56～86m の尾根上に位置し、北から南への傾斜面と西から東への傾斜面に大きく分かれる。麓（平地部）からの比高差は約36～56m を測る。調査区からは竪穴住居跡11軒の他、段状遺構11基が出土した。出土遺物から弥生時代中期末～後期初頭頃の高地性集落であることが確認された。また調査区南側の平野部では平成３年度に鳴門市によって発掘調査が実施され、弥生時代中期以降の竪穴住居群が確認されている。



第３図　トレンチ配置図

（2）基本層序（第3・4図）

土層堆積状況はトレンチによって微差はあるが、基本的に1．腐植土　2．風化砂礫土　3．風化砂礫土（包含層・遺構面）　4．地山（岩盤）である。斜面部分は急峻な地形のため非常に早い速度で風化砂礫土が堆積していた。基本層序は以下の通り調査区全域でほぼ対応する。

1．…黒褐色　7.5Y2/2　砂質土（表土、腐植土。）
2．…黄褐色　10YR5/6　砂質土
3．…明黄褐色　10YR6/6　砂質土（岩盤・和泉層群の砂質泥岩風化礫を含む。遺物包含層。）
4．…にぶい黄褐色　2.5Y6/4　砂質土（岩盤・和泉層群の砂質泥岩風化層。）

（3）遺構と遺物

阿讃山脈南麓の標高56～86mの尾根上に位置し、北から南への傾斜面と西から東への傾斜面に大きく分かれる。麓（平地部）からの比高差は約36～56mを測る。調査の結果、弥生時代中期末～後期初頭の高地性集落であることが確認された。主な遺構としては、北から南へ傾斜する西側尾根上からは6軒の竪穴住居跡、段状遺構4基が、西から東へ傾斜する東側の斜面部からは竪穴住居跡5軒、段状遺構7基が検出された。その他の遺構としては、性格不明遺構、土坑13基、柱穴36基が出土した。

遺物点数は、9,300点、28ℓコンテナで55箱の出土量であった。本遺跡における出土遺物の大半は包含層および段状遺構から出土したものが大半を占める。急峻な傾斜地のためか、出土土器は、小片で摩滅が激しく、調整の判別するものは少ないゆえ、器種等の認定に誤りがあった場合は御容赦されたい。最終的に報告書に掲載したのは、土器94点・石器250点であった。

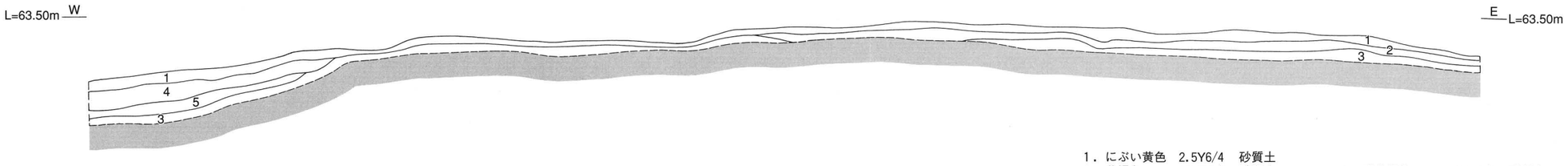
弥生時代

竪穴住居跡（SB）（第2図）

本遺跡で出土した竪穴住居跡は、計11軒である。尾根頂部あるいは斜面地形コンタラインに沿うように構築されている。主柱は6本が主体となるが、全容が分かるものは少ない。山頂部の平坦面には確認されていない。住居内の遺物の出土量が少なく、各住居とも単一時期であることから、集落の存続期間が短期であったことが確認される。当初、竪穴住居跡としたものは13軒であったが、その後の検討で、竪穴住居跡とした中には平面プランが曖昧なものもあり、必ずしも竪穴住居跡と断定し難いものがあったのも否めない事実である。最終的に住居施設として評価し得るものは11軒であると結論付けた。時期的には出土遺物等から弥生時代中期末～後期初頭頃と考えられる。

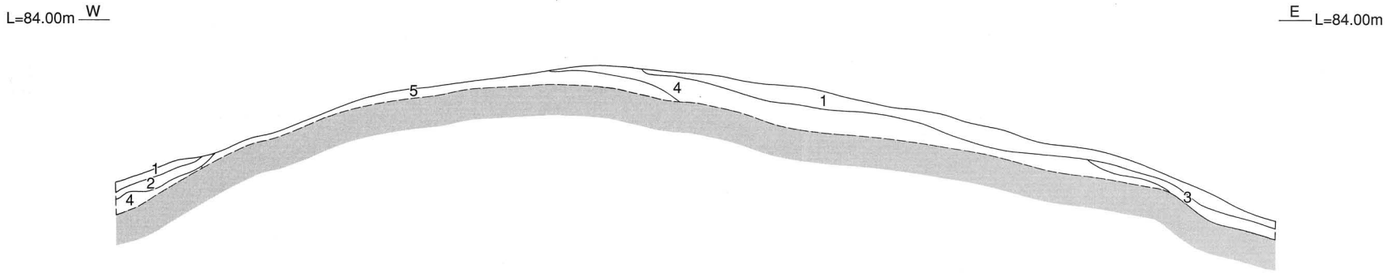
調査区の制限のため確認することはできなかったが、遺跡の位置する尾根の北側の東・西斜面上に竪穴住居群が展開している可能性がある。

セクションベルト1



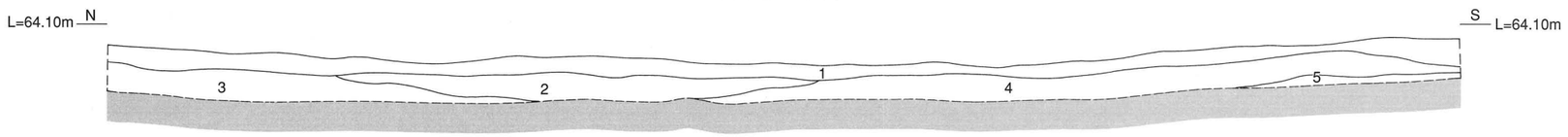
1．にぶい黄色　2.5Y6/4　砂質土
2．黄褐色　10YR5/6　砂質土
3．明黄褐色　10YR6/6　砂質土
4．明黄褐色　10YR6/6　砂質土
5．にぶい黄橙色　10YR6/4　砂質土

セクションベルト2



1．褐色　10YR4/6　砂質土
2．黄褐色　10YR5/6　砂質土
3．明黄褐色　10YR6/6　砂質土
4．明黄褐色　10YR6/8　砂質土（遺物包含層）
5．黄褐色　10YR5/6　砂質土（岩盤）

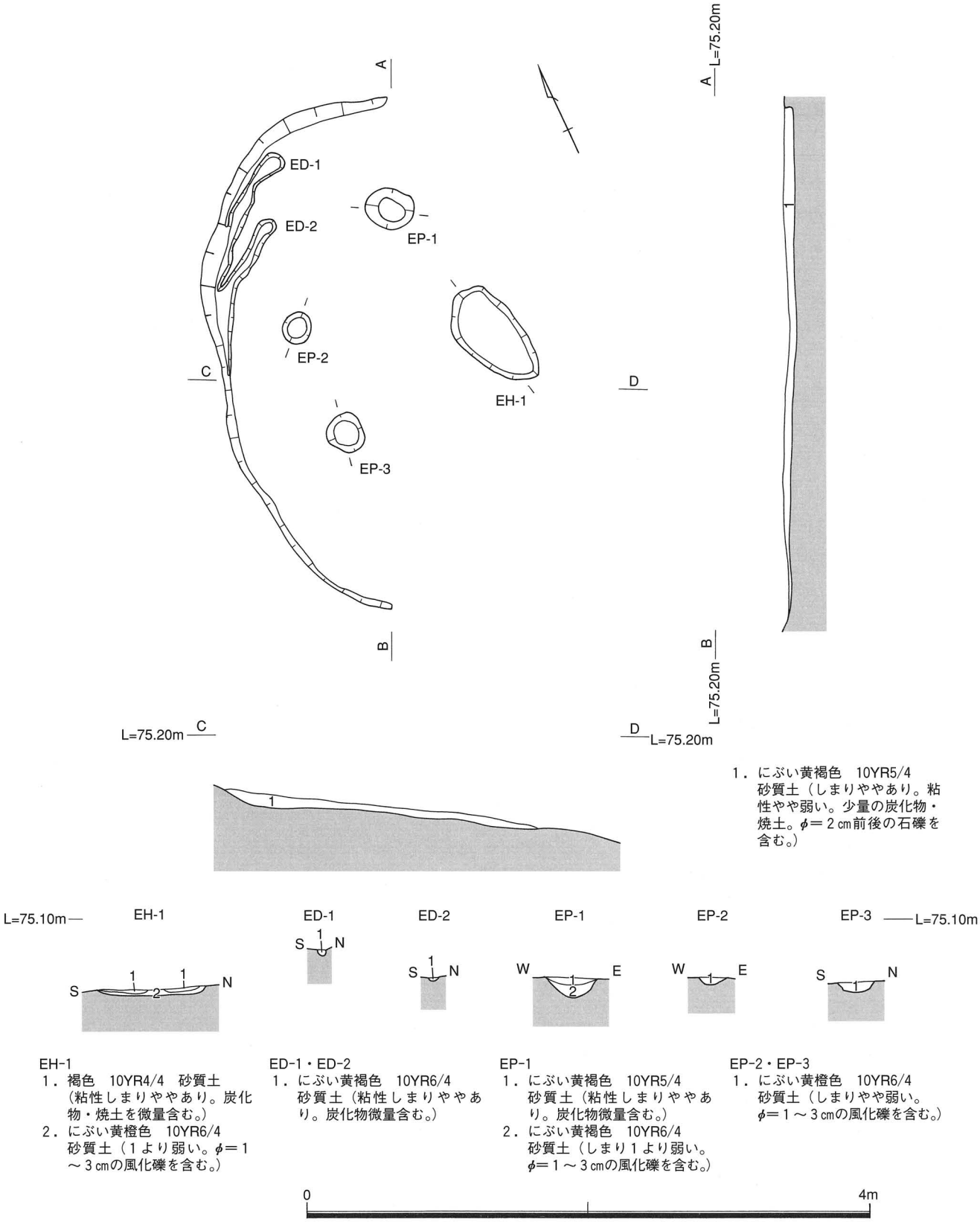
セクションベルト3



1．にぶい黄色　2.5YR6/4　砂質土
2．浅黄色　2.5Y7/4　砂質土（遺物包含層）
3．浅黄色　2.5Y7/4　砂質土（遺物包含層）
4．にぶい黄橙色　10YR6/4　砂質土（遺物包含層）
5．にぶい黄橙色　10YR7/4　砂質土（遺物包含層）

0　4m

第４図　トレンチ土層断面図



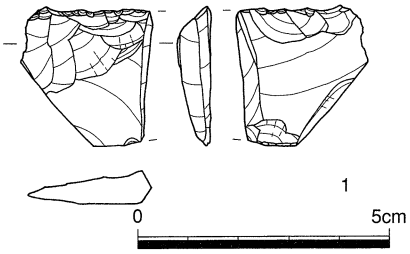
第5図　SB1001平・断面図

SB1001（１号竪穴住居跡）（第５図）

調査区北部、Q-16グリッド、標高75.00m前後の南西向きの斜面上に位置する。南側部分は一部消失しており、断面形はＬ字状を呈する。平面プランは隅丸長方形状を呈する。残存状態は比較的良好である。規模は現存長で長軸3.72m、短軸2.22m、最大深度は９㎝を測る。主柱穴は６本と思われ、中央部には炉跡も確認された。周壁溝も部分的に検出されている。

出土遺物（第６図）

出土遺物は少ない。弥生土器片もわずかに出土したが、いずれも細片のため実測可能なものはなかった。１はサヌカイトの楔形石器である。炉跡より出土しているが、被熱はしていない。



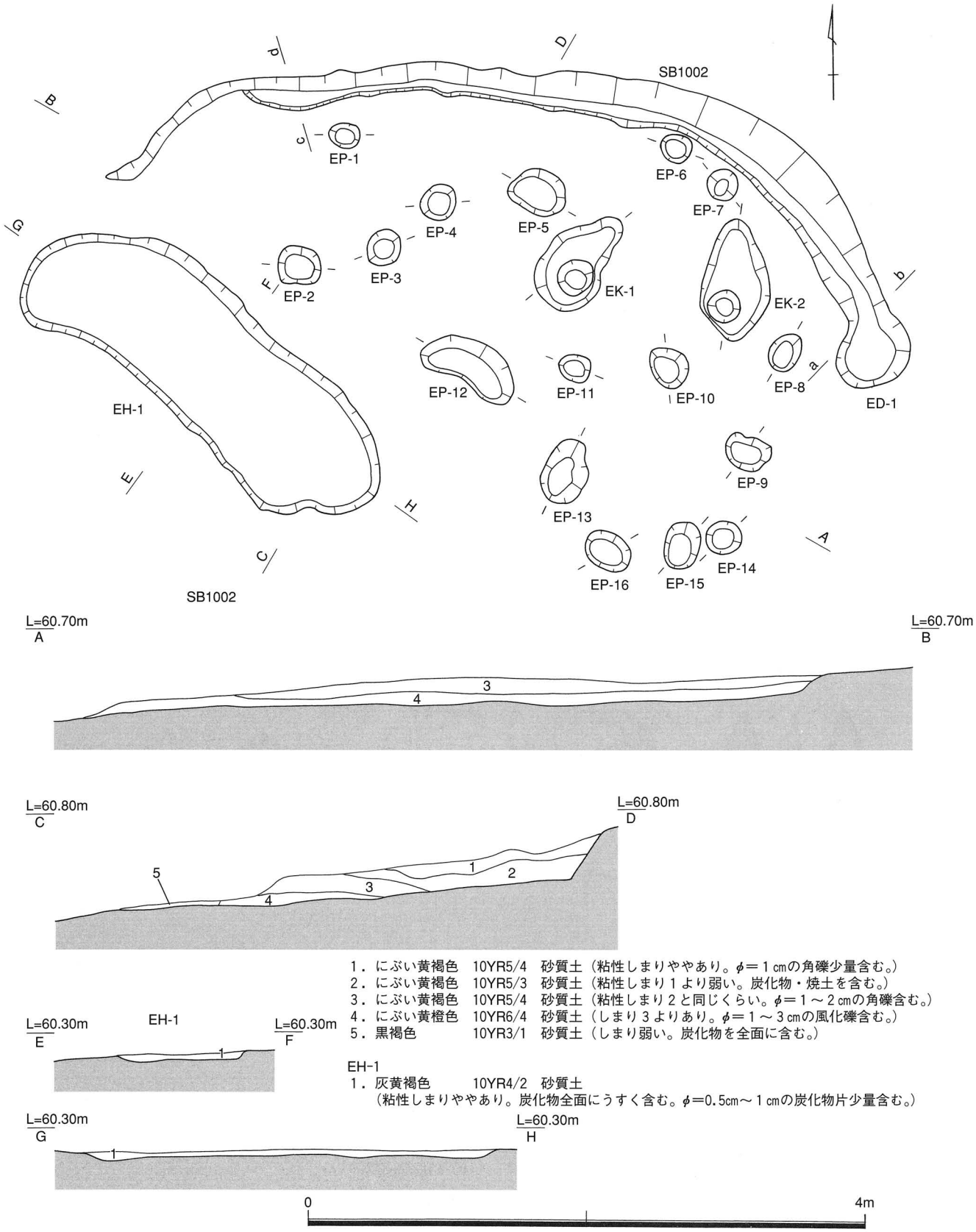
第６図　SB1001出土遺物

SB1002（２号竪穴住居跡）（第７・８図）

調査区中央部、G・H-５・６グリッド、標高61.00m前後の南西向きの斜面上に位置する。直径5.0m前後の円形であったと思われるが、西側部分は一部消失しており、半円形の平面プランをとどめる。規模は現存長で長軸5.32m、短軸3.46m、最大深度は28㎝を測り、断面形はＬ字状を呈する。主柱穴は６本と思われる。周壁溝は南側で不明瞭になっている。不明瞭ではあるが、西側で炉跡と思われる炭化物の拡がりが確認された。

出土遺物（第９図）

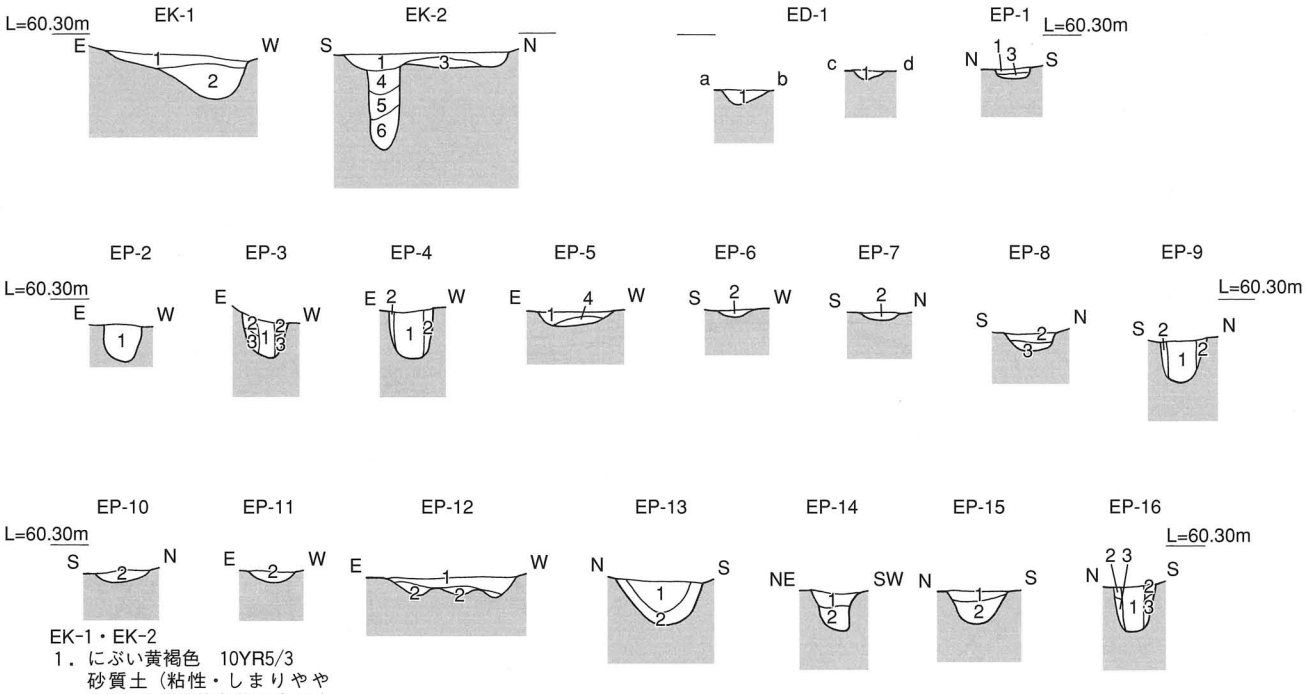
弥生土器片もわずかに出土したが、いずれも細片のため実測可能なものはない。２は床面直上より出土したサヌカイトの石鏃である。３は石核、４は使用痕のある剥片、５は剥片である。石材はいずれもサヌカイトである。



1．にぶい黄褐色　10YR5/4　砂質土（粘性しまりややあり。φ＝1㎝の角礫少量含む。）
2．にぶい黄褐色　10YR5/3　砂質土（粘性しまり1より弱い。炭化物・焼土を含む。）
3．にぶい黄褐色　10YR5/4　砂質土（粘性しまり2と同じくらい。φ＝1～2㎝の角礫含む。）
4．にぶい黄橙色　10YR6/4　砂質土（しまり3よりあり。φ＝1～3㎝の風化礫含む。）
5．黒褐色　10YR3/1　砂質土（しまり弱い。炭化物を全面に含む。）

EH-1
1．灰黄褐色　10YR4/2　砂質土
（粘性しまりややあり。炭化物全面にうすく含む。φ＝0.5㎝～1㎝の炭化物片少量含む。）

第7図　SB1002平・断面図



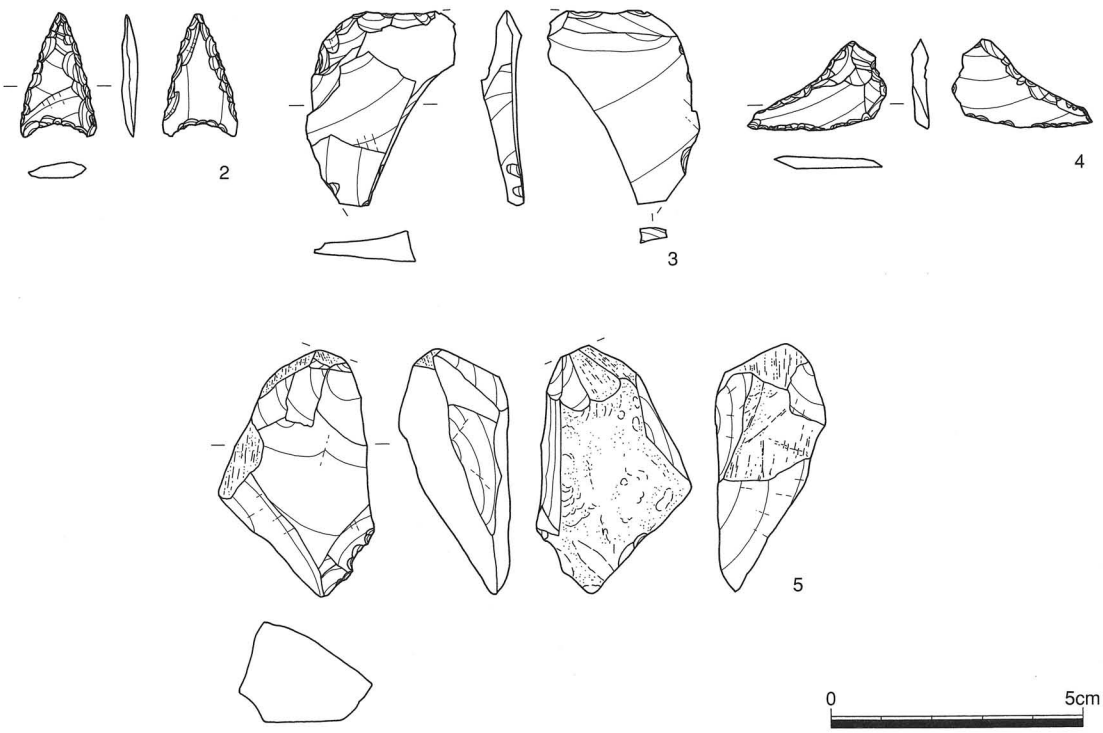
EK-1・EK-2
1．にぶい黄褐色　10YR5/3
砂質土（粘性・しまりややあり。少量の炭化物を含む。）
2．にぶい黄褐色　10YR5/3
砂質土（粘性・しまりややあり。φ＝5㎝前後の石礫を少量含む。）
3．にぶい黄橙色　10YR6/3
シルト（粘性・しまりあり。）
4．にぶい黄褐色　10YR4/3
砂質土（粘性・しまりややあり。炭化物を少量含む。）
5．灰黄褐色　10YR4/2
砂質土（粘性・しまり4より弱い。炭化物を少量含む。）
6．黒褐色　10YR3/2　砂質土（粘性・しまり5より弱い。炭化物を少量含む。）

ED-1
1．にぶい黄褐色　10YR5/3
砂質土（粘性しまりややあり。少量の炭化物を含む。）

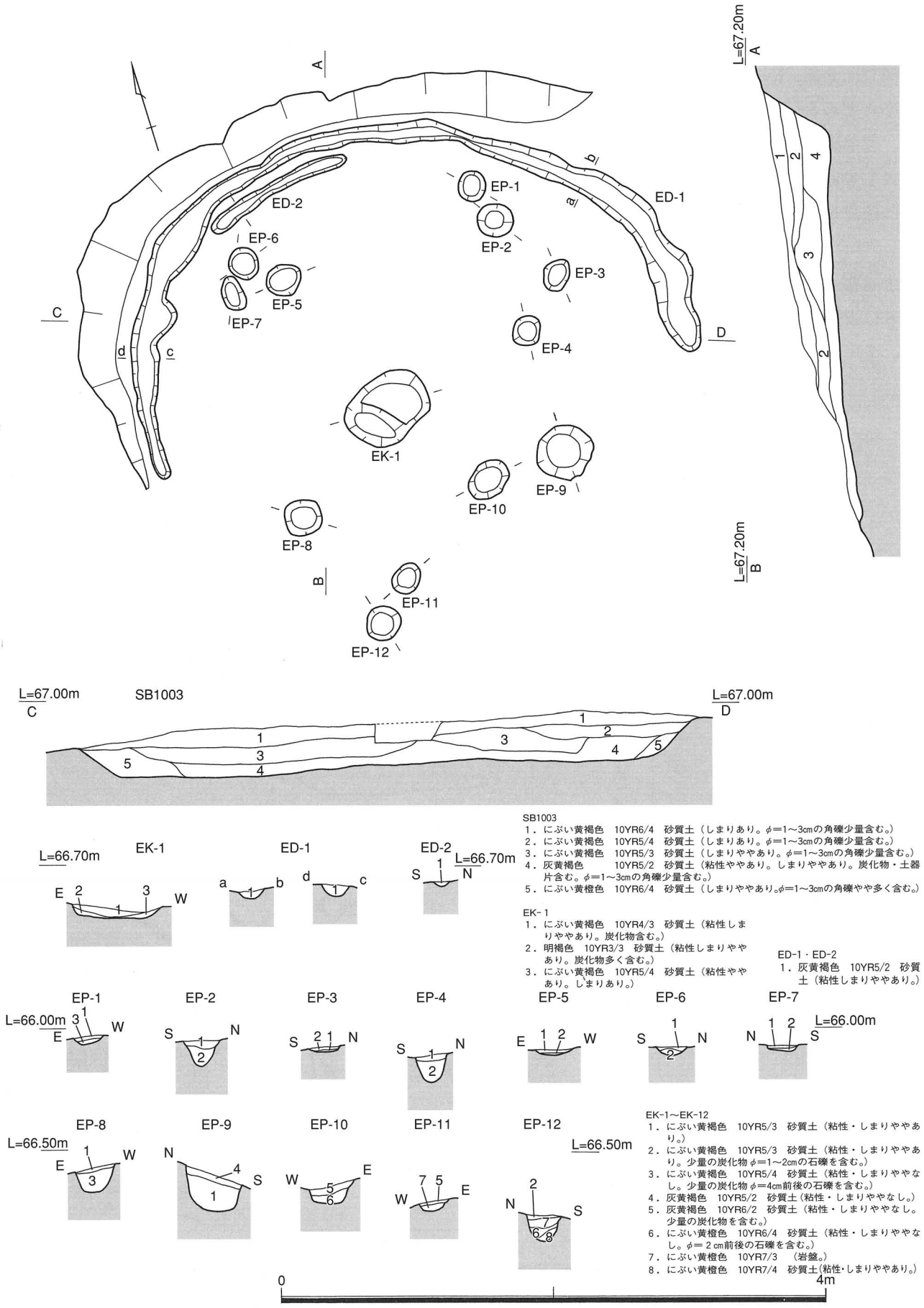
EP-1～EP-16
1．にぶい黄褐色　10YR5/3
砂質土（粘性しまりややあり。少量の炭化物を含む。）
2．にぶい黄褐色　10YR5/3
砂質土（粘性しまりややあり。少量の炭化物を含む。）
3．にぶい黄褐色　10YR5/4
砂質土（粘性しまりややあり。）
4．明黄褐色　10YR6/6
砂質土（粘性しまりややあり。φ＝1㎝前後の石礫を多く含む。）

0　1m

第8図　SB1002-EK・ED・EP断面図



第9図　SB1002出土遺物



SB1003
1．にぶい黄褐色　10YR6/4　砂質土（しまりあり。φ=1～3cmの角礫少量含む。）
2．にぶい黄褐色　10YR5/4　砂質土（しまりあり。φ=1～3cmの角礫少量含む。）
3．にぶい黄褐色　10YR5/3　砂質土（しまりややあり。φ=1～3cmの角礫少量含む。）
4．灰黄褐色　10YR5/2　砂質土（粘性ややあり。しまりややあり。炭化物・土器片含む。φ=1～3cmの角礫少量含む。）
5．にぶい黄橙色　10YR6/4　砂質土（しまりややあり。φ=1～3cmの角礫やや多く含む。）

EK-1
1．にぶい黄褐色　10YR4/3　砂質土（粘性しまりややあり。炭化物含む。）
2．明褐色　10YR3/3　砂質土（粘性しまりややあり。炭化物多く含む。）
3．にぶい黄褐色　10YR5/4　砂質土（粘性ややあり。しまりあり。）

ED-1・ED-2
1．灰黄褐色　10YR5/2　砂質土（粘性しまりややあり。）

EK-1～EK-12
1．にぶい黄褐色　10YR5/3　砂質土（粘性・しまりややあり。）
2．にぶい黄褐色　10YR5/3　砂質土（粘性・しまりややあり。少量の炭化物φ=1～2cmの石礫を含む。）
3．にぶい黄褐色　10YR5/4　砂質土（粘性・しまりややなし。少量の炭化物φ=4cm前後の石礫を含む。）
4．灰黄褐色　10YR5/2　砂質土（粘性・しまりややなし。）
5．灰黄褐色　10YR6/2　砂質土（粘性・しまりややなし。少量の炭化物を含む。）
6．にぶい黄橙色　10YR6/4　砂質土（粘性・しまりややなし。φ=2cm前後の石礫を含む。）
7．にぶい黄橙色　10YR7/3　（岩盤。）
8．にぶい黄橙色　10YR7/4　砂質土（粘性・しまりややあり。）

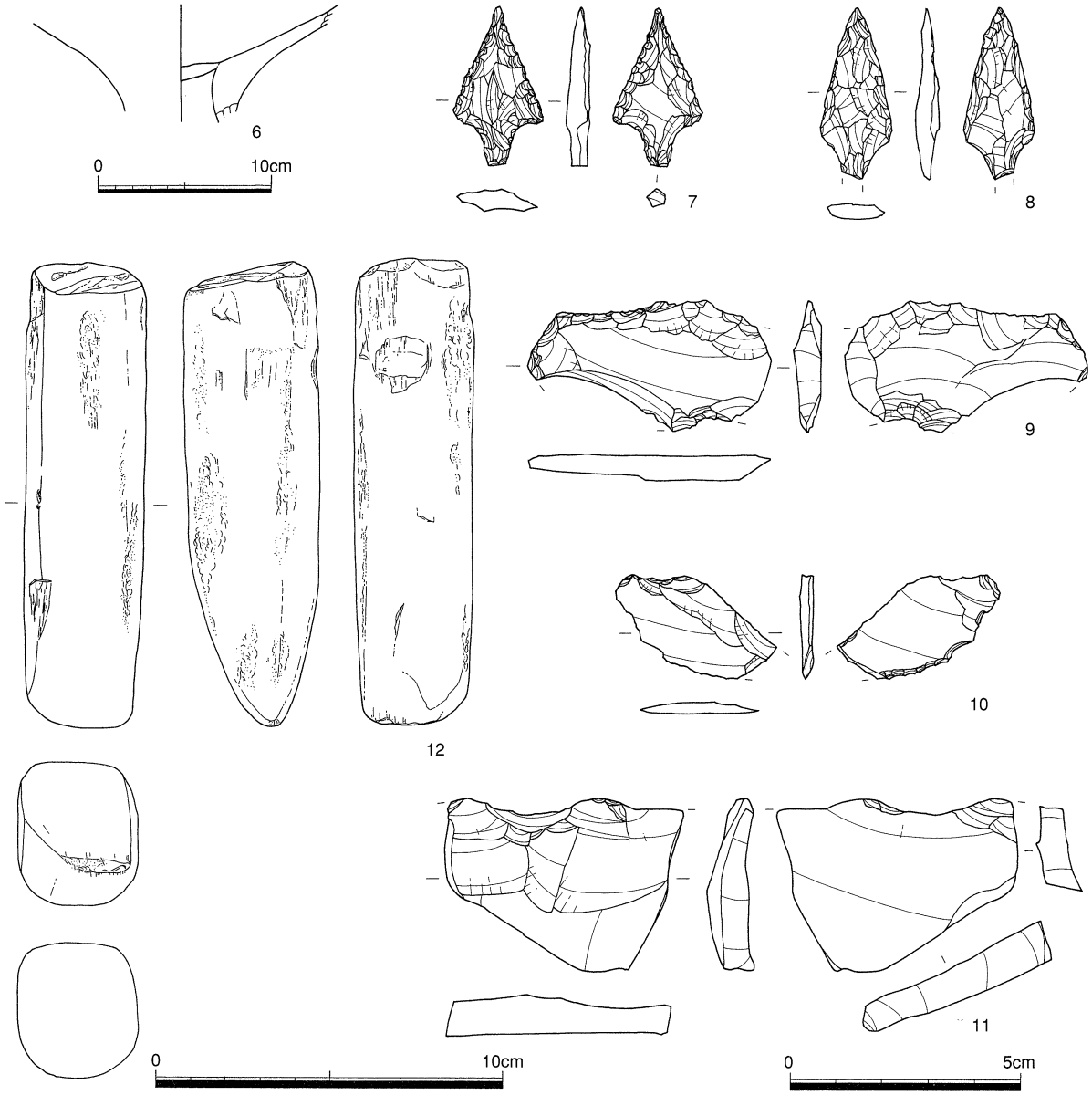
第10図　SB1003平・断面図

SB1003（３号竪穴住居跡）（第10図）

調査区北部、K-6・７グリッド、標高67.00m 前後の南東向きの斜面上に位置し、半円形の平面プランをとどめる。直径5.0m の円形であったと思われるが、南側約2/3が消失しており、全体は不明である。周壁溝は検出されている。規模は現存長で直径4.55m、短軸3.52m、最大深度は42cmを測る。断面形はＬ字状を呈する。床面検出の柱穴は不安定であるが、主柱穴は８本になると思われる。明瞭な炉跡は確認されていない。

出土遺物（第11図）

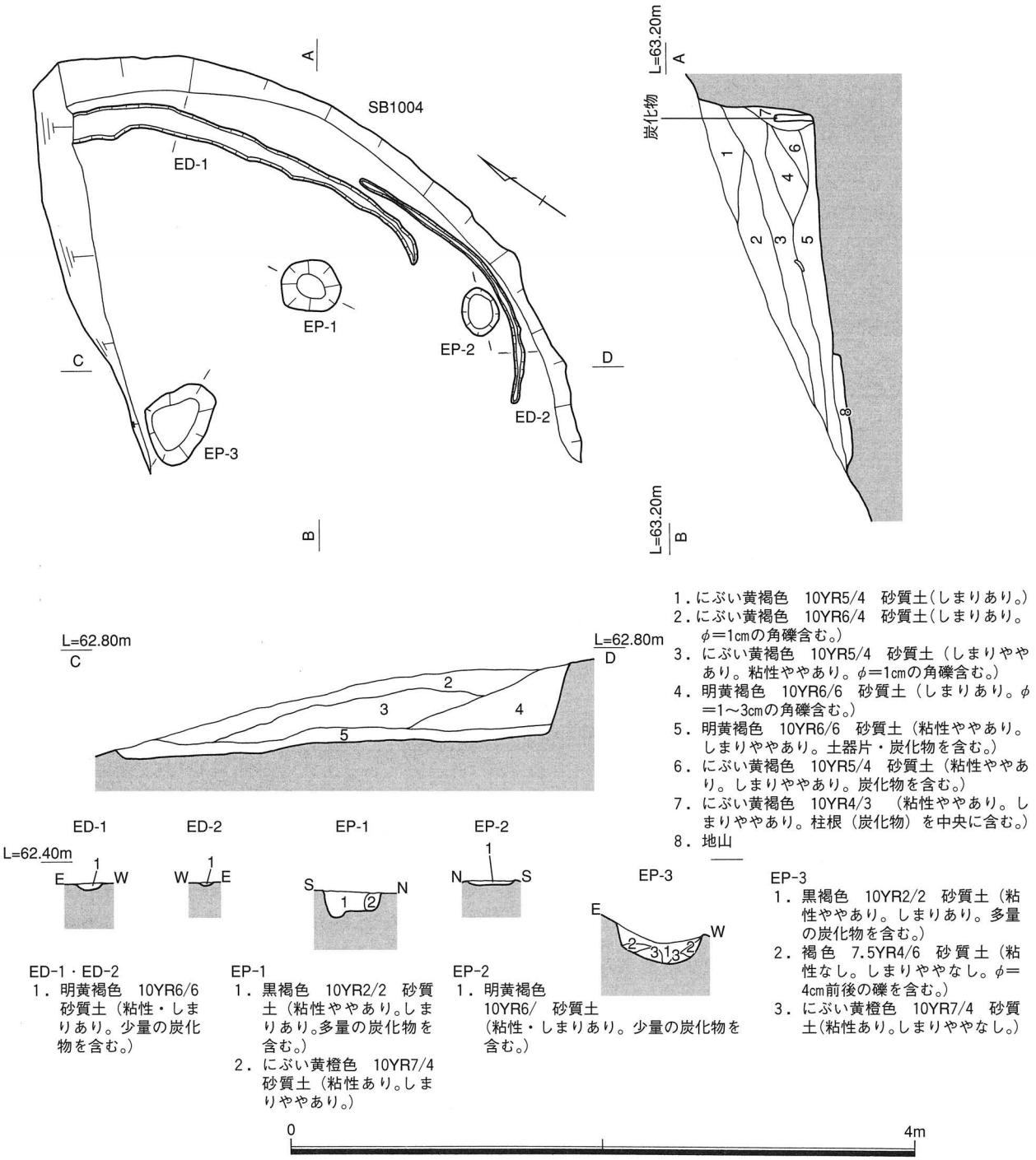
６は周壁溝より出土した高杯の杯部である。７・８は石鏃である。９は楔形石器、10・11は剥片である。７～11はサヌカイトを石材とする。12は柱状片刃石斧で石材は片岩を用いる。



第11図　SB1003出土遺物

SB1004（４号竪穴住居跡）（第12図）

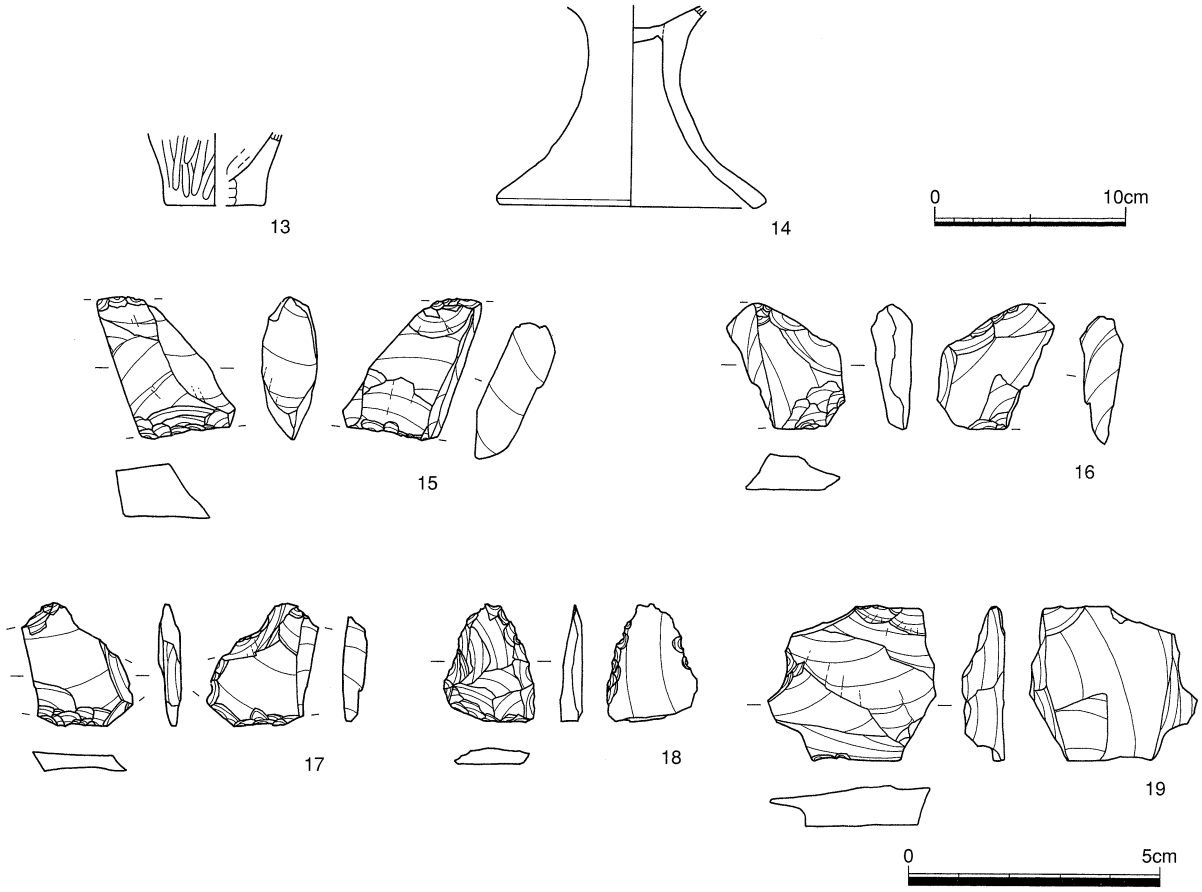
調査区北部、L-3・４グリッド、標高63.00m前後の南西向きの斜面上に位置し、半円形の平面プランをとどめる。直径5.0mの円形であったと思われるが、南側約2/3が消失しており、全体は不明である。周壁溝は検出されている。規模は現存長で直径2.77m、短軸2.62m、最大深度は69cmを測る。断面形はＬ字状を呈する。床面検出の柱穴は明瞭でなく、主柱穴は不明である。炉跡は不明である。



第12図　SB1004平・断面図

出土遺物（第13図）

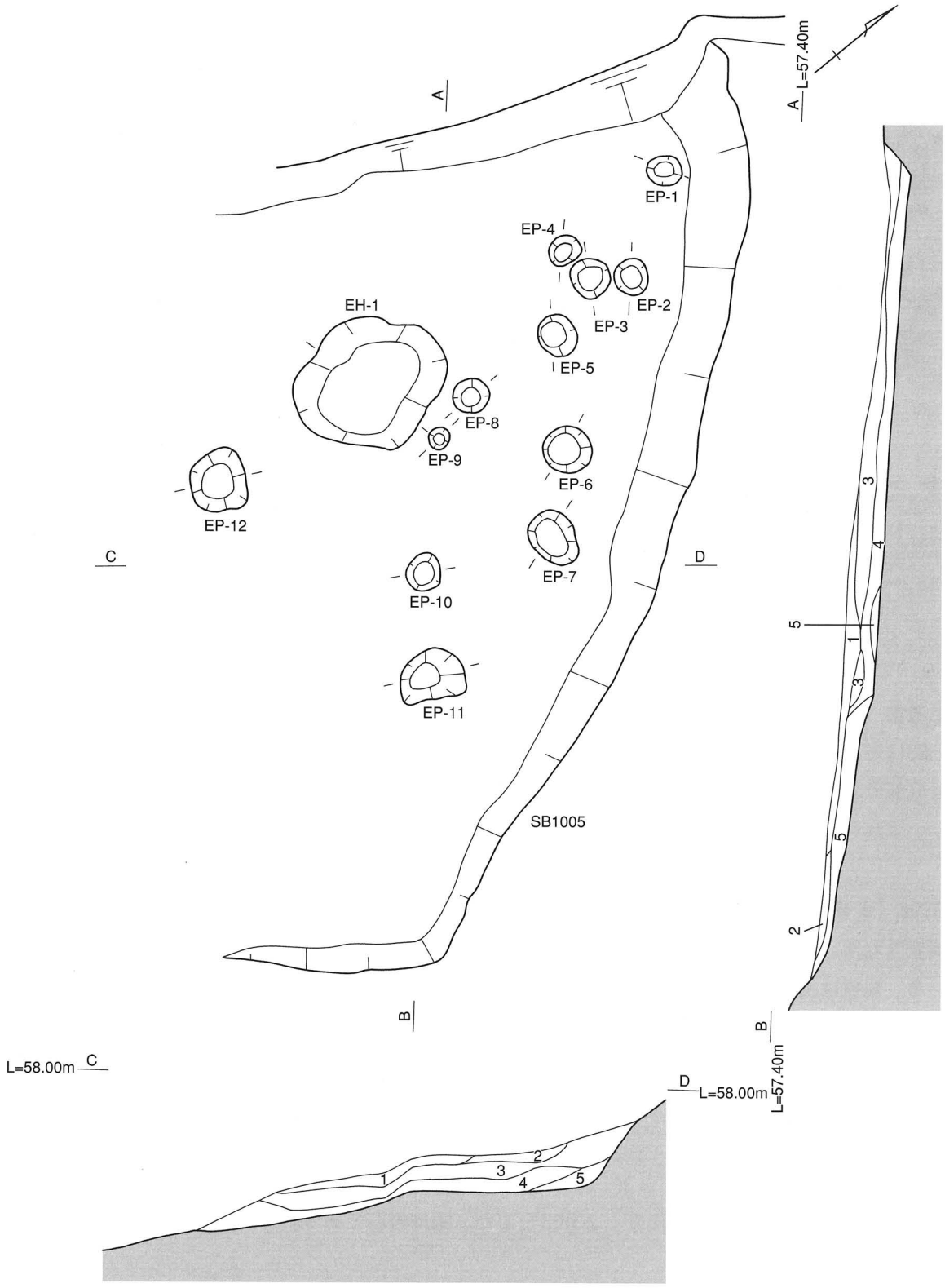
13は甕底部と思われる。14は高杯脚部である。摩滅が著しく調整は不明である。15～17・19は楔形石器、18は石鏃である。いずれもサヌカイトを用いる。



第13図　SB1004出土遺物

SB1005（５号竪穴住居跡）（第14・15図）

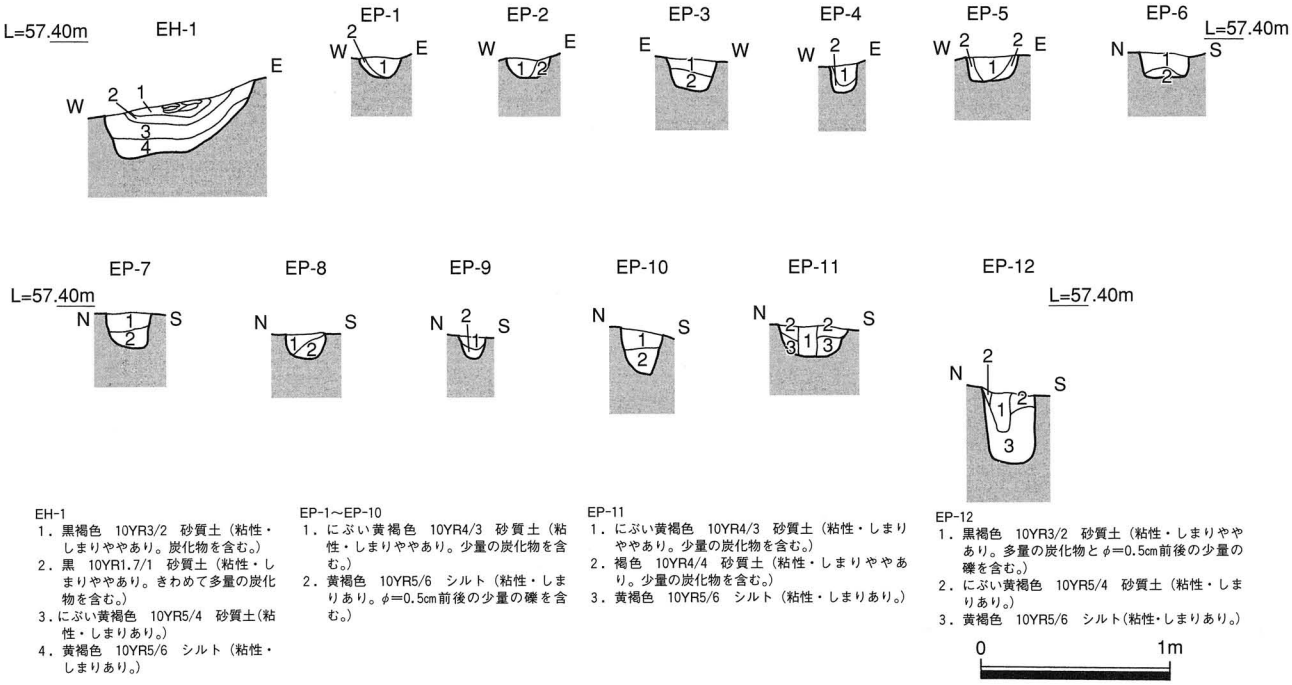
調査区北部、I・J-2・３グリッド、標高58.00m前後の南西向きの斜面上に位置し、長軸5.62m、短軸3.31mの隅丸長方形の平面プランを呈する。西側が一部分消失しているが、比較的残存状態は良好である。最大深度は27㎝を測る。床面検出の柱穴は５本確認されており、主柱穴は６本であると思われる。炉跡は確認されたが、周壁溝は検出されていない。



1．褐灰色　10YR4/1　砂質土（粘性しまりややあり。全面に炭化物を含む。）
2．褐灰色　10YR5/1　砂質土（粘性しまりややあり。全面に炭化物うすく含む。）
3．にぶい黄橙色　10YR6/4　砂質土（粘性しまりややあり。φ=1～3cmの角礫を少量含む。）
4．灰黄褐色　10YR5/2　砂質土（粘性しまりややあり。全面に焼土炭化物を含む。土器片含む。）
5．にぶい黄橙色　10YR6/3　砂質土（粘性しまりあり。φ=1～3cmの角礫を少量含む。）

0　4m

第14図　SB1005平・断面図



EH-1
1．黒褐色　10YR3/2　砂質土（粘性・しまりややあり。炭化物を含む。）
2．黒　10YR1.7/1　砂質土（粘性・しまりややあり。きわめて多量の炭化物を含む。）
3．にぶい黄褐色　10YR5/4　砂質土(粘性・しまりあり。)
4．黄褐色　10YR5/6　シルト（粘性・しまりあり。）

EP-1～EP-10
1．にぶい黄褐色　10YR4/3　砂質土（粘性・しまりややあり。少量の炭化物を含む。）
2．黄褐色　10YR5/6　シルト（粘性・しまりあり。φ=0.5cm前後の少量の礫を含む。）

EP-11
1．にぶい黄褐色　10YR4/3　砂質土（粘性・しまりややあり。少量の炭化物を含む。）
2．褐色　10YR4/4　砂質土（粘性・しまりややあり。少量の炭化物を含む。）
3．黄褐色　10YR5/6　シルト（粘性・しまりあり。）

EP-12
1．黒褐色　10YR3/2　砂質土（粘性・しまりややあり。多量の炭化物とφ=0.5cm前後の少量の礫を含む。）
2．にぶい黄褐色　10YR5/4　砂質土（粘性・しまりあり。）
3．黄褐色　10YR5/6　シルト(粘性・しまりあり。)

第15図　SB1005-EH・EP 断面図

出土遺物（第16図）

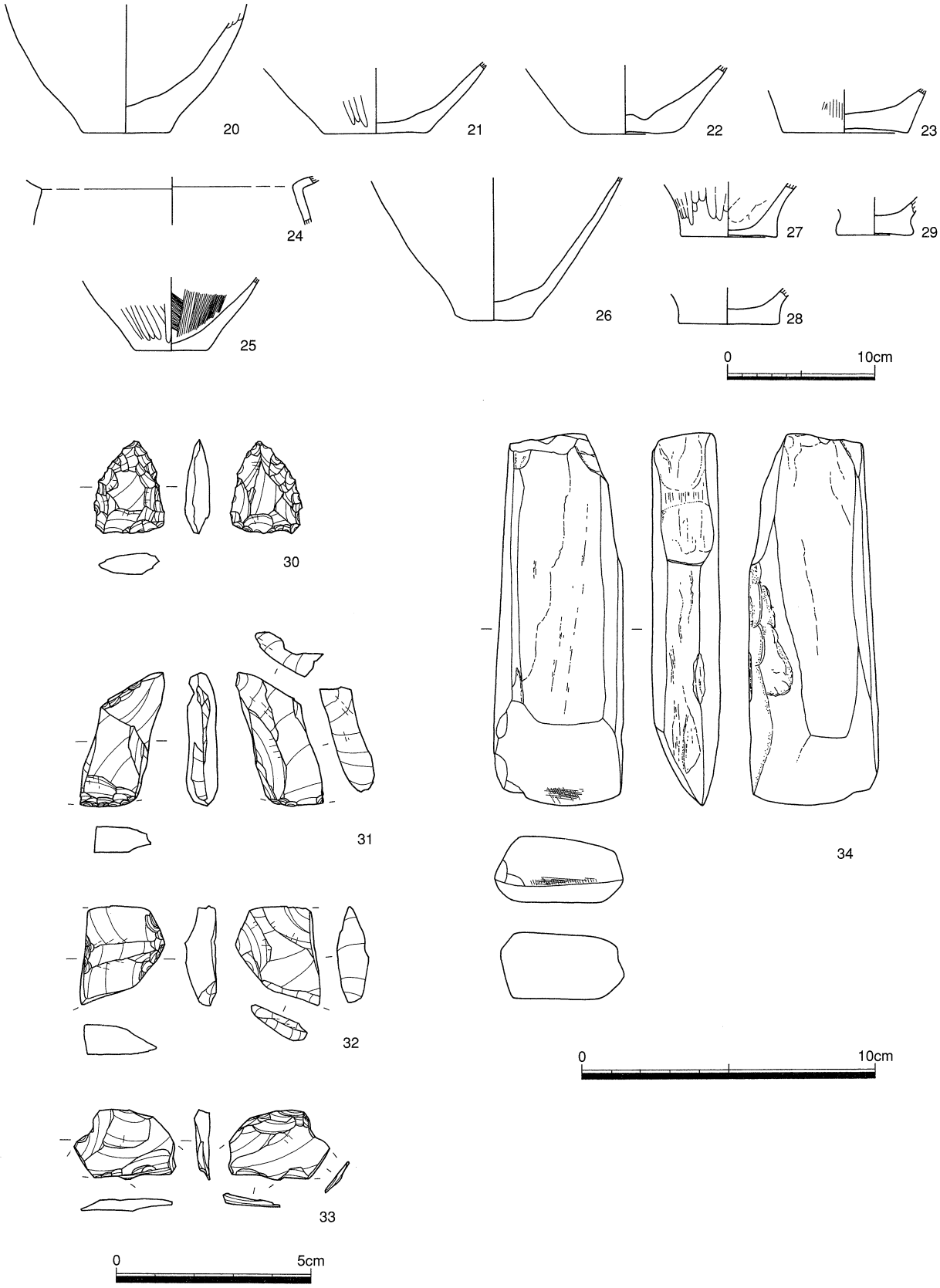
20～23は壺と思われる。いずれも底部であり、器形の全容は不明である。24～29は甕で24は口縁部、25～29は底部である。いずれも小片のため詳細は不明である。30は石鏃、31・32は楔形石器、33は剥片である。いずれもサヌカイトを石材とする。34は扁平片刃石斧である。石材は片岩を用いる。

SB1006（6号竪穴住居跡）（第17・18図）

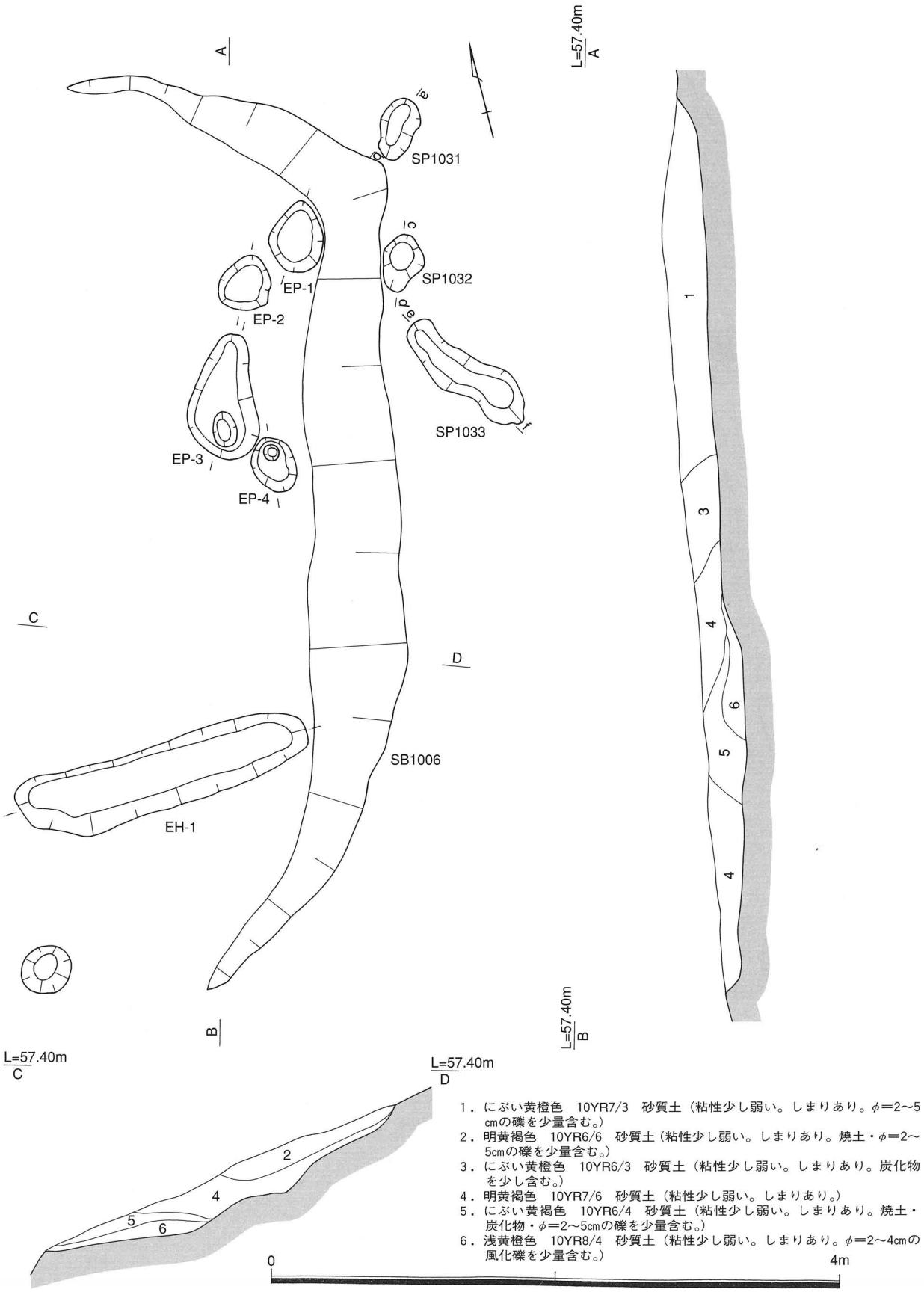
調査区北部、F～H-3グリッド、標高57.00m 前後の南西向きの斜面上に位置し、南側約1/2が消失している。規模は現存長で長軸6.46m、短軸2.56m の隅丸長方形の平面プランを呈する。最大深度は22cmで、直径5.0m 前後の円形を呈していたものと思われる。床面検出の柱穴は4本確認されている。柱穴間の判明するものはないが、竪穴住居跡の規模から類推すると主柱穴は6本であると思われる。炉跡と思われる炭化物・焼土の拡がりを確認した。周壁溝は検出されていない。

出土遺物（第19図）

35は壺の底部と思われる。床面直上より出土した。36は台石である。砂岩の亜角礫を用いる。

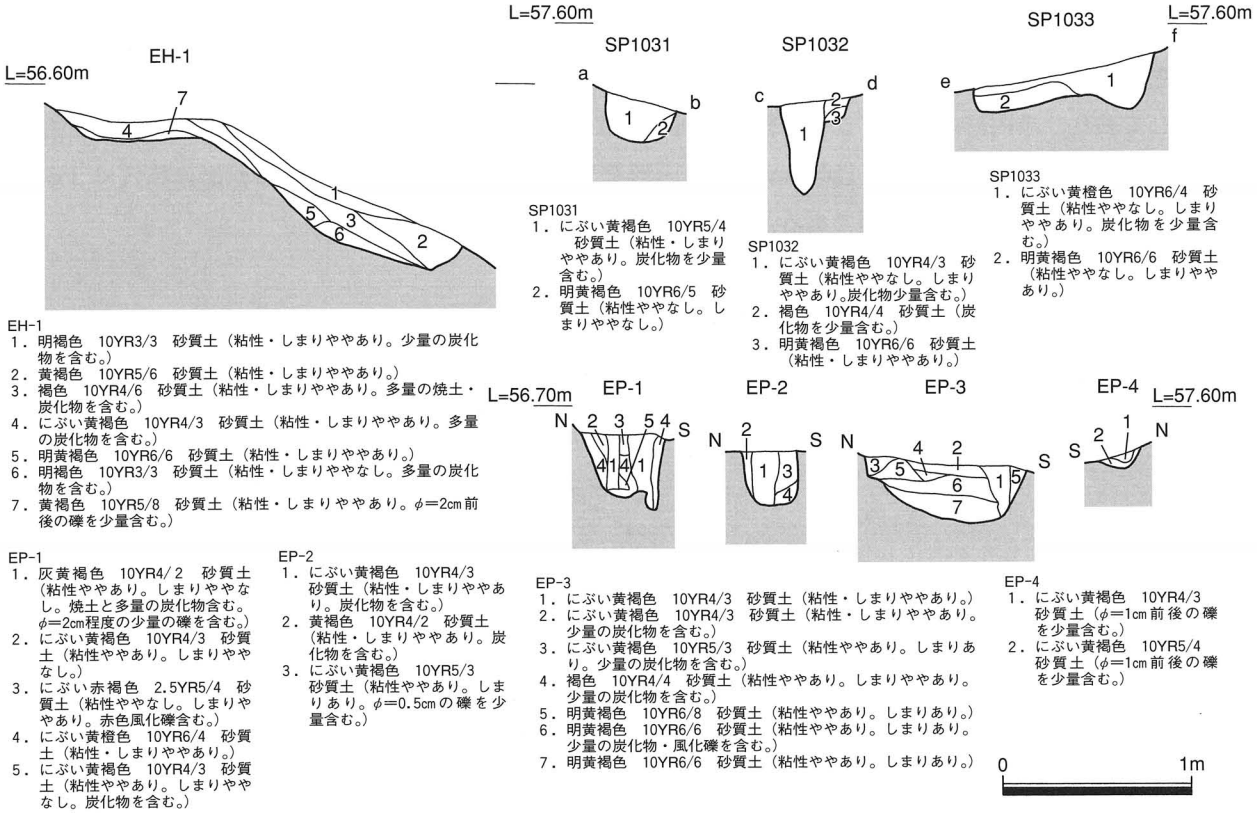


第16図　SB1005出土遺物



1．にぶい黄橙色　10YR7/3　砂質土（粘性少し弱い。しまりあり。φ=2～5cmの礫を少量含む。）
2．明黄褐色　10YR6/6　砂質土（粘性少し弱い。しまりあり。焼土・φ=2～5cmの礫を少量含む。）
3．にぶい黄橙色　10YR6/3　砂質土（粘性少し弱い。しまりあり。炭化物を少し含む。）
4．明黄褐色　10YR7/6　砂質土（粘性少し弱い。しまりあり。）
5．にぶい黄褐色　10YR6/4　砂質土（粘性少し弱い。しまりあり。焼土・炭化物・φ=2～5cmの礫を少量含む。）
6．浅黄橙色　10YR8/4　砂質土（粘性少し弱い。しまりあり。φ=2～4cmの風化礫を少量含む。）

第17図　SB1006平・断面図およびSP1031～1033平面図



EH-1
1. 明褐色　10YR3/3　砂質土（粘性・しまりややあり。少量の炭化物を含む。）
2. 黄褐色　10YR5/6　砂質土（粘性・しまりややあり。）
3. 褐色　10YR4/6　砂質土（粘性・しまりややあり。多量の焼土・炭化物を含む。）
4. にぶい黄褐色　10YR4/3　砂質土（粘性・しまりややあり。多量の炭化物を含む。）
5. 明黄褐色　10YR6/6　砂質土（粘性・しまりややあり。）
6. 明褐色　10YR3/3　砂質土（粘性・しまりややなし。多量の炭化物を含む。）
7. 黄褐色　10YR5/8　砂質土（粘性・しまりややあり。ϕ=2cm前後の礫を少量含む。）

SP1031
1. にぶい黄褐色　10YR5/4　砂質土（粘性・しまりややあり。炭化物を少量含む。）
2. 明黄褐色　10YR6/5　砂質土（粘性ややなし。しまりややなし。）

SP1032
1. にぶい黄褐色　10YR4/3　砂質土（粘性ややなし。しまりややあり。炭化物少量含む。）
2. 褐色　10YR4/4　砂質土（炭化物を少量含む。）
3. 明黄褐色　10YR6/6　砂質土（粘性・しまりややあり。）

SP1033
1. にぶい黄橙色　10YR6/4　砂質土（粘性ややなし。しまりややあり。炭化物を少量含む。）
2. 明黄褐色　10YR6/6　砂質土（粘性ややなし。しまりややあり。）

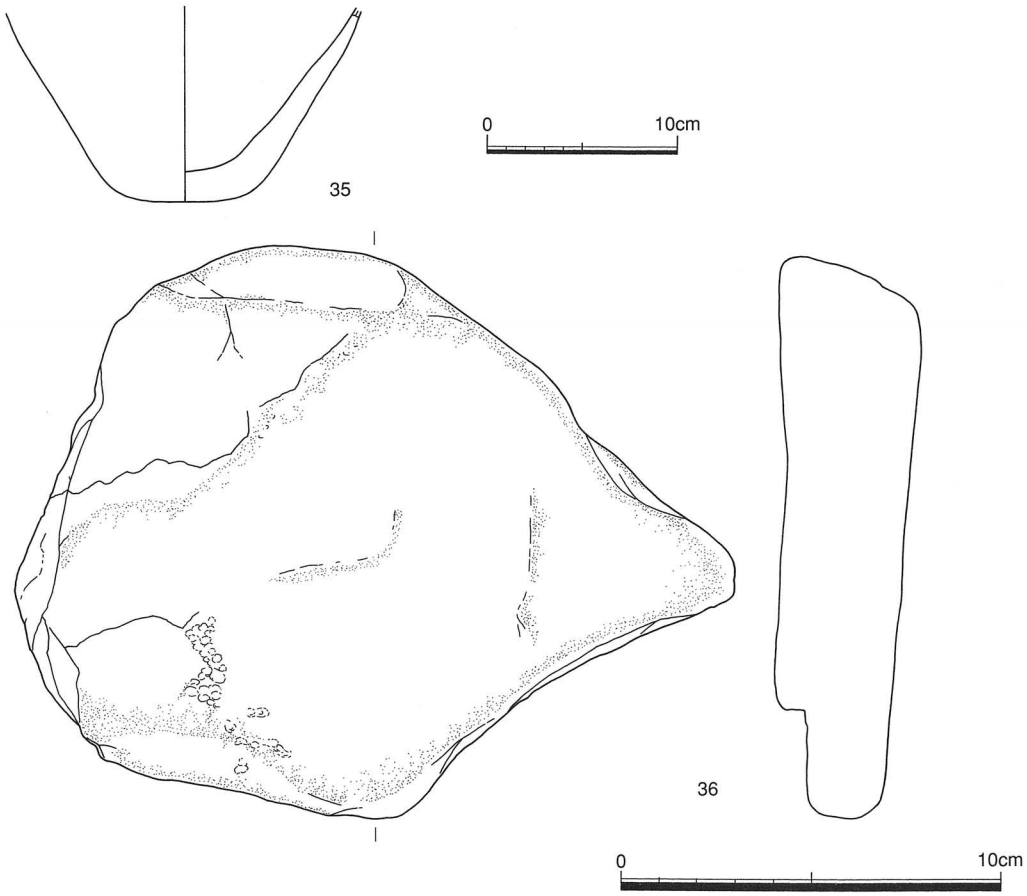
EP-1
1. 灰黄褐色　10YR4/2　砂質土（粘性ややあり。しまりややなし。焼土と多量の炭化物含む。ϕ=2cm程度の少量の礫を含む。）
2. にぶい黄褐色　10YR4/3　砂質土（粘性ややあり。しまりややなし。）
3. にぶい赤褐色　2.5YR5/4　砂質土（粘性ややなし。しまりややあり。赤色風化礫含む。）
4. にぶい黄橙色　10YR6/4　砂質土（粘性・しまりややあり。）
5. にぶい黄褐色　10YR4/3　砂質土（粘性ややあり。しまりややなし。炭化物を含む。）

EP-2
1. にぶい黄褐色　10YR4/3　砂質土（粘性・しまりややあり。炭化物を含む。）
2. 黄褐色　10YR4/2　砂質土（粘性・しまりややあり。炭化物を含む。）
3. にぶい黄褐色　10YR5/3　砂質土（粘性ややあり。しまりあり。ϕ=0.5cmの礫を少量含む。）

EP-3
1. にぶい黄褐色　10YR4/3　砂質土（粘性・しまりややあり。）
2. にぶい黄褐色　10YR4/3　砂質土（粘性・しまりややあり。少量の炭化物を含む。）
3. にぶい黄褐色　10YR5/3　砂質土（粘性ややあり。しまりあり。少量の炭化物を含む。）
4. 褐色　10YR4/4　砂質土（粘性ややあり。しまりややあり。少量の炭化物を含む。）
5. 明黄褐色　10YR6/8　砂質土（粘性ややあり。しまりあり。）
6. 明黄褐色　10YR6/6　砂質土（粘性ややあり。しまりあり。少量の炭化物・風化礫を含む。）
7. 明黄褐色　10YR6/6　砂質土（粘性ややあり。しまりあり。）

EP-4
1. にぶい黄褐色　10YR4/3　砂質土（ϕ=1cm前後の礫を少量含む。）
2. にぶい黄褐色　10YR5/4　砂質土（ϕ=1cm前後の礫を少量含む。）

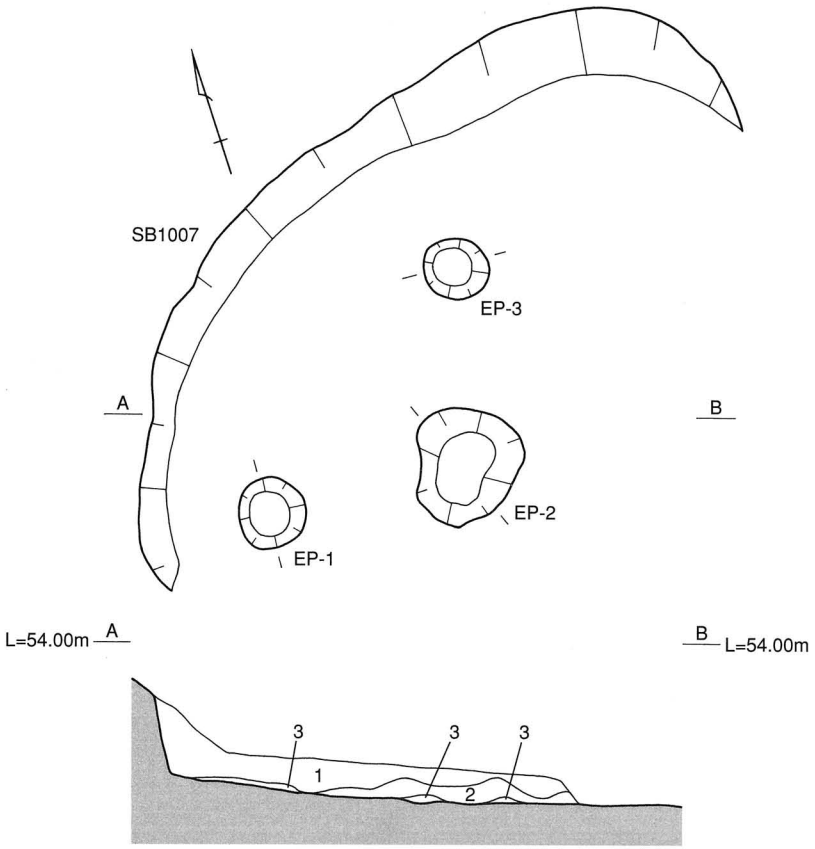
第18図　SB1006-EH・EP および SP1031～1033断面図



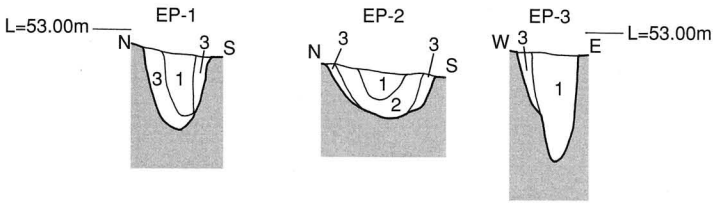
第19図　SB1006出土遺物

SB1007（７号竪穴住居跡）（第20図）

調査区北部、B・C-6・７グリッド、標高54.00m 前後の南西向きの斜面上に位置する。南側約1/2が消失しており、半円形の平面プランを呈し、断面形はＬ字状である。規模は現存長で長軸3.88m、短軸2.75m、最大深度は42㎝で、直径4.0m 前後の円形を呈するものと思われる。床面検出の柱穴は３本確認されているが、主柱穴は不明である。炉跡および周壁溝は検出されていない。



1．にぶい黄橙色　10YR7/4　砂質土（粘性・しまりややなし。φ=4㎝前後の礫を少量含む。）
2．灰黄褐色　10YR4/2　砂質土（粘性・しまりややなし。炭化物を多く含む。φ=4㎝前後の礫を少量含む。）
3．にぶい黄橙色　10YR5/3（岩盤。）



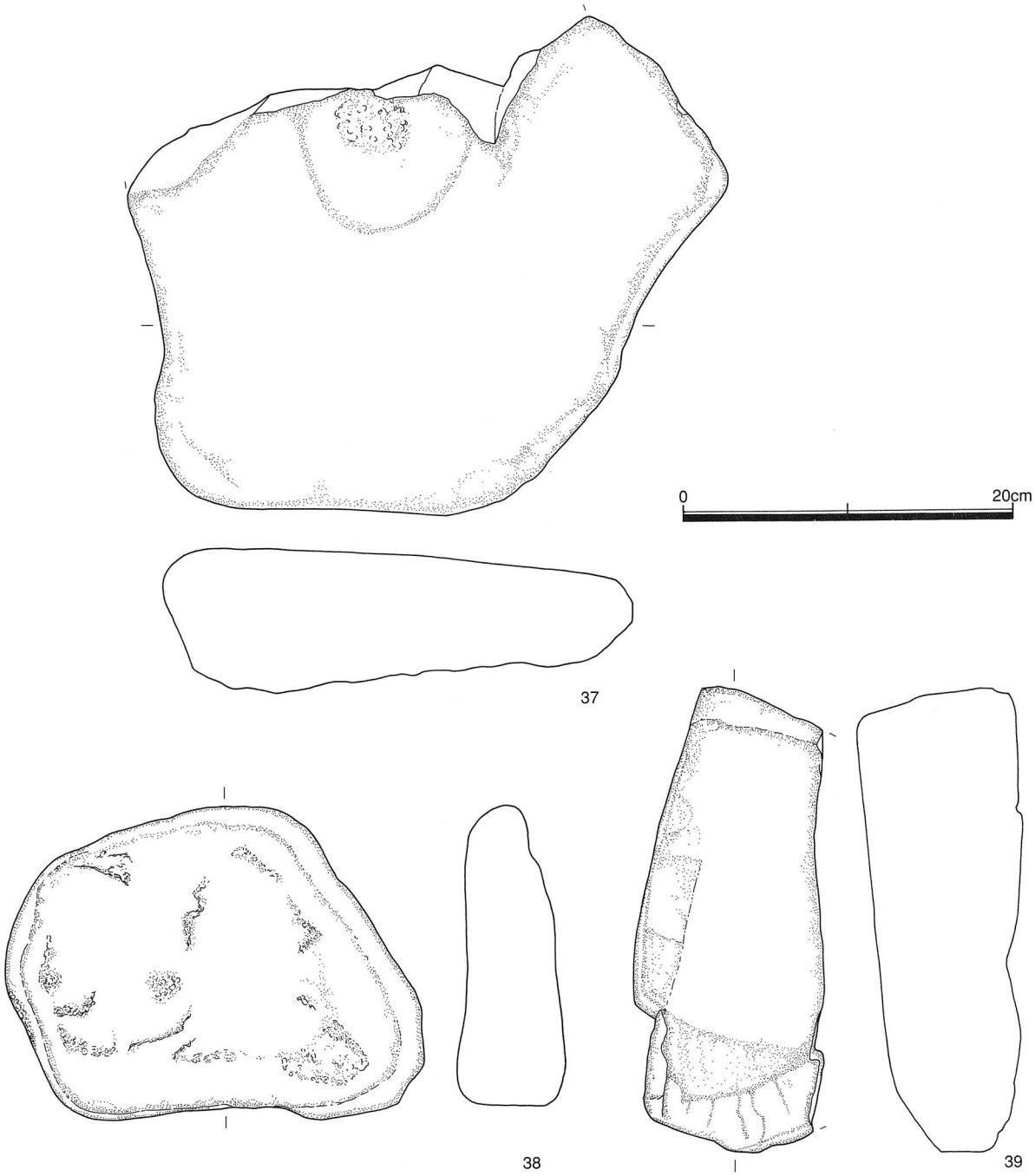
1．にぶい褐色　7.5YR5/3　砂質土（粘性・しまりややなし。焼土含む。φ=2㎝前後の礫を少量含む。）
2．黒褐色　10YR2/2　砂質土（粘性・しまりややなし。きわめて多量の炭化物を含む。φ=3㎝前後の礫を少量含む。）
3．にぶい黄褐色　10YR5/4　砂質土（粘性・しまりややなし。φ=2～4㎝前後の礫を少量含む。）

0　2m

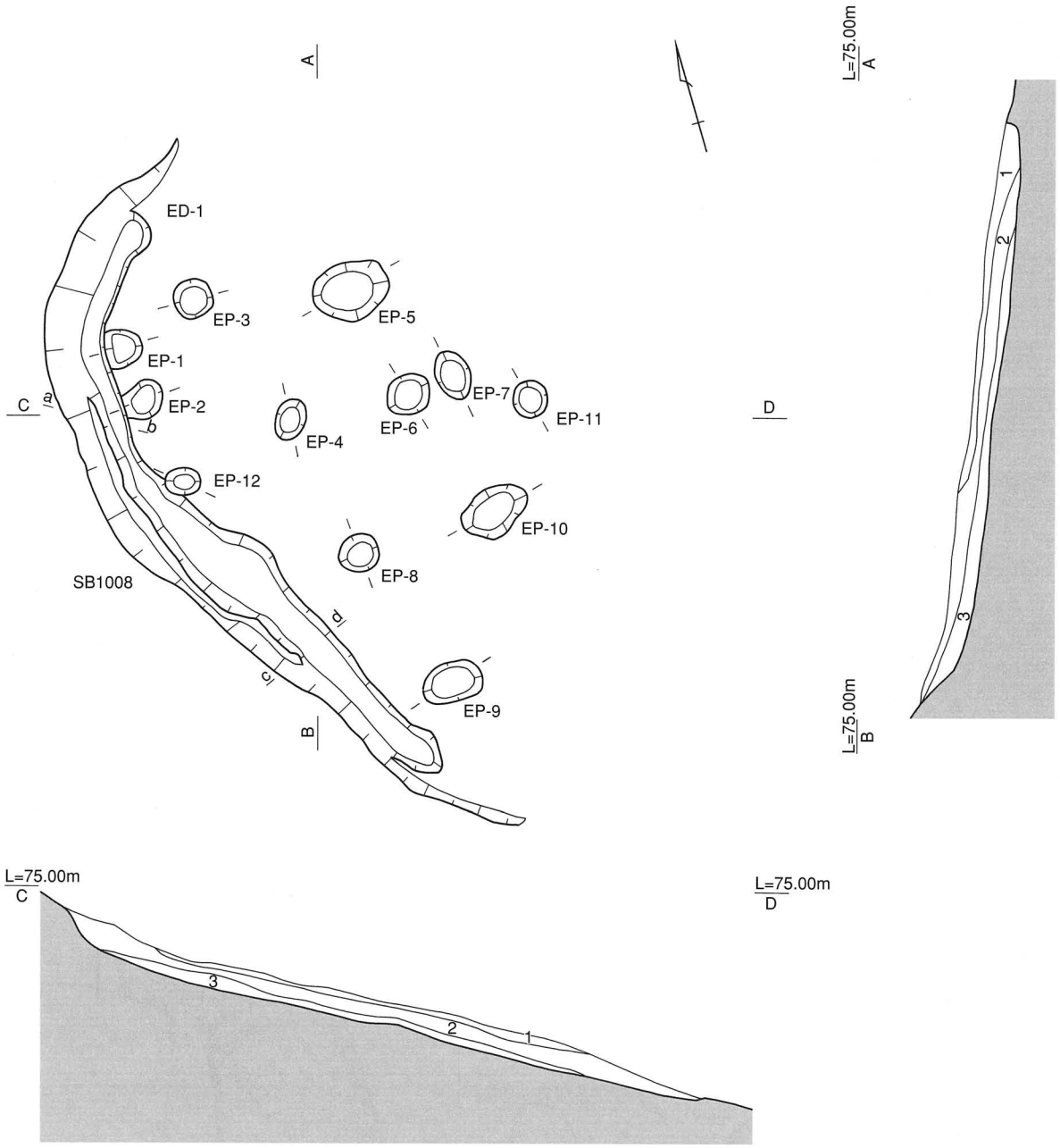
第20図　SB1007平・断面図

出土遺物（第21図）

砥石と台石が出土している。37・38は台石、39は砥石である。石材は砂岩を用いる。



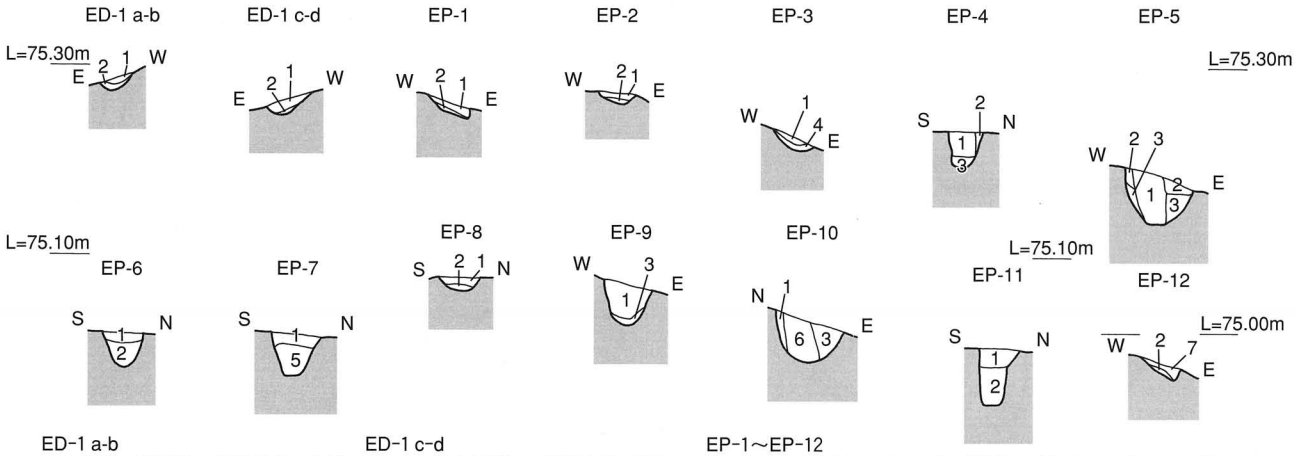
第21図　SB1007出土遺物



1．褐色　10YR4/4　砂質土（粘性・しまりやや弱い。少量の炭化物を含む。）
2．褐色　10YR4/4　砂質土（粘性・しまりややあり。若干の焼土・φ＝4cm前後の石礫を少量含む。）
3．明黄褐色　10YR6/6　砂質土（粘性・しまりややあり。少量の風化礫を含む。）

0　4m

第22図　SB1008平・断面図



ED-1 a-b
1．にぶい黄褐色　10YR4/3　砂質土（赤色風化礫および炭化物をブロック状に含む。）
2．褐色　10YR4/4　砂質土（粘性・しまりややあり。）

ED-1 c-d
1．にぶい黄褐色　10YR4/3　砂質土（粘性・しまりややあり。少量の炭化物を含む。）
2．にぶい黄褐色　10YR5/4　砂質土（粘性・しまりややあり。）

0　1m

EP-1～EP-12
1．にぶい黄褐色　10YR4/3　砂質土（粘性・しまりややあり。少量の炭化物・φ=0.5cm前後の赤色風化礫を含む。）
2．にぶい黄褐色　10YR5/3　砂質土（粘性・しまりややあり。炭化物を少量含む。）
3．にぶい黄褐色　10YR5/4　砂質土（粘性・しまりややあり。）
4．にぶい黄褐色　10YR5/4　砂質土（φ=0.5cm前後の礫を少量含む。）
5．にぶい黄橙色　10YR6/4　砂質土（粘性・しまりややあり。）
6．暗褐色　10YR3/3　砂質土（粘性・しまりややあり。炭化物を多量に含む。大小の礫を少量含む。）
7．灰黄褐色　10YR4/2　砂質土（粘性・しまりややあり。大量の炭化物を含む。）

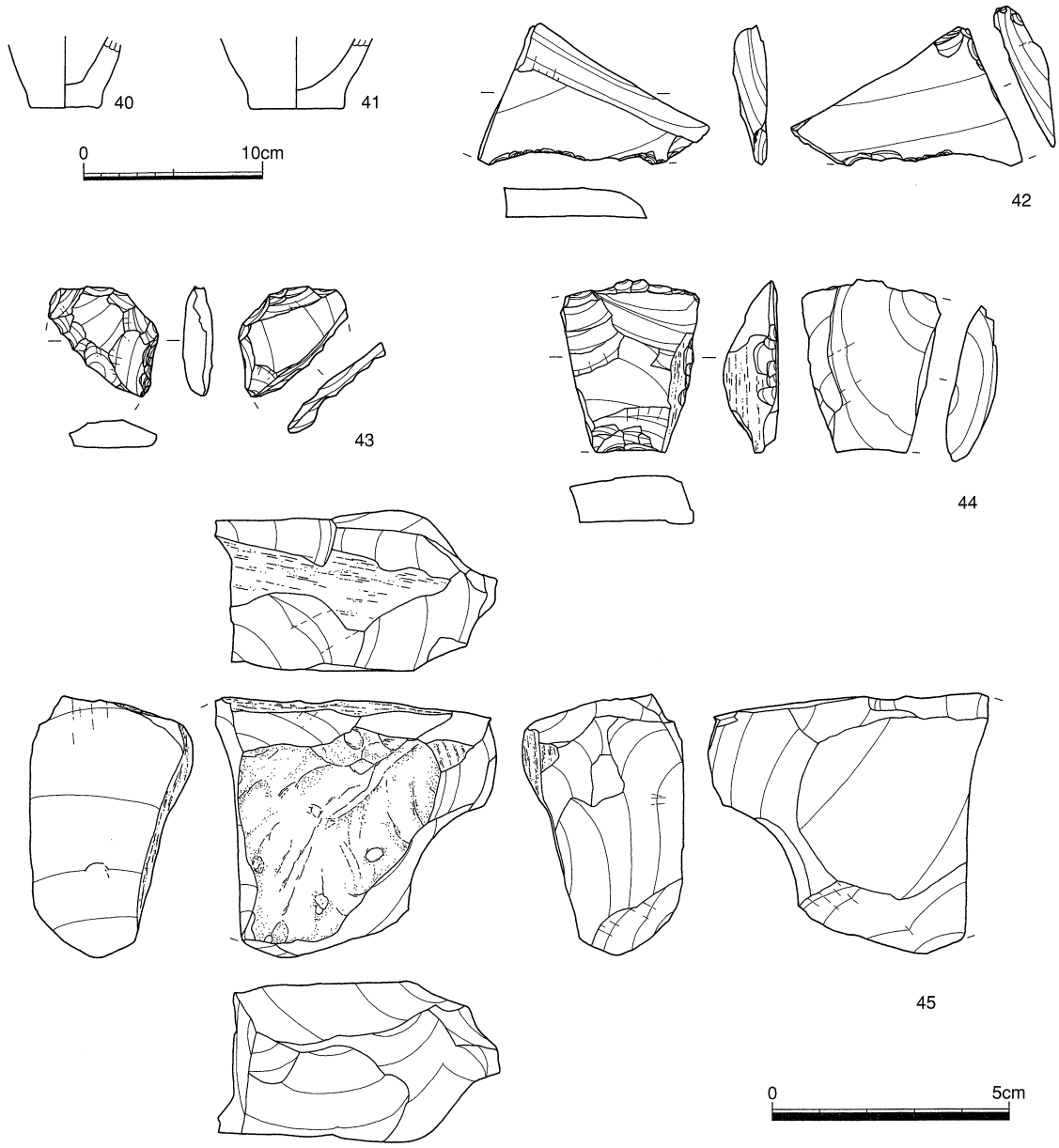
第23図　SB1008-ED・EP 断面図

SB1008（8号竪穴住居跡）（第22・23図）

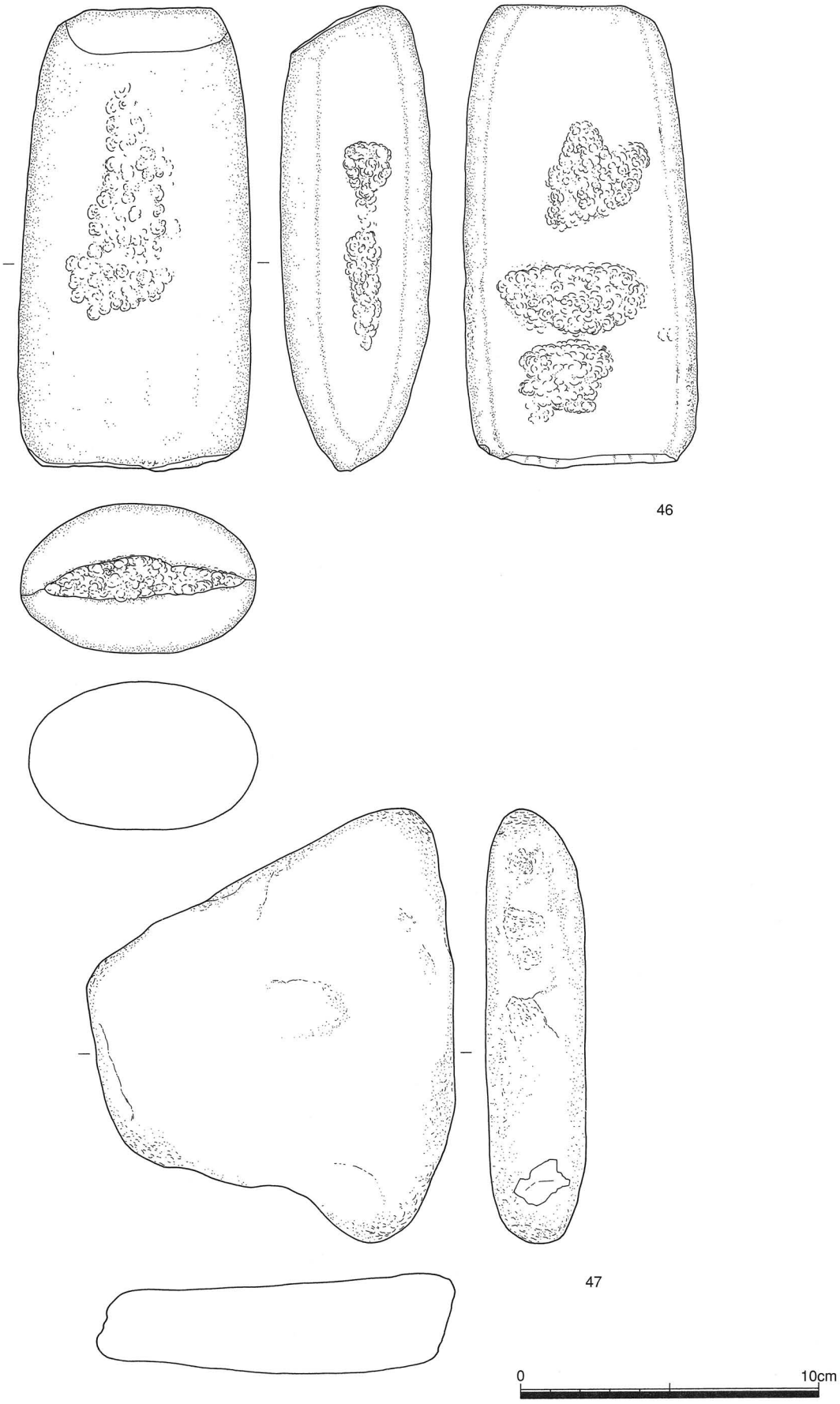
調査区中央部、S・T-15・16グリッド、標高75.00m 前後の南西向きの斜面上に位置する。コンタラインに沿うように検出され、段状を呈する。西側の大部分が消失しているものと思われ、全体は不明であるが、4.0m 前後の円形を呈していたものと思われる。規模は現存長で長軸4.06m、短軸3.58m、最大深度は18cmで、隅丸長方形を呈する。平面的には複数の遺構が切り合っているように見えるが、切り合いを確認することはできなかった。床面にはピットが数基出土しているが、不整列であり、主柱穴は不明である。炉跡は確認されていない。周壁溝は検出された。

出土遺物（第24・25図）

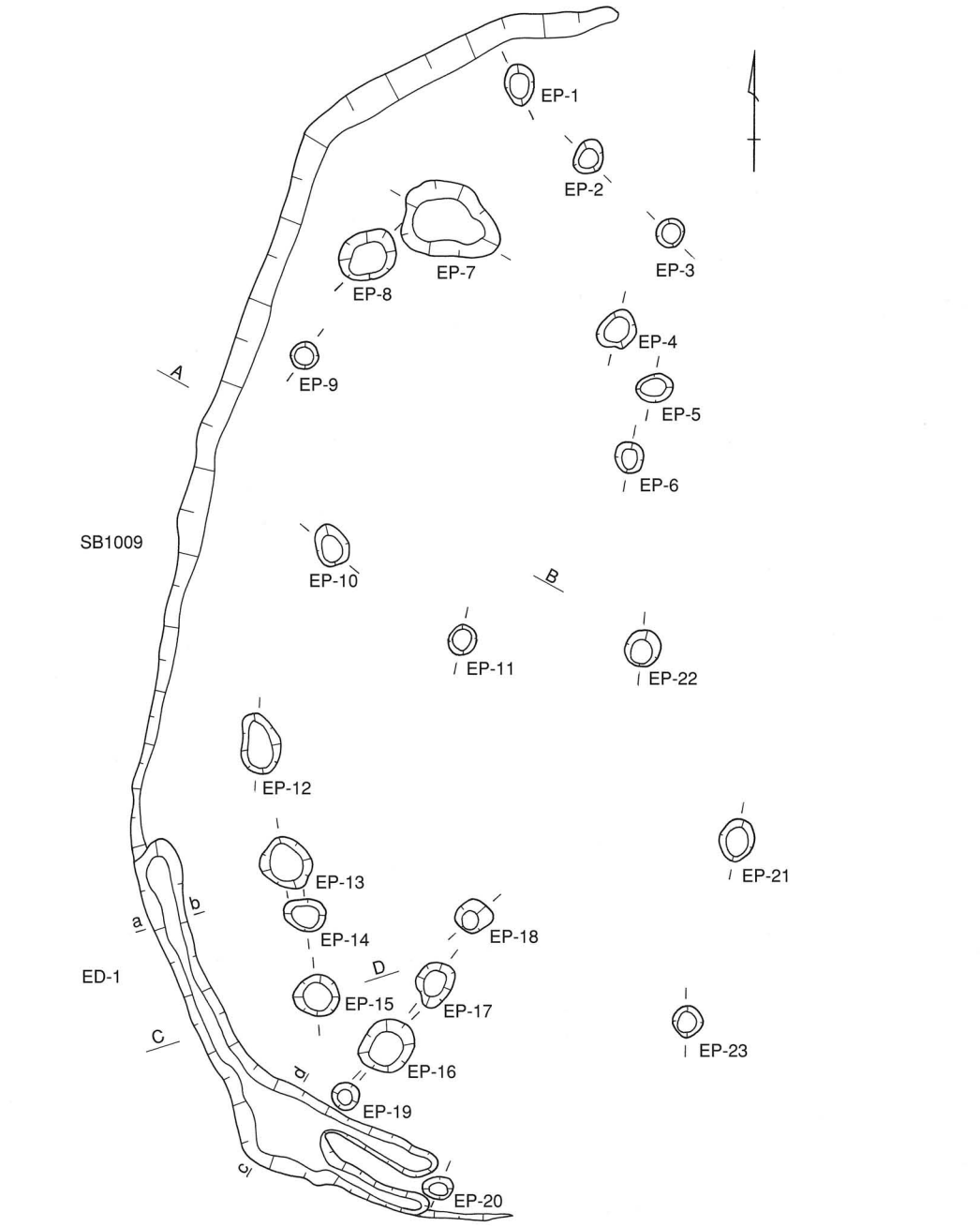
40は壺、41は甕である。いずれも小片であり、詳細は不明である。42は削器、43・44は楔形石器、45は石核で打面を転移しながら剥片を剥離している。46は太形蛤刃石斧で刃部の使用痕が顕著である。47は敲石で表裏面に敲打痕が見られる。石材は42～45はサヌカイト、46は玄武岩、47は砂岩を使用している。

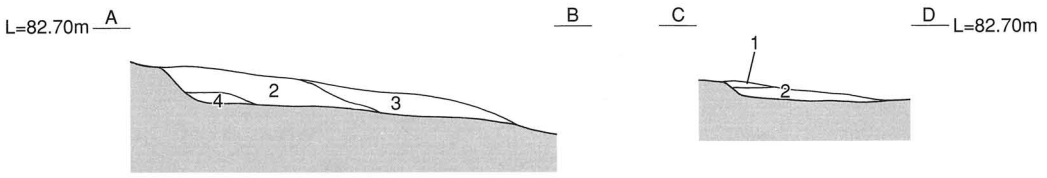


第24図　SB1008出土遺物 1



第25図　SB1008出土遺物 2





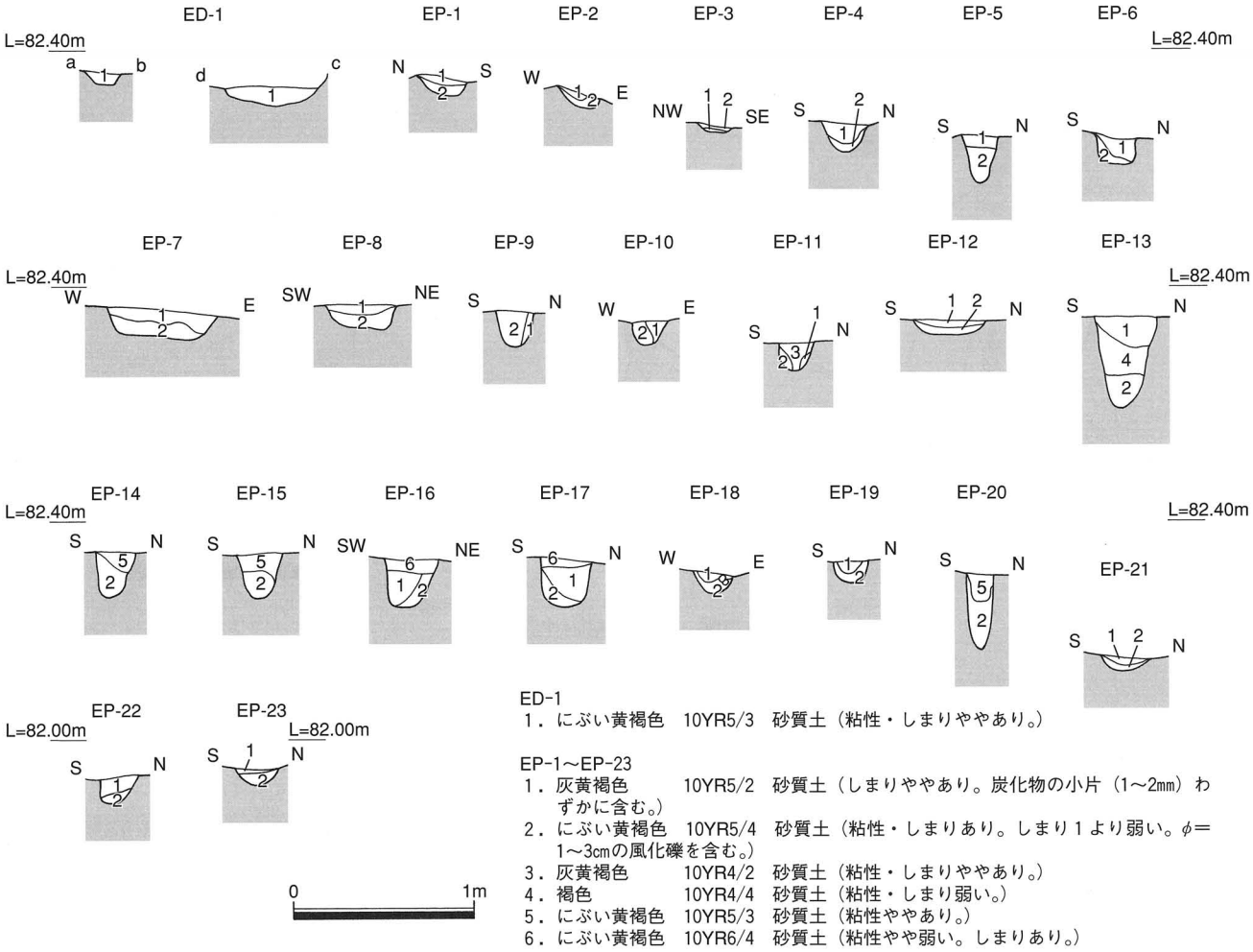
1．灰黄褐色　10YR5/2　砂質土（粘性ややあり。しまりややあり。）
2．にぶい黄褐色　10YR5/3　砂質土（粘性・しまり１よりあり。）
3．にぶい黄橙色　10YR6/4　砂質土（φ＝3～10cmの風化礫を含む。）
4．明黄褐色　10YR6/6　砂質土（φ＝５cmほどの風化礫を含む。）

0　4m

第26図　SB1009平・断面図

SB1009（９号竪穴住居跡）（第26・27図）

調査区北部、U・V-12グリッド、標高82.00m前後の南東向きの斜面上に位置する。西側部分は一部消失しており、隅丸の「コ」の字形の平面プランを呈する。残存状態は比較的良好である。規模は現存長で長軸6.77m、短軸1.86m、最大深度は27㎝を測る。柱穴と思われるピットは３基検出され、主柱穴は６本と思われる。炉跡は検出されなかった。周壁溝は部分的に検出された。



ED-1
1．にぶい黄褐色　10YR5/3　砂質土（粘性・しまりややあり。）

EP-1～EP-23
1．灰黄褐色　10YR5/2　砂質土（しまりややあり。炭化物の小片（1～2㎜）わずかに含む。）
2．にぶい黄褐色　10YR5/4　砂質土（粘性・しまりあり。しまり１より弱い。φ＝1～3㎝の風化礫を含む。）
3．灰黄褐色　10YR4/2　砂質土（粘性・しまりややあり。）
4．褐色　10YR4/4　砂質土（粘性・しまり弱い。）
5．にぶい黄褐色　10YR5/3　砂質土（粘性ややあり。）
6．にぶい黄褐色　10YR6/4　砂質土（粘性やや弱い。しまりあり。）

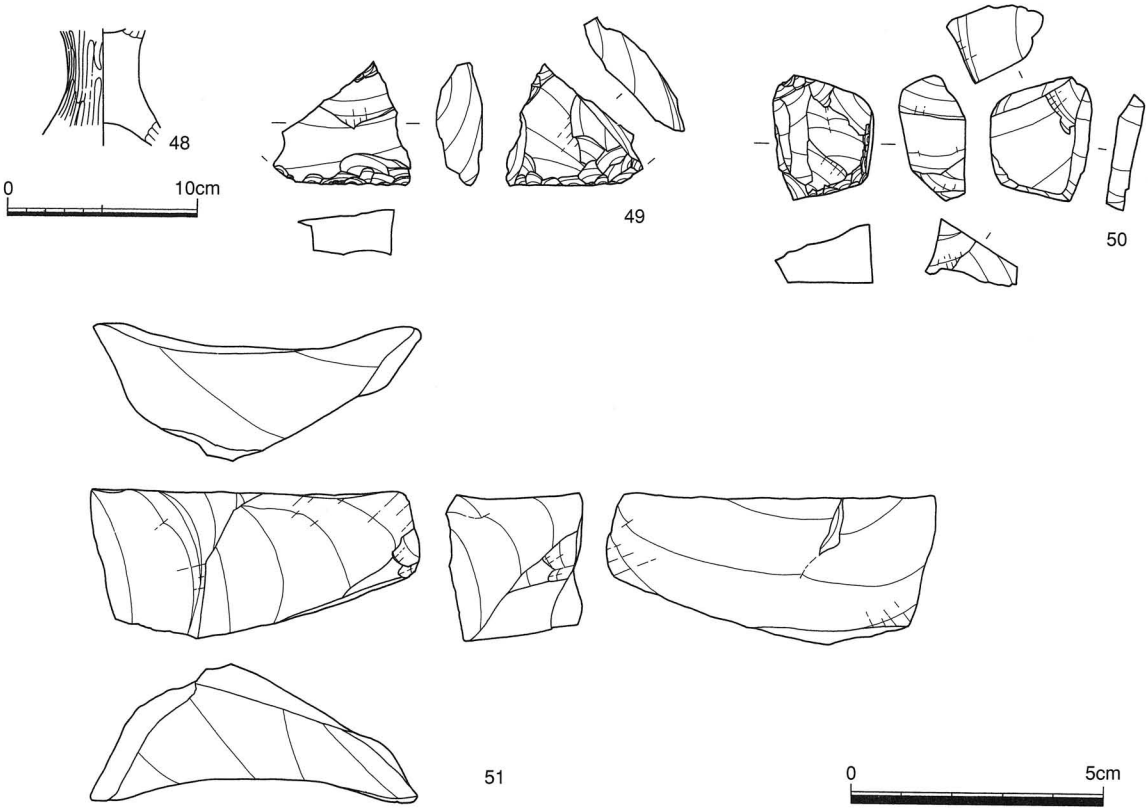
第27図　SB1009-ED・EP断面図

出土遺物（第28図）

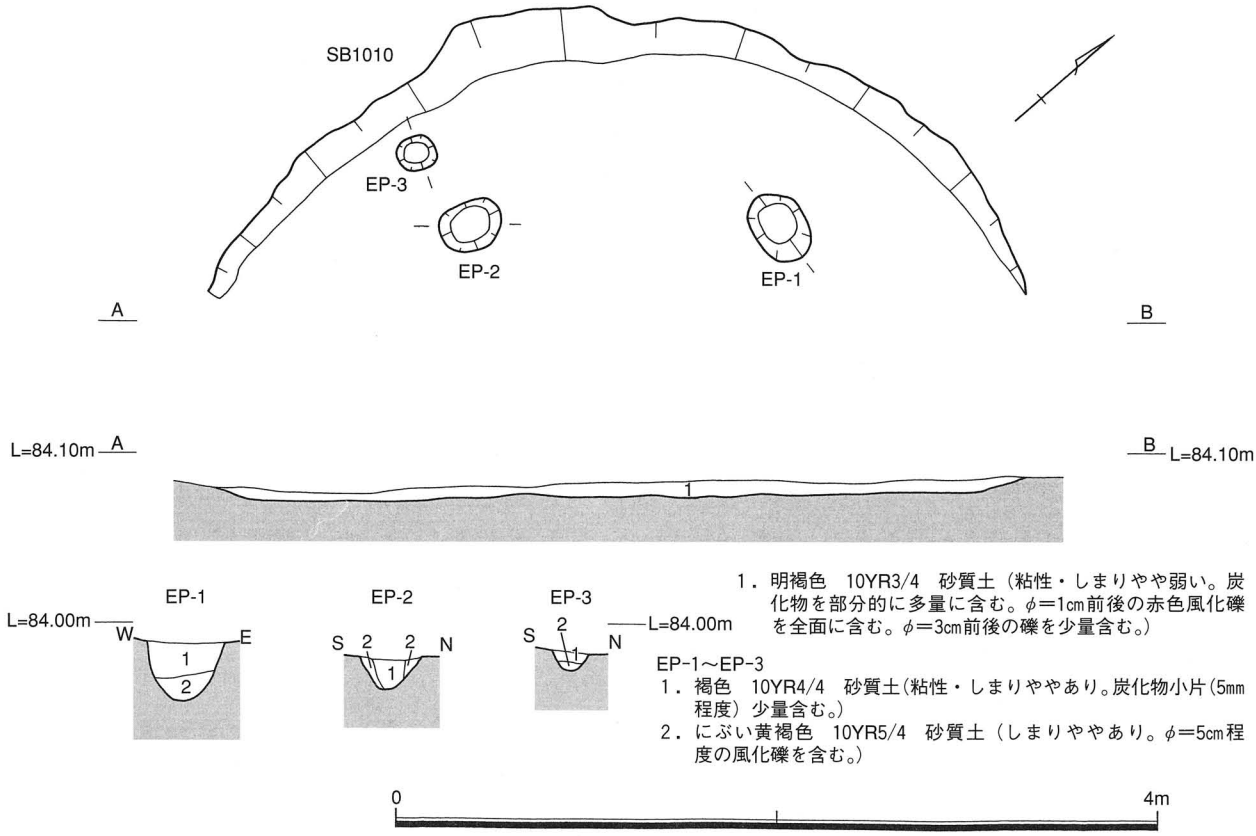
弥生土器片・石器が出土した。48は高杯脚部である。小片であり、全体は不明である。49・50は楔形石器、51は剥片で打面を転移しながら剥離されている。石核とも考えられる。石材は49～51はサヌカイトを使用している。

SB1010（10号竪穴住居跡）（第29図）

調査区南部、X-12グリッド、標高84.00m前後の南向きの斜面上に位置し、半円形の平面プランを呈する。南側約1/2が消失している。規模は現存長で長軸4.33m、短軸1.52m、最大深度は８㎝で、直径4.0m前後の円形を呈するものと思われる。床面検出の柱穴は２本確認されている。炉跡および周壁溝は検出されていない。



第28図　SB1009出土遺物



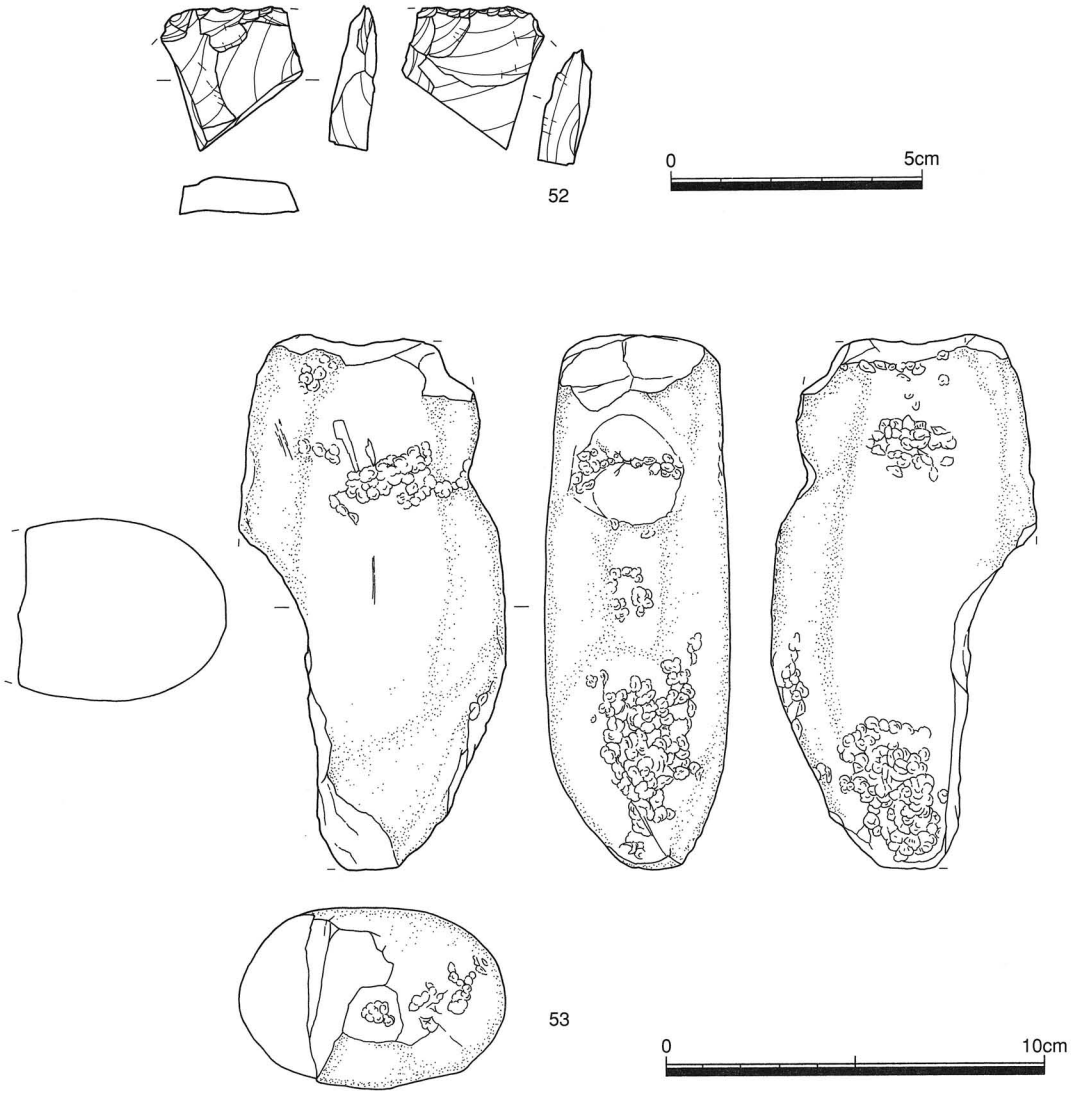
1．明褐色　10YR3/4　砂質土（粘性・しまりやや弱い。炭化物を部分的に多量に含む。φ＝1cm前後の赤色風化礫を全面に含む。φ＝3cm前後の礫を少量含む。）

EP-1～EP-3
1．褐色　10YR4/4　砂質土(粘性・しまりややあり。炭化物小片(5mm程度）少量含む。)
2．にぶい黄褐色　10YR5/4　砂質土（しまりややあり。φ＝5cm程度の風化礫を含む。）

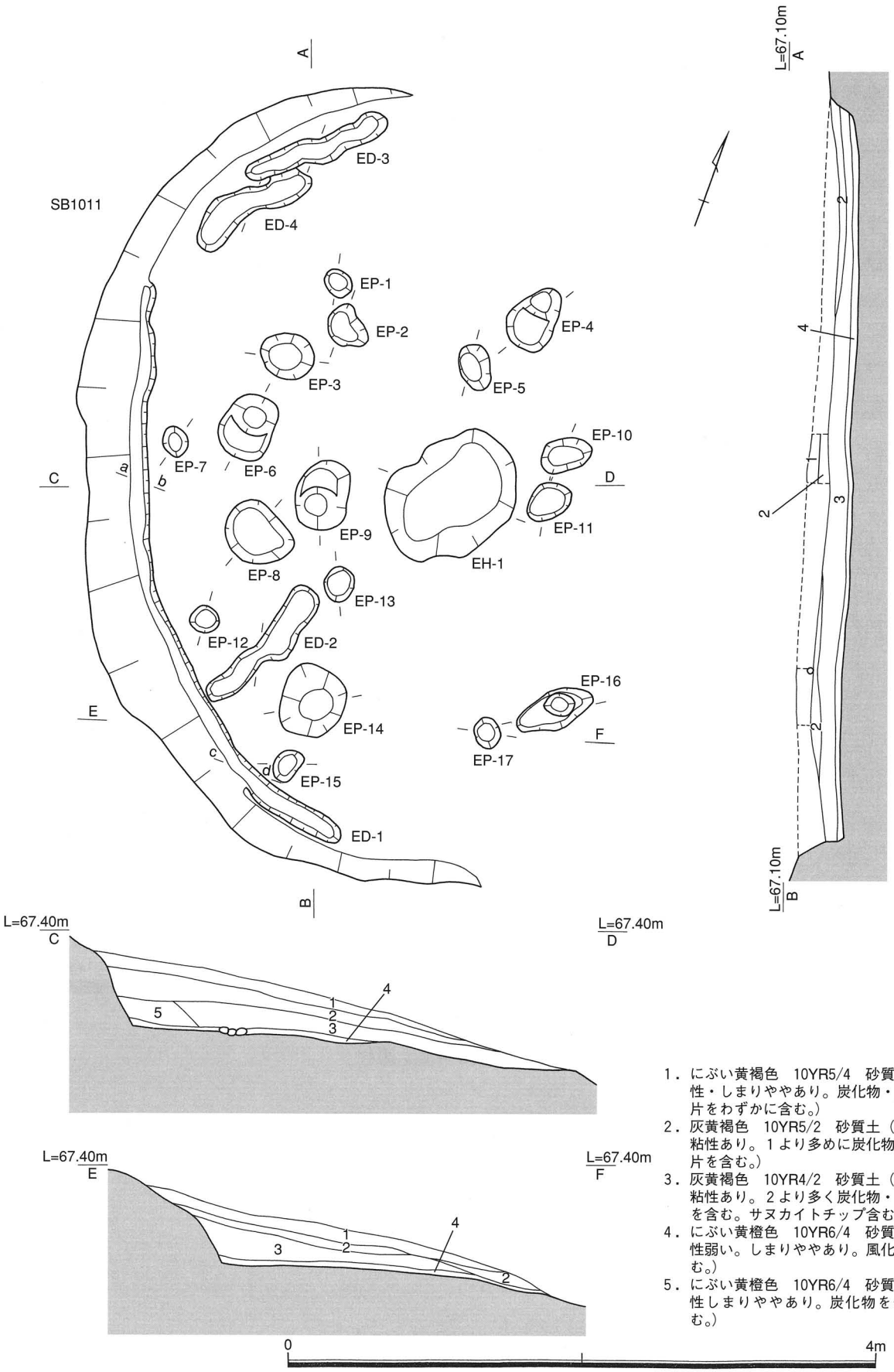
第29図　SB1010平・断面図

出土遺物（第30図）

52は楔形石器で石材はサヌカイトである。53は太形蛤刃石斧で石材に玄武岩を使用している。弥生土器細片なども出土したが、実測可能な遺物はなかった。



第30図　SB1010出土遺物

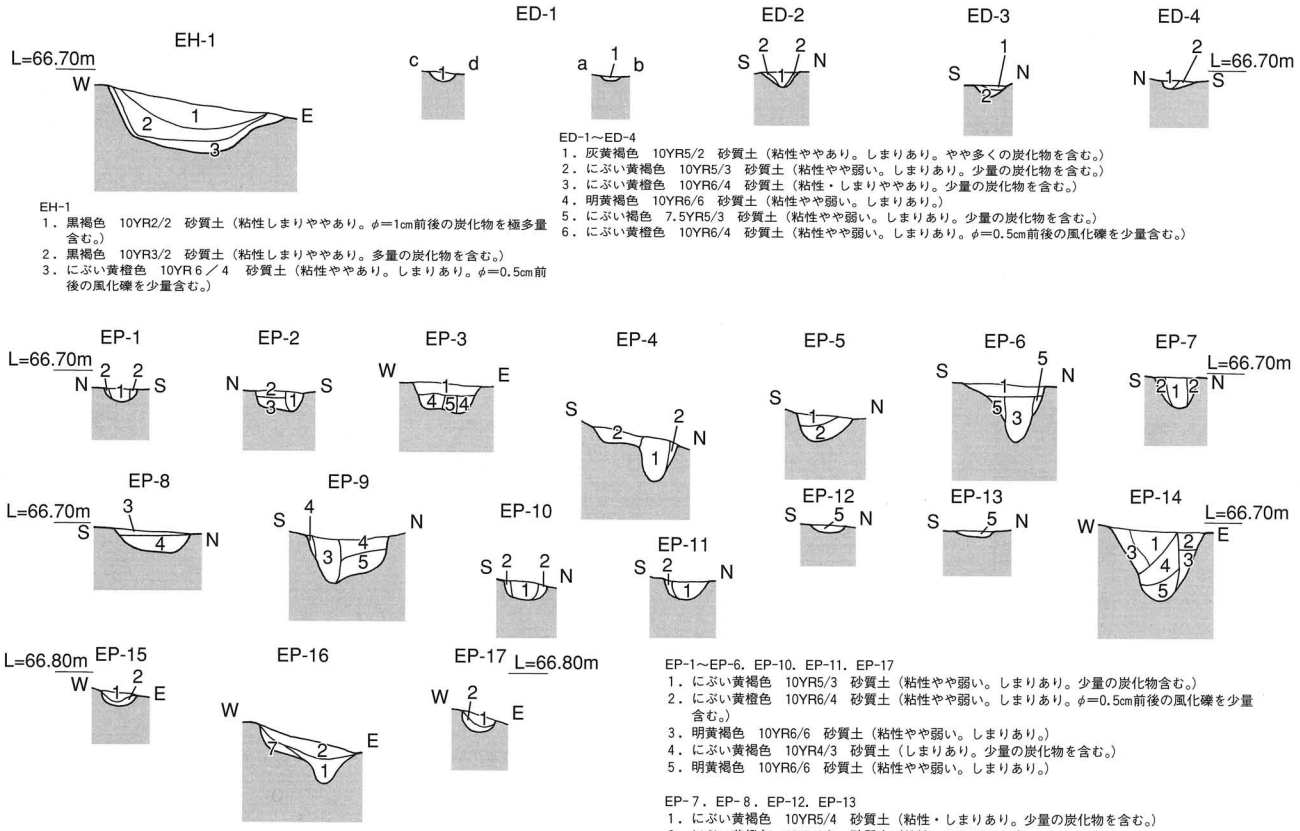


1．にぶい黄褐色　10YR5/4　砂質土（粘性・しまりややあり。炭化物・土器小片をわずかに含む。）
2．灰黄褐色　10YR5/2　砂質土（1より粘性あり。1より多めに炭化物・土器片を含む。）
3．灰黄褐色　10YR4/2　砂質土（2より粘性あり。2より多く炭化物・土器片を含む。サヌカイトチップ含む。）
4．にぶい黄橙色　10YR6/4　砂質土（粘性弱い。しまりややあり。風化礫を含む。）
5．にぶい黄橙色　10YR6/4　砂質土（粘性しまりややあり。炭化物を少量含む。）

第31図　SB1011平・断面図

SB1011（11号竪穴住居跡）（第31・32図）

調査区南部、P・Q-19・20グリッド、遺構内埋土および床面からはサヌカイトの剥片・砕片が多量に検出され、また石鏃などの製品をはじめ、敲石・台石など、石器製作に関係する一連の遺物が出土していることから、住居というよりも石器製作工房的な施設であったと考えられる遺構である。標高67.00m前後の南西向きの斜面上に位置する。西側約1/2が消失しており、半円形の平面プランを呈する。規模は現存長で長軸5.46m、短軸3.54m、最大深度は46cmで、直径5.0mの円形を呈するものと思われる。床面検出の柱穴は4本確認されているが、主柱穴は不明である。炉跡および周壁溝も検出されている。



EH-1
1．黒褐色　10YR2/2　砂質土（粘性しまりややあり。φ=1cm前後の炭化物を極多量含む。）
2．黒褐色　10YR3/2　砂質土（粘性しまりややあり。多量の炭化物を含む。）
3．にぶい黄橙色　10YR 6／4　砂質土（粘性ややあり。しまりあり。φ=0.5cm前後の風化礫を少量含む。）

ED-1～ED-4
1．灰黄褐色　10YR5/2　砂質土（粘性ややあり。しまりあり。やや多くの炭化物を含む。）
2．にぶい黄褐色　10YR5/3　砂質土（粘性やや弱い。しまりあり。少量の炭化物を含む。）
3．にぶい黄橙色　10YR6/4　砂質土（粘性・しまりややあり。少量の炭化物を含む。）
4．明黄褐色　10YR6/6　砂質土（粘性やや弱い。しまりあり。）
5．にぶい褐色　7.5YR5/3　砂質土（粘性やや弱い。しまりあり。少量の炭化物を含む。）
6．にぶい黄橙色　10YR6/4　砂質土（粘性やや弱い。しまりあり。φ=0.5cm前後の風化礫を少量含む。）

EP-1～EP-6. EP-10. EP-11. EP-17
1．にぶい黄褐色　10YR5/3　砂質土（粘性やや弱い。しまりあり。少量の炭化物含む。）
2．にぶい黄橙色　10YR6/4　砂質土（粘性やや弱い。しまりあり。φ=0.5cm前後の風化礫を少量含む。）
3．明黄褐色　10YR6/6　砂質土（粘性やや弱い。しまりあり。）
4．にぶい黄褐色　10YR4/3　砂質土（しまりあり。少量の炭化物を含む。）
5．明黄褐色　10YR6/6　砂質土（粘性やや弱い。しまりあり。）

EP-7. EP-8. EP-12. EP-13
1．にぶい黄褐色　10YR5/4　砂質土（粘性・しまりあり。少量の炭化物を含む。）
2．にぶい黄橙色　10YR6/4　砂質土（粘性・しまりあり。）
3．にぶい黄褐色　10YR4/3　砂質土（粘性ややあり。しまりあり。少量の炭化物を含む。）
4．にぶい黄褐色　10YR5/3　砂質土（粘性ややあり。しまりあり。φ=3cm前後の礫を少量含む。）
5．にぶい黄橙色　10YR6/4　砂質土（粘性・しまりあり。極少量の炭化物を含む。）

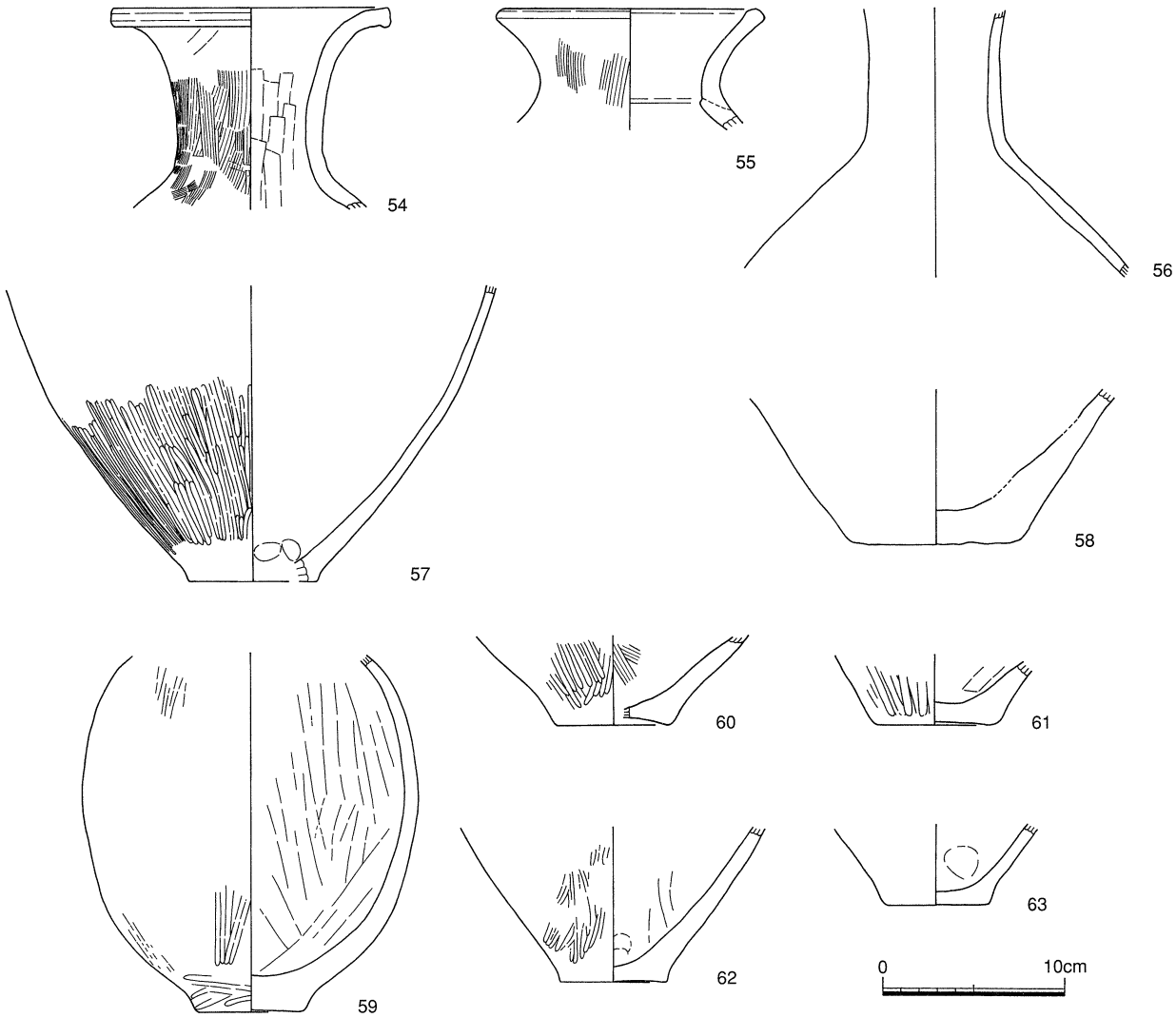
EP-9. EP-15. EP-16
1．にぶい黄褐色　10YR4/3　砂質土（粘性ややあり。しまりあり。少量の炭化物を含む。）
2．黄褐色　2.5Y5/3　砂質土（粘性・しまりやや弱い。）
3．灰黄褐色　10YR4/2　砂質土（粘性ややあり。しまりあり。炭化物を少量含む。）
4．灰黄褐色　10YR5/2　砂質土（粘性ややあり。しまりあり。炭化物を少量含む。）
5．にぶい黄褐色　10YR5/3　砂質土（粘性ややあり。しまりあり。）
6．にぶい黄褐色　10YR5/3　砂質土（粘性やや弱い。しまりあり。少量の炭化物を含む。）
7．にぶい黄橙色　10YR6/4　砂質土（粘性やや弱い。しまりあり。φ=0.5cm前後の風化礫を少量含む。）

EP-14
1．灰黄褐色　10YR4/2　砂質土（粘性・しまりややあり。φ=1cm前後の炭化物をやや多く含む。）
2．灰黄褐色　10YR4/2　砂質土（粘性やや弱い。しまりややあり。やや多くの炭化物を含む。）
3．黄褐色　2.5Y5/4　砂質土（粘性弱い。しまりやや弱い。φ=4cm前後の風化礫を多く含む。）
4．灰黄褐色　10YR4/2　砂質土（粘性・しまりややあり。やや多くの炭化物を含む。）
5．黄褐色　2.5Y5/4　砂質土（粘性やや弱い。しまりややあり。φ=4cm前後の風化礫を多く含む。）

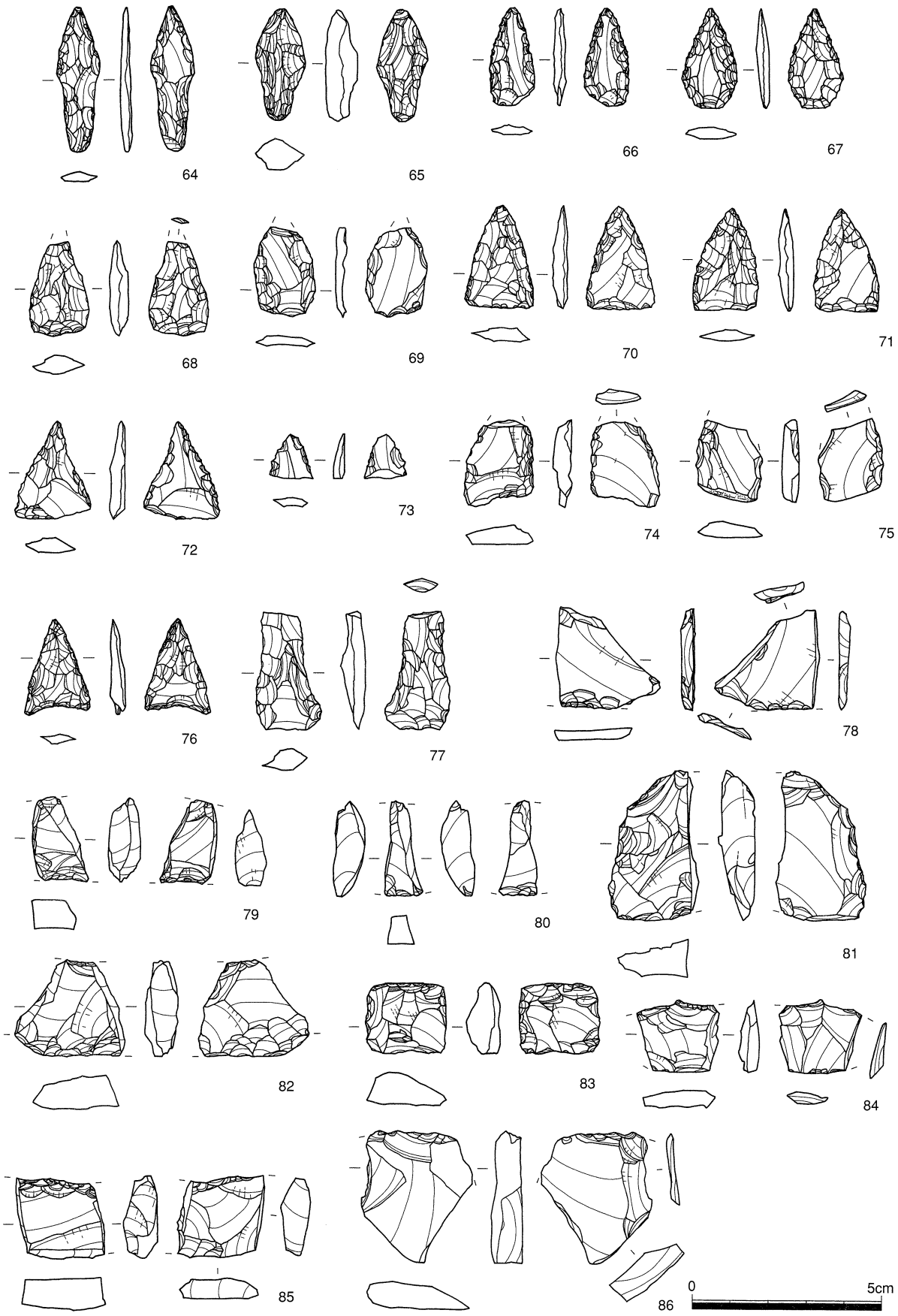
第32図　SB1011-EH・ED・EP 断面図

出土遺物（第33～37図）

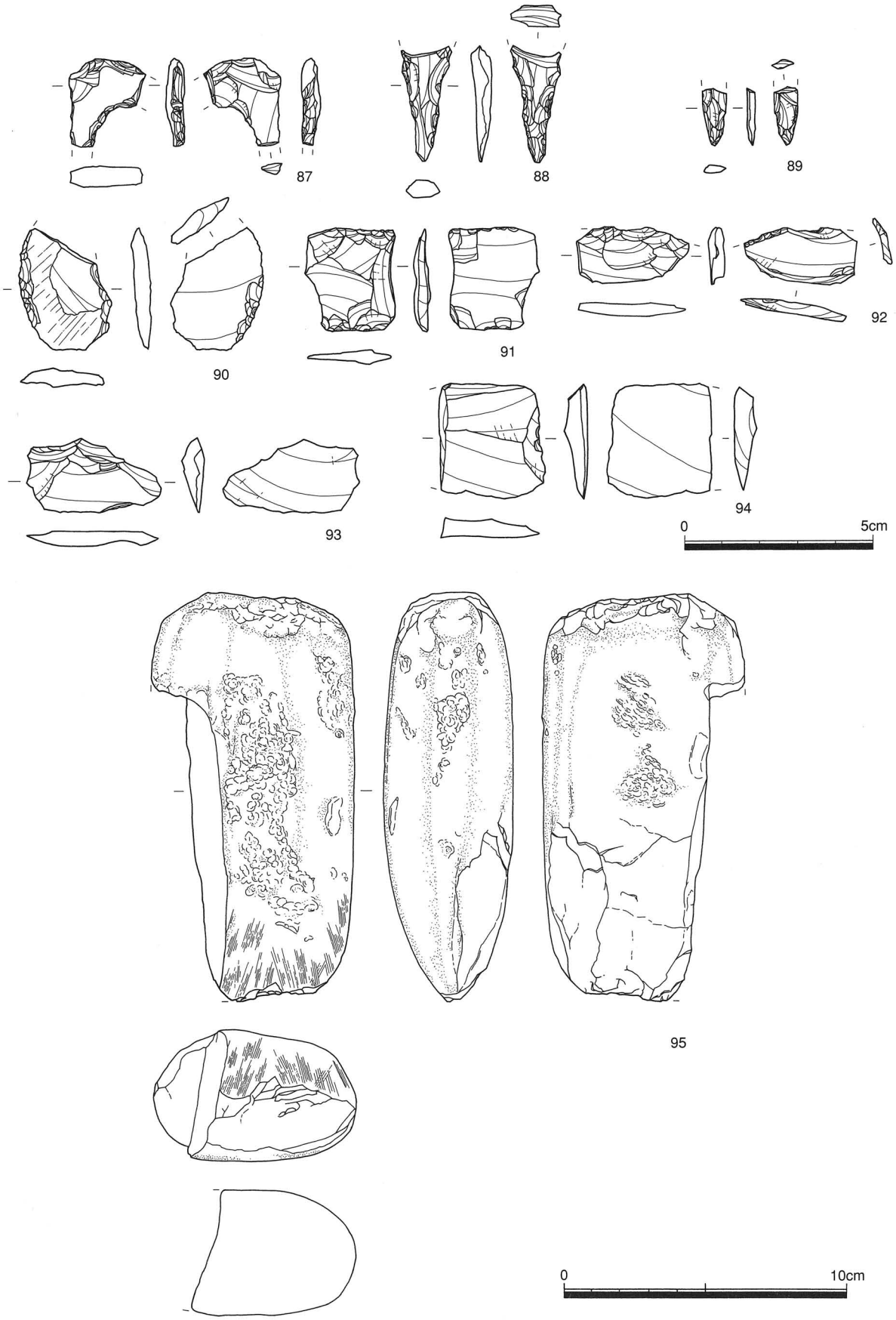
54～61は壺、62・63は甕と思われる。いずれも底部など小片が多いため、全体の判明するものは少ない。石器類は他の遺構に比べ、多く出土している。その多くはチップなどの砕片であるため、実測可能なものは36点である。量的に多いのは石鏃、楔形石器である。64～77は石鏃、78は削器、79～86は楔形石器、87～89は石錐、90は使用痕のある剥片、91～94は剥片である。石材はいずれもサヌカイトを用いている。95は太形蛤刃石斧で石材に玄武岩を使用している。96は扁平片刃石斧である。石材は片岩である。97は敲石、98は台石、99は砥石で共に砂岩を用いる。



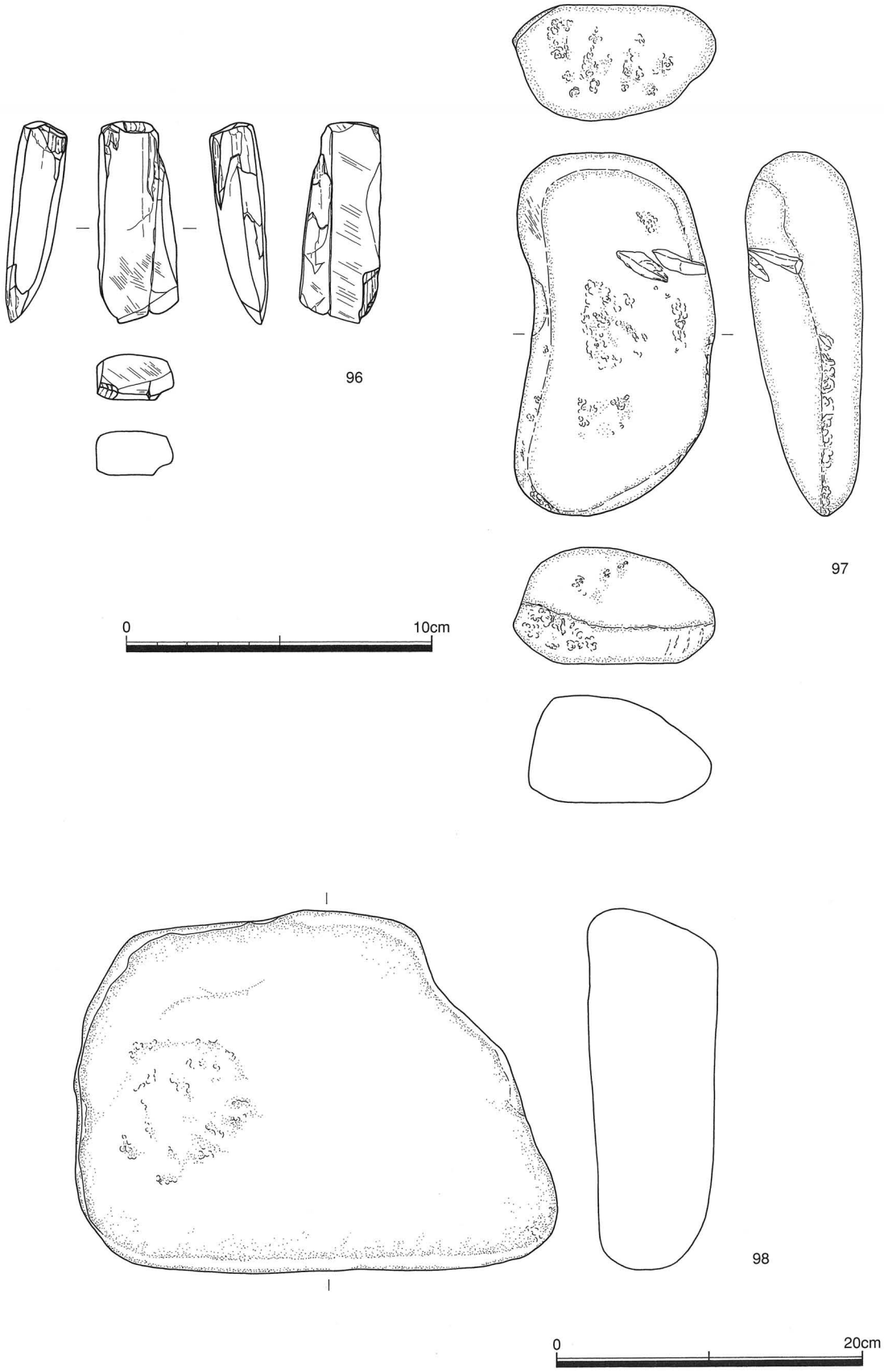
第33図　SB1011出土遺物１



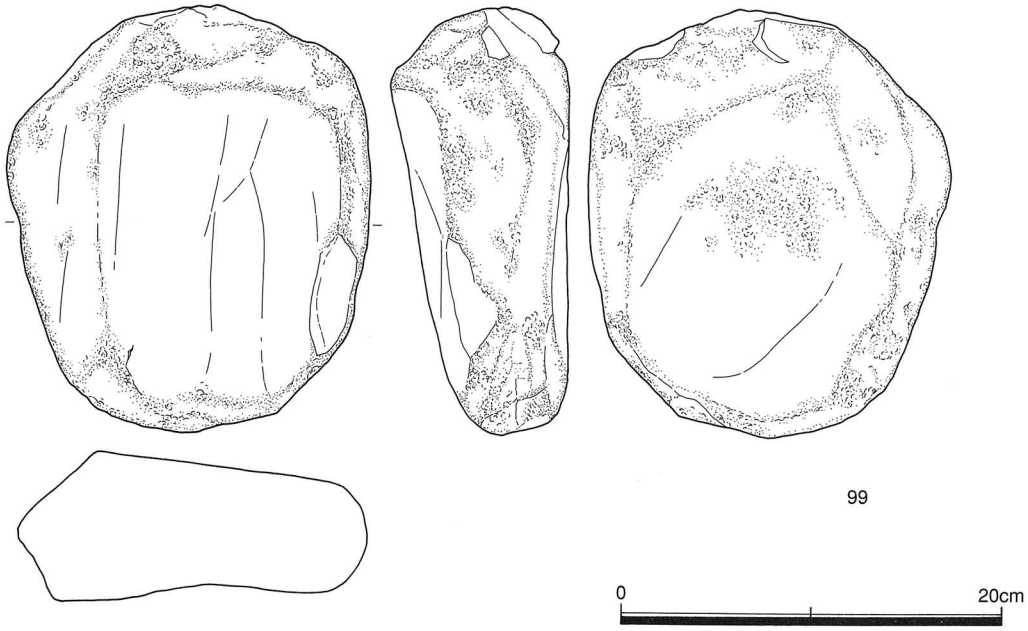
第34図　SB1011出土遺物 2



第35図　SB1011出土遺物 3



第36図　SB1011出土遺物 4



第37図　SB1011出土遺物５

段状遺構（SD）（第２図）

本遺跡から出土した段状遺構（SD）は東および西斜面上に形成されている。段状遺構は地形コンタラインに沿って、斜面を大規模に「L」字状にカットすることで平坦面を造りだすものである。段状遺構という呼称は、遺構の造成過程において与えられた名称であり、形態的な呼称である。ゆえに機能的部分について表現したものではない。

弥生時代の高地性集落で出土する段状遺構は、その形状や規模、および付帯施設等について多くのバリエーションを持っており、段状遺構という一遺構の中でも様々な機能的差異を持つと考えられる。近年においても様々な検討が成されているが、未だ機能的側面について不明な点が多いため、本遺跡についても機能的な部分について極力言及はしていない。

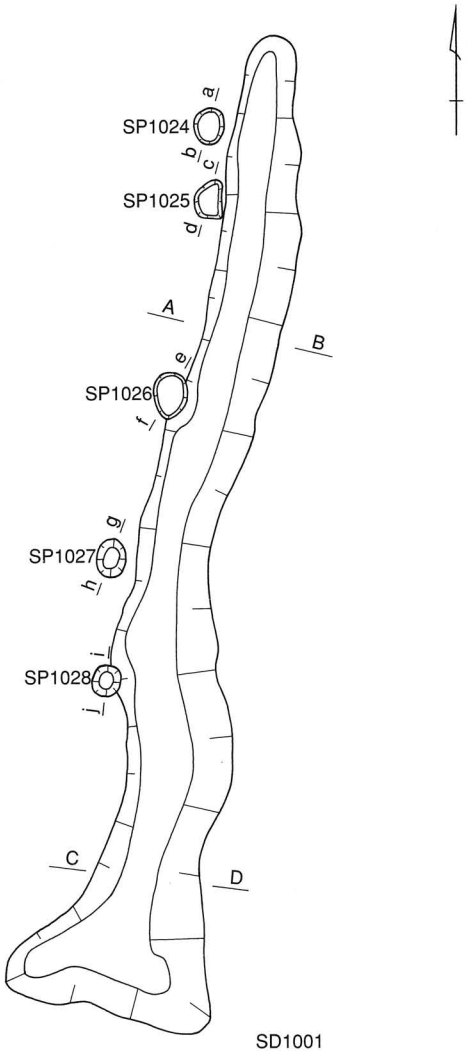
本遺跡では計11基の段状遺構が確認された。段状遺構内堆積土は地山土に酷似した風化砂礫土であり、急峻な地形のため非常に早い速度で堆積したことが窺われる。平面の形態的には、全長5.0m前後の細長い不定形な形状をしたものが多く、また柱穴・周壁溝などを伴うものは少ない。段状遺構としたものの中で、柱穴を伴うものは、竪穴住居跡になる可能性も残す。

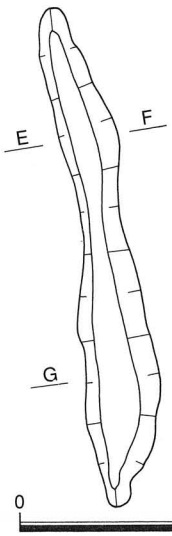
SD1001（段状遺構１）（第38図）

調査区南西部、G-2・３グリッド、標高54m前後の斜面上の地形コンタラインに沿って構築される。斜面を「L」字状にカットし、立ち上がりは確認できない。平面形状は細長い楕円形状（溝状）を呈する。また同一地形コンタラインに沿って、段状遺構に付帯すると思われる数基の柱穴が確認されている。段状遺構内堆積土は地山土に酷似した風化砂礫土であり、急峻な地形のため非常に早い速度で堆積したことが窺われる。

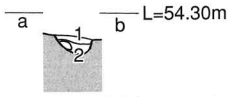
出土遺物

弥生土器細片などが出土したが、実測可能な遺物はなかった。



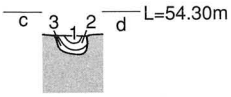


SP1024



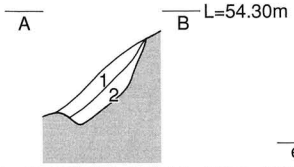
1．にぶい黄橙色　10YR6/4　砂質土（粘性ややなし。しまりややあり。）
2．明黄褐色　10YR6/6　砂質土（粘性ややなし。しまりややあり。φ=2cm前後の礫を含む。）

SP1025



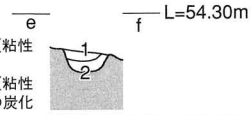
1．明黄褐色　10YR6/6　砂質土（粘性ややなし。しまりややあり。）
2．にぶい黄橙色　10YR6/3　砂質土（粘性ややなし。しまりややあり。少量の炭化物を含む。）
3．明黄褐色　10YR6/8　砂質土（粘性ややなし。しまりややあり。）

SD1001



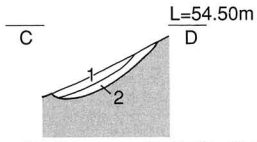
1．にぶい黄橙色　10YR6/4　砂質土（粘性ややなし。しまりややあり。）
2．にぶい黄橙色　10YR6/4　砂質土（粘性ややなし。しまりややあり。少量の炭化物を含む。）

SP1026



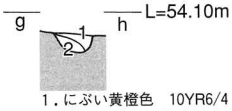
1．にぶい黄橙色　10YR6/4　砂質土（粘性ややなし。しまりややあり。）
2．明黄褐色　10YR6/6　砂質土（粘性ややなし。しまりややあり。φ=2cm前後の礫を含む。）

SD1001



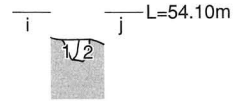
1．明黄褐色　10YR7/6　砂質土（粘性ややなし。しまりややあり。）
2．明黄褐色　10YR7/6　砂質土（粘性ややなし。しまりややあり。φ=5cm前後の礫を少量含む。）

SP1027



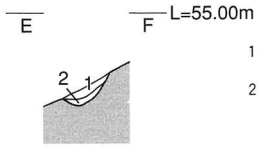
1．にぶい黄橙色　10YR6/4　砂質土（粘性ややなし。しまりややあり。φ=4cm前後の礫を少量含む。）
2．にぶい黄橙色　10YR7/4　砂質土（粘性ややなし。しまりややあり。φ=4cm前後の礫を少量含む。）

SP1028



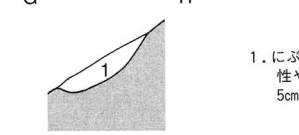
1．にぶい黄橙色　10YR6/4　砂質土（粘性ややなし。しまりややあり。φ=1～2cmの礫を少量含む。）
2．にぶい黄褐色　10YR5/3　砂質土（粘性ややなし。しまりややあり。炭化物を含む。）

SD1001



1．にぶい黄褐色　10YR5/3　砂質土（粘性ややなし。しまりややあり。）
2．明黄褐色　10YR6/6　砂質土（粘性ややなし。しまりややあり。φ=2～3cmの風化礫を含む。）

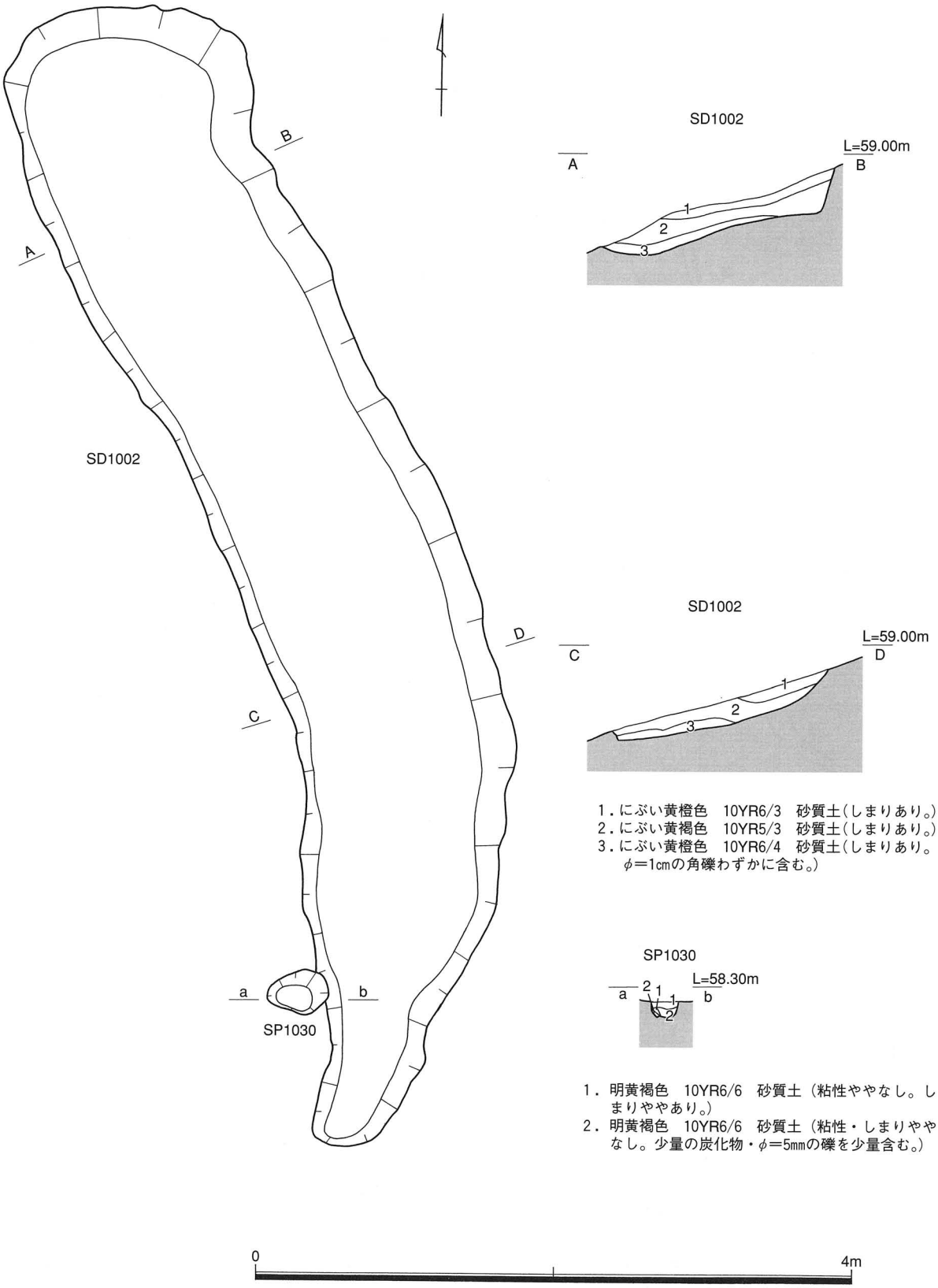
SD1001



1．にぶい黄橙色　10YR6/4　砂質土（粘性ややなし。しまりややあり。φ=5cm前後の風化礫を含む。）

0　4m

第38図　SD1001およびSP1024～1028平・断面図



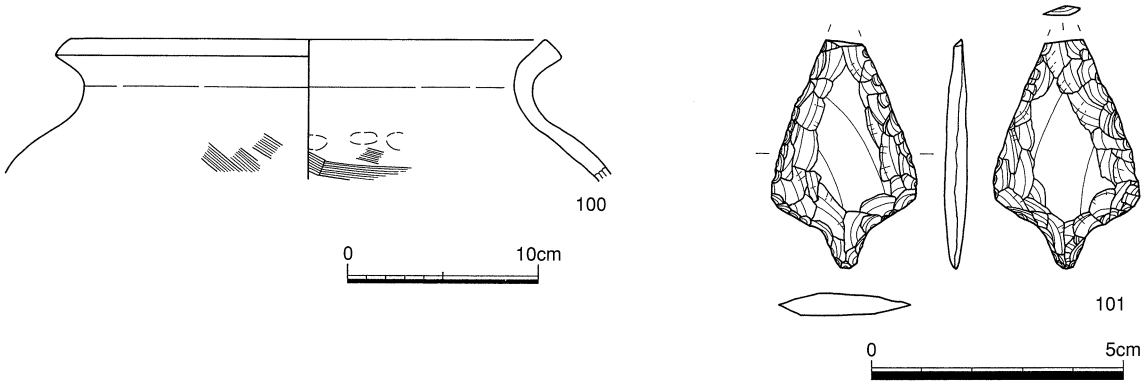
第39図　SD1002・SP1030平・断面図

SD1002（段状遺構２）（第39図）

H・I-4グリッド、調査区南西部、標高59.00m前後の斜面上に構築され、SB1006の上を地形コンタラインに沿って延びる。平面形状は細長い楕円形状を呈する。斜面を「L」字状にカットし、平坦面を造りだす。柱穴・周壁溝等の付帯施設は伴わない。段状遺構内堆積土は地山土に酷似した風化砂礫土であり、急峻な地形のため非常に早い速度で堆積したことが窺われる。

出土遺物（第40・41図）

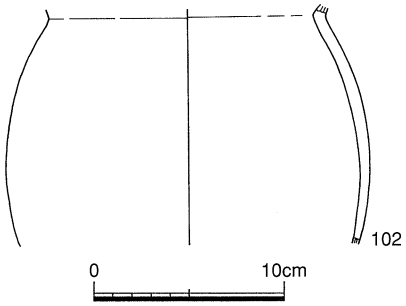
弥生土器小片、サヌカイトチップなどが出土したが、実測可能な遺物は２点のみであった。100は甕口縁部である。101はサヌカイトの石鏃で器長５㎝程度の大形のものである。102はSD1002に付随すると思われる柱穴出土土器で甕体部である。



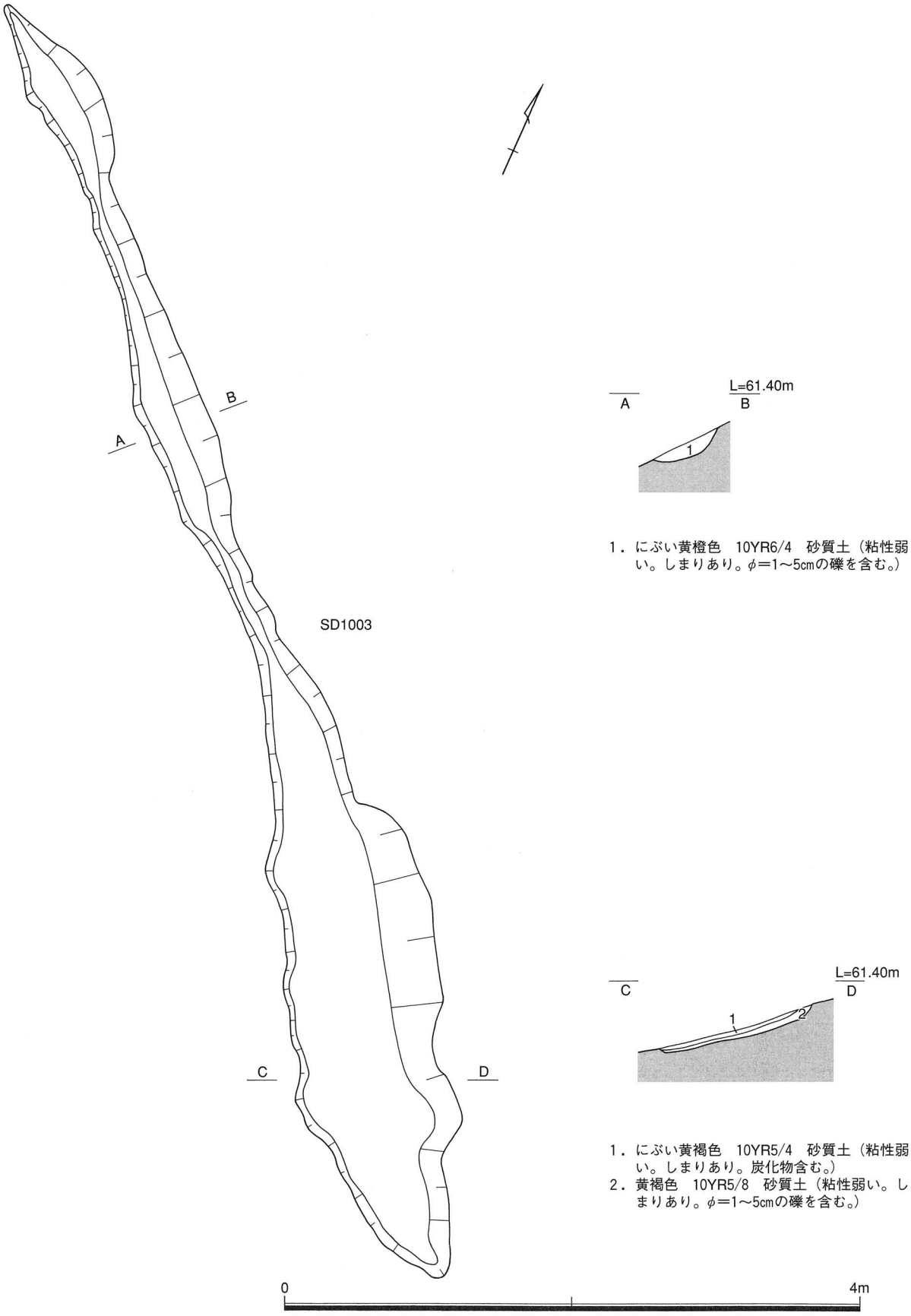
第40図　SD1002出土遺物

SD1003（段状遺構３）（第42図）

J・K-3・４グリッド、調査区南西部、SB1004の下を地形コンタラインに沿って延びる。標高61.00m前後の地点の斜面を「L」字状にカットして造りだし、平面形状は細長い不整形な楕円形状を呈する。柱穴・周壁溝等の付帯施設は伴わない。段状遺構内堆積土は地山土に酷似した風化砂礫土であり、急峻な地形のため非常に早い速度で堆積したことが窺われる。



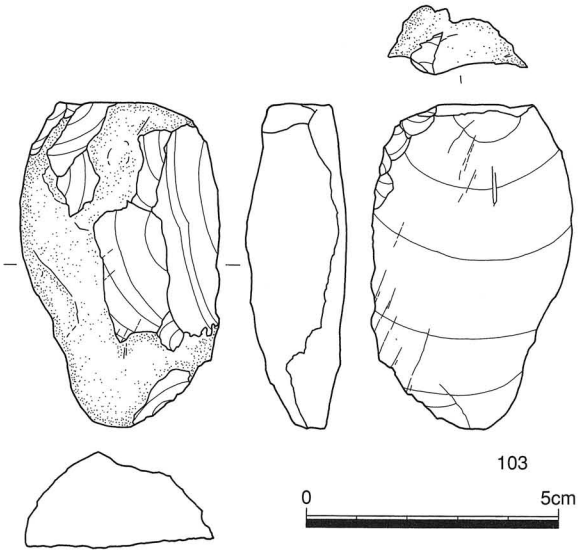
第41図　SP1030出土遺物



第42図　SD1003平・断面図

出土遺物（第43図）

弥生土器片などが出土したが、いずれも細片のため実測可能なものは少ない。103はサヌカイト剥片で自然面を残す。



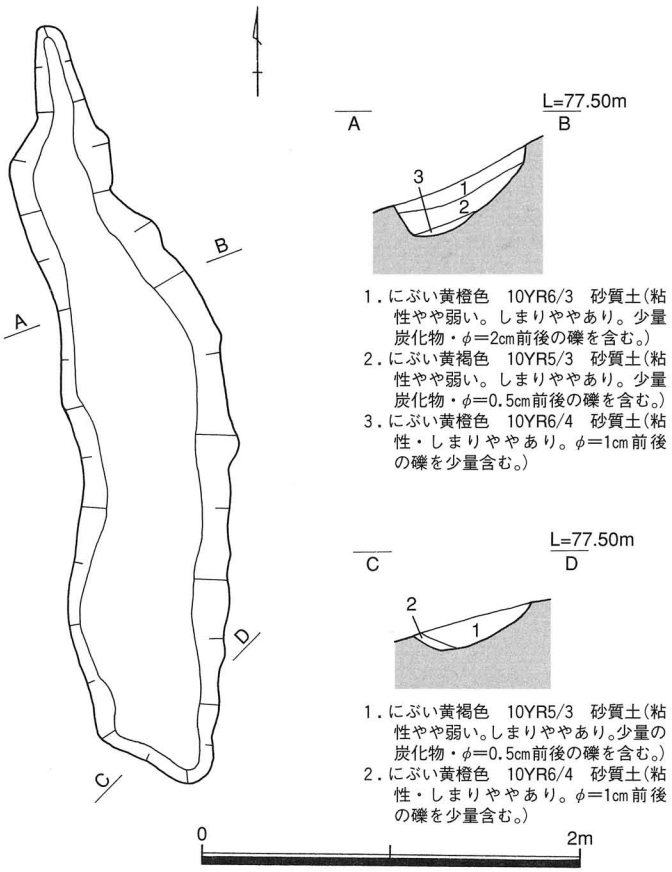
第43図　SD1003出土遺物

SD1004（段状遺構４）（第44図）

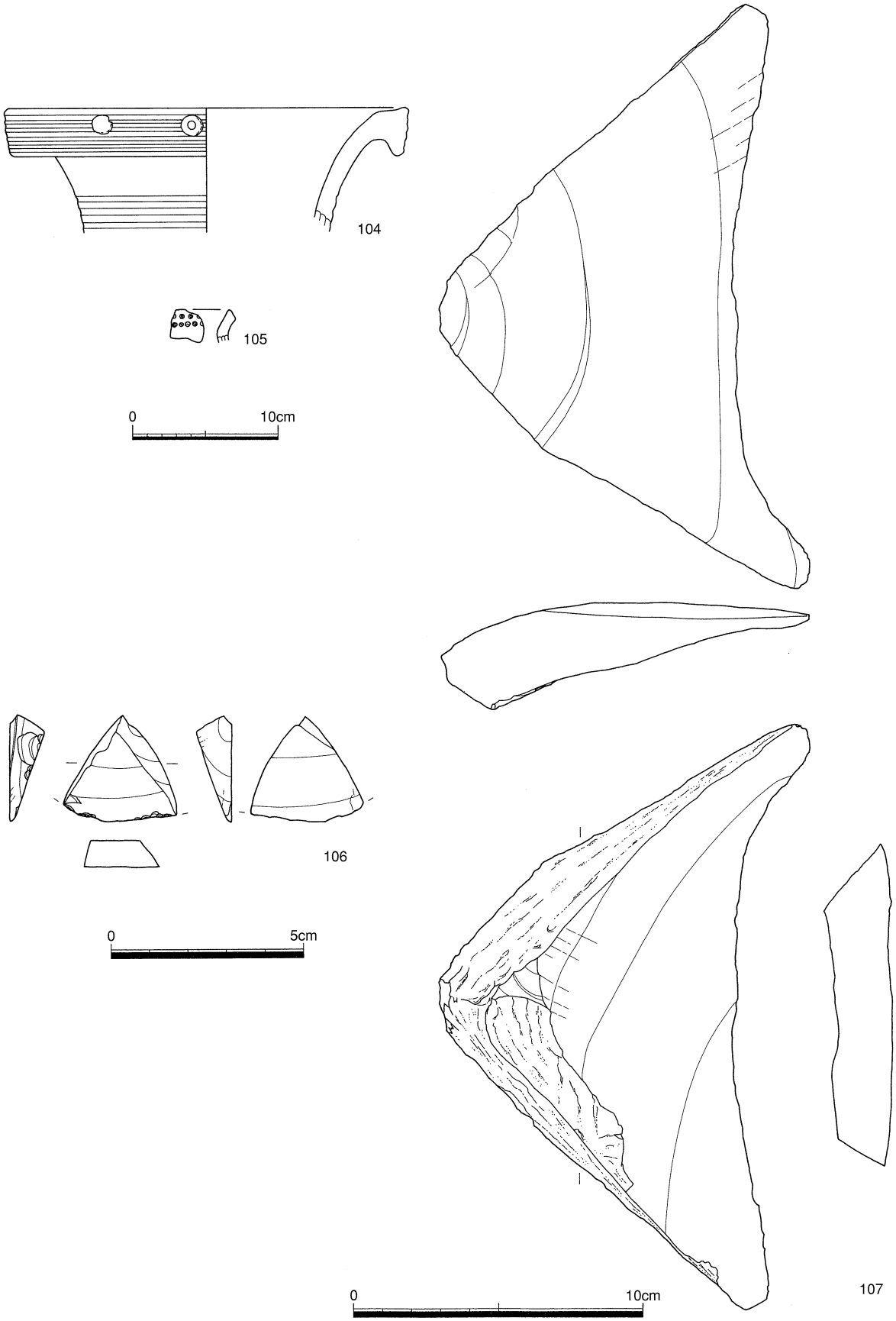
Q・R-9グリッド、調査区南西部、標高78.00m前後の地点の東側斜面を「L」字状にカットして、平坦面を造りだす。平面形は細長い楕円形状を呈する。段状遺構内堆積土は地山土に酷似した風化砂礫土であり、急峻な地形のため非常に早い速度で堆積したことが窺われる。

出土遺物（第45図）

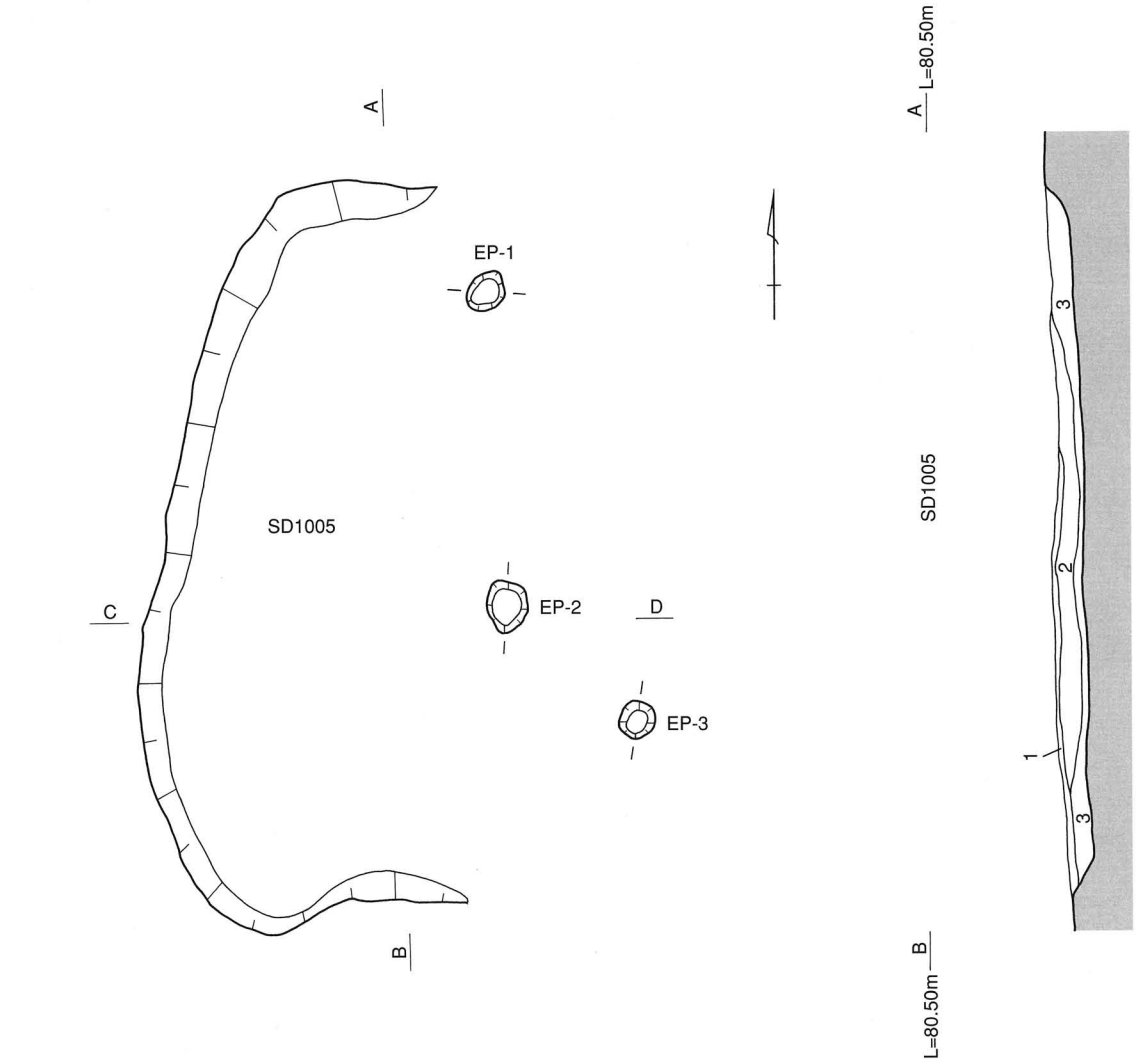
104・105は壺である。104は口縁端部外面に円形浮文、105は口縁端部内面に竹管文が装飾される。106は楔形石器、107は大形の剥片で自然面が残存する。石材はいずれもサヌカイトである。

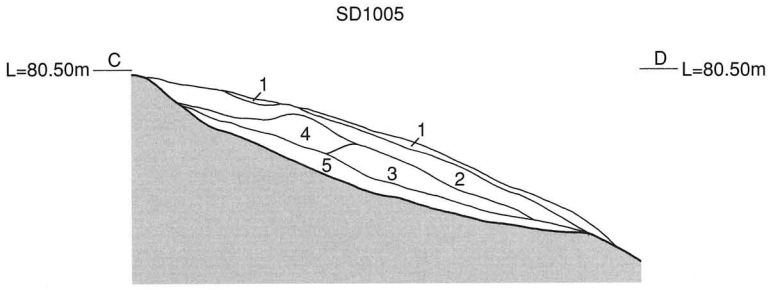


第44図　SD1004平・断面図



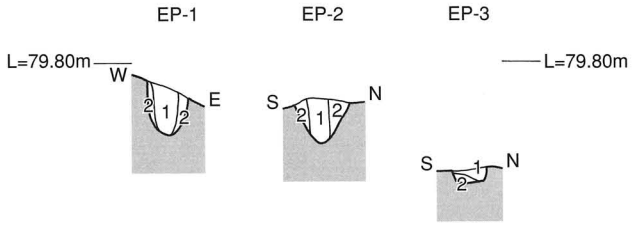
第45図　SD1004出土遺物





SD1005A-B、C-D

1．褐色　10YR4/4　砂質土（粘性しまりややなし。少量の炭化物を含む。）
2．にぶい黄褐色　10YR4/3　砂質土（粘性しまりややなし。1より多くの炭化物と若干の焼土を含む。）
3．にぶい黄褐色　10YR5/4　砂質土（粘性しまりややあり。少量の炭化物を含む。）
4．黄褐色　10YR5/6　砂質土（粘性しまりややあり。風化礫等の5㎝前後の礫を少量含む。）
5．にぶい黄橙色　10YR6/4　（岩盤）



EP-1、EP-2

1．にぶい黄褐色　10YR5/4　砂質土（粘性ややあり。しまりあり。少量の炭化物を含む。）
2．黄褐色　10YR5/6　砂質土（粘性ややあり。しまりあり。）

EP-3

1．にぶい黄橙色　10YR6/4　砂質土（粘性・しまりやや弱い。）
2．にぶい黄橙色　10YR6/3　（岩盤）

0　4m

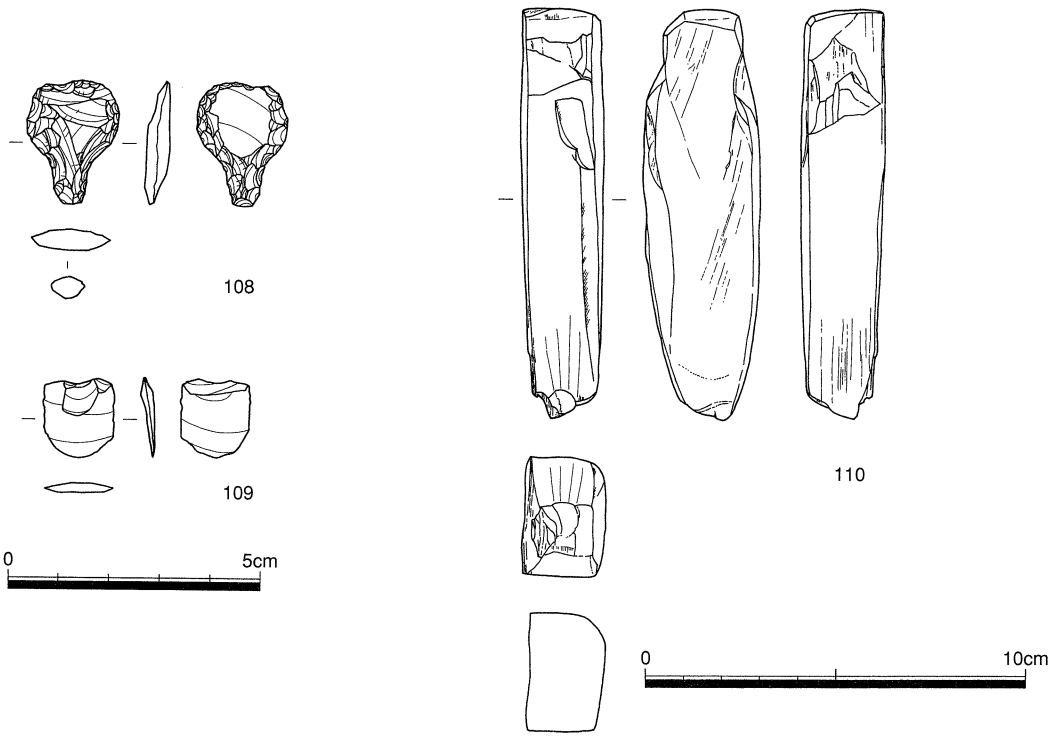
第46図　SD1005平・断面図

SD1005（段状遺構５）（第46図）

U-13グリッド、調査区中央部、標高80.00m 前後の地点の東側斜面を「L」字状にカットして、平坦面を造りだしている。平面形は隅丸長方形状を呈する。残存状態は良くないが、柱穴が２基確認されており、竪穴住居跡の可能性を残す。段状遺構内堆積土は地山土に酷似した風化砂礫土であり、急峻な地形のため非常に早い速度で堆積したことが窺われる。

出土遺物（第47図）

108は石錐、109は剥片である。石材はサヌカイトである。110は片岩の柱状片刃石斧である。基部に弱い抉りがある。また刃部は使用によると思われる刃潰れがみられる。



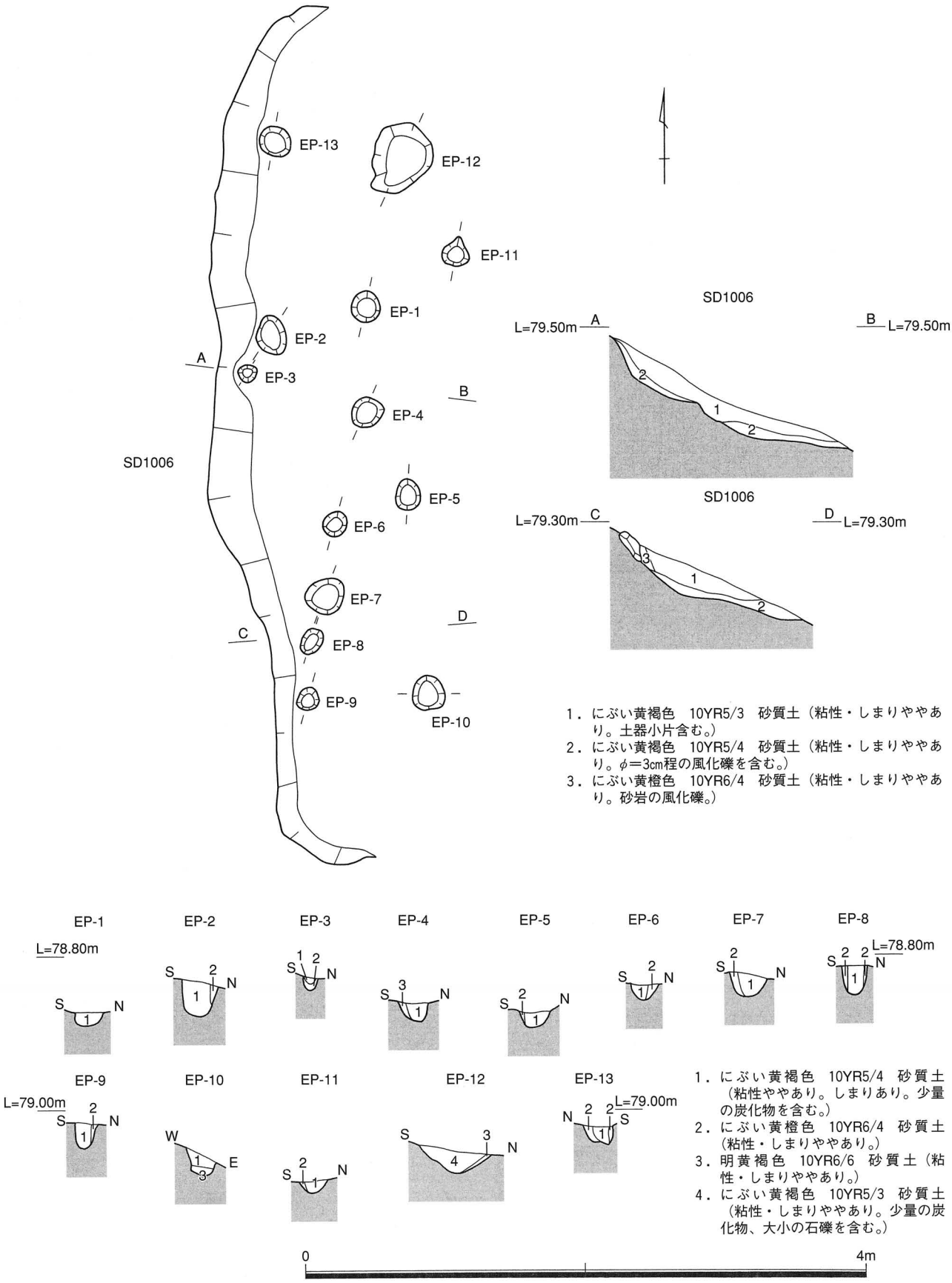
第47図　SD1005出土遺物

SD1006（段状遺構６）（第48図）

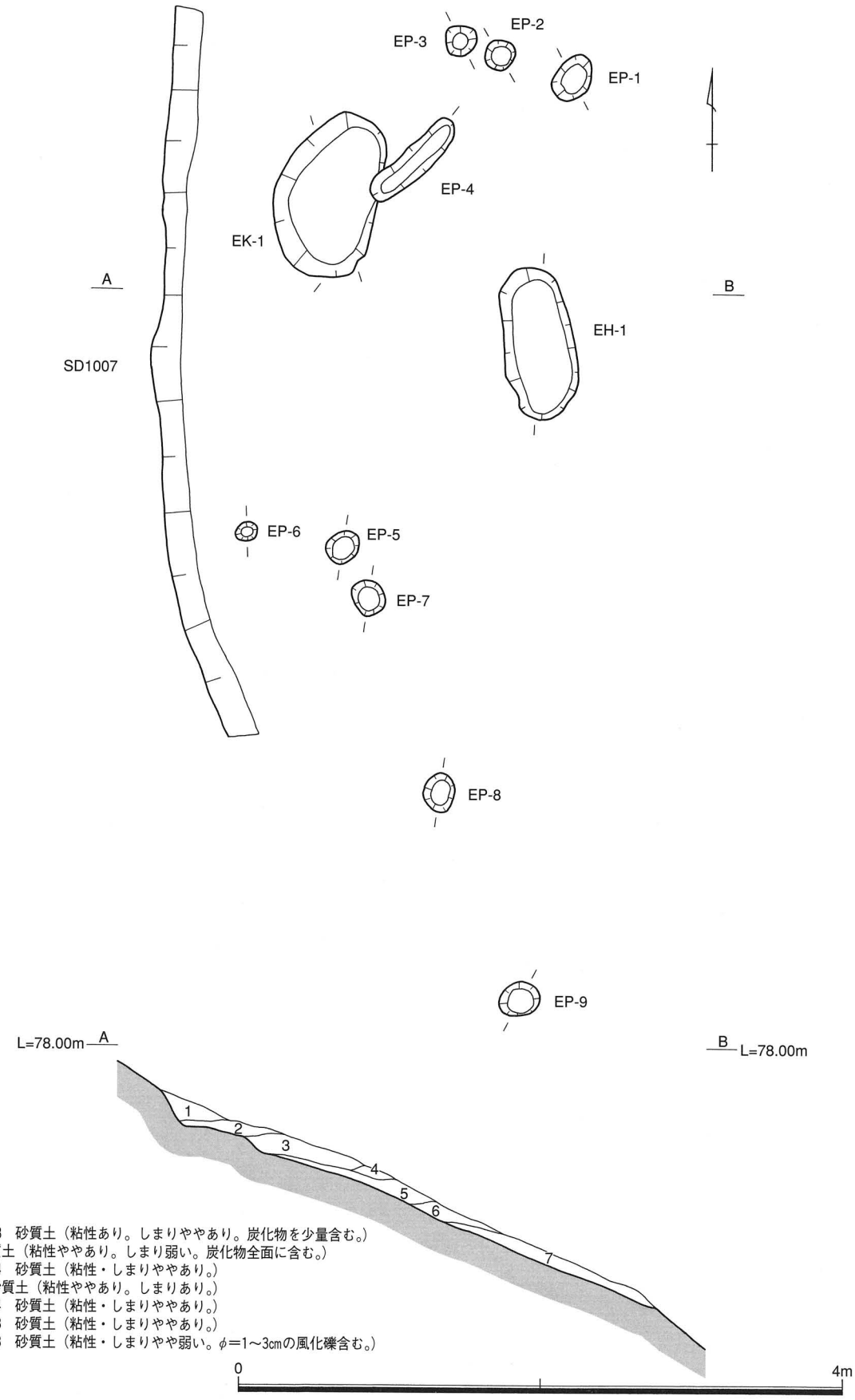
U・V-14グリッド、調査区中央部、標高79.00m 前後の地点の東側斜面を地形コンタラインに沿って「L」字状にカットし、平坦面を造りだしている。立ち上がりは確認できない。平面形はやや細長い隅丸長方形状を呈する。13基の柱穴が出土しており、竪穴住居跡の可能性もある。段状遺構内堆積土は地山土に酷似した風化砂礫土であり、急峻な地形のため非常に早い速度で堆積したことが窺われる。

出土遺物

実測可能な遺物は出土していない。



第48図　SD1006平・断面図

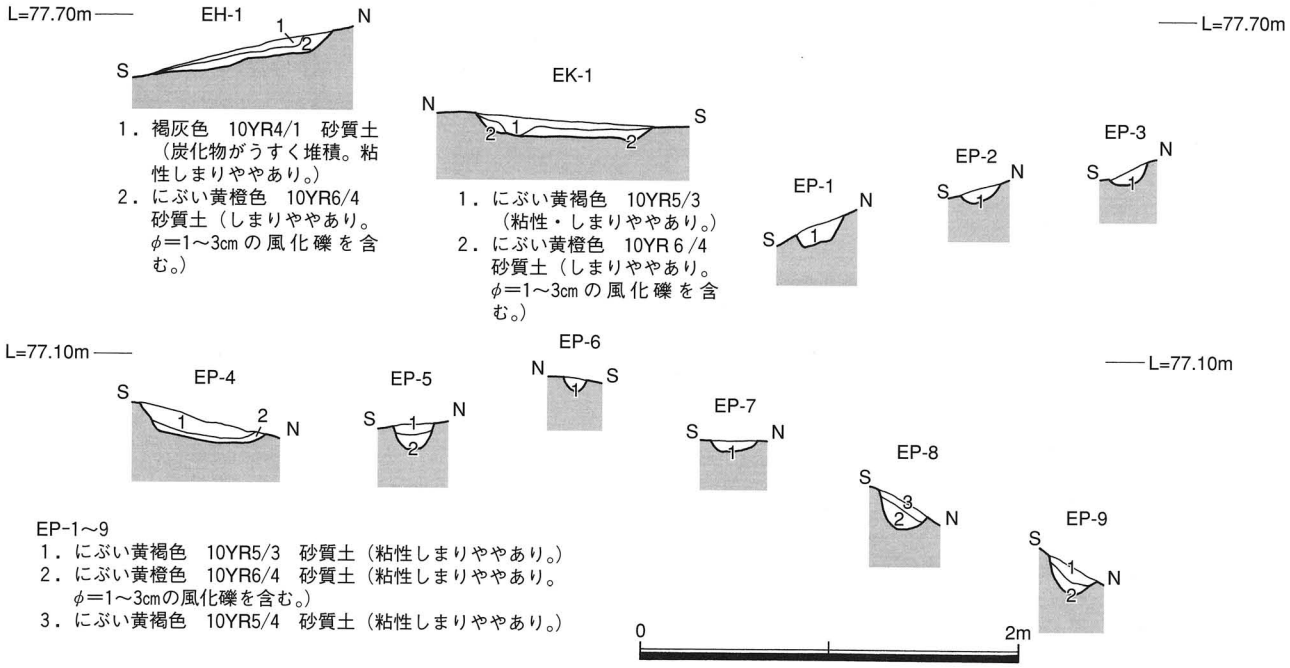


1．にぶい黄褐色　10YR4/3　砂質土（粘性あり。しまりややあり。炭化物を少量含む。）
2．黒褐色　10YR3/1　砂質土（粘性ややあり。しまり弱い。炭化物全面に含む。）
3．にぶい黄褐色　10YR5/4　砂質土（粘性・しまりややあり。）
4．明黄褐色　10YR6/6　砂質土（粘性ややあり。しまりあり。）
5．にぶい黄橙色　10YR6/4　砂質土（粘性・しまりややあり。）
6．にぶい黄橙色　10YR6/3　砂質土（粘性・しまりややあり。）
7．にぶい黄褐色　10YR5/3　砂質土（粘性・しまりやや弱い。φ＝1～3cmの風化礫含む。）

第49図　SD1007平・断面図

SD1007（段状遺構７）（第49・50図）

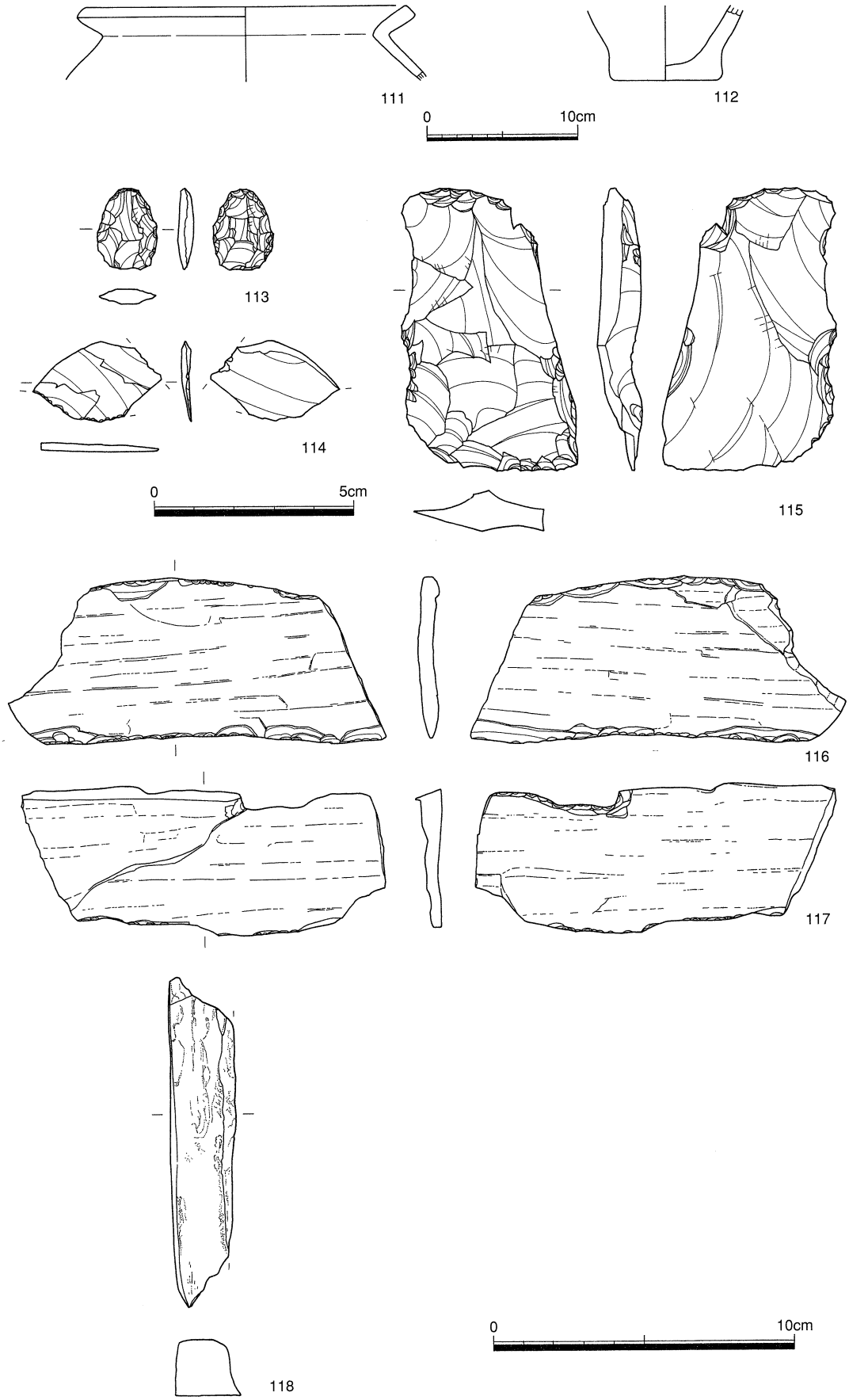
V-14・15グリッド、調査区中央部、標高77.00m 前後の地点の東側斜面を地形コンタラインに沿って「L」字状にカットし、平坦面を造りだしている。立ち上がりは確認できない。平面形は長方形状を呈し、平坦面上には複数の土坑・柱穴が出土したが、切り合い関係は不明瞭である。竪穴住居跡の可能性を残す。段状遺構内堆積土は地山土に酷似した風化砂礫土であり、急峻な地形のため非常に早い速度で堆積したことが窺われる。



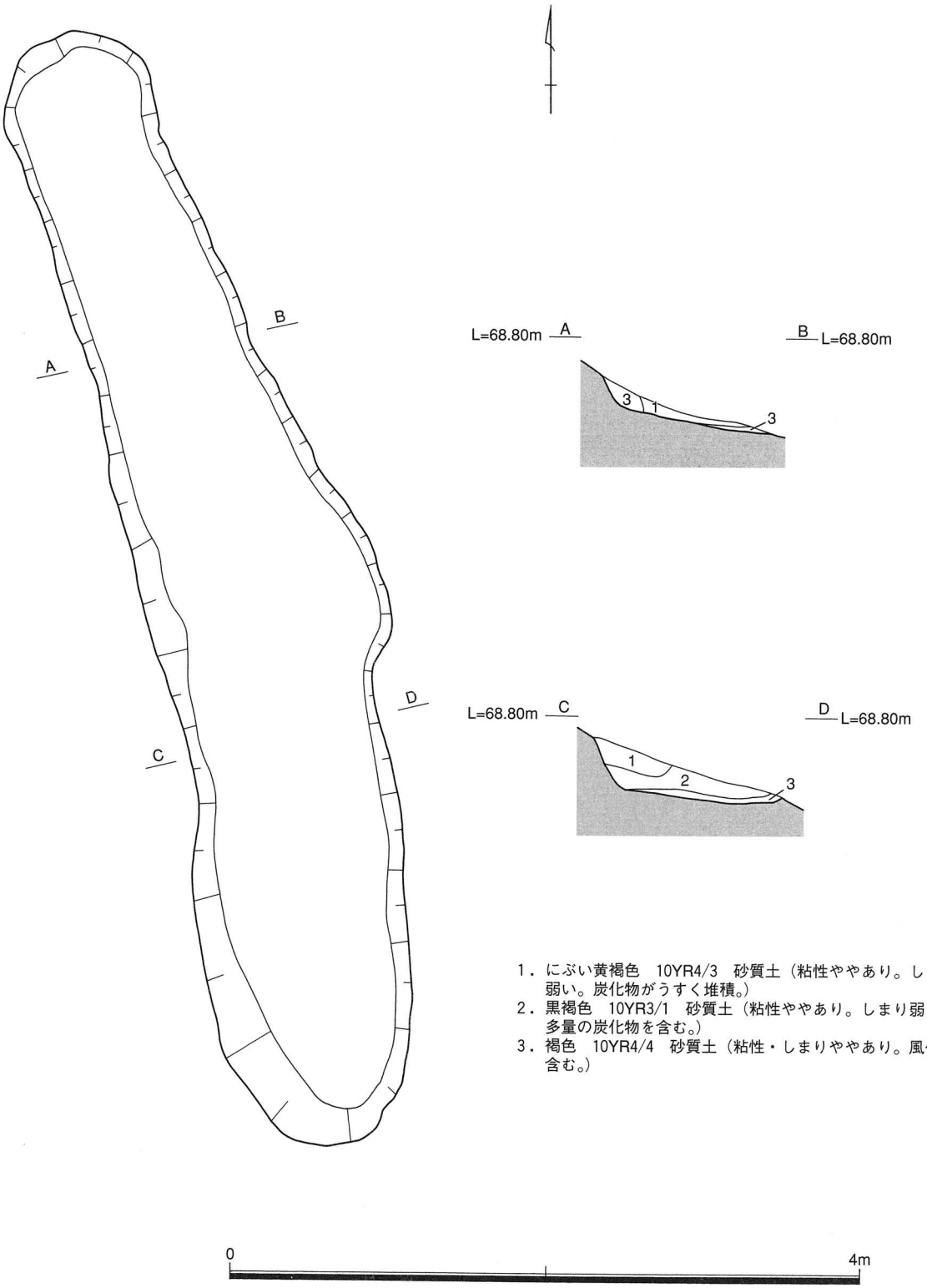
第50図　SD1007-EH・EK・EP 平・断面図

出土遺物（第51図）

111は甕口縁部である。112は壺底部と思われる。113は石鏃、114は剥片である。115は楔形石器である。いずれも石材はサヌカイトを用いる。116・117は石庖丁で、結晶片岩の剥片を素材としている。118は柱状片刃石斧で石材は片岩を用いる。



第51図　SD1007出土遺物



第52図　SD1008平・断面図

SD1008（段状遺構８）（第52図）

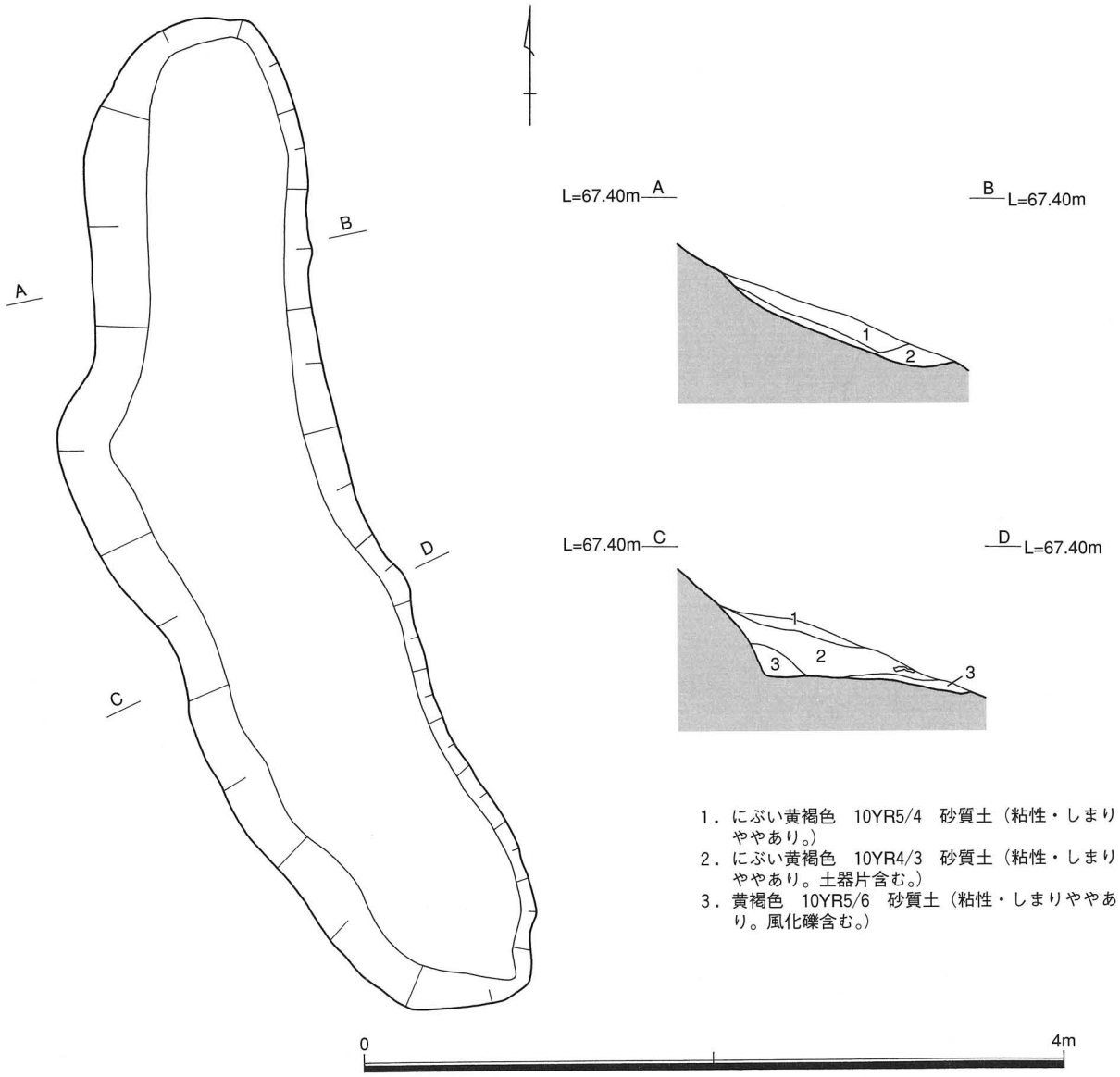
P・Q-18グリッド、調査区南東部、標高69.00m前後の地点の東側斜面を「L」字状にカットして、平坦面を造りだす。平面形は細長い楕円形状を呈する。柱穴等は出土していない。段状遺構内堆積土は地山土に酷似した風化砂礫土であり、急峻な地形のため非常に早い速度で堆積したことが窺われる。

出土遺物

実測可能な遺物は出土していない。

SD1009（段状遺構９）（第53図）

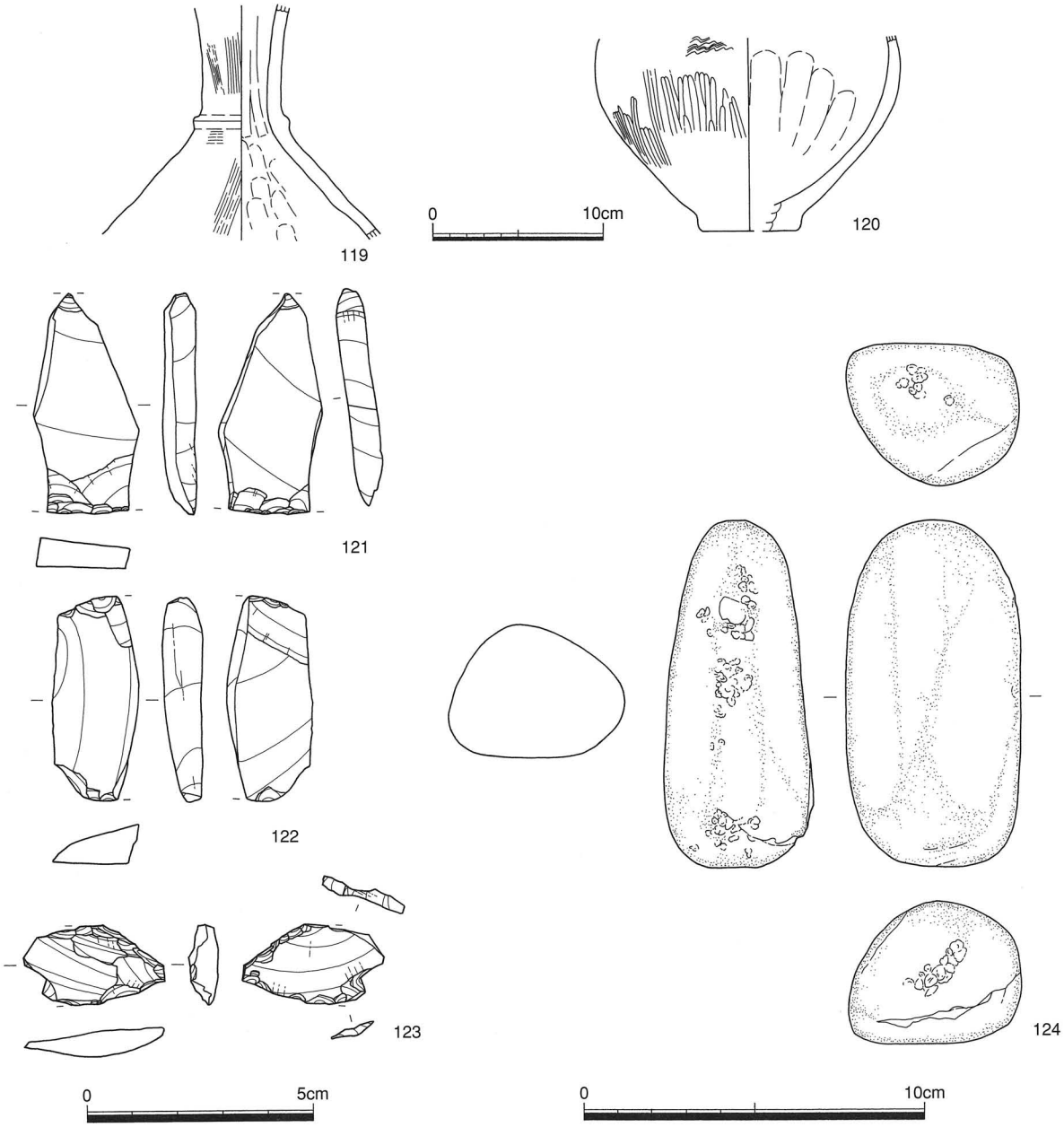
Q・R-18・19グリッド、調査区南東部、標高67.00m前後の地点の東側斜面を「L」字状にカットして、平坦面を造りだす。平面形は細長い楕円形状を呈する。柱穴等は出土していない。段状遺構内堆積土は地山土に酷似した風化砂礫土であり、急峻な地形のため非常に早い速度で堆積したことが窺われる。



第53図　SD1009平・断面図

出土遺物（第54図）

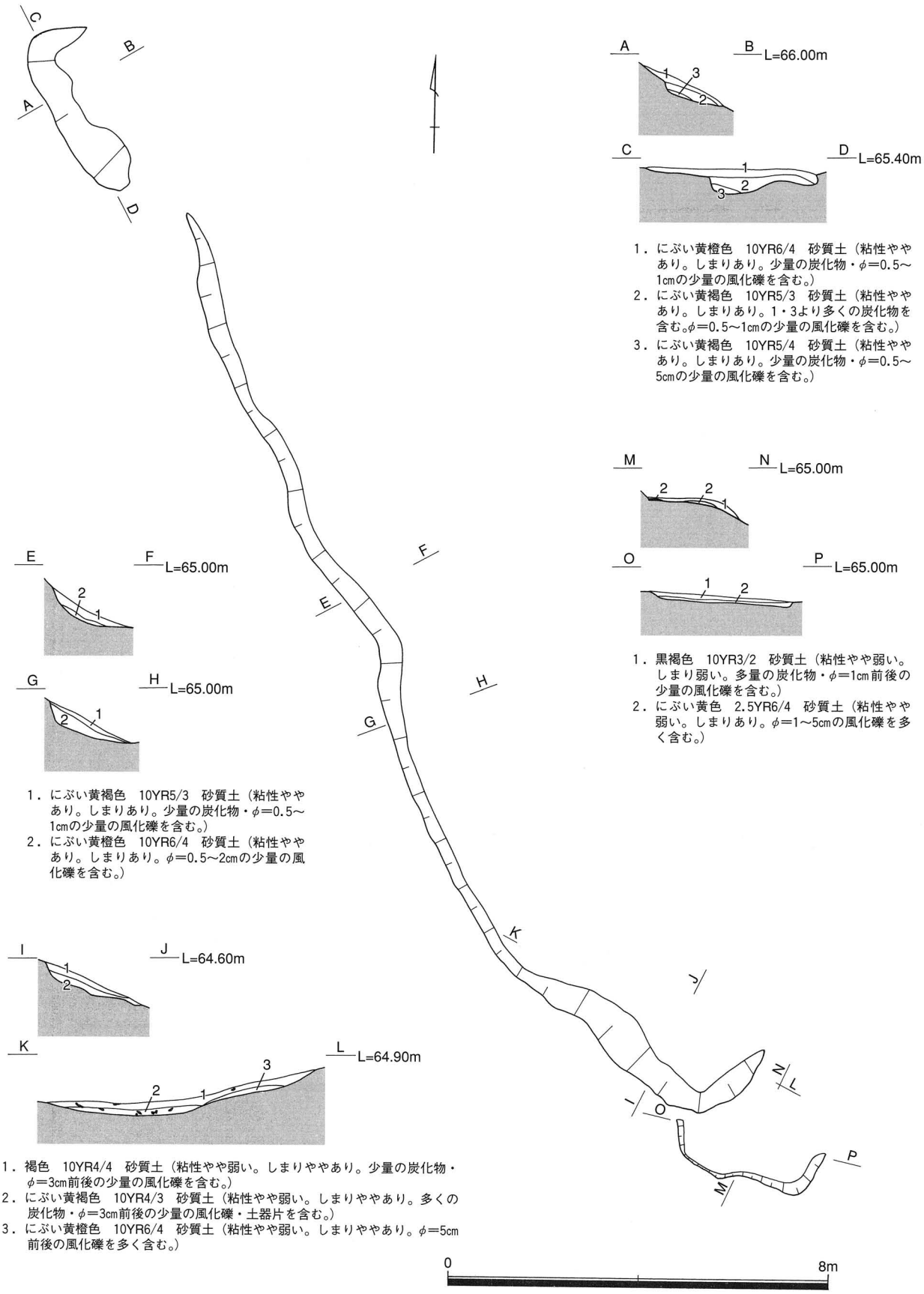
壺形土器と思われる土器片が出土している。119は壺頸部、120は底部である。121～124は石器である。121・122は楔形石器、123は二次加工痕のある剥片である。石材はサヌカイトを用いる。124は砂岩の円礫を使用した敲石である。



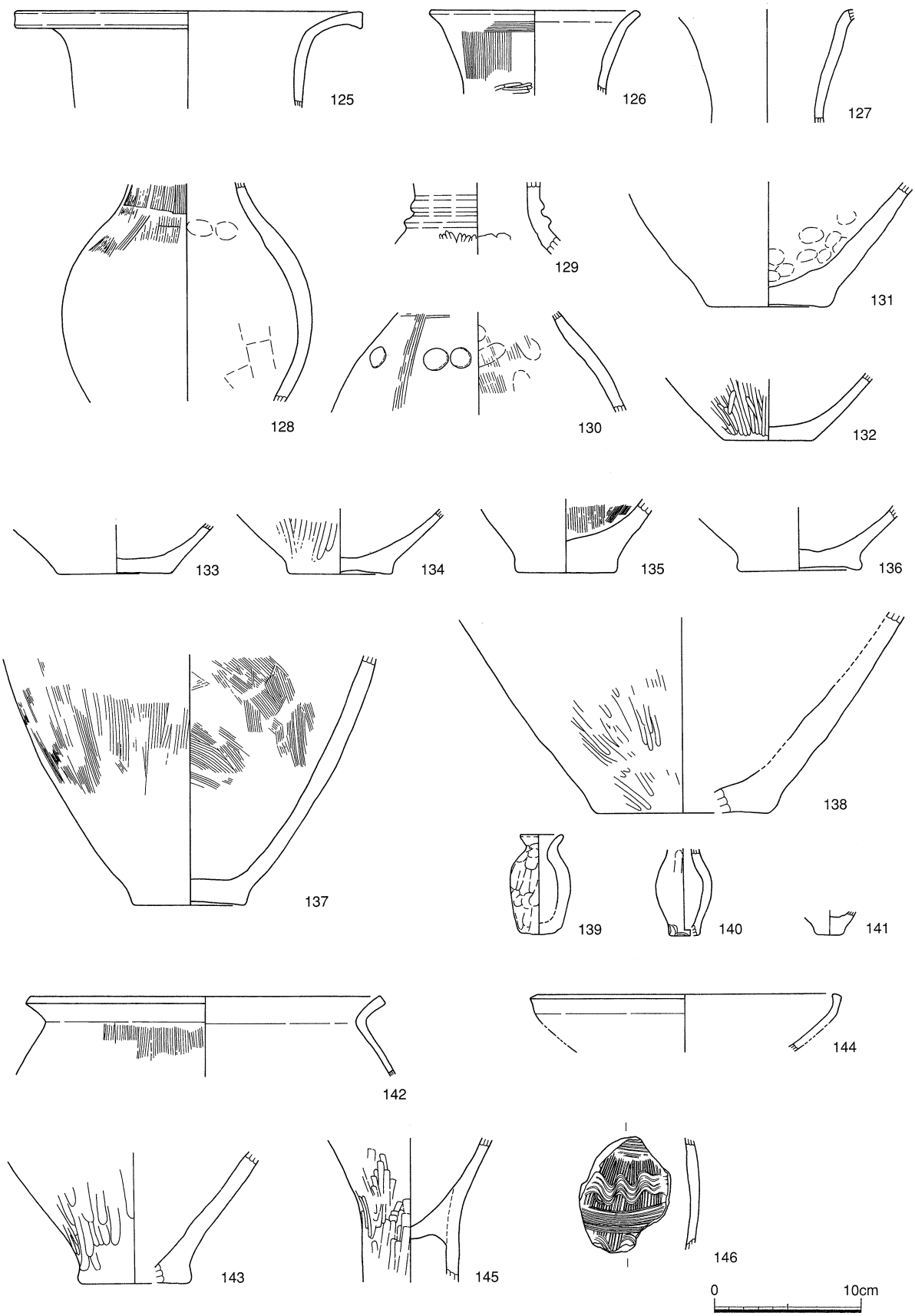
第54図　SD1009出土遺物

SD1010（段状遺構10）（第55図）

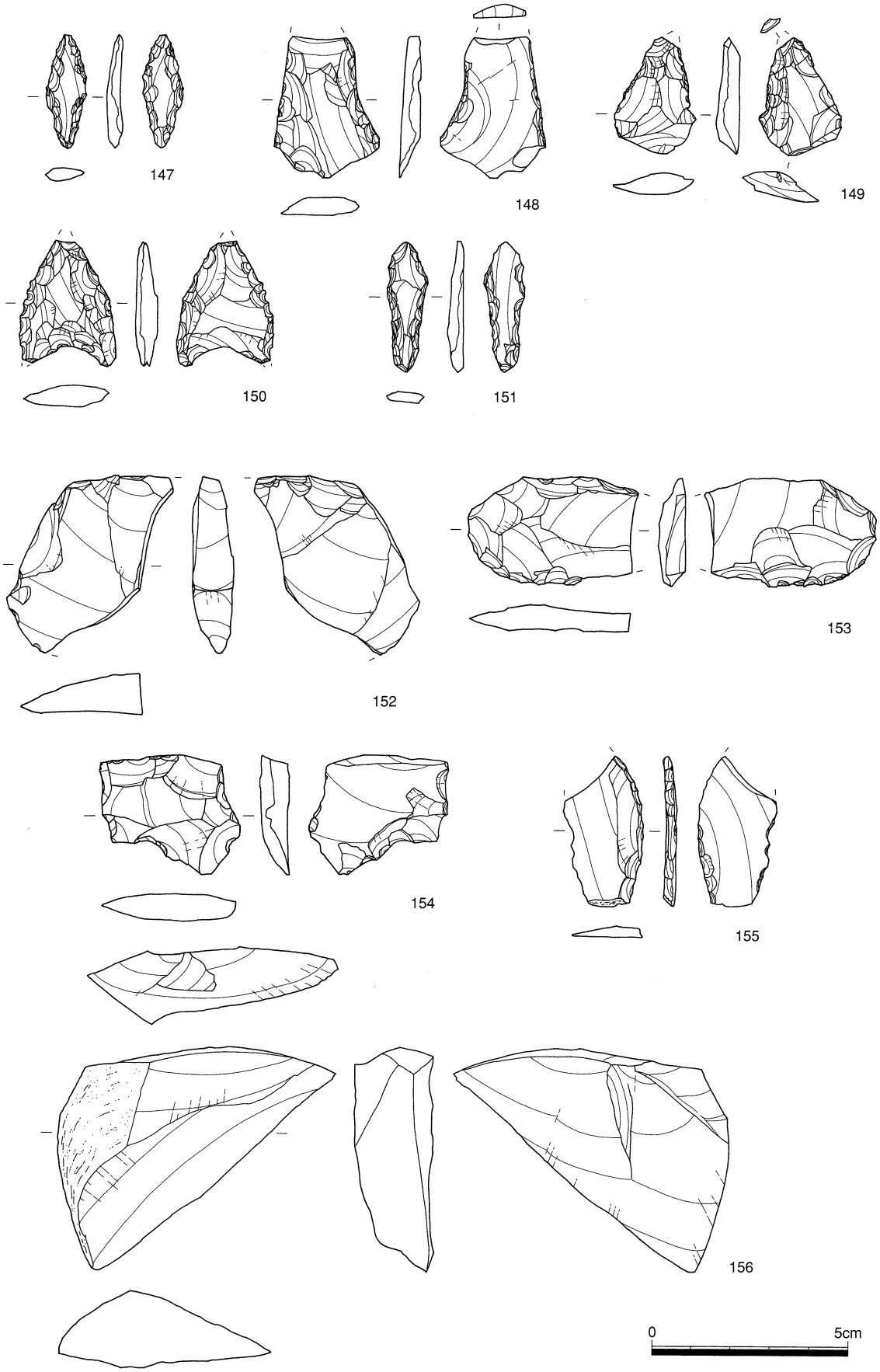
P～S - 20・21グリッド、調査区南東部に位置する本遺跡で最長の段状遺構である。標高63.00m 前後の地点の東側斜面を、地形コンタラインに沿って「L」字状にカットし、平坦面を造りだす。立ち上がりは確認できない。平面形は不整形な細長い楕円形状を呈する。柱穴等は出土していない。



第55図　SD1010平・断面図



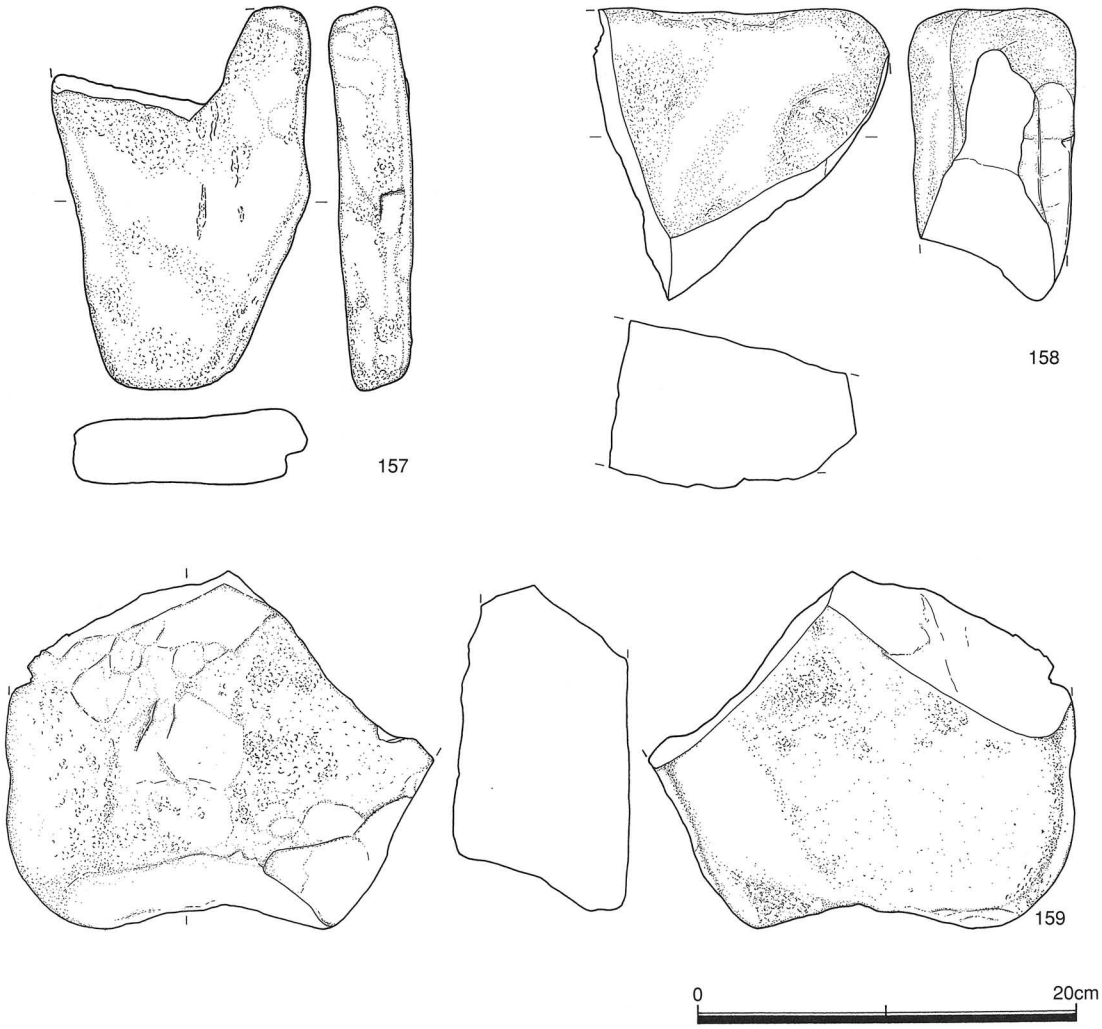
第56図　SD1010出土遺物 1



第57図　SD1010出土遺物 2

出土遺物（第56～58図）

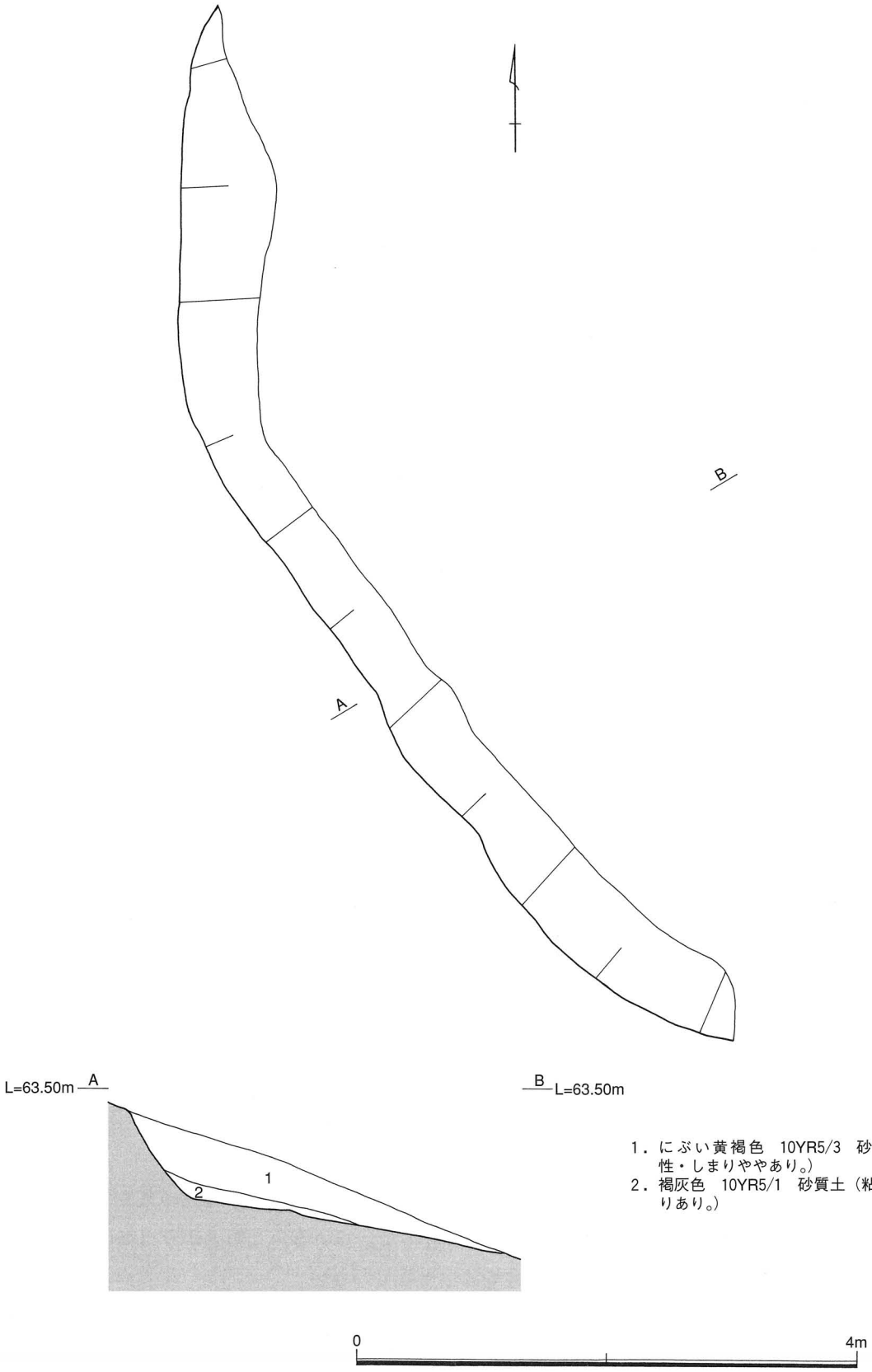
他の遺構に比べ、遺物の出土量は多い。125～146は弥生土器、147～159は石器である。125～141は壺である。142・143は甕、144・145は高杯である。146は壺と思われる。147～150は石鏃、151は石錐である。152・153は楔形石器、154・155は使用痕のある剥片、156は剥片である。石器石材はいずれもサヌカイトである。157～159は砂岩の台石である。



第58図　SD1010出土遺物 3

SD1011（段状遺構11）（第59図）

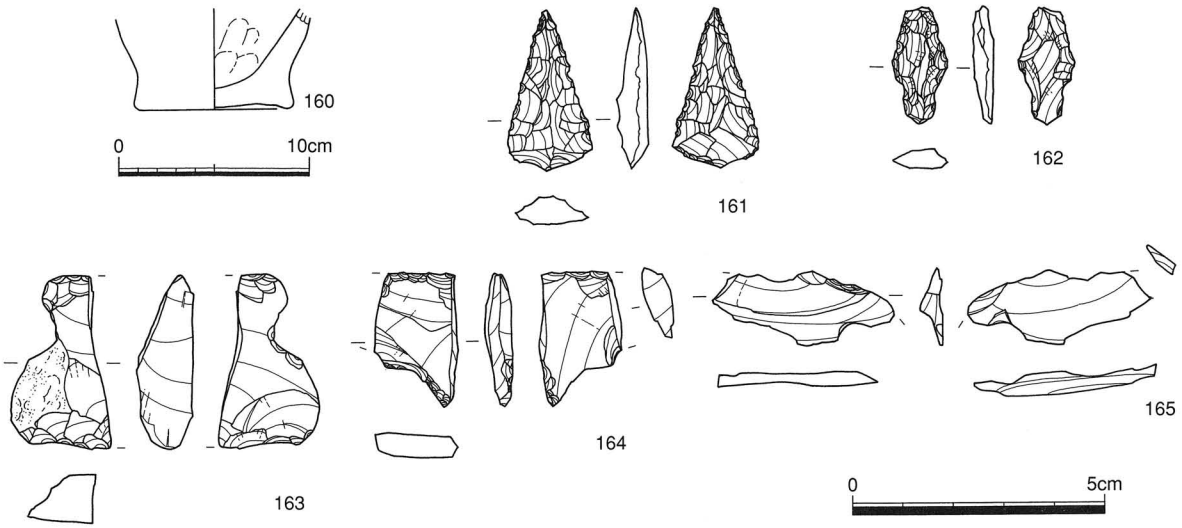
R～T-19・20グリッド、調査区南東部に位置する。標高63.00m 前後の地点の東側斜面を、地形コンタラインに沿って「L」字状にカットし、平坦面を造りだしている。立ち上がりは確認できない。平面形は不整形な細長い楕円形状を呈する。柱穴等は出土していない。



第59図　SD1011平・断面図

出土遺物（第60図）

160は壺の底部と思われる。161・162は石鏃、163は楔形石器、164は石錐、165は剥片である。石材はサヌカイトを用いる。



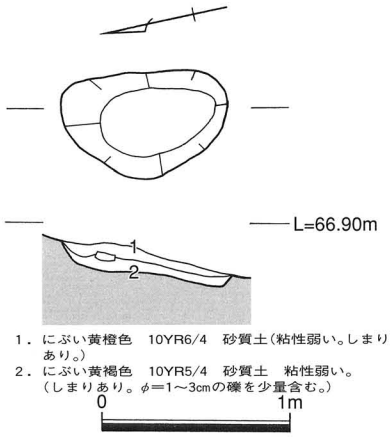
第60図　SD1011出土遺物

SK1002（土坑２）（第61図）

調査区南西部、K・L-8グリッドに位置する楕円形の土坑である。

出土遺物

弥生土器の小片等が出土したが、実測可能な遺物は無かった。



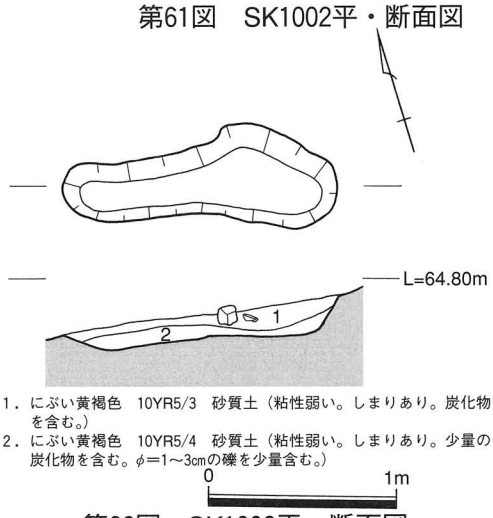
第61図　SK1002平・断面図

SK1003（土坑３）（第62図）

調査区南西部、K-5グリッドに位置する楕円形の土坑である。

出土遺物

弥生土器の小片等が出土したが、実測可能な遺物は無かった。



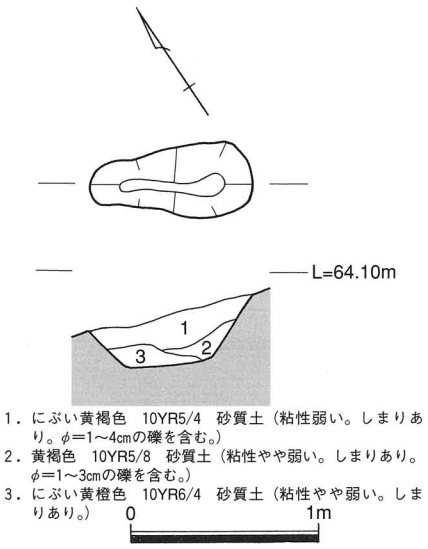
第62図　SK1003平・断面図

SK1004（土坑４）（第63図）

調査区南西部、K・L-6グリッドに位置する楕円形の土坑である。

出土遺物

弥生土器の小片等が出土したが、実測可能な遺物は無かった。



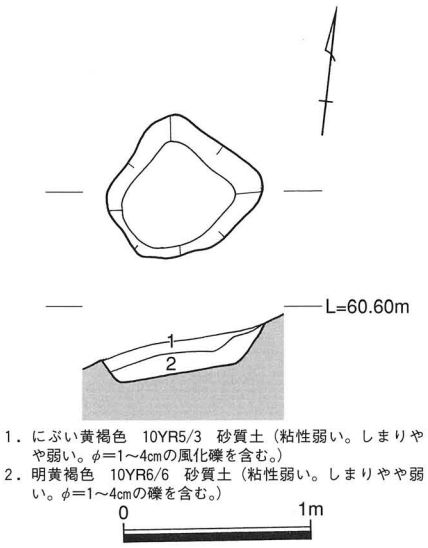
第63図　SK1004平・断面図

SK1005（土坑５）（第64図）

調査区南西部、K-3グリッドに位置するいびつな円形の土坑である。

出土遺物

弥生土器の小片等が出土したが、実測可能な遺物は無かった。



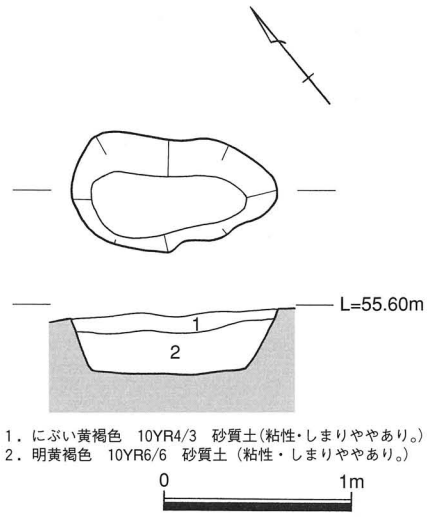
第64図　SK1005平・断面図

SK1006（土坑６）（第65図）

調査区南西部、I-2グリッドに位置する楕円形の土坑である。

出土遺物

弥生土器の小片等が出土したが、実測可能な遺物は無かった。



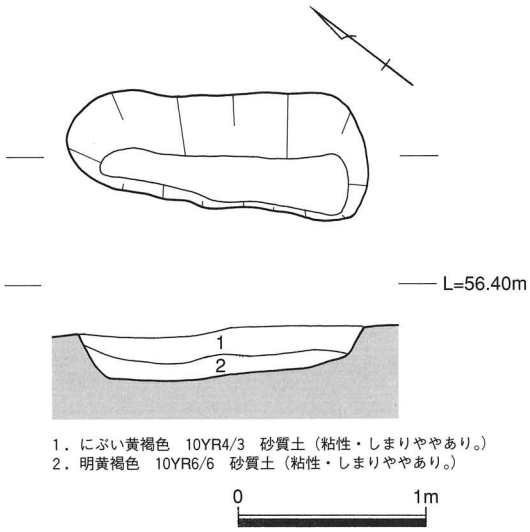
第65図　SK1006平・断面図

SK1007（土坑７）（第66図）

調査区南西部、H・I-3グリッドに位置する楕円形の土坑である。

出土遺物

弥生土器の小片等が出土したが、実測可能な遺物は無かった。



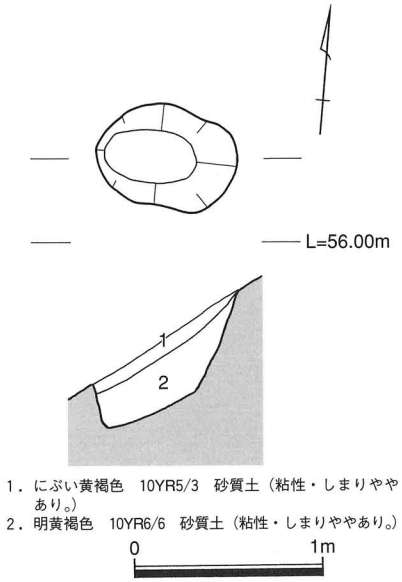
第66図　SK1007平・断面図

SK1008（土坑８）（第67図）

調査区南西部、H-3グリッドに位置する楕円形の土坑である。

出土遺物

弥生土器の小片等が出土したが、実測可能な遺物は無かった。



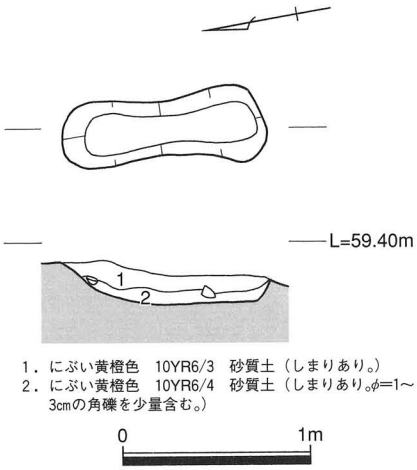
第67図　SK1008平・断面図

SK1009（土坑９）（第68図）

調査区南西部、G・H-4グリッドに位置する楕円形の土坑である。

出土遺物

弥生土器の小片等が出土したが、実測可能な遺物は無かった。



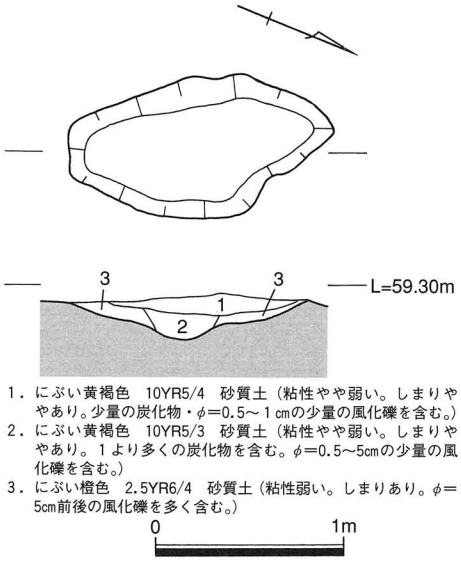
第68図　SK1009平・断面図

SK1010（土坑10）（第69図）

調査区南東部、O-24グリッドに位置する楕円形の土坑である。

出土遺物

弥生土器の小片等が出土したが、実測可能な遺物は無かった。



1．にぶい黄褐色　10YR5/4　砂質土（粘性やや弱い。しまりややあり。少量の炭化物・φ=0.5～1㎝の少量の風化礫を含む。）
2．にぶい黄褐色　10YR5/3　砂質土（粘性やや弱い。しまりややあり。1より多くの炭化物を含む。φ=0.5～5cmの少量の風化礫を含む。）
3．にぶい橙色　2.5YR6/4　砂質土（粘性弱い。しまりあり。φ=5cm前後の風化礫を多く含む。）

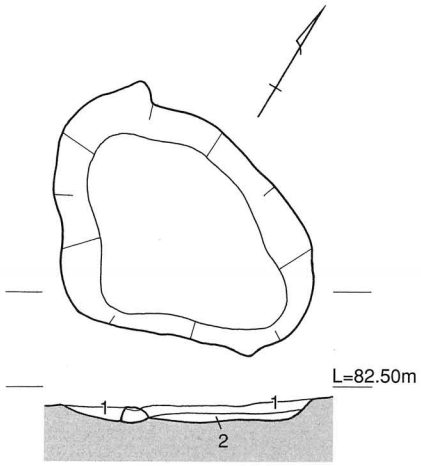
第69図　SK1010平・断面図

SK1011（土坑11）（第70図）

調査区中央部、S・T-11グリッドに位置する楕円形の土坑である。

出土遺物

弥生土器の小片等が出土したが、実測可能な遺物は無かった。



1．灰黄褐色　10YR4/2　砂質土（粘性・しまりややあり。炭化物を多量に含む。φ=2cm前後の礫を少量含む。）
2．にぶい黄橙色　10YR6/3　砂質土（粘性・しまりあり。赤色風化礫・φ=5cm前後の礫を少量含む。）

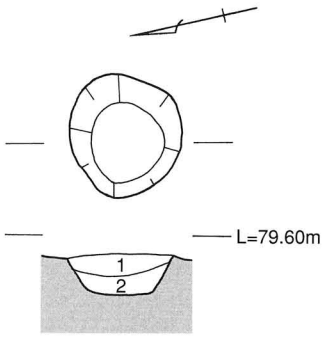
第70図　SK1011平・断面図

SK1012（土坑12）（第71図）

調査区中央部、S-10グリッドに位置する円形の土坑である。

出土遺物

弥生土器の小片等が出土したが、実測可能な遺物は無かった。



1．褐色　7.5YR4/3　砂質土（粘性やや弱い。しまりややあり。少量の炭化物を含む。φ=1cm前後の赤色風化礫・φ=4～5cmの角礫を少量含む。）
2．褐色　7.5YR4/4　砂質土(粘性・しまりやや弱い。φ=4～5cm程度の角礫を多く含む。)

第71図　SK1012平・断面図

SK1013（土坑13）（第72図）

調査区南西部、J-3グリッドに位置する楕円形の土坑である。

出土遺物

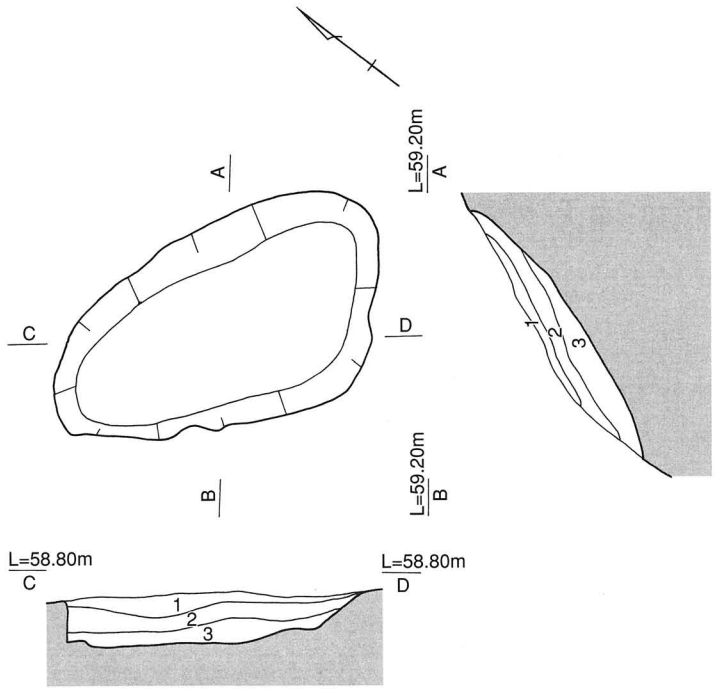
弥生土器の小片等が出土したが、実測可能な遺物は無かった。

SP1006・1007（柱穴６・７）（第73図）

I・J-6グリッド、調査区西部に位置する円形のピットである。

出土遺物

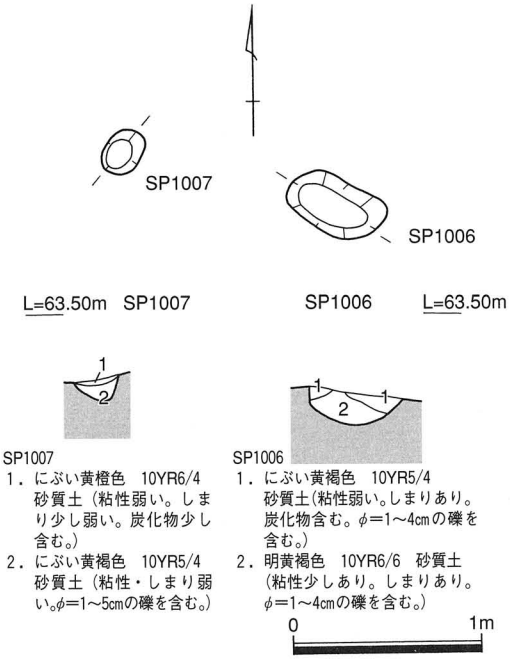
弥生土器の小片等が出土したが、実測可能な遺物は無かった。



1．にぶい黄褐色　10YR4/3　砂質土（粘性ややあり。しまりややあり。）
2．にぶい黄褐色　10YR5/3　砂質土（粘性ややあり。しまりややあり。）
3．にぶい黄褐色　10YR5/4　砂質土（粘性ややあり。しまりあり。φ=1～3cm角礫含む。）

0　1m

第72図　SK1013平・断面図



SP1007
1．にぶい黄橙色　10YR6/4　砂質土（粘性弱い。しまり少し弱い。炭化物少し含む。）
2．にぶい黄褐色　10YR5/4　砂質土（粘性・しまり弱い。φ=1～5cmの礫を含む。）

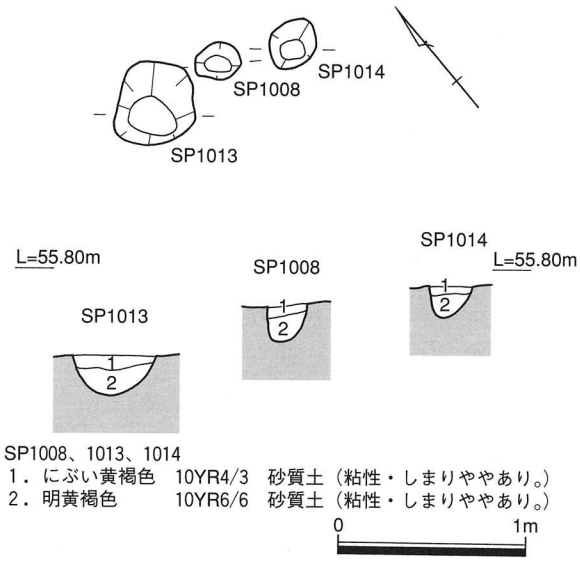
SP1006
1．にぶい黄褐色　10YR5/4　砂質土（粘性弱い。しまりあり。炭化物含む。φ=1～4cmの礫を含む。）
2．明黄褐色　10YR6/6　砂質土（粘性少しあり。しまりあり。φ=1～4cmの礫を含む。）

0　1m

第73図　SP1006・1007平・断面図

SP1008・1013・1014（柱穴８・13・14）（第74図）

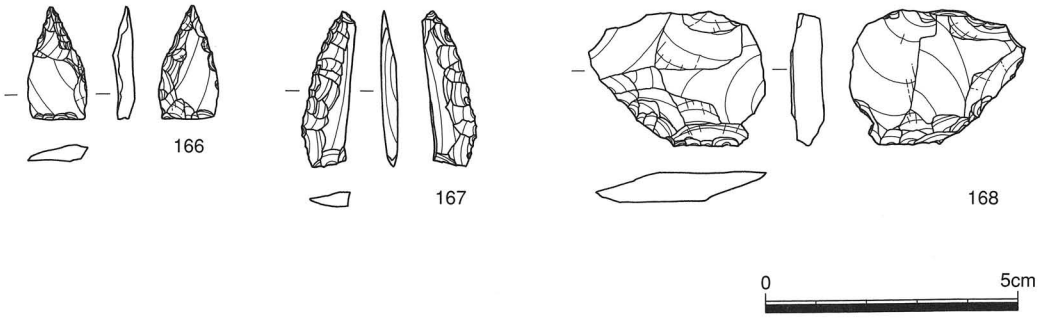
I-2・３グリッド、調査区西部に位置する。SD1001の北側に位置する円形のピットである。SP1008からは石器が出土した。



第74図　SP1008・1013・1014平・断面図

SP1008出土遺物（第75図）

166・167は石鏃、168は楔形石器である。石材はサヌカイトである。



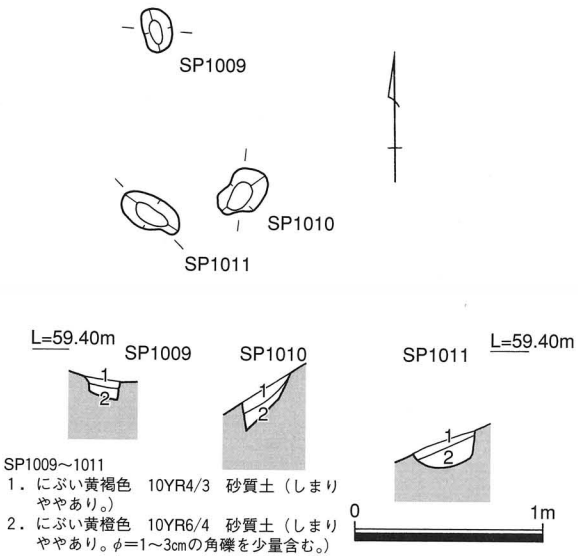
第75図　SP1008出土遺物

SP1009～1011（柱穴９～11）（第76図）

Ⅰ・J-3・４グリッド、調査区西部に位置する円形のピットである。

出土遺物

弥生土器の小片等が出土したが、実測可能な遺物は無かった。



SP1009～1011
1．にぶい黄褐色　10YR4/3　砂質土（しまりややあり。）
2．にぶい黄橙色　10YR6/4　砂質土（しまりややあり。φ=1～3cmの角礫を少量含む。）

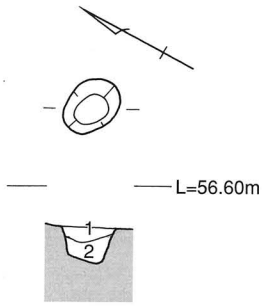
第76図　SP1009～1011平・断面図

SP1012（柱穴12）（第77図）

I-2グリッド、調査区西部に位置する円形のピットである。

出土遺物

弥生土器の小片等が出土したが、実測可能な遺物は無かった。



1．にぶい黄橙色　10YR6/4　砂質土（粘性ややなし。しまりややあり。φ=0.5cm前後の礫を少量含む。）
2．明黄褐色　10YR6/6　砂質土（粘性ややなし。しまりややあり。φ=0.5～4cmの礫を少量含む。）

0　1m

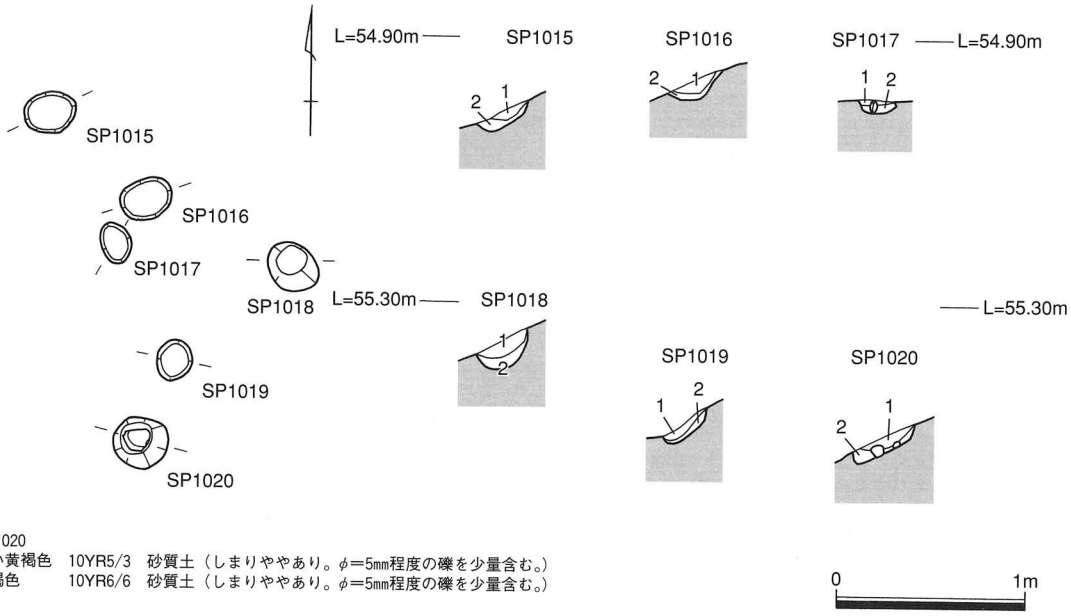
第77図　SP1012平・断面図

SP1015～1020（柱穴15～20）（第78図）

H・I-2・３グリッド、調査区西部に位置する円形のピットである。

出土遺物

弥生土器の小片等が出土したが、実測可能な遺物は無かった。



SP1015～1020
1．にぶい黄褐色　10YR5/3　砂質土（しまりややあり。φ=5mm程度の礫を少量含む。）
2．明黄褐色　10YR6/6　砂質土（しまりややあり。φ=5mm程度の礫を少量含む。）

第78図　SP1015～1020平・断面図

SP1021～1023（柱穴21～23）（第79図）

G・H-2・3グリッド、調査区西部に位置する円形のピットである。

出土遺物

弥生土器の小片等が出土したが、実測可能な遺物は無かった。

SP1029（柱穴29）（第80図）

I-3グリッド、調査区西部に位置する円形のピットである。

出土遺物

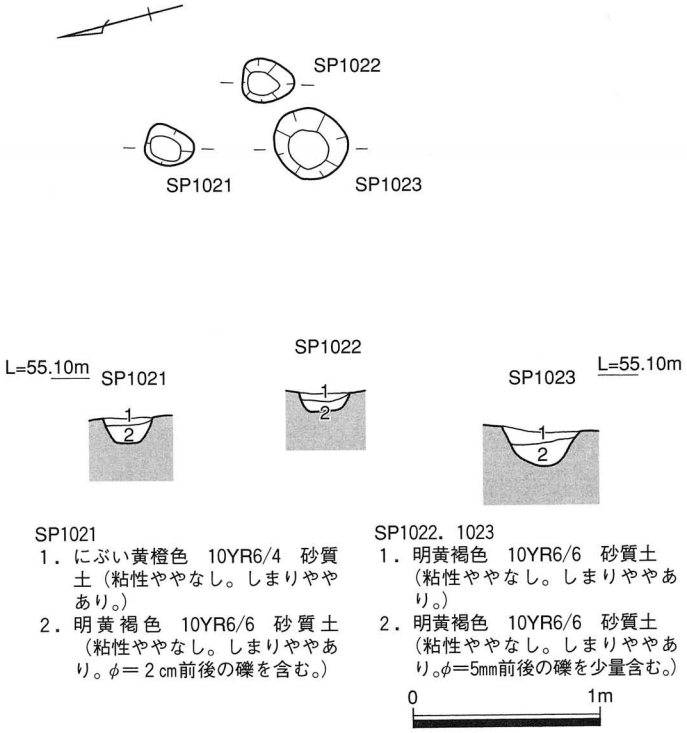
弥生土器の小片等が出土したが、実測可能な遺物は無かった。

SP1034・1035（柱穴34・35）（第81図）

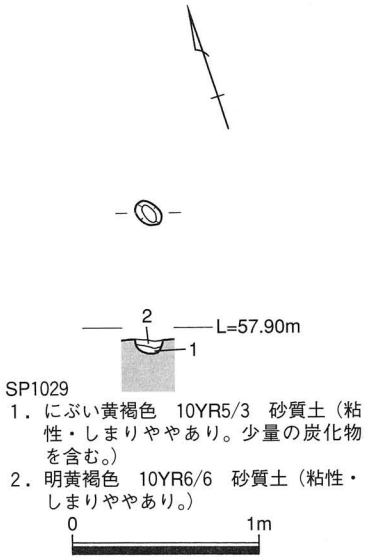
G-4グリッド、調査区西部に位置する円形のピットである。

出土遺物

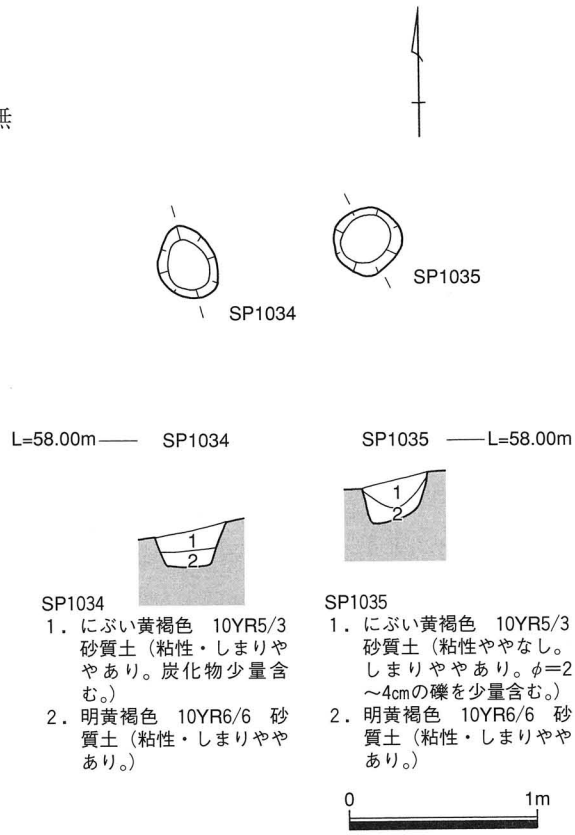
弥生土器の小片等が出土したが、実測可能な遺物は無かった。



第79図　SP1021～1023平・断面図



第80図　SP1029平・断面図



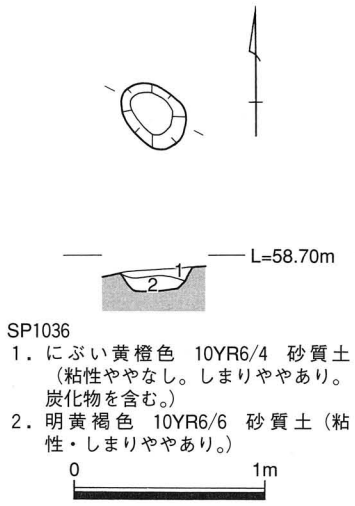
第81図　SP1034・1035平・断面図

SP1036（柱穴36）（第82図）

F・G-4グリッド、調査区西部に位置する円形のピットである。

出土遺物

弥生土器の小片等が出土したが、実測可能な遺物は無かった。



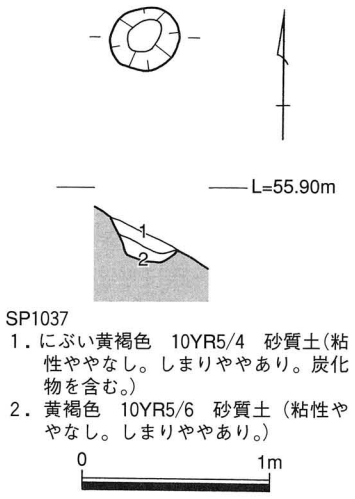
第82図　SP1036平・断面図

SP1037（柱穴37）（第83図）

F-3グリッド、調査区西部に位置する円形のピットである。

出土遺物

弥生土器の小片等が出土したが、実測可能な遺物は無かった。



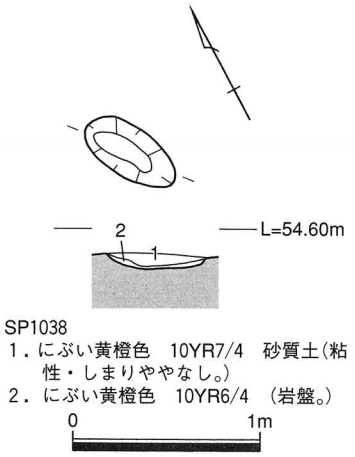
第83図　SP1037平・断面図

SP1038（柱穴38）（第84図）

L-4・5グリッド、調査区西部に位置する円形のピットである。

出土遺物

弥生土器の小片等が出土したが、実測可能な遺物は無かった。



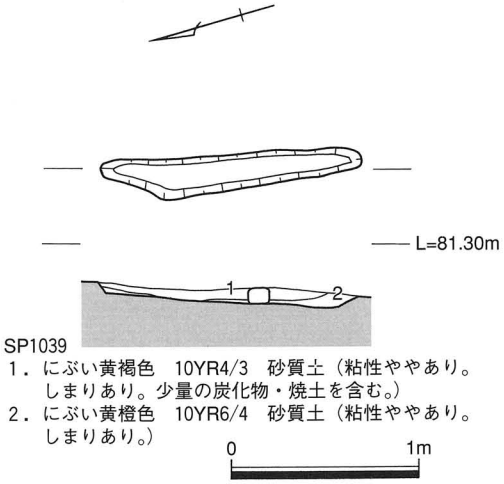
第84図　SP1038平・断面図

SP1039（柱穴39）（第85図）

V-13グリッド、調査区中央部に位置する長楕円形の浅いピットである。

出土遺物

弥生土器の小片等が出土したが、実測可能な遺物は無かった。



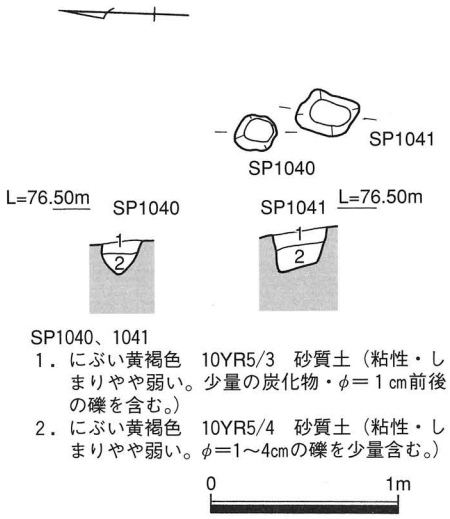
第85図　SP1039平・断面図

SP1040・1041（柱穴40・41）（第86図）

Q・R-9グリッド、調査区中央部に位置する円形のピットである。

出土遺物

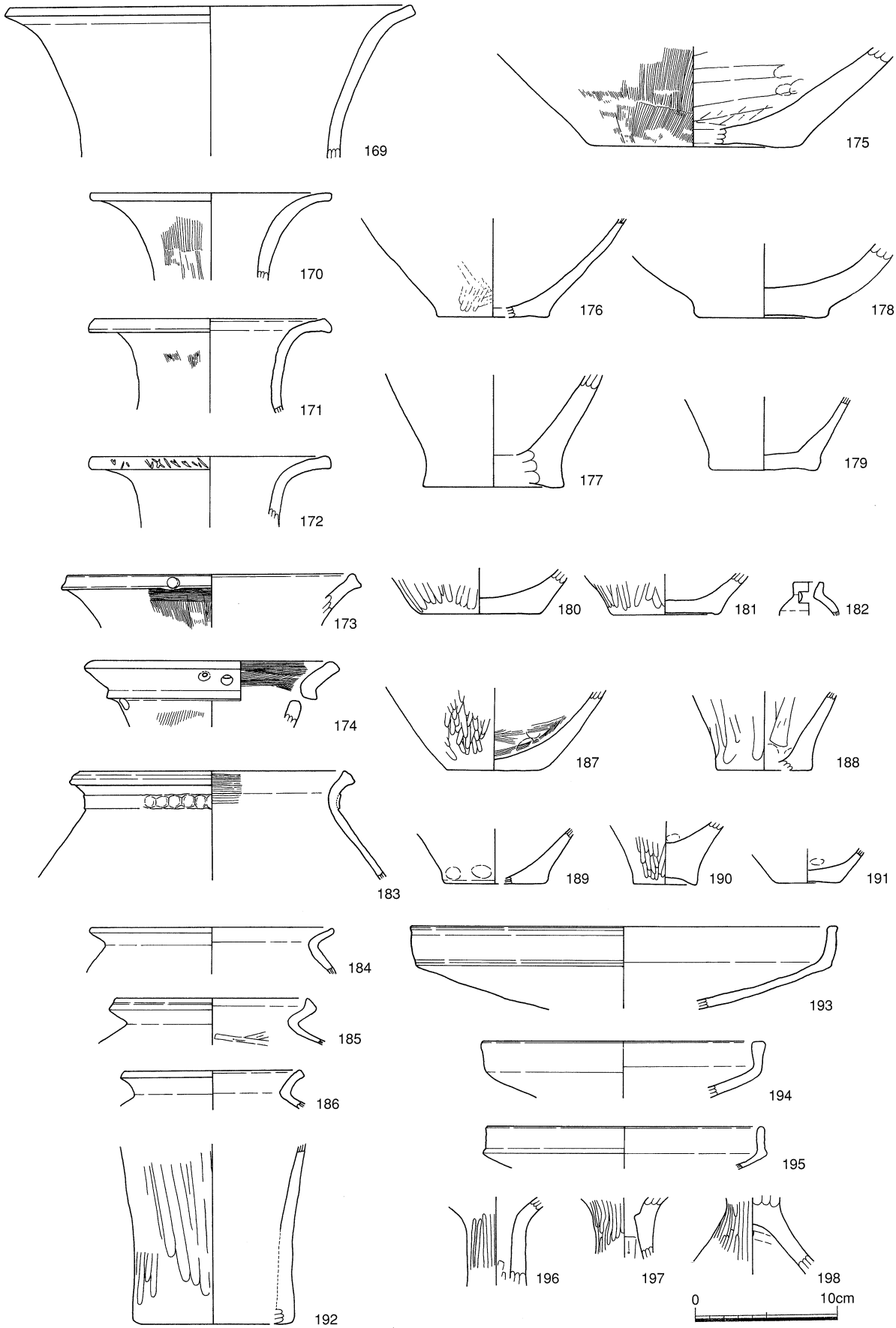
弥生土器の小片等が出土したが、実測可能な遺物は無かった。



第86図　SP1040・1041平・断面図

包含層出土遺物

遺構以外からも多くの弥生土器・石器が出土している。遺構内出土遺物と同様、土器類は小片あるいは摩滅の著しいものがほとんどであり、全容の判明するものは少ない。遺構外で出土した遺物のうち、実測可能なものについて包含層出土遺物としてここに掲載する。



第87図　包含層出土遺物１

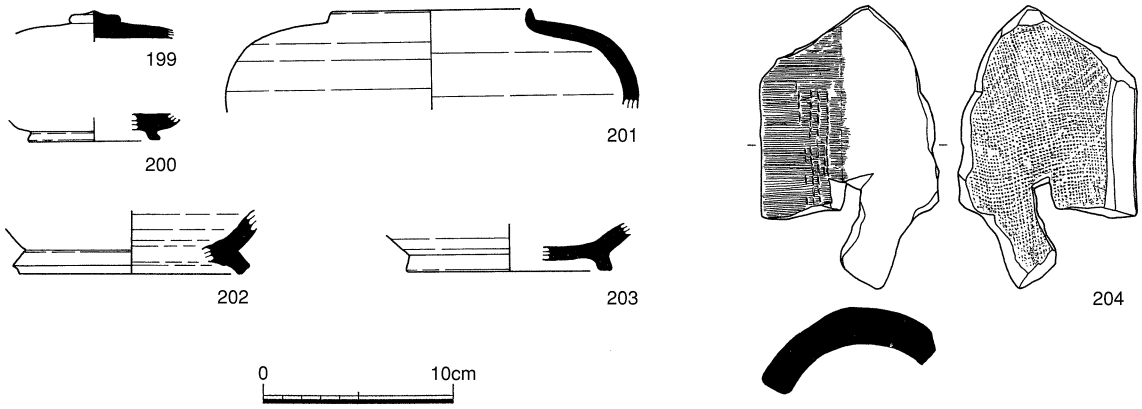
出土土器

弥生土器（第87図）

169～182は壺、183～191は甕、192はバケツ形土器、193～198は高杯土器である。

その他の土器（第88図）

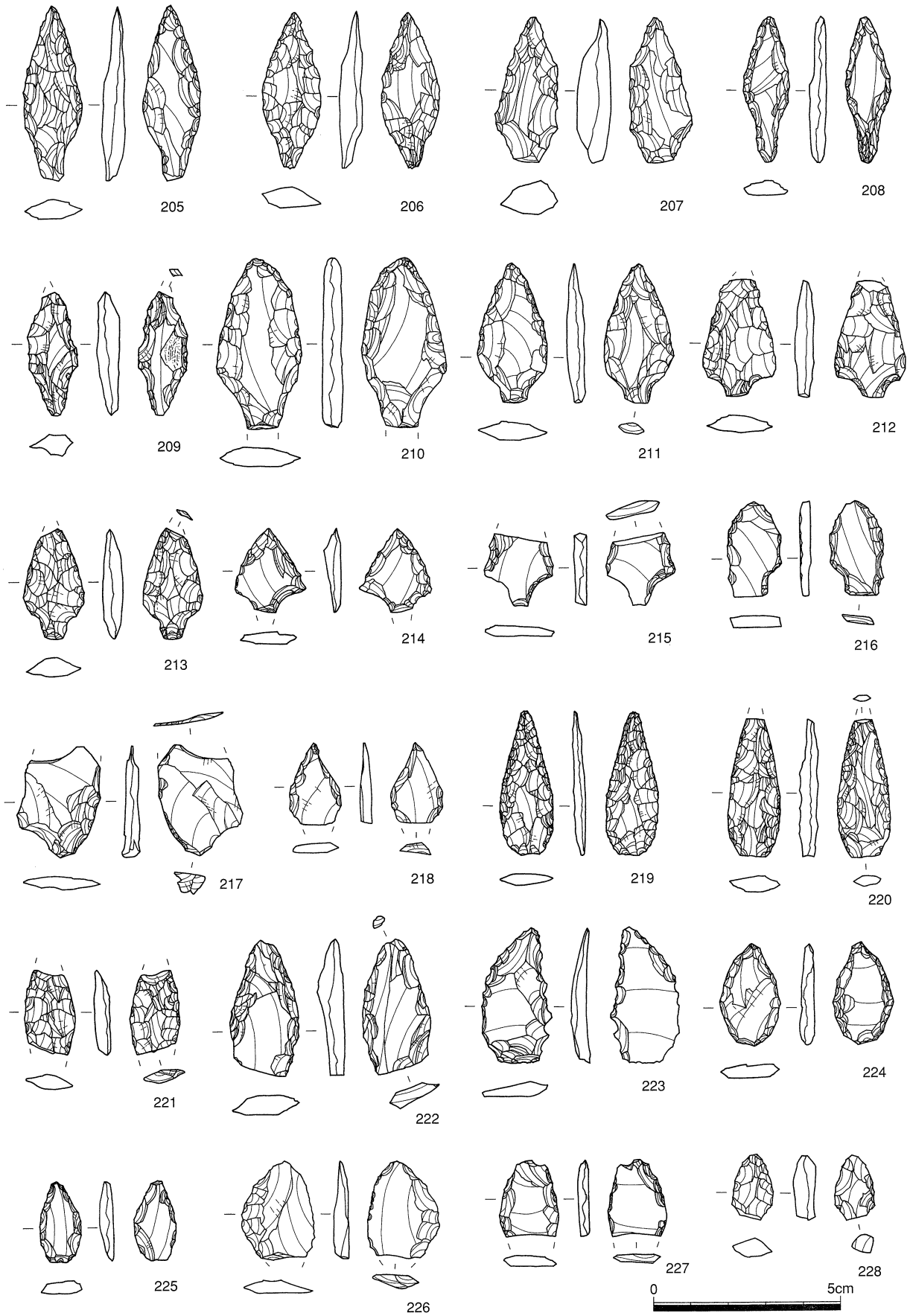
199は須恵器蓋である。200は須恵器椀の底部と思われる。201は須恵器短頸壺、202・203は須恵器壺の底部と思われる。199～203はいずれも小片のため、詳細な時期決定は困難であるが、概ね10世紀末頃と思われる。204は丸瓦で時期は不明である。



第88図　包含層出土遺物２

出土石器（第89～105図）

剥片石器のほとんどがサヌカイトを石材とする。205～247は石鏃、248は石剣、249・250は石庖丁である。249はサヌカイト、250は結晶片岩の剥片を素材とする。251～256は削器、257～297は楔形石器、298～325は剥片である。剥片の中には微細な剥離がみられるもの、自然面の残存するものがある。326・327は太形蛤刃石斧である。玄武岩を石材に用いる。328は柱状片刃石斧、329は扁平片刃石斧である。石材は結晶片岩である。330は円柱状の泥岩礫の端部に刃部を作出した鑿状の磨製石斧である。331～339は敲石である。335は斑レイ岩、336は片岩を用いる。他は砂岩の円礫を使用している。340～344は台石である。いずれも砂岩の亜角礫を用いる。



第89図　包含層出土遺物 3